

研究紀要

第 23 号

—千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡—

2014（平成 26）年 8 月

三重県埋蔵文化財センター



千本塚遺跡航空写真



堀越遺跡航空写真



大蔵遺跡 A 地区航空写真



大蔵遺跡 B·C 地区航空写真

例　言

1. 本書は、三重県亀山市亀田町字千本塚に所在する千本塚(せんほんづか)遺跡、同市羽若町字大藪に所在する大藪(おおやぶ)遺跡、及び同市椿世町字堀越に所在する堀越(ほりこし)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、一般国道1号亀山バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第二分冊－1（三重県埋蔵文化財調査報告100－3）である。各分冊の概要は、下記のとおりである。

- 第一分冊　　上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群・正知浦遺跡
- 第二分冊－1 千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡
- 第二分冊－2 稲屋垣内遺跡
- 第三分冊－1 山城遺跡・北瀬古遺跡
- 第三分冊－2 大鼻遺跡
3. 当分冊に係る発掘調査は、三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて三重県教育委員会が実施したものであり、発掘調査に係る費用は、建設省中部地方建設局が全額を負担した。
 4. 当該業務全般に係る発掘調査は、昭和59～63年度は三重県教育委員会事務局文化課が、平成元年度以降は三重県埋蔵文化財センターが担当した。なお、現地調査の体制・担当は第一分冊に示したとおりである。
 5. 本調査報告書の執筆分担は、文末に示したとおりである。なお、編集は、各執筆者及び西村美幸・小林美沙子の協力を得て駒田利治が担当した。

なお、遺構写真は、各調査担当が撮影し、遺物写真は主に田中久生・小山憲一・小林美沙子が撮影した。
6. 発掘調査にあたっては、下記の方々にご指導とご助言をいただいた。なお、所属は調査当時とし、教称は省略させていただいた。

- 井上喜久男(愛知県陶磁資料館)、菅原洋一(三重大学工学部)、中野晴久(常滑市民俗資料館)、八賀晋(三重大学人文学部)、藤澤良裕(瀬戸市歴史民俗資料館)
7. 遺構及び遺物の実測は、各調査担当が実施したほか下記の方々(調査当時)の協力を得た。
大川勝宏(三重県埋蔵文化財センター)、坂田孝彦(花園大学学生)、清水弘之(菰野中学校講師)、田中智子(京都女子大学学生)、穂積裕昌(同志社大学学生)、水谷芳泰(立正大学学生)
 8. 当遺跡の位置は、国土座標第VI系に属している。挿図の方位は、すべて真北で示している。真北は、磁北から東へ6°35'振れる。
 9. 本報告書で使用した遺構表示略号は、下記のとおりである。

- S B ; 挖立柱建物　　S H ; 壁穴住居　　S A ; 柱列(樋)　　S D ; 溝　　S K ; 土坑
S E ; 井戸　　S F ; 炉・カマド・焼土　　S R ; 道路　　S X ; 不明
10. 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。
 11. 山茶碗の記述については、藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」「研究紀要」第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年の文献を参考とし、個々に註を付けることを省略した。
 12. 本書には、調査に係わって自然科学の分析を委託した調査の結果を、下記のとおり掲載させていただいた。

付篇1 大藪遺跡出土山茶碗の胎土分析・・・・・・・・・・・・三辻利一

付篇2 千本塚遺跡のプラントオパール分析・・・・・・・・・・・・徳パリノ・サーヴェイ

目 次

I	前　　言	1
II	位置と環境	6
III	千本塚遺跡	12
IV	大藪遺跡	18
1	位置と地形	18
2	A地区の遺構と遺物	18
3	B地区の遺構と遺物	37
4	C地区の遺構と遺物	48
5	大藪遺跡の変遷	59
V	堀越遺跡	62
付 篇		
1	大藪遺跡出土山茶椀の胎土分析	90
2	千本塚遺跡のプラントオパール分析	94

図 版 目 次

卷頭図版

- 図版1 千本塚遺跡航空写真 堀越遺跡航空写真
図版2 大藪遺跡A地区航空写真 B・C地区航空写真

挿図

I 前言

- 第1図 一般国道1号バイパスと調査遺跡位置図

II 位置と環境

- 第2図 鶴鹿川流域の遺跡位置図

- 第3図 糸屋垣内遺跡・大藪遺跡・千本塚遺跡位置図

III 千本塚遺跡

- 第4図 千本塚遺跡地形図

- 第5図 千本塚遺跡遺構配置図

- 第6図 SH10実測図

- 第7図 SB2・3、SB6・7、SB9実測図

- 第8図 SK8実測図

- 第9図 千本塚遺跡出土遺物実測図

IV 大藪遺跡

- 第10図 大藪遺跡A地区遺構配置図

- 第11図 SH2・SB3・4、SH26、SH28実測図

- 第12図 SB1・5・SH2、SB7、SB8実測図

- 第13図 SB12、SB13実測図、SK42、SK46実測図

- 第14図 A地区飛鳥・奈良時代遺構出土遺物実測図

- 第15図 SB9、SB14、SB29実測図

- 第16図 SB31・33、SB32・34~36実測図

- 第17図 SB27、SB45、SB37・38実測図

- 第18図 SB49・50、SB15・SA16実測図

- SK17、SK18、SK20、SK52実測図

- 第19図 A地区掘立柱建物・周辺の出土遺物実測図

- 第20図 A地区土坑・中世墓出土遺物実測図

- 第21図 A地区溝・包含層出土遺物実測図

- 第22図 大藪遺跡B地区遺構配置図

- 第23図 SB62・SX63・SK61実測図

- 第24図 SB64・65、SB76実測図

- 第25図 SK68・SB69~72・SK73・SD74・

- S A75実測図

- 第26図 B地区掘立柱建物、土坑、井戸、溝、包含層
出土遺物実測図

- 第27図 B地区SK73出土遺物実測図

- 第28図 大藪遺跡C地区遺構配置図

- 第29図 SB85、SB89、SB93・94実測図

- 第30図 SB90・SE91・SB92、SB100・101、
SB110実測図

- 第31図 SB106・SK107、SB104・105、SB108
実測図、SK98、SD109実測図

- 第32図 C地区掘立柱建物、井戸、土坑、溝出土遺物
実測図

- 第33図 C地区溝、包含層出土遺物実測図

- 第34図 大藪遺跡遺構変遷図

V 堀越遺跡

- 第35図 堀越遺跡地形図

- 第36図 堀越遺跡遺構配置図

- 第37図 SB1・2・SK3、SB4・SK5・
SD8実測図

- 第38図 SD8、SB10・12・13・15、SK21実測図

- 第39図 SB7、SB19、SB20、SB16~18実測図

- 第40図 堀越遺跡出土遺物実測図

表

- 第1表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財一
覧表

- 第2表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財発
掘調査経過表

- 第3表 亀山市周辺の遺跡一覧表

付表

- 付表1 千本塚遺跡堅穴住居一覧表

- 付表2 大藪遺跡A地区堅穴住居一覧表

- 付表3 千本塚遺跡掘立柱建物一覧表

付表4	大蔵遺跡A地区掘立柱建物一覧表	P L 10	S B31・33・34	S B37・38
付表5	大蔵遺跡B地区掘立柱建物一覧表	P L 11	S B35・36	S K42 S H39 S K46
付表6	大蔵遺跡C地区掘立柱建物一覧表		S B49・50	
付表7	堀越遺跡掘立柱建物一覧表	P L 12	B地区調査前	B地区調査後
付表8	千本塚遺跡出土遺物観察表	P L 13	B・C地区調査後	B地区調査後
付表9	大蔵遺跡A地区出土遺物観察表	P L 14	S K61・S B62	S B65 S X63 S E67
付表10	大蔵遺跡B地区出土遺物観察表		S B64	S K73 S B76
付表11	大蔵遺跡C地区出土遺物観察表	P L 15	S A75・S B69	S B70~72
付表12	堀越遺跡出土遺物観察表	P L 16	C地区調査前	S B93・94 S B85
			S K98・S D99	S D87 S B105
			S B89	S B110

写真図版

千本塚遺跡

P L 1	調査前近景	調査後航空写真
P L 2	調査後全景	S B 2
P L 3	S B 3	S B 6・7
P L 4	S B 9	S K 8

大蔵遺跡

P L 5	A地区調査前	A地区調査後
P L 6	A地区全景	S H 2 S B 5 S B 7
	S B 8	
P L 7	S B 1~5, S H 2	S A 6, S B 13・14
P L 8	S K10・11 S H26	S B12 S H28
	S B13 S B29	S B15 S B32
P L 9	S B29~34	S B31~36

堀越遺跡

P L 17	第2次調査後	調査前	第1次調査後
	S B 2	S B 4	
出土遺物			
P L 18	千本塚遺跡		
P L 19	大蔵遺跡A地区		
P L 20	大蔵遺跡A地区		
P L 21	大蔵遺跡B地区		
P L 22	大蔵遺跡B地区		
P L 23	大蔵遺跡C地区		
P L 24	大蔵遺跡C地区		
P L 25	堀越遺跡		

I 前 言

1 経過

歴史的経過 飛鳥時代(7世紀頃)、大和南部に都があつた頃、伊勢国への道は長谷(初瀬)・名張・青山峠を経て一志郡に出るもののが主であつた。一志から北上すれば東海道・東山道であり、南下すれば奈宮・伊勢神宮への道である。

ところが、大和北部への平城遷都(710年)後、伊勢への道は木津川及び鈴鹿川沿いとなる。伊勢国府や国分寺が鈴鹿川沿いに選地された所以である。そして、長岡京(784年)・平安京(794年)遷都後、東国へは近江・美濃ルートが重要性を増した。一方、鈴鹿川沿いの官道は、都から東国に至る不可避的なルートではなくなつたために相対的にその地位が低下し、延暦8(789)年には鈴鹿閣も廢されている。しかし、都と奈宮や神宮、あるいは御食国志摩に通じる官道としての地位は失われなかつた。

近世に至つても、難所として名高い鈴鹿閣を控えた関宿は東海道の宿場町として栄え、今日もその面影は重要伝統的建造物群保存地区として伝えられている。また、亀山市内の旧東海道筋には、国史跡「野村の一里塚」をはじめ、街道の名残が各所に認められる。

ところで、亀山の旧市街地は鈴鹿川北岸の台地南縁を東西に延びる旧東海道沿いに発達したものである。亀山城も、この交通の要衝地に位置している。亀山市街は、幸いにして第二次世界大戦の戦禍をあまり被らず、落ち着いた家並景観を留めている。

しかしながら、道路の狭さは、街の発達と広域交通の要請に応えきれなくなり、国道1号は鈴鹿川北岸の低位段丘面でもある旧市街地の南方に新設された、いわば「第一次亀山バイパス」である。

その後、1960年代には名神・東名高速道路が開通し、東・西名阪国道等も順次開設された。このように、戦後のモータリゼーション化に対応する道路整備がなされてきたが、これらの東西日本を結ぶ高速道路は自ずと料金抵抗も大きく、国道1号を利用する長距離トラックは増加の一途を辿っている。本踏

査に至るまでこのような交通状況に対して、建設省は昭和48年度に亀山市街地の北にバイパスを新設し、その他の2車線部分も4車線化するよう事業化した。これが当該調査業務に係わるものであり、上述の経緯からすれば、いわば「第二次亀山バイパス」とでも云うべきものである。

それはともかく、翌昭和49年度には、建設省中部地方建設局名阪国道工事事務所(当時「北勢国道工事事務所」)から、三重県教育委員会事務局文化課(当時)に対して、当該事業に係わる埋蔵文化財の保護協議がなされた。昭和55年度には、文化課において全線の分布調査を実施し、多数の埋蔵文化財が存在する事実を確認した。そして、昭和58年度には、翌年度からの発掘調査に先立つて、全体計画や調査体制等に関する具体的な協議を重ねた。

現地調査期間 昭和59年度からは、いよいよ本格的に現地調査を開始した。まず、4月に建設省中部地方建設局長との間で、業務全体を確認した協定書と当該年度の埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を締結した。また、これに伴つて、全体計画書や当該年度調査計画書も併せて策定した。

本格的な発掘調査の幕開けは、昭和59年7月からの谷山古墳においてであった。一方、10月には亀山市和田町内に「一般国道亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所」を開設し、以後の日常的な調査活動の拠点とした。

調査体制については後述するが、当初は調査業務を受託した三重県教育委員会が、民間土木建設業者に現場作業の土工部門を委託した。しかし、昭和61年度からは、社団法人中部建設協会に建設省が直接土工部門を委託する方式に変更した。また、平成元年度からは、亀山市教育委員会も調査の一部を分担した。現地調査期間は、最終的に昭和59年度から平成2年度までの7年間に及び、10遺跡計約65,000m²を本調査した。

この間には、発掘調査結果の公報活動として、現地説明会を開催するなどし、多くの市民の参加を得た。また、地元の小・中・高校生を対象とした体験

発掘も実施した。一方、「国一バイパスだより」を23号まで発行し、県内外の研究者や一般市民に調査成果を紹介し、好評を得た。さらに、これらとは別

に現地調査を実施した各年度には「調査概要Ⅰ～Ⅶ」を刊行した。

(山田 猛)



第1図 一般国道1号バイパスと調査遺跡位置図 (1:50,000)

番号	中心杭 No.	遺跡名	所在地	種別	時代	現況・地目	面積(m ²)		概要			
							全 体	調査面積				
1	No4	谷山古墳	龜山市井川町	古墳	古墳	山林	100	100	古墳紀後葉の集落にならむ10mの方墳で、本相直原 2つ2つの主体部をもつ古墳。			
2	No59~72	山城遺跡	龜山市川合町	集落跡	弥生～縄文	畠・水田 栗樹園	7,500	2,600	古墳時代の聚落の例で、河原田(河原)は、縄文時代の聚落様 式が成されたものとされる。			
3	No72~75	上椎ノ木古墳群 上椎ノ木駕跡	龜山市川合町	古墳 城跡	古墳・中世	山林	6,500	2,500	4世紀末の集落にならむ18～24mの円墳で、施主様の 土体部から西周期・石製埴造品・勾玉が出土。			
4	No135~142	堰越遺跡	龜山市櫛世町	集落跡	平安・鎌倉	畠	4,700	3,400	平安時代古の縄文時代の聚落跡物群で構成される 集落跡。			
5	No148.5~152	大坪遺跡	龜山市移世町	集落跡	平安・鎌倉	畠	4,600	0	岡原上2段階の傾斜に、土御器點が散布する。			
6	No158~169	正知浦遺跡 正知浦古墳群	龜山市龜田町	集落跡 古墳	古墳～江戸	畠・栗樹園 荒地	40,000	8,500	6世紀の礎穴式石室を内蔵土室とする古墳2基と古墳 時代から江戸時代にかけての聚落跡。			
7	No169.5~169	千本塚遺跡	龜山市龜田町	集落跡	奈良～縄文	畠・水田 荒地	36,000	1,230	奈良時代の聚落の例と見立柱跡等で構成される集落 跡。			
8	No196.5~200.5	大藪遺跡	龜山市羽若町	集落跡	奈良～縄文	荒地	45,000	8,650	奈良時代の聚落の例と見立柱跡等、縄文時代の聚落 物群で構成される集落跡。			
9	No214～224.5	樅原垣内遺跡	龜山市羽若町	集落跡	奈良～縄文	畠	28,000	9,500	平安時代から縄文時代の聚落跡物群で構成される集 落跡。			
10	No293.5～303.5	上野垣内遺跡	龜山市野村町	集落跡	古墳～室町	畠	8,000	0	茶塙とその周辺の土御器や近世陶器が散布する。			
11	No308～336	北瀬古遺跡	龜山市布気町	集落跡	繩文	山林・畠	64,000	1,000	繩文時代早期の土器片が出土。			
12	No338～369	大鼻遺跡	龜山市太閤寺町	墳墓 集落跡	繩文～室町	畠・水田	73,000	27,500	繩文時代早期の土器片と縄文時代の聚落跡物群で構成される複合遺跡。			
合 計		12處跡					317,400	64,980				

第1表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財一覧表

遺跡名	調査面積(m ²)		昭和59 範囲確 認調査	本調査	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5
	範囲確 認調査	本調査								報告書			
1 谷山古墳	—	100	100										
2 山城遺跡	96	2,600	1,200範	1,000	400								報告書
3 上椎ノ木古墳群 上椎ノ木駕跡	—	2,500						2,500			報告書		
4 堰越遺跡	152	3,400				範	1,700範	1,700			報告書		
5 大坪遺跡	16	0			範								
6 正知浦遺跡 正知浦古墳群	176	8,500				範	8,500				報告書		
7 千本塚遺跡	258	1,230				範		1,230			報告書		
8 大藪遺跡	360	8,650				範		8,650			報告書		
9 樅原垣内遺跡	232	[9,500]				範		[3,000]	[6,500]		[報告書]		
10 上野垣内遺跡	88	0				範							
11 北瀬古遺跡	472	1,000	1,000	範									報告書
12 大鼻遺跡	728	27,500	2,400範	7,500				11,100		6,500			報告書
合計	2,578	55,480	2,300	3,400	7,900	10,200	12,800	12,380	6,500				
		[9,500]						[3,000]	[6,500]				
調査担当職員数	31[3]		2	2	2	3	4	4[1]	3[1]	4[1]	4	3	

第2表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財発掘調査経過表

〔〕亀山市教育委員会

2 調査の組織と方法

調査の体制については、第一分冊で報告しているので、参照されたい。

(1) 調査の組織

一般国道1号亀山バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、三重県が建設省中部地方建設局の委託を受けて実施した。発掘調査の主体は、三重県教育委員会であり、昭和59年度から昭和63年度までは三重県教育委員会文化課が、平成元年度以後は同年に発足した三重県埋蔵文化財センターが各々担当した。

以下、現地調査にかかる組織及び担当を列記する。

昭和59年度

教育長	横田猛雄
文化課長	橋 重蔵
同課長補佐	西村高雄
主幹	小玉道明
文化財第二係長	伊藤久嗣
文化財第二係	技師 山田 猛
主事	梅澤 裕

昭和60年度

教育長	横田猛雄
文化課長	橋 重蔵
同課長補佐	西村高雄
主幹	小玉道明
文化財第二係長	伊藤久嗣
文化財第二係	技師 山田 猛
主事	梅澤 裕

昭和61年度

教育長	中林 博
文化課長	佐々木宣明
同課長補佐	岡田 忠
主幹	小玉道明
文化財第二係長	伊藤久嗣
文化財第二係	技師 山田 猛
主事	梅澤 裕

昭和62年度

教育長	中林 博
文化課長	佐々木宣明
同課長補佐	蒔田 督

主幹	小玉道明
文化財第二係長	伊藤久嗣
文化財第二係 主事	駒田利治・浅尾 悟 梅澤 裕

昭和63年度

教育長	中林 博
文化課長	佐々木宣明
同課長補佐	蒔田 督
文化財第二係長	伊藤久嗣
文化財第二係 主査	吉水康夫
主事	駒田利治・浅尾 悟 森川幸雄・近藤 健

平成元年度

教育長	中林 博
文化課長	佐々木宣明
三重県埋蔵文化財センター所長	中林昭一
主幹兼調査第二課長	山澤義貴
同 課 主査	新田 洋
同 課 第二係長	駒田利治
主事	平子 弘・浅尾 悟 近藤 健

平成2年度

教育長	宮本長和
文化部長	横山洋平
三重県埋蔵文化財センター所長	中林昭一
主幹兼調査第二課長	山澤義貴
同 課 主査	新田 洋
同 課 第二係長	駒田利治
主事	平子 弘

(2) 調査の方法

亀山バイパス建設予定地内には、昭和49年度の分布調査で10ヶ所の遺跡が確認されていた。昭和57年1月に都市計画が決定され、工事計画が具体化してきた昭和58年度には具体的な発掘調査計画の協議が行われ、翌昭和59年度からは、谷山古墳・山城遺跡の調査に着手した。昭和59年4月に実施したバイパス建設予定地内における遺跡の再調査を行ったところ、新たな遺跡の所在も確認され、12ヶ所の遺跡が所在していることが確定された。

発掘調査は、バイパス工事計画が東から開始される計画になっていることに呼応して、谷山古墳・山城遺跡から着手した。しかしながら、建設計画地内の用地買収の進捗状況や民家の移転問題などにより山城遺跡のように分割して発掘調査を実施せざるを得なかつた遺跡もある。従って、発掘調査は、東の起点を前提としながらも、用地買収等の進捗状況をみきわめながら、協議・決定して行った。

1 現地調査

現地における発掘調査の実施にあたっては、遺跡の位置等の基準を国土座標に求めることにした。幸い、バイパス建設路線に沿って第V系の基準点及び水準点が埋設されており、また計画路線内には20mピッヂで座標が付加されたセンター杭が設定されていたので、地区割り等の基準はこれに依った。

地区割りは、重機による表土除去後、4 m方眼の地区を設定しこれを小地区とし、小地区25の集合である20m四方を中地区とし、中地区25の集合である100m四方を大地区とする地区設定を基本にしてきた。

平成元年度に三重県埋蔵文化財センターが設置され、地区割りについても見直しが行われた。4 mの小地区を基本地区とすることに変わりないが、100 m四方を縦横各々25分割し、縦(南北)方向にA～Yのアルファベット、横(東西)方向に1～25の数字を与えた。100mを越える遺跡については、100m単位の地区を設定し、(大地区) - (小地区)と呼称することになった。この地区割りの見直しにより、亀山バイパス関係の調査でも、平成元年度から新たに調査を開始した上椎ノ木古墳群・千本塚遺跡・大蔵遺跡については新しい方式を用いることとなった。

調査の掘削では、表土・耕作土は重機による機械掘削とし、これ以下の遺物包含層は人力掘削とした。昭和60年度の大鼻遺跡(第1次)の調査以降、堅穴住居の埋土は、すべて2 mmのフリイで水洗いし、埋土中に含まれる遺物の散逸を防いだ。この結果、古墳時代の堅穴住居から多数の滑石製の白玉や石鏡の出土をみた。

調査の記録は、図面関係では最終検出面の実測は航空写真測量を用い、1/300から1/400の写真撮影を行い、1/50と1/100の平面図・構造図を作成した。また、報告書作成段階で構造と等高線を図示した等高線図も作成し、報告書へ掲載した。日々の調査結果は、小地区毎に「構造カード」へ記入し、作業経過は「作業日誌」に記録し、調査の流れを確認できるようにした。

映像記録は、主に大型カメラと小型カメラによる写真としたが、平成元年度からはビデオカメラによる映像記録も適宜採用した。写真は、プローニー判及び4×5判のカラーポジフィルム及びモノクロフィルムを基本とし、35mm判を補助として撮影した。

現地調査で、熱残留磁気・熱ルミネッセンスの年代測定、プランクトン・花粉分析等による古環境の復元、脂肪酸・カルシウム・リンの分析による動物遺体の鑑定など考古学的手法では不可能な分野については、各々必要に応じて自然科学分野の研究者に調査・分析を依頼し、調査に万全を期した。

2 整理・報告書作成

遺物の整理は、抽出した遺物について遺跡毎に登録ナンバー〔R〕番号を与え、後には図面番号「000-00」を与えた。報告書掲載番号が確定した段階で、「遺物管理台帳」を整理・作成し、遺物を収納した。金属製品及び木製品については、自然科学的保存処理を施した。調査を円滑に実施するため、調査現地に近い亀山市和田町に「一般国道亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所」を設けて、実施した。

(駒田利治)

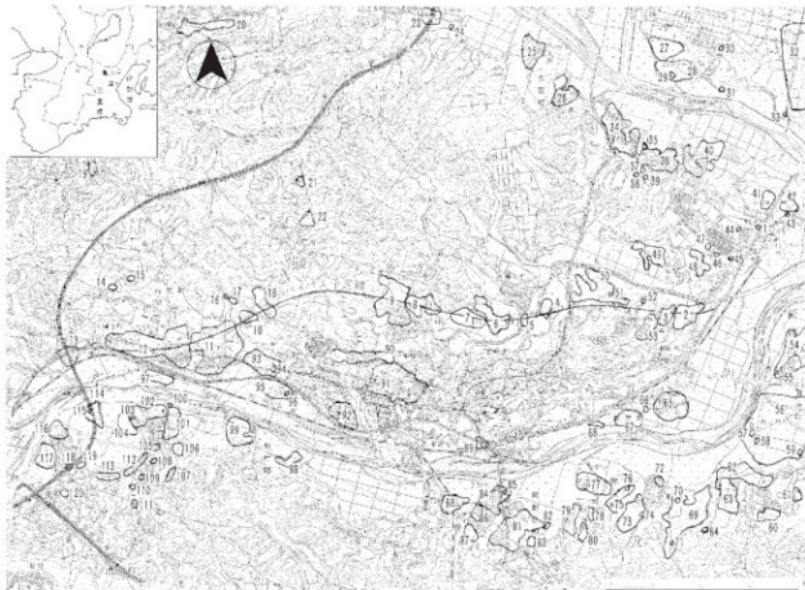
II 位置と環境

1 位置と地形

三重県は南北に長く、旧国名では伊勢国、伊賀国、志摩国と紀伊国の一帯を編入する。さらに、旧伊勢国は、風土的にも、また行政的にも南北三つに分かれ、それぞれ北勢、中勢、南勢と呼称される。亀山市は、北勢の南端に位置し、東は鈴鹿市に、西は伊賀市、南は津市に、北は鈴鹿山脈を隔てて滋賀県と接する。現在の亀山市は、人口51,023人(平成22年国勢調査)、面積190.91km²で、東西に国道1号とJ R関西線が、南北に名阪国道とJ R参宮線が貫通

する交通の要衝にある。

亀山地域の地形は複雑で、北辺の仙ヶ岳(961m)、野登山(851m)をはじめとする山岳地帯の南側は、中小の河川が浸食する開析谷が発達し、起伏の多い台地が連続している。市の南端を東流する鈴鹿川は西の加太峰に源を発し、亀山市、鈴鹿市を流れ、伊勢湾に注ぐ。鈴鹿川両岸は河岸段丘が発達し、低位段丘面上に水田が、高位段丘面上に集落が立地する。



第2図 鈴鹿川流域の遺跡位置図 (1:50,000)

2 歴史的環境

1 繩文時代

亀山市域では、現在のところ確実に旧石器時代に遡る遺跡は報告されていないが、正知浦遺跡(6)出土の有茎尖頭器が唯一最古の遺物である。

亀山市域では縄文時代の遺跡は西部の鈴鹿川流域に集中している。今次バイパス建設によって調査された大鼻遺跡(12)では、早期の竪穴住居7棟とともに押型文土器を出土している他、大鼻遺跡の東方約1kmに位置する野村遺跡(93)からは後期の土器が、さらに1km東方の南野遺跡(92)からは晩期の土器が、また、鈴鹿川を隔てて対岸の沢遺跡(102)からは中期を主体とした前期から晩期の土器を出土している。

2 弥生時代

亀山市域における弥生時代の遺跡は、発掘調査によって検出された遺跡の他は明らかでない。前期に遡る遺跡・遺物は、現段階では報告されていない。地蔵僧遺跡では中期中葉の方形周溝墓3基と後期後半の竪穴住居6基が検出されている他、大鼻遺跡では中期中葉から後葉にかけての方形周溝墓11基を検出している。また、太岡寺古墳群(13)の下層から中期の住居跡を検出している他、下庄町からは中期の壺の出土報告がある。特に大鼻・地蔵僧遺跡の遺物は中期中葉からの「近江系」の壺も出土しており、鈴鹿市の沖積地に立地する上箕田遺跡などには見られない近江との交流が注目される。

3 古墳時代

畿内から東国への玄関口に位置する鈴鹿川流域は、古墳時代に至り高度に発達した文化の吸収、伝播の地となった。

鈴鹿川流域及び北勢地方で最古最大の古墳は、能褒野王塚古墳(29)とされる。全長90mの前方後円墳は、埴輪列・葺石を外部施設とし、概ね4世紀後半の時期が想定される。それに続く古墳は、鈴鹿川流域では鈴鹿市愛宕山1号墳(全長66m、前方後円墳)や寺田山1号墳(全長70m、前方後円墳)で、概ね5世紀前後の時期が考えられる。また、それらは規模的には似通っているが、距離的には分散しており、鈴鹿川流域が全体として系統的に発展したのではなく、それぞれの小グループに分化して発展していく。

た。

上椎ノ木1号墳(3)を含むグループは、鈴鹿川流域の中でも特に卓越しており、上椎ノ木1号墳→愛宕山1号墳→西ノ野5号墳(58、全長31m、前方後円墳)→西ノ野王塚古墳(57、全長63m、前方後円墳)→井尻古墳(66、全長54m、前方後円墳)→井田川茶臼山古墳(44)の首長墓の変遷を辿ることができる。特に井田川茶臼山古墳は、1972年に調査され、この地方では最古の横穴式石室と考えられる。箱式石棺2基を主体部とし、画文帯同向式神獸鏡2面、宝冠、馬具類をはじめとする数々の副葬品の豊富さは畿内の強い結びつきをよく反映している。また、亀山市の西端には、木ノ下古墳(118、全長31m、前方後円墳)と山下古墳(103、全長39m、前方後円墳)が位置する。木ノ下古墳は、1964年に名阪国道建設に先立ち発掘調査された。埴輪列と葺石を外部施設とする帆立貝式古墳で、三つの主体部を有し、獸幣鏡や形象埴輪をはじめとする出土品から5世紀末の築造とされる。

この時代の集落は、須恵器、土師器の散布する遺跡の数から多くの集落が存在したであろうことが予想される。発掘調査によって明らかになった集落遺跡では、大鼻遺跡(竪穴住居64棟、6世紀)、山城遺跡(2、竪穴住居16棟、4~6世紀)、柴戸遺跡(50、竪穴住居17棟、4~5世紀)、地蔵僧遺跡(竪穴住居32棟、4~6世紀)、柴崎遺跡(竪穴住居5棟、6世紀)等がある。

4 奈良・平安時代

この地域は、律令時代には鈴鹿郡に属していた。「和名抄」によれば、鈴鹿郡には英多、高宮、長世、鈴鹿、牧田、神戸、驛家の7郷があった。郡衙の所在地については不明であるが、ここに三閻の一つである鈴鹿関が設けられた。伊賀から加太越えて鈴鹿川に至る大和街道(旧東海道)上に設けられた関は、現在の亀山市閑町集落の地に比定されている。壬申の乱の頃には、すでに關としての機能を備えていたようである。伊勢國府の所在地も鈴鹿郡内にあり、創置の国府が鈴鹿市広瀬町長者屋敷遺跡(32)にあり、鈴鹿関の軍団をも兼ね備えていたようである。しかし、延暦8(789)年の三閻廃止、延暦11(792)年の軍団制の廃止でその役割を終え、平安時代には政府の

み鈴鹿川対岸の国府地内に移動したものと考えられる。

鈴鹿郡内で白鳳・奈良時代の寺院跡は現在のところ発見されていない。僅かに奈良時代の伊勢国分寺へ供給された川原井瓦窯跡の他、国分寺と同系統の瓦を産出する八野瓦窯跡(64)と隣接する寺院跡の可能性もある八野积迦堂遺跡(63)が確認されるのみである。また、亀山市閑町大日森遺跡からは平安時代後半の古瓦や土製如来座像が発見されており、寺院跡と考えられている。

条里造構は、平地が狭小なためあまり発達せず、僅かに鈴鹿川右岸の山下・木ノ下地区、阿野田・桜野地区、安楽川右岸の太田地区の一部に見られるのみである。

5 鎌倉・室町時代

院政期よりこの地方にも荘園の成立をみる。「神鳳抄」には豊田御厨、安乃田御厨、安楽御厨、葉若御厨、原御厨、井後(尻)御厨等が見えるが、その他の記録には、畫生荘、和田荘、三箇荘等も散見される。遺跡との照合でも、平安時代末期からの遺跡は前代よりも格段に増加している。今次バイパス建設によって調査された大蔵遺跡(8)や糸屋塙内遺跡(9)では、平安時代末期の集落跡を検出しているが、特に後者は葉若御厨との関係が指摘できる集落構成

となっている。

元久元(1204)年、平重盛の曾孫である平実忠は鈴鹿郡閑谷21郷の地頭職に任じられ、久我に居を構え、閑氏を称した。後に山下の地に館(105)を移し、文永元(1264)年には若山城(90)を築いてここを拠点とした。南北朝争乱期に、閑盛忠は南朝方の武将として活躍したが、5人の子息に領地を分割し、峯城、加太城、国府城、沢城を築かせた。閑氏一統である。

その他の中世城館としては、野元坂跡(23)、白木城跡(19)、小川城跡(20)、沢遺跡・山下城跡(102)、阿野田城跡(86)がある。

6 江戸時代

天正18(1590)年、峯城主岡本下野守良勝は秀吉よりこの地方の領主として領地をあてがわれ、若山城の南に新城を築いた。これが亀山城跡(91)で、その後、本多俊次によって城郭とともに城下町も整備された。城下を通過するように東海道が付け替えられ、巡見道や伊勢別街道等の脇街道も整備された。野村一里塚跡(94)は、東海道で唯一現存する一里塚である。

延享元(1744)年以降は、譜代大名石川氏が代々亀山藩を治め、所領6万石の内、1万石は備中領で、残り5万石は鈴鹿郡を中心とした86ヶ村であった。

(浅尾 恒)

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	規模、発掘調査等
1	谷山古墳	亀山市井田川町	古墳	古墳	一辺13mの方墳、5世紀後葉築造
2	山城遺跡	亀山市川合町	集落跡	弥生～鎌倉	古墳時代の竪穴住居16棟、鎌倉時代の溝
3	上裡／木綿跡・上裡／木吉塙跡	亀山市川合町	古墳、城壁跡	古墳、戰国	4世紀後半の前期古墳、中世城館
4	堀跡遺跡	亀山市椿世町	集落跡	平安～鎌倉	平安～鎌倉時代の堀立柱建物群
5	大坪遺跡	亀山市椿世町	散布地	鎌倉	1987年試掘調査
6	正知浦遺跡・正知浦古墳群	亀山市龟田町	古墳、集落跡	古墳～江戸	古墳2基、奈良～江戸時代の集落跡
7	千本塙遺跡	亀山市龟田町	水田、集落跡	奈良～鎌倉	奈良時代の竪穴住居、鎌倉時代の堀立柱建物
8	大蔵遺跡	亀山市羽若町	集落跡	奈良～鎌倉	奈良時代末～鎌倉時代を中心とする集落跡
9	糸屋塙内遺跡	亀山市羽若町	集落跡	平安～鎌倉	平安～鎌倉時代の大集落跡
10	上野塙内遺跡	亀山市野村町	散布地	古墳～室町	1988年試掘調査
11	北瀬古遺跡	亀山市布気町	散布地	縄文	縄文時代早期土器片出土
12	大鼻遺跡	亀山市太岡寺町	墳墓、集落跡	縄文～室町	弥生時代の方形周溝墓群、縄文～室町時代の大集落跡
13	太岡寺古墳群	亀山市太岡寺町	古墳	古墳	1964年調査、6基の内3基が横穴式石室
14	大畠遺跡	亀山市布気町	散布地	鎌倉～江戸	山茶碗、施釉陶器

第3表 亀山市周辺の遺跡一覧表 (Noは第2図の番号と一致)

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	規模、発掘調査等
15	山子遺跡	亀山市布気町	散布地	鎌倉～室町	山茶碗、常滑窯
16	古部野経塚	亀山市布気町	経塚	平安	円形、径5m・高1.5m
17	横沢経塚Ⅰ・Ⅱ	亀山市布気町	経塚	平安	I : 径6.5m・高1.3m, II : 径6.3m・高1m
18	高飛鶴跡	亀山市野村町	城館跡	戦国	土壘が数ヶ所残る、伝承なし
19	白木城跡	亀山市白木町	城館跡	室町	関家与力の白木氏の居城跡、永享年間築城
20	小川城跡	亀山市小川町	城館跡	室町	関家与力の小川氏の居城跡、土壘残る
21	住山庚寺	亀山市住山町	寺院跡	室町	中世真宗寺院跡
22	住山鶴跡	亀山市住山町	城館跡	戦国	関氏一党の住山氏の居城跡
23	野元坂館跡	亀山市辺法寺町	城館跡	戦国	1969年調査、掘立柱建物2棟等検出
24	青木古墳	亀山市辺法寺町	古墳	古墳	円墳、径6m・高1m
25	太田遺跡	亀山市太森町	散布地	鎌倉～江戸	土師器、山茶碗、近世陶器
26	高頭遺跡	亀山市太森町	散布地	縄文、古墳～江戸	石器、須恵器、土師器、山茶碗、常滑窯
27	御帝立道跡	亀山市能褒野町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、施釉陶器、円筒埴輪
28	能褒野古墳群	亀山市田村町	古墳	古墳	円墳16基、径4～14m
29	能褒野王塚古墳	亀山市田村町	古墳	古墳	前方後円墳、全長90mでこの地方最古で最大
30	小天狗古墳	亀山市田村町	古墳	古墳	円墳、径10m・高2m
31	名越2号墳	亀山市能褒野町	古墳	古墳	前方後円墳、消滅
32	長者屋敷遺跡	鈴鹿市広瀬町	官衙	奈良	創置の伊勢国府跡
33	矢下4号墳	亀山市田村町	古墳	古墳	前方後円墳、消滅
34	中一色遺跡	亀山市長毛町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、白磁、常滑窯、山茶碗
35	山尾氏館跡	亀山市田村町	城館跡	戦国	天正年間、山尾甲斐守が居城、土壘、堀残る
36	奥条遺跡	亀山市田村町	散布地	室町	土師器、山茶碗、白磁、近世陶器
37	中尾遺跡	亀山市田村町	城館跡	戦国	土壘、堀切残る
38	高い山古墳	亀山市田村町	古墳	古墳	円墳、径10m・高1m
39	田守神社古墳	亀山市田村町	古墳	古墳	円墳、径18m・高1.5m
40	若宮遺跡	亀山市田村町	散布地	古墳	須恵器、土師器、灰釉陶器、常滑窯、山茶碗
41	阿ごら遺跡	鈴鹿市小田町	散布地	古墳	1989年試掘調査
42	宮上遺跡	鈴鹿市小田町	散布地	古墳～鎌倉	須恵器、土師器、山茶碗
43	宮上遺跡	鈴鹿市小田町	古墳	古墳	横穴式石室、須恵器・長頸壺・広口壺)出土
44	井田川某山古墳	亀山市みどり町	古墳	古墳	1972年調査、横穴式石室、銅鏡2面等遺物多数出土
45	川合古墳	亀山市川合町	古墳	古墳	円墳、径6m・高0.8m
46	天賀山古墳	亀山市川合町	古墳	古墳	円墳、径10m・高1m
47	城山古墳	亀山市みどり町	古墳	古墳	前方後円墳、埴輪列、全長40m
48	黒沢遺跡	亀山市川合町	散布地	縄文～江戸	縄文土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗
49	ハツハ遺跡	亀山市みどり町	散布地	縄文～鎌倉	縄文土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗
50	柴戸遺跡	亀山市柴栄町	集落・古墳	弥生～鎌倉	1987・1988年調査、古墳時代住居17棟、古墳10基
51	柴戸古墳	亀山市柴栄町	古墳	古墳	1987年調査、木棺直葬、6世紀前半築造
52	釣鐘山古墳	亀山市川合町	古墳	古墳	1973年調査、箱式石棺、6世紀前半築造
53	和田古墳群	亀山市和田町	古墳	古墳	6基、径6～14mの円墳
54	北一色遺跡	鈴鹿市国府町	集落・墓地	縄文～古墳	1968・1989年調査、縄文時代中期住居跡6棟
55	保子里古墳群	鈴鹿市国府町	古墳	古墳	全16基、現存15基、1号墳からは五重鏡等出土
56	西ノ野遺跡	鈴鹿市国府町	散布地・古墳	縄文～古墳	全91基の古墳群(現存12基)
57	西ノ野1号(王塚)塙	鈴鹿市国府町	古墳	古墳	前方後円墳、全長63m・後円部高6m、周提
58	西ノ野5号塙	鈴鹿市国府町	古墳	古墳	前方後円墳、全長31m・後円部高3.4m
59	西ノ野11号(腕塚)塙	鈴鹿市国府町	古墳	古墳	前方後円墳、半塙
60	南條A遺跡	鈴鹿市八野町	散布地	古墳	須恵器、土師器
61	南條B遺跡	鈴鹿市八野町	散布地	古墳	須恵器、土師器
62	八野古墳群	鈴鹿市八野町	古墳	古墳	全25基、現存16基、2・3・8号墳は発掘調査
63	八野祇園堂遺跡	鈴鹿市八野町	散布地	弥生～室町	寺院跡か
64	八野瓦窯跡	鈴鹿市八野町	窯跡	奈良	瓦窯跡2基、重圓文・蓮華文軒丸瓦、消滅
65	宮ノ腰遺跡	亀山市井尻町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器、常滑窯
66	井尻古墳	亀山市井尻町	古墳	古墳	前方後円墳、全長54m・後円部高4m
67	高垣内遺跡	亀山市井尻町	散布地	縄文～室町	剥片石器、須恵器、土師器、山茶碗、施釉陶器
68	小下遺跡	亀山市管内町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器

第3表 亀山市周辺の遺跡一覧表 (No.は第2図の番号と一致)

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	規模、発掘調査等
69	植松遺跡	亀山市管内町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶椀、灰釉陶器
70	お経松古墳群	亀山市管内町	古墳	古墳	円墳4基、径6～10m
71	植松古墳	亀山市管内町	古墳	古墳	円墳、径10m・高1.8m、半壙
72	長瀬神社古墳群	亀山市管内町	古墳	古墳	円墳3基、径7～8m
73	南野遺跡	亀山市管内町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶椀、灰釉陶器、常滑窯
74	管内町南野古墳	亀山市管内町	古墳	古墳	円墳、径7m・高0.8m
75	東華野遺跡	亀山市管内町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶椀、灰釉陶器、常滑窯
76	東華野1・2号墳	亀山市管内町	古墳	古墳	2号墳は1991年調査、径13.5m、6世紀後半の円墳
77	中野遺跡	亀山市管内町	散布地	弥生～鎌倉	弥生土器、須恵器、土師器、山茶椀、常滑窯
78	西華野古墳群	亀山市管内町	古墳	古墳	6基、径7.5～16mの円墳
79	東阿野田古墳群	亀山市管内町	古墳	古墳	8基、円墳
80	東阿野田遺跡	亀山市管内町	散布地	縄文～室町	剥片石器、須恵器、土師器
81	阿野田東遺跡	亀山市阿野田町	散布地	縄文～江戸	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、常滑窯
82	東阿野田9号墳	亀山市阿野田町	古墳	古墳	円墳、径17.5m・高3.5m
83	辰巳谷遺跡	亀山市阿野田町	散布地	縄文～江戸	石匙、土師器、近世陶器
84	下ノ垣遺跡	亀山市阿野田町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、灰釉陶器、近世陶器
85	下ノ垣古墳	亀山市阿野田町	古墳	古墳	円墳、径12m・高1.5m
86	阿野田城跡	亀山市阿野田町	城跡跡	戰国	関氏一党の豊田氏の居館跡
87	西ヶ谷遺跡	亀山市阿野田町	散布地	古墳～室町	須恵器、土師器、山茶椀、施釉陶器
88	中川原遺跡	亀山市阿野田町	散布地	縄文～室町	須恵器、土師器、灰釉陶器、白磁、綠釉陶器
89	陰涼寺山遺跡	亀山市本町	横穴墓	奈良	4基の横穴墓群
90	亀山古(若山)城跡	亀山市若山町	城跡跡	鎌倉～戦国	文永元年、闘闘実忠が築城、以後330年間、関氏の居館
91	亀山城跡	亀山市本丸町、東丸町、西丸町	城跡跡	鎌倉～江戸	天正18年、岡本宗忠が築城、以後幕末まで亀山藩の居城
92	南野遺跡	亀山市南野町	散布地	縄文～江戸	縄文土器、山茶椀、近世陶器
93	野村遺跡	亀山市野村町	散布地	縄文～江戸	縄文土器、山茶椀
94	野村一里塚跡	亀山市野村町	一里塚	江戸	国史跡、慶長9年築造、北側1基のみ現存
95	忍山遺跡	亀山市野村町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶椀、信楽焼、施釉陶器
96	忍山古墳	亀山市野村町	古墳	古墳	円墳、径12m・高2m
97	山之下遺跡	亀山市布気町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶椀、灰釉陶器、近世陶器
98	大古墳遺跡	亀山市和賀町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、白磁、近世陶器
99	和歌遺跡	亀山市和賀町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶椀、近世陶器
100	大垣内古墳	亀山市山下町	古墳	縄文・古墳	1991年調査、径20mの円墳、下層に縄文中期の住居跡
101	大垣内遺跡	亀山市山下町	散布地	縄文～江戸	須恵器、土師器、灰釉陶器、常滑窯
102	沢遺跡・山下城跡	亀山市山下町	集落・古墳、城跡跡	縄文～室町	1987・1989年調査、縄文時代の住居跡、古墳
103	山下古墳	亀山市山下町	古墳	古墳	前方後円墳、全長39m・後円部高4m
104	山下古墳跡	亀山市山下町	散布地	鎌倉～江戸	山茶椀、土師器、近世陶器
105	関忠実館跡	亀山市山下町	城跡跡	鎌倉	文久元年若山城跡築城以前の関氏居城跡
106	荒巣遺跡	亀山市山下町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶椀、常滑窯、近世陶器
107	アタゴ山古墳群	亀山市山下町	古墳	古墳	3基、径10～20mの円墳
108	山ノ神古墳	亀山市山下町	古墳	古墳	円墳、径15m・高3m
109	オドリ古墳	亀山市山下町	古墳	古墳	円墳、径30m・高2m
110	初牛山古墳	亀山市山下町	古墳	古墳	円墳、径30m・高6m、消滅か
111	キツネ塚古墳群	亀山市山下町	古墳	古墳	2基、径15m・高2mの円墳
112	麦尾谷古墳群	亀山市山下町	古墳	古墳	3基、径20m・高5m、1988年試掘調査
113	出入古墳群	亀山市山下町	古墳	古墳	3基、径15～20m・高2～3mの円墳
114	於登志館跡	亀山市木下町	城跡跡	戰国	関氏一党、小野筑前守の居館跡
115	於登志古墳	亀山市山下町	古墳	古墳	円墳、径8m・高1m
116	木ノ下中遺跡	亀山市木下町	散布地	古墳～鎌倉	土師器、須恵器、山茶椀
117	西台遺跡	亀山市木下町	散布地	古墳	土師器、須恵器
118	木ノ下古墳	亀山市木下町	古墳	古墳	1964年調査、全長31mの前方後円墳、5世紀末築造
119	宮ノ前古墳群	亀山市木下町	古墳	古墳	2基、径7～15mの円墳
120	勢武谷経塚	亀山市木下町	経塚	江戸	一字一石經、享保21年設置

第3表 亀山市周辺の遺跡一覧表 (No.は第2図の番号と一致)



第3図 粕屋堀内遺跡・大藪遺跡・千本塚遺跡位置図 (1:10,000)
龜山市都市計画平面図D-6, D-7

III 千本塚遺跡

1 位置と地形

千本塚遺跡の所在する亀山地方の台地は、開析谷がよく発達し、台地と谷が樹枝状に入り組んでいる。千本塚遺跡も、周囲との比高約4mをはかる小島状の地形をなし丘陵上は標高51m前後で東西約80m、南北約50mの平坦地となっている。

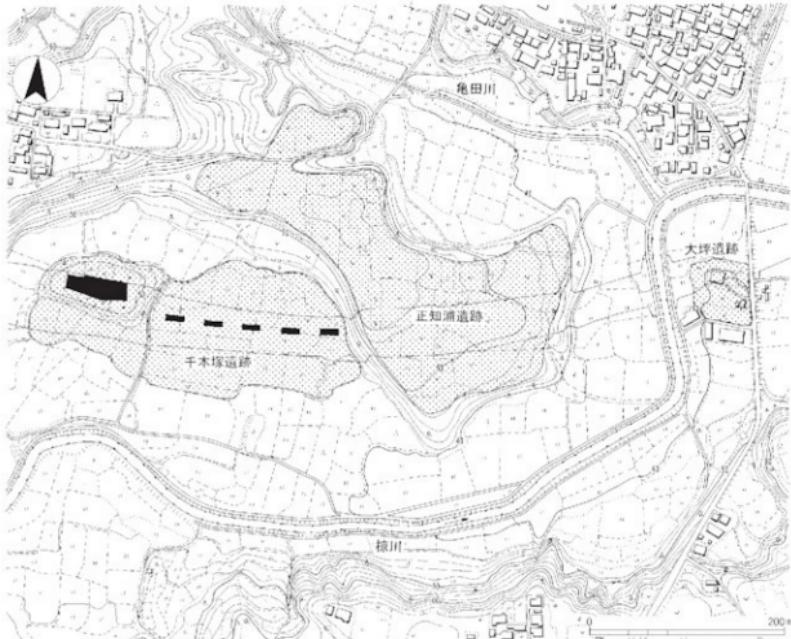
千本塚遺跡と谷を隔てた東側の台地状には、古墳時代から近世に至るまで断続的に営まれた正知浦遺跡・正知浦古墳群、西側には奈良時代から鎌倉時代の集落跡である大坪遺跡が所在する。

調査の経過 事業地内の分布調査を実施した際、丘陵上及び水田地帯で須恵器・山茶椀片が採集され、古墳時代以降の集落跡と水田跡の存在が想定された。

昭和61年度には、範囲確認を実施し、遺跡の範囲及び内容の把握に努め、水田地帯については遺構のトレンチ調査を実施し、土壤分析を㈱バリノ・サークルウェイに委託した。

この調査の結果、丘陵上では溝・ピットの遺構を確認するとともに7世紀初期の須恵器が出土し、水田地帯では古墳時代の須恵器及び鎌倉時代の山茶碗が出土したが、水田遺構としての畦畔等は確認されなかった。

この結果に基づき、面調査を丘陵部に限定し、平成2年1月8日から2月8日まで1,230m²の調査を実施した。



第4図 千本塚遺跡地形図 (1:5,000) 黒塗り:調査区

2 遺構と遺物

1 飛鳥時代

この時代の遺構には、堅穴住居 1 基(S H10)と土坑(S K 4、S K 5)がある。また、出土遺物には、6世紀末から7世紀前半の土師器、須恵器がある。

堅穴住居

S H10 調査区の北東隅で検出された。主軸はN39°Wで、北東部は調査区外に広がる。東側には、隅丸方形状に落ち込んで段を認めたが、堅穴住居の重複とは断定できなかった。南西辺壁が約4.3mで僅かに隅が丸い平面形をなし、深さは約4~10cmで検出した。周溝は確認されず、主柱穴は3ヶ所で確認でき、柱間は2.2mである。南西壁中央部で、カマドの痕跡とみられる焼土が認められた。

遺物は、カマド近くで土師器甕の胴部片とピットから須恵器杯蓋片が出土するのみで、同時期と考えられる土坑及び包含層遺物から7世紀初頭の時期が考えられる。

土坑

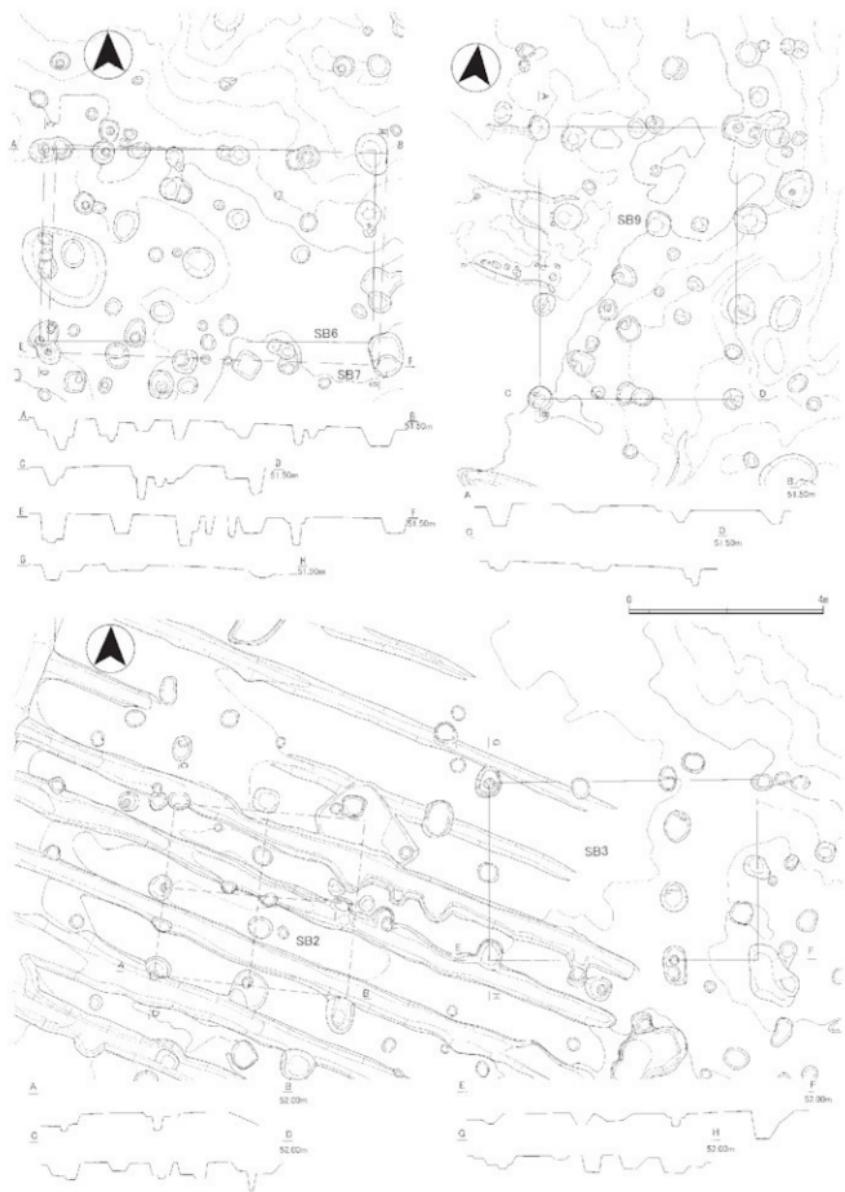
S K 4 調査区の中央北部で検出された長径0.6m、



第6図 SH10実測図 (1:100)



第5図 千本塚遺跡遺構配置図 (1:400)



第7図 SB2・3、SB6・7、SB9実測図 (1:100)

深さ0.1mの楕円形の土坑で、土坑内から正立の状態で土師器杯(7)が完形で出土した。

7は、口径12.9cm、器高3.4cmで、体部が大きく内湾し、口縁端部はヨコナデされ、内側に巻き込まれて肥厚する。体部外面には、粘土紐の接合痕によるオサエで整形する。7世紀前半のものと考えられる。

SK 5 調査区中部で長径1.8m、短径1.4m、深さ0.3mの不整形の土坑である。土坑内から須恵器杯(8)の完形が、正立の状態で出土した。

8は、口径10.2cm、器高3.4cmで、口縁端部は強く内傾し、受部も短い。体部全体をロクロ水挽きで整形し、底部外面はヘラケズリ調整するが、未調整の部分も残る。7世紀前半のものである。

2 奈良時代

この時期の遺構には、掘立柱建物5棟(SB 2、SB 3、SB 6、SB 7、SB 9)と土坑1基(SK 8)がある。出土遺物は、土師器、須恵器があり、SK 8で一括出土したほか、調査区中央部の包含層から多く出土している。

掘立柱建物

3間×2間の側柱建物4棟、2間×2間の総柱建物1棟が検出された。

SB 2 調査区西部で検出された2間×2間の総柱建物で、方位はE 4° S、東西4.0m・南北3.6mで、東隅柱穴の柱通りが悪いが、倉庫と考えられる建物である。柱間は、桁行2.0m、梁行1.8mの等間で、柱穴掘形は、径0.4~0.6m、深さ0.6mである。

柱穴遺物は、土師器、須恵器の細片である。

SB 3 調査区西部SB 2の東で検出された3間×2間の側柱建物で、方位E 0° S、東西5.5m、南北3.8mの東西棟の建物である。柱間は、桁行で西から1.8+1.9+1.8m、梁行で1.9mの等間と考えられ、柱穴は径0.3~0.5m、深さ0.5mほどである。

柱穴から土師器、須恵器杯蓋(1)・杯(2)・壺(3・4)が出土している。

1は、推定口径12.8cmで、疑宝珠形のつまみが付くものと考えられ、平坦な天井部に口縁端部が下方に向引きだされる形態をなし、平城宮I期に併行するものと考えられる。2は、口径12.6cm、器高2.6

cmで、わずかに内湾した底部から口縁部が外方に直線的に引きだされる。底部外面には、ヘラケズリの痕跡を残す。3・4は、壺の底部と口縁部である。杯蓋の時期から、8世紀前半の遺物と考えられる。

SB 6 調査区中央部で検出され、SB 7と同一場所で建て替えられた建物で、SB 7より古い。方位はE 2° Sで、東西棟4間×2間の側柱建物、東西7.0m、南北3.9mである。柱間は、桁行が北側柱で西から2.0+2.0+1.5+1.5m、南側柱で西から2.0+1.5+1.5+2.0m、梁行は北から1.8+2.1mである。柱穴掘形は、径0.4~0.5m、深さ0.4~0.7mである。柱穴からは、土師器壺(6)、須恵器杯蓋(5)などが出土している。

5は、推定口径16cmで、疑宝珠形のつまみをもつものと考えられる杯蓋は、平城宮I期に併行するものであろう。6は、推定口径26.6cmで、口縁部がほぼ直角に外に開き、端部が上方に引きだされる。

SB 7 SB 6と同一場所で建て替えられた建物で、SB 6より新しい。方位はE 5° Sで、東西棟3間×2間の側柱建物で、東西6.8m、南北4.3mである。柱間は、桁行が北側柱で西から2.5+2.5+1.8m、南側柱で西から2.8+2.2+1.8m、梁行が西側柱で北から2.2+2.1m、東側柱で北から2.5+1.8mとそれぞれ柱間が異なる。柱穴掘形は、径0.4~0.5m、深さ0.4~0.7mである。



S B 9 調査区東部で検出され、方位はN 7° Wの南北棟の建物で、3間×2間の側柱建物、南北5.7m、東西4.0mである。柱間は、桁行1.9m、梁行2.0mの等間であり、柱穴掘形は、0.4~0.5m、深さ0.3mである。柱穴からの遺物で、時期を決め得る資料はない。

土坑

S K 8 S B 6・7の南西に位置する推定長径4.5m、短径3.0m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。土坑は、暗茶褐色粘質土を埋土とし、比較的多くの土器類が出土した。土師器皿(13~15)・甕(16~18)・瓶(19)、須恵器杯蓋(9・10)・杯(11・12)のほか、砥石(20)が1点出土したが、完形に復元し得るものではなく、廃棄されたものと考えられる。

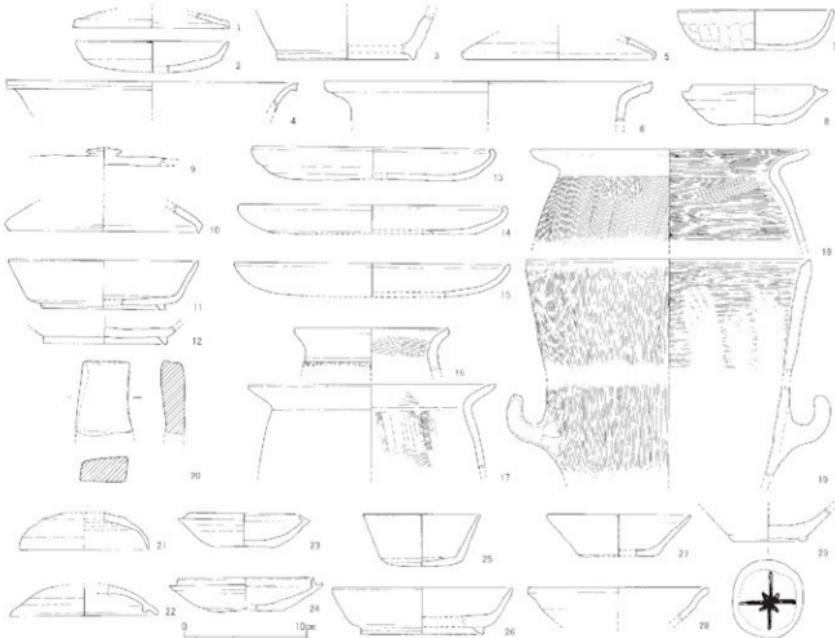
皿(13~15)は、口径19.8cmと22.6cmの法量差が認められる。口縁部は内済し、端部で肥厚して内側に巻き込まれる。口縁部をヨコナデし、底部外面をヘラケズリする。甕(16~18)は、口縁部が「く」字状

に外反し、体部はわずかに外開する長胴甕である。

ともに口縁部をヨコナデし、18は体部外面にタテハケ、内面はともにヨコハケで調整する。瓶(19)は、体部が直線的に外開し、口縁端部が上方につまみ上げられる。外面にタテハケを施し、内面はヨコハケで調整したあとナデで仕上げられる。直角気味に折り曲げられた把手が1対貼り付けられる。須恵器杯蓋(9・10)は、疑宝珠形のつまみが付くものと考えられる。天井部は丸味をもち、口縁部が下方に垂直に引き出される。

3 包含層の遺物

7世紀後半の須恵器(21~24)と8世紀の須恵器(25~27)等がある。前者には、天井部が丸く、口縁部が外開する(21)、口縁半端部内面に返りをもつ(22)杯蓋がある。杯身は口縁部が短く、内傾し、受け部も小さい(23・24)。7世紀第IV四半期のものと考えられる。



第9図 千本塚遺跡出土遺物実測図 (1:4)

後者の須恵器には、比較的小さな底部から口縁部が直線的に外開する杯(25)、直線的に外開する口縁部と底部に高台が貼り付けられた杯(26)及び口縁部が大きく外開する(27)がある。25・27の底部外面は、ヘラケズリされる。25・26は8世紀前半、27は後出し8世紀後半と考えられる。

4 トレンチ出土の遺物

千本塚遺跡と正知浦遺跡が立地する丘陵裾に拡がる谷底平野に設定したトレンチから出土した遺物に山茶椀(28・29)がある。

28は、推定口径14.6cmで、口縁端部がヨコナデにより外反し、端面が外方に向く。29は、底径6.3cmで、断面台形の低い高台が貼り付けられる。底部外面は糸切りされ、縦横と×印による墨書き記号が施される。ともに、第Ⅲ段階第8型式の時期と考えられる。

3 まとめ

千本塚遺跡は、小規模な独立丘陵上に位置する飛鳥時代と奈良時代の二時期にわたる古代集落跡である。前者の7世紀初頭では、堅穴住居で構成される集落であったと推定されるが、堅穴住居跡1棟であるため詳細は不明である。

後者の8世紀初頭では、堅穴住居と同程度の建物面積をもつ掘立柱建物で構成される集落に変化している。この集落は、小さな独立丘陵上に立地し、限定された空間において、3間×2間の掘立柱建物2～3棟に倉1棟を共有する形態をとる古代世帯共同体の様相の一端を示していると考えられる事例と考えられる。また、畿内周辺に位置するこの地域で、遅くとも7世紀代から8世紀初頭には、堅穴住居から掘立柱建物への住居構造の変遷が図られたことを示している。

(駒田利治)

IV 大藪遺跡

1 位置と地形

大藪遺跡の立地する亀山市北部は、開折谷が発達し、台地と谷が入り組んだ地形となっている。大藪遺跡は、鈴鹿川支流の猿川左岸の亀山市羽若町集落の北東部に位置する。台地は標高約75mで、水田面との比高は約30mである。東方には、谷水田を挟んで奈良時代の集落跡である千本塚遺跡、古墳時代から近世まで営まれた正知浦古墳群・正知浦遺跡を望み、西方には一連の遺跡群と考えられる平安時代から鎌倉時代の集落跡である糸屋垣内遺跡が広がっている。

大藪遺跡は、昭和62年度に範囲確認調査を行い、全遺跡推定面積のうち、道路敷にあたる台地縁辺部8,650m²を本調査として、平成元年7月10日から平成2年2月8日にかけて、A地区(4,500m²)、B地区(2,050m²)、C地区(2,100m²)の3地区にわけて発掘調査を実施した。

2 A地区の遺構と遺物

1 飛鳥時代

この時期の遺構は、堅穴住居(SH)3棟、掘立柱建物(SB)5棟、土坑(SK)3基等で調査区の北部を中心で営まれている。

堅穴住居は、東西・南北とも一辺4m以上の方形の平面形を呈し、SH2・26・28の北壁側にカマド跡とみられる焼土がみられる。遺構の残存状態が悪く、平面形を確認できない堅穴住居もあった。周溝は、SH2・28で確認された。

掘立柱建物は3間×2間の南北棟1棟、3間×2間の東西棟2棟、2間×2間のもの1棟、東西2間で南北は2間以上のもの1棟が検出された。柱穴掘形は、径が40~60cmと大きめのものが多く、柱間は1.4~2.4mでやや不等間の傾向がみられる。

土坑は不定形で、深さは検出面から20~30cmと比較的浅く、SK46以外は遺物も少ない。

この時期の遺構・遺物は、A地区が中心であり、B地区・C地区ではほとんど検出されていない。

堅穴住居

SH2 調査区の北西隅に位置する。東西4.6m、南北は4.3~4.7mと西側が長い堅穴住居である。保存状況が悪く、北辺部には擾乱土坑がみられる。検出面から2~5cmで床面が検出された。特に南東隅は残りが悪く検出が困難であり、本来は南北約4.7mの平面が方形をなすものと考えられる。

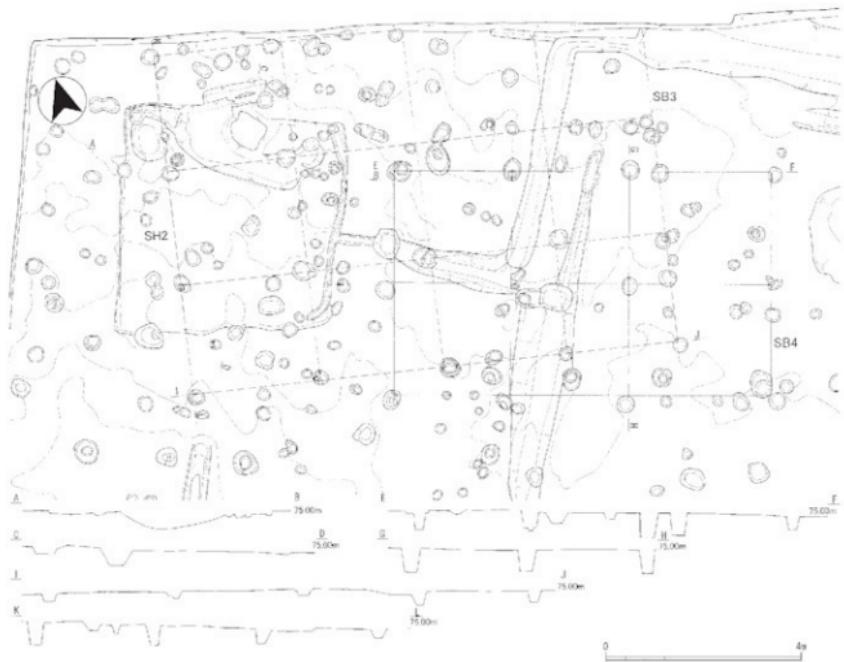
方位は、N20°Eである。主柱穴をもち、東壁にわずかに周溝の痕跡を認める。北辺のほぼ中央部にカマドが取り付く。主柱穴の径は30~50cm、深さ5~25cmで、南東隅の柱穴は削平され、確認できなかつた。柱間は、東西・南北とも約2.8mである。周溝は、東壁側に幅10~20cm、深さ2~7cmの溝が検出されたのみで、他の壁では認められなかつた。カマドは保存状態が悪く、北壁中央部に2~5cmの焼土の痕跡を残す程度である。出土遺物は、土師器甕(1)などである。

SH26 調査区北東部に位置する。北西隅部が溝に削られ、平面の検出が困難であり、東辺3.5m、南辺3.2m以上、北辺3.0m以上、西辺3.2m以上の不整形な方形を呈する。検出面から5~15cmで床面が検出された。方位は、N10°Wほどである。主柱穴は明瞭でなく、南西部が土坑状に窪む。土師器甕(2)がある。

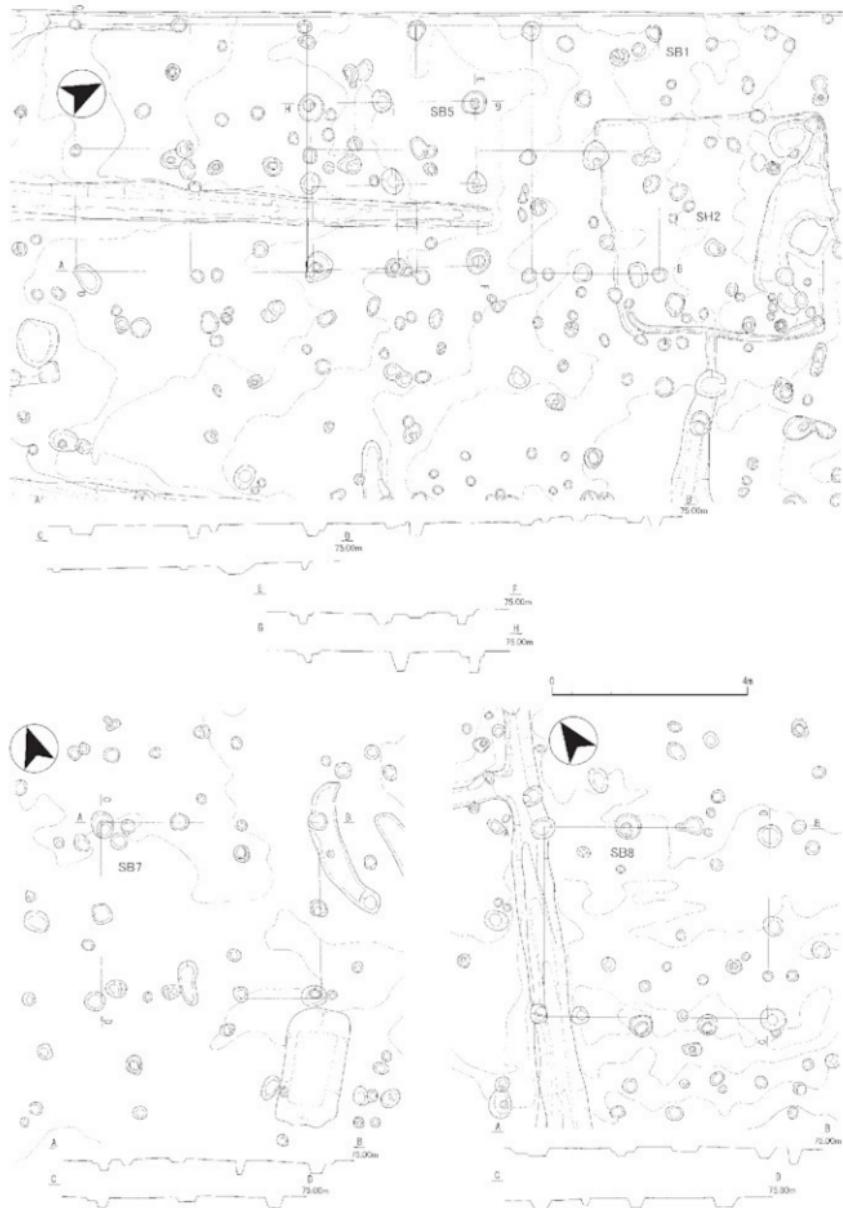
SH28 調査区北東部で、SH26の東に位置する。最も保存状態が良好な堅穴住居で、南北4.9m、東西4.6~4.7mの方形を呈し、検出面から約8cmの深さで床面となる。方位は、N25°Eである。主柱穴をもち、主柱穴の径は20~50cm、深さも20~40cmである。主柱穴間の柱間は、北側2.1m、南側2.4m、東側2.5m、西側2.3mである。南壁側と東壁側にわずかに周溝の痕跡が認められ、幅10~20cm、深さ5~10cmで、一部痕跡をとどめているに過ぎない。北辺のほぼ中央部にカマドが取り付き、天井部が崩落しているが、保存状態は良好である。中央部に土師器甕(3)が正立の状態で検出された。カマドの裾部最大幅は60cmで、右袖75cm、左袖50cmがほぼ平行に張り出している。焚口部付近には焼土が堅く張り



第10図 大蔵遺跡A地区遺構配置図（1:400）



第11図 SH2・SB3・4、SH26、SH28実測図 (1:100)



第12図 SB1・5・SH2、SB7、SB8実測図 (1:100)

付いている。また、カマドの東側20cmの部分にも焼土が堅く張り付いた箇所があり、カマドが改築された可能性もある。

S H39 調査区の東部で、S H28の東に位置する。竪穴住居の北西隅部と推定される一部を確認するにとどまり、土坑の可能性もある。

S H39からは、土師器甕(4)、須恵器杯(5)が出土している。須恵器杯は、陶邑古窯址群のT K209～T K217、尾張灘の東山50号窯跡の時期に比定され、600～650年の7世紀前半と考えられる。

掘立柱建物

S B 5 調査区の北西部に位置する。棟方向はN 23° Eで、南北2間(3.4m)、東西2間(3.4m)の方形の平面形を呈する純柱建物である。柱間は、全て1.7mの等間である。柱穴掘形は、40～60cm、深さ25～40cmであり、根石が認められる柱穴もある。倉庫と考えられ、位置や方向からS H 2との同時存在も推定される。

S B 7 調査区の北西部に位置する。棟方向はE 20° Sで、桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.6m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行1.5m、梁行1.8mの等間である。柱穴掘形は、径20～50cm、深さ5～50cmである。

S B 8 調査区の北西部に位置する。棟方向は、E 36° Sで、桁行3間(4.6m)、梁行2間(3.9m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行の南北側柱で異なり1.4～1.9m、梁行1.95mの等間である。柱穴掘形は、径40～60cm、深さ25～50cmである。西側柱中央の柱穴は、溝に削平され、検出できなかった。

S B12 調査区北部の中央に位置する。棟方向はN 16° Eで、南側柱を溝で削平されており、桁行2間以上(4.0m以上)、梁行2間(4.8m)の南北棟と考えられる側柱建物である。柱間は、桁行2.0m、梁行2.4mの等間である。柱穴掘形は、径25～50cm、深さ15～50cmである。

S B13 調査区のほぼ中央部に位置する。棟方向はN 15° Eで、桁行3間(5.1m)、梁行2間(3.8m)の南北棟の側柱建物である。柱間は、桁行1.7m、梁行1.9mの等間である。柱穴掘形は、径25～45cm、深さ20～55cmである。

土坑

S K10 調査区中央部北端で、S B12の北西に位置する土坑群の一つである。長径2.7m、短径1.2～1.8mの不定形土坑である。深さ18～35cmで、南部に窪みがある。壁面はなだらかに落ち込み、底部は平坦である。土坑の南西部掘形付近に厚さ2～3cmの焼土が認められ、土坑の南東部から長さ4.8m、深さ5～8cmの溝が認められるが、焼土、溝と土坑との関係は不明である。

土師器甕(28・29)、須恵器杯(30)が出土している。土師器甕は、口縁部が短く外反し、端部が細く尖る。外面にタテハケが施される。須恵器杯(30)は、口縁部が短く外湾気味に内傾する形態を示し、7世紀後半のものと考えられる。

S K11 S K10に隣接し、長径4.3m、短径1.9～2.4mの不定形土坑である。深さ5～20cmで、南部により深い窪みがある。壁面は、なだらかに落ち込み、底部は平坦である。

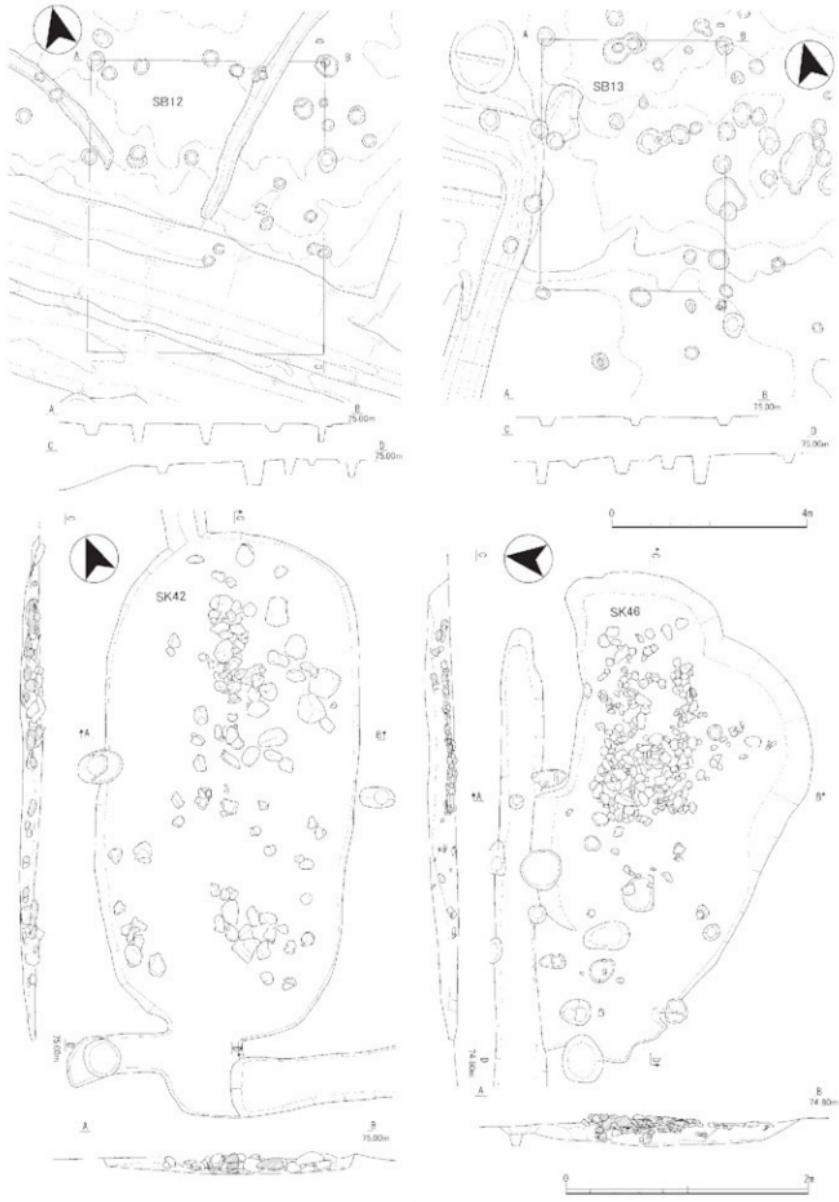
須恵器長頸壺(31)、短頸壺(32)が出土する。(32)は、口縁部が短く直立し、肩は緩く内湾する。口縁部外面には、櫛描きが施される。

S K46 調査区東部に位置し、長径4.1m、短径2.0m、深さ15～30cmの東西に長い楕円形土坑で、北西部は現代の溝に削平されており、土坑全体の形状は不明である。掘形は、非常に緩やかである。主に土坑の東部に挙大から人頭大の川原石と土師器・須恵器などの破片が出土した。それらの多くは、検出面から10～15cmの深さまでの範囲で出土している。土坑の西側には、2ヶ所にわたって厚さ5～10cmほどの焼土が認められ、埋土のなかにも炭が混入した層もあることから、この土坑で火が使われた可能性もある。

土師器杯(11・12)・片口鉢(13)・壺(14)・甕(15～17)・瓶(18)・土錐(19)、須恵器杯(20)・杯蓋(21・22)・壺(23・26)・甕(24・25)・器台(27)などが出土している。

2 平安・鎌倉時代

この時期の遺構は、掘立柱建物19棟、土坑2基。中世墓3基、溝6条等があり、調査区全体に亘がっている。掘立柱建物は、純柱建物12棟、側柱建物7

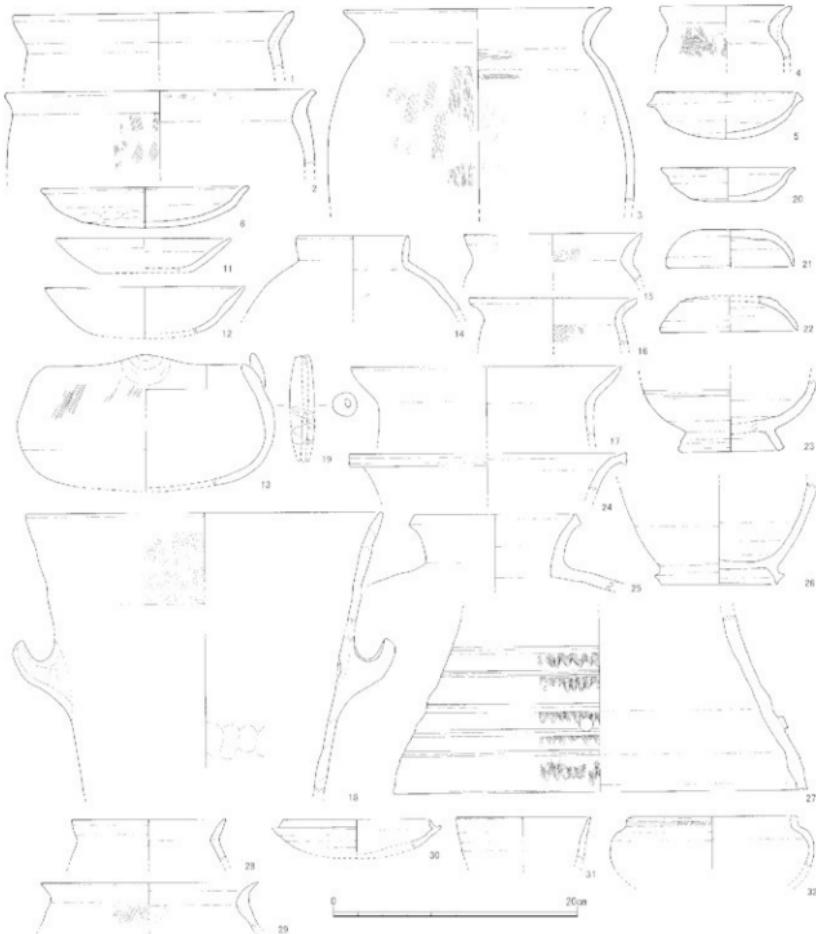


第13図 SB12、SB13実測図 (1:100)、SK42、SK46実測図 (1:40)

棟で構造的には純柱建物が主体をなし、柱穴内に根石をもつものも認められる。棟方向は、東西棟12棟、南北棟7棟と東西棟の建物が多い。建物規模は、S B37が四面庇の桁行6間、梁行5間の建物を最大として、桁行3間、梁行2間の建物が一般的である。柱間は、2.0～2.5mほどであるが、桁行での柱間の

不揃いが目立つようになる。柱穴掘形は、すべて円形で径0.2～0.6mほどである。

建物群の中には、S B31・32・35のように、主屋・脇屋と推定される建物群も存在する。南北方向の溝を数条確認しているが、屋敷地を区画するものは断定しがたい。



第14図 A地区飛鳥・奈良時代遺構出土遺物実測図 (1:4)

掘立柱建物

S B 1 調査区北西部に位置し、奈良時代の S B 5 と重複する。棟方向は N24° E で、桁行 5 間(12.0m)、梁行 2 間(5.1m)の南北棟の総柱建物である。柱間は、桁行が北から 2.6+2.4+2.2+2.4+2.4m、梁行が 2.55m の等間である。柱穴掘形は、径 25~60cm、深さ 10~40cm である。

周辺のピットから灰釉陶器(33・34)が出土している。(33)は、口径 13.2cm、薄手の器壁で緩く内湾する部体から口縁部が外反する。(34)は、高台径 7.0cm、高台断面は長方形で端部がわずかに外反する。ともに第Ⅱ段階第3型式前後の12世紀前半に属する。

S B 3 調査区北西隅に位置し、奈良時代の S H 2 及び平安時代の S B 4 と重複する。棟方向は E11° S で、桁行 4 間(9.9m)、梁行 3 間以上(7.1m)の東西棟の総柱建物である。柱間は、桁行が西から 2.6+2.5+2.5+2.3m と東間がやや狭い。梁行は北から 2.4+2.4+2.3m で、調査区の関係から更に北側に延びる可能性がある。柱穴掘形は、径 20~50cm、深さ 15~50cm である。

周辺のピットから灰釉陶器の底部(35)、縁釉陶器の底部(36)が出土している。(35)は、高台径 7.8cm で、高台断面は長方形をなし、比較的高い。底部外面に 3 条の線形のヘラ記号が見られる。(36)は、高台径 5.8cm で、高台はやや低い。第Ⅱ段階第4型式前後の12世紀中頃に属する。

S B 4 調査区北西部に位置し、S B 3 と重複するが、前後関係は不明である。棟方向は E18° S で、桁行 3 間(7.7m)、梁行 2 間(4.6m)の東西棟の総柱建物である。柱間は、桁行が西から 2.4+2.4+2.9m と東 1 間が広い。梁行は、2.3m の等間である。柱穴掘形は、径 20~50cm、深さ 10~45cm で、柱穴内に根石が存在するものもある。

S B 9 調査区西部の中央に位置する。棟方向は E 34° S で、桁行 2 間(5.0m)、梁行 2 間(4.2m)の東西棟の総柱建物である。柱間は、桁行が西から 2.7+2.3m で、梁行は 2.1m の等間である。柱穴掘形は、径が 20~30cm、深さが 10~28cm で、中央の床束は深さ 6 cm と他の柱穴に比べ浅い。

S B 14 調査区中央部に位置する。棟方向は N27°

E で、桁行 4 間(6.2m)、梁行 3 間(5.7m)の南北棟の側柱建物である。柱間は、桁行が西側柱の北から二つ目の柱穴が確認されていないが、北から 1.3+1.7+1.4+1.8m、梁行は北側柱と南側柱で異なり、北側柱が西から 2.0+2.0+1.7m、南側柱が西から 1.9+1.8+2.0m と不等間である。柱穴掘形は、径 20~30cm、深さ 20~60cm である。

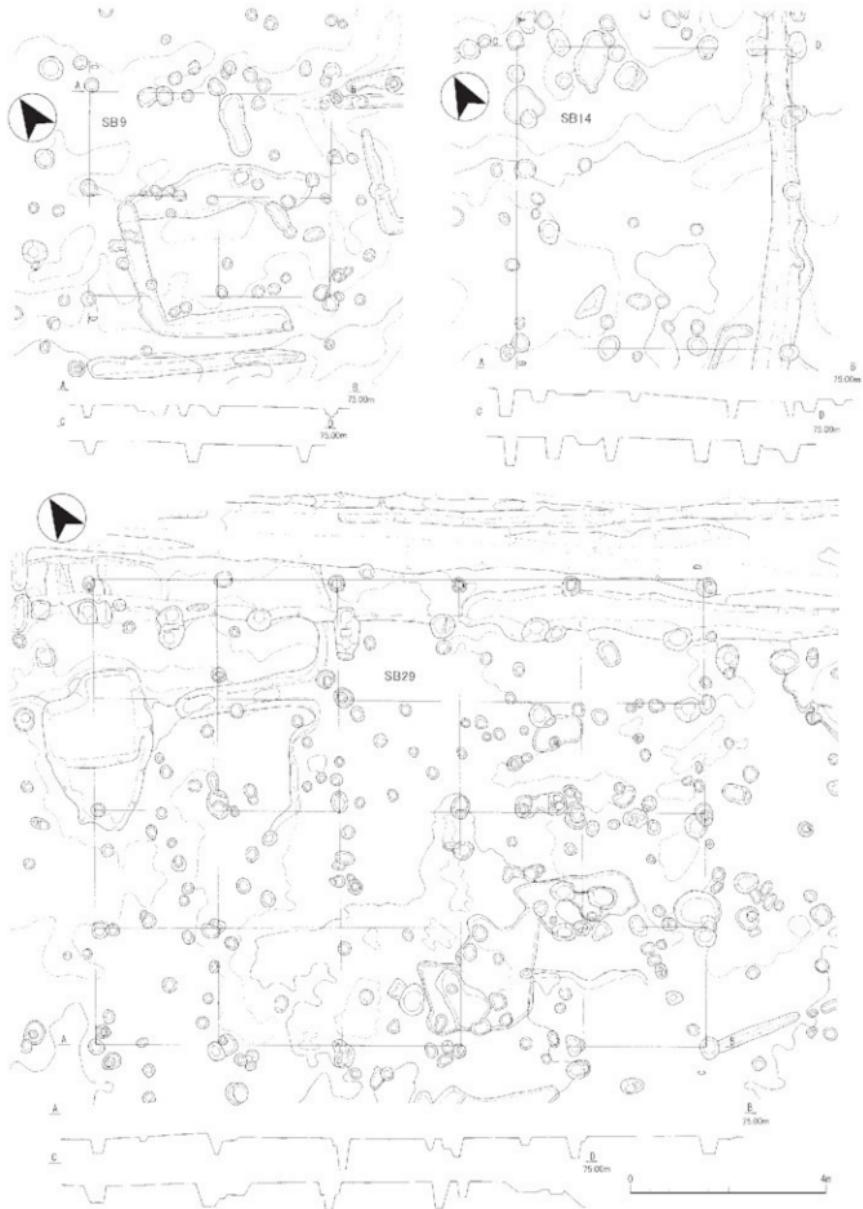
S B 27 調査区の東北部に位置する。棟方向は E 32° S で、桁行 3 間(7.6m)、梁行 2 間(4.6m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行が西から 2.6+2.6+2.3m、梁行が北から 2.2+2.4m である。柱穴掘形は、径 20~50cm、深さ 10~50cm である。

S B 29 調査区中央部に位置する。棟方向は E 30° S で、桁行 5 間(12.7m)、梁行 4 間(9.5m)の東西棟の総柱建物と考えられるが、梁行中央の桁行方向以外では東柱を欠く箇所がある。柱間は桁行の北側柱で西から 2.7+2.4+2.5+2.3+2.8m、梁行の東側柱で北から 2.3+2.3+2.3+2.5m と、桁行・梁行とも側柱で微妙に寸法が異なる。柱穴掘形は、径 35~60cm、深さ 30~65cm である。

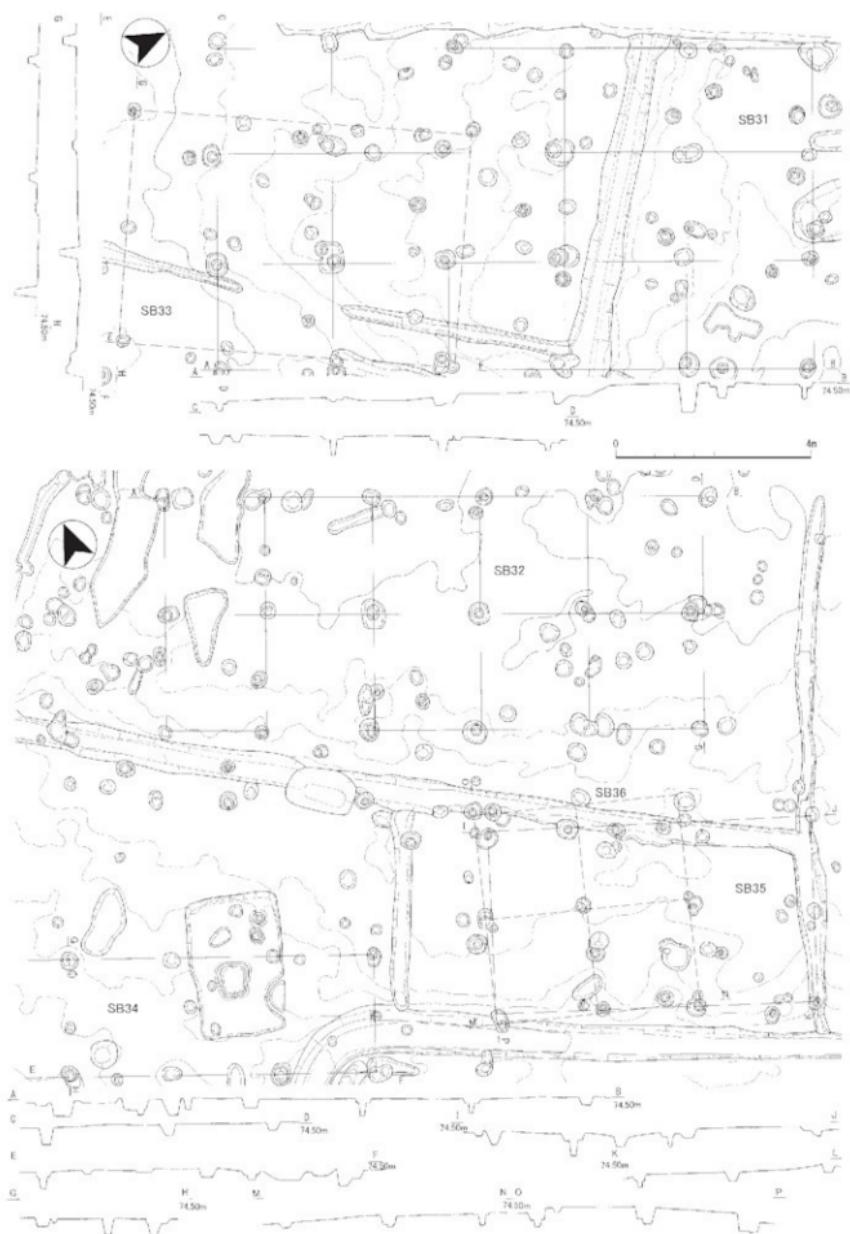
周辺のピットから土師器皿(38)・ロクロ土師器台付椀(39)・甕(37)・鍋(40・41)、及び山茶碗(42)が出土している。皿(38)は、口径 18.8cm、器高 3.1cm の中皿で体部内外面をナデ調整し、直線的に外開する口縁部をヨコナデする。台付椀(39)は、高台径 6.8cm、高さ 2.2cm で、高台は「八」字状に聞く。鍋(41)は、口径 26.0cm で、体部中央付近に一対の把手が付く。外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケ調整する。甕(37)は、口径 30.5cm で、口縁部は大きく外湾して聞く。山茶碗(42)は、口径 15.0cm の薄手の器壁で、口縁部が外反する。

S B 30 調査区の中央部で、S B 29・S B 31 と重複関係にあるが、新旧は不明である。棟方向は N41° E で、桁行 3 間(6.2m)、梁行 2 間(4.0m)の南北棟の側柱建物である。西側柱列を後世の構に削平される。柱間は、桁行が南から 2.1+2.1+2.0m、梁行が西から 1.9+2.1m である。柱穴掘形は、径 20~40cm、深さ 20~30cm である。

S B 31 調査区南部に位置し、S B 32・35 と屋敷地を構成し、S B 31 は主屋と考えられる。棟方向は N 23° E で、桁行 5 間(12.2m)、梁行 3 間(6.8m)の南



第15図 SB9、SB14、SB29実測図 (1:100)



第16図 SB31・33, SB32・34～36実測図 (1:100)

北棟の総柱建物である。柱間は、桁行は東側柱で $2.5+2.5+2.4+2.4+2.4$ m、梁行は南側柱で西から $2.3+2.3+2.2$ mである。柱穴掘形は、径30~55cm、深さ30~55cmである。焼土が詰まっている柱穴や、土器が大量に入っている柱穴も認められた。

柱穴遺物は、土師器皿(43・44)、ロクロ土師器台付皿(45~50)、同台付椀(51)、須恵器片口鉢(53)、灰釉陶器(54・58)、山茶椀(55・57・60~63)など平安時代後期のものが主体をなす。

ロクロ土師器は、口径7.6~9.6cm、器高1.5~3.2cmで高台部が低いもの(45・46)から高いもの(49・50)までが見られる。山茶椀は、口径16.8cm前後で、器壁が比較的薄手のものが多く、口縁部が外反し、直線的に外開する。高台は、径5.6~7.5cmと幅があり、高台断面が長方形から逆台形をなし、全体的には高い高台となる。第Ⅱ段階第3型式の範疇にはいる製品とみられ、12世紀前半のものである。

周辺及び建物内外のピットから土師器皿(64~66・68~75)、ロクロ土師器(76~78)、山茶椀(79~81)が出土しており、周辺建物の存続時期を示唆している。

S B32 調査区南部、S B31の東に位置し、S B31・35と屋敷地を構成し、S B32は脇屋的な性格をもった建物と考えられる。棟方向はE24° Sで、桁行5間(11.0m)、梁行2間(4.8m)の東西棟の総柱建物である。柱間は、桁行南側柱で西から $2.1+2.1+2.1+2.3+2.4$ m、梁行は2.4mの等間である。柱穴掘形は、径35~60cm、深さ20~65cmである。

柱穴からは、土師器皿(82)、ロクロ土師器台付皿(83)、灰釉陶器椀(84~89)が出土している。土師器皿(82)は、口径11.6cm、推定器高2.8cmで口縁部は直線的に外開する。ロクロ土師器(83)は、推定口径8.6cm、器高2.0cmで皿部は盤状を呈する。灰釉陶器椀は、(86)が口径11.8cm、器高4.1cmの小振りの椀、(85)が推定口径17.0cmと大小がある。高台は、径6.5~8.4cmで、高台断面は長方形・逆台形・逆三角形をなし、ほぼ直立する。第Ⅰ段階第2型式の11世紀後半の時期が考えられる。

建物内外及び周辺のピットから土師器皿(90~92)、ロクロ土師器台付皿(93~97)、同台付椀(98・99)、灰釉陶器椀(100・101)が出土している。

S B33 調査区南部に位置し、S B31と重複し、S B31に先行する建物である。棟方向はN27° Eで、桁行3間(6.9m)、梁行2間(4.8m)の南北棟の側柱建物である。柱間は、桁行2.3m、梁行2.4mの等間である。柱穴掘形は、径25~35cm、深さ15~30cmである。柱穴内に根石が認められるものもある。

S B34 調査区南東部に位置し、棟方向はE22° S、桁行4間(8.4m)、梁行1間(2.4m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行2.1mの等間、梁行は2.4mである。柱穴掘形は、径30~50cm、深さは25~40cmである。

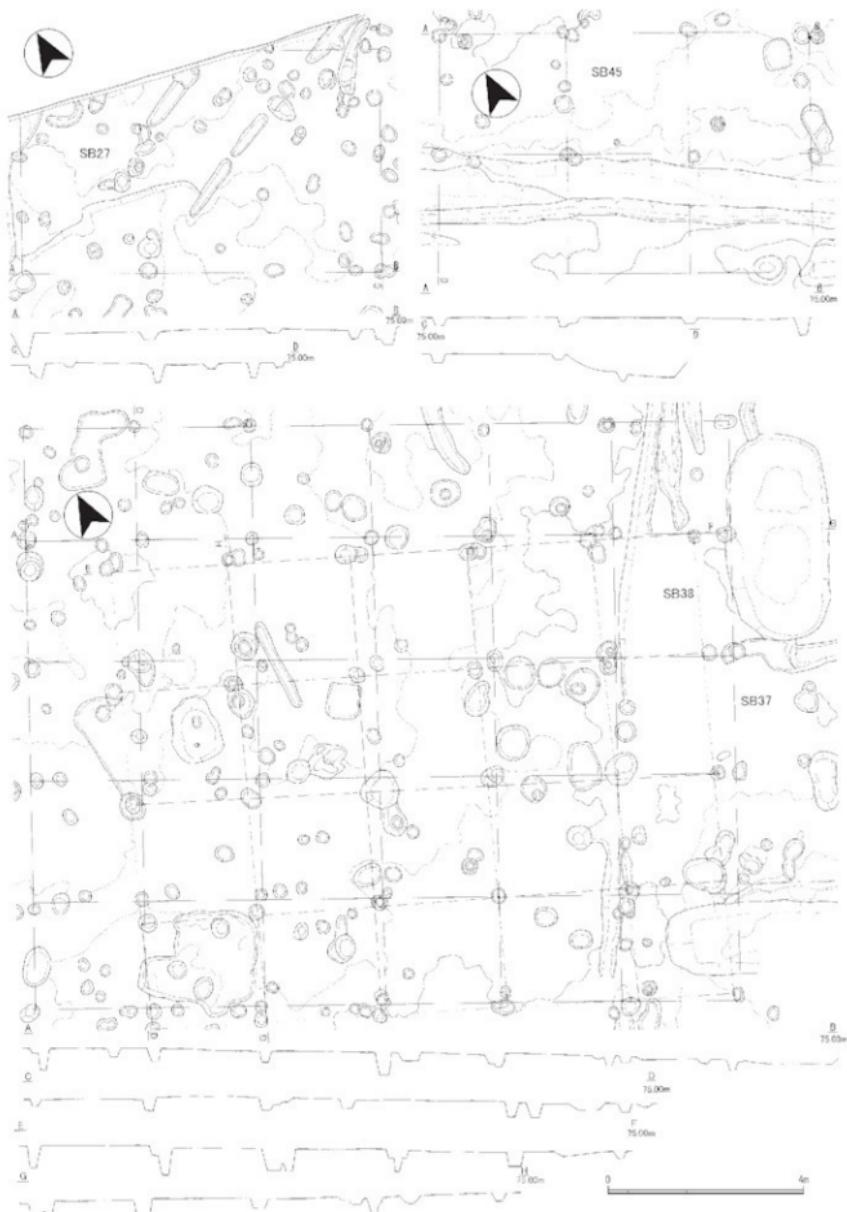
S B35 調査区南東部に位置し、S B36と重複するが、前後関係は不明である。棟方向はE21° Sで、桁行3間(6.5m)、梁行2間(3.8m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行が南側柱で西から $2.1+2.0+2.4$ m、梁行1.9mの等間である。柱穴掘形は、径25~50cm、深さは20~45cmである。

S B36 調査区南東部に位置し、S B35と重複するが、前後関係は不明である。棟方向はN17° Eで、桁行2間(4.4m)、梁行2間(4.2m)のほぼ方形に近い南北棟の総柱建物である。柱間は、桁行で2.2m、梁行で2.1mの等間である。柱穴掘形は、径35~45cm、深さ20~45cmである。倉庫的な建物で、S B31・32・34で構成する屋敷地の一部である可能性がある。

S B37 調査区北東部に位置する。建物方位はE30° Sで、桁行6間(14.4m)、梁行5間(11.9m)の東西棟の総柱建物である。桁行4間(9.7m)、梁行3間(7.4m)の身舎の四面に庇が付く大型の建物である。庇の出は、南と西で2.2m、北2.3m、東2.5mである。柱間は、桁行・梁行とも2.4~2.5mのほぼ等間である。身舎の柱穴掘形は、径25~50cm、深さ10~45cm。庇の柱穴掘形は、径25~40cm、深さ10~45cmと身舎に比べてやや小振りである。柱穴内に根石をもつものもある。

建物の東北部に接するS K42は、庇と平行して柱穴が巡り、上部構造が想定でき、規模や方向からこの建物に付属する施設と考えられる。

柱穴出土遺物には、土師器鍋(102)、灰釉陶器椀(103)、山茶椀(104)がある。土師器鍋(102)は、口径19.2cmで大きく外湾する。口縁部は端部が肥厚し、



第17図 SB27、SB45、SB37-38実測図 (1:100)

外上方に面をもつ。灰釉陶器碗(103)は、推定口径16.8cmで、器壁は薄く、体部は内湾し、口縁部が外反する。内外面に淡乳白色の灰釉が掛かる。山茶碗(104)は、口径16.0cm、器高6.5cmで、やや厚手の器壁は体部で内湾し、口縁部が外反する。高台は、径7.8cmで断面が逆台形をなす。それぞれ、第Ⅱ段階第3型式、第Ⅲ段階第5型式とみられ、12世紀代の建物と考えられる。

S B38 調査区北東部に位置し、S B37と重複し、S B37の建て替えと考えられる。棟方向はE24°Sで、桁行5間(12.0m)、梁行4間(9.6m)の東西棟の総柱建物である。柱間は、桁行が北側柱で西から2.4+2.4+2.6+2.5+2.1m、梁行は西側柱で北から2.5+2.4+2.4+2.3mである。柱穴掘形は、径25~50cm、深さ15~40cmである。

柱穴出土遺物には、ロクロ土師器台付小椀(105)、山茶碗(107)・同小椀(108)がある。ロクロ土師器台付椀(105)は、口径8.1~8.5cm、器高3.7~4.0cm、口縁部は、ヨコナデされ、内側に引きだされる。山茶碗(107)は、口径15.5cm、器高5.1cmで、やや薄手の体部には凹凸が強く、口縁部は外反する。小椀(108)は、口径11.2~11.5cm、器高4.0cmで口縁部が外方に強く外反する。高台は、径5.9cmで、断面が逆台形をなす。第Ⅱ段階第4型式に属すると考えられ、12世紀中頃の時期が推定される。

S B37・S B38の建物内に位置するピットからは、土師器皿(109)・鍋(110)、山茶碗(112・113)・小椀(111)が出土している。山茶碗(113)は、口径16.8cm、器高5.8cmで、体部が内湾し、口縁部が弱く外反する。小椀(111)は、口径11.4cmで、高台が剥離したものと考えられ、ともに第Ⅱ段階第4型式前後の12世紀中頃と推定される。

S B45 調査区東部のS B37・38のすぐ南に位置する。棟方向はE31°Sで、桁行3間(7.5m)、梁行1間(2.5m)以上の東西棟であるが、南に梁が1間分割平されたと考えられ、本来は梁行2間の総柱建物であったものと推定される。柱間は、桁行・梁行ともに2.5mの等間と考えられる。柱穴掘形は、径25~40cm、深さ15~60cmである。

S B49 調査区南東隅に位置し、S B50と重複するがS B49が新しい。棟方向はE30°Sで、桁行3間

(6.6m)、梁行2間(4.8m)以上の東西棟の総柱建物と考えられる。柱間は、桁行2.2mの等間、梁行は西側柱で北から2.2+2.6mである。柱穴掘形は、径30~40cm、深さ15~40cmである。

S B50 調査区南東隅に位置し、S B49に先行する。棟方向はN19°Eで、桁行3間(7.2m)、梁行2間(5.0m)の南北棟の側柱建物である。柱間は、桁行の西側柱で2.4+2.5+2.2m、梁行が2.5mの等間である。柱穴掘形は、径35~60cm、深さ15~40cmである。

S B49・S B50の建物内のピットから須恵器杯蓋(115)が出土している。

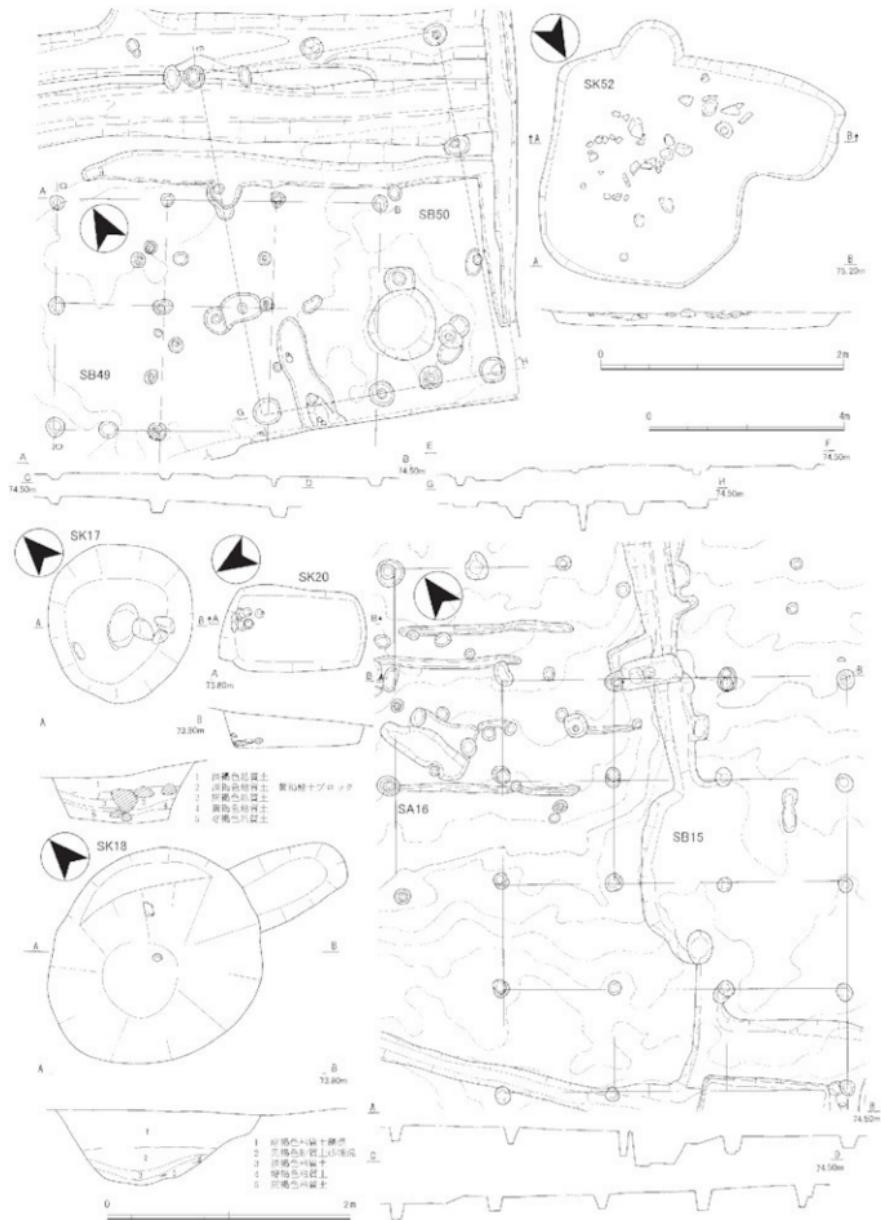
土坑

S K42 調査区の北東隅に位置し、S B37の北東部に近接しており、土坑の東側に覆屋と考えられる柱穴も存在し、S B37の下屋と考えられる。また、土坑の北と南では溝と接続するが、その機能については明確でない。土坑は、平面が南北4.1m、東西2.1mの隅丸の長円形を示し、深さは、中央部で約20cmの皿状をなしている。土坑内には、北部を中心に拳大から人頭大の石が認められるが、意図的に敷き詰められたものとは考えられない。

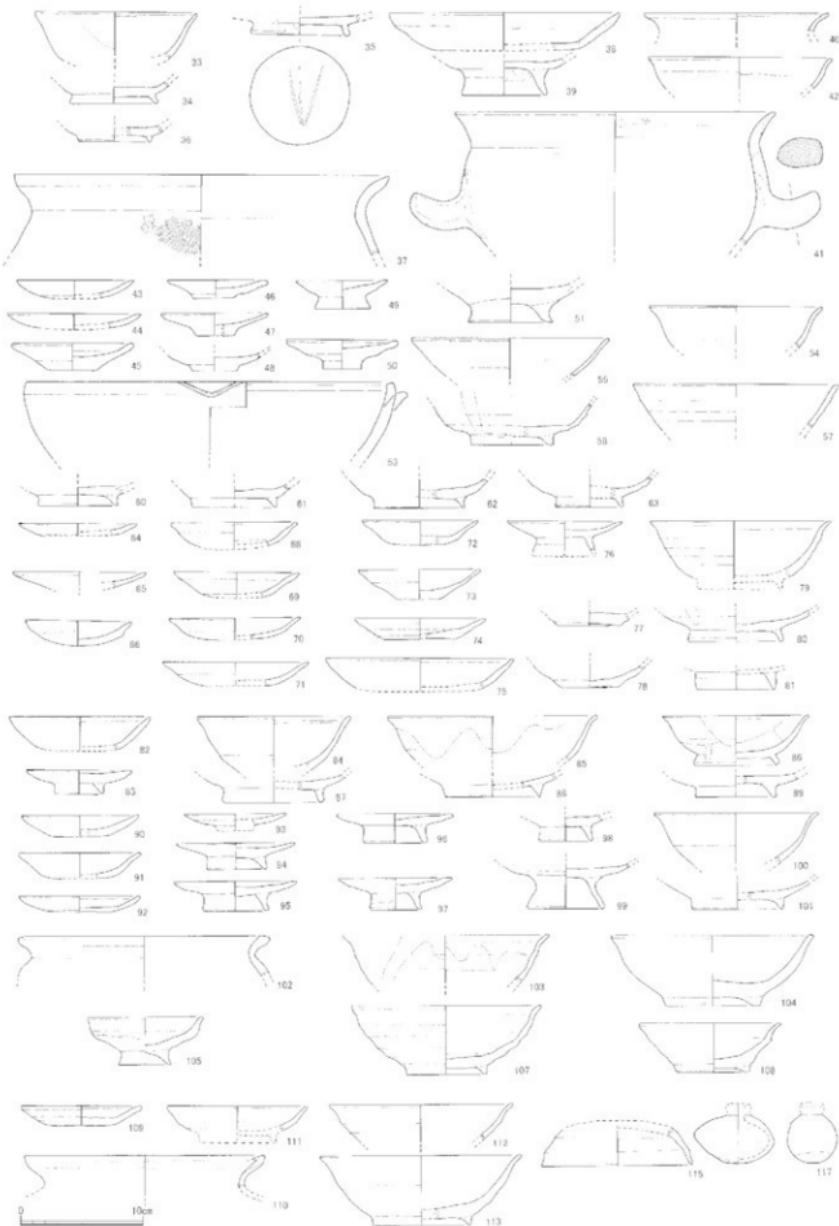
出土遺物には、土師器小皿(133・134)・鍋(136・137)、山茶碗(138~151)がある。土師器皿は、口径9.1~9.2cm、器高1.6~1.9cmの小型の皿で、口縁部が外方に開く。土師器鍋は、口径20cm前後で、口縁部が「く」字状に外反し、端部が内側に折り返され、肥厚する。

山茶碗は、口径14.0~18.2cm、器高4.8~6.0cm、高台径6.2~8.2cmまでのものがある。器形は、体部が大きく内湾し、体部に指掌痕を残す(142)、口縁端部がわずかに外反する(140・141・143)、端部の外反部が小さく直線的にのびる(144・145)ものなど各種がある。瀬戸古窯址群の編年による第Ⅱ段階に相当する12世紀前半の製品である。

S K52 調査区東部でS B37・S B38と重複し、S B38の南西隅に収まる位置にあるが、建物に付属するかは不明である。平面が、南北1.9m、東西1.6mのほぼ長方形をなし、南西隅に張り出し部を有する。深さは、約13cmで検出され、人頭大の石とともに土師器鍋(118~124)、山茶碗(125~132)が床面から



第18図 SB49・50, SB15・SA16実測図 (1:100) SK17, SK18, SK20, SK52実測図 (1:40)



第19図 A地区据立柱建物・周辺の出土遺物実測図 (1:4)

遊離した状況で出土した。

土師器鍋は、口径18.6~24.0cmで、口縁部が「く」字状に外反し、端部が内側に折り返され、折り返しが明瞭で縁面をもつ(118~120)。縁部が肥厚し玉縁状となる(121・123・124)がある。

山茶椀は、口径15.2~19.0cm、器高5.4cm前後、高台径4.8~8.3cmまでの大小がある。緩く内湾する体部に口縁部がわずかに外反する。高台は、断面が逆台形で、やや高いもの(129)と低いもの(127・130~132)がある。

中世墓

調査区南西隅、S D21・22の北側で、南に緩やかに下る斜面に東西方向に並んで営まれた中世墓群である。

S K17 長径1.3m、短径1.2mで、ほぼ円形に近い平面形を呈する。壁面は垂直に近い角度をなし、底部は30~50cmの深さで平坦である。検出面から15~30cm下で、拳大から人頭大の川原石が混入していたが、遺物はほとんど検出されなかった。

S K18 S K17の東に位置する。長径1.9m、短径1.6mで、ほぼ円形に近い平面形を呈する。壁面は緩やかに60cm落ち、断面形はやや開いたU字形となる検出面から15~30cmにかけて、拳大から人頭大の川原石が混入していた。

山茶椀(163~166)・山皿(162)が出土している。山茶椀は、口径14.7~15.7cm、器高5cm前後、高台径6.2~7.2cmで、体部が直線的に外開し、高台は断面逆台形で低い。山皿は、口径7.7cm、器高1.6cmで、口縁は直線的に短く開く。第Ⅲ段階第6型式の13世紀前半に営まれたものである。

S K20 S K19の東に位置し、平面が南北方向に長い長方形を示し、長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.3mで、北端で土師器皿(167)・山皿(168~173)・刀子(174)が折り重なるように出土している。

溝

S D19 調査区の南東部に位置し、北西から南東方向に長さ6mほど延びる溝である。幅0.4~1.0m、深さ十数cmの小規模な溝である。

山茶椀(193)が出土している。口径15.8cm、器高5.2cm、高台径6.5cmで、直線的に開く体部とヨコナデによりわずかに外反する口縁部、断面が逆台形

の低い高台が貼り付けられる。第Ⅲ段階第6型式の13世紀前半の製品である。

S D21 調査区の南西隅部に位置し、中世墓群S K17・18・20の南側で、北西から南東方向に延び、南東部で南に折れ曲がる。全長約13.5m以上、幅0.8~1.1m、深さ約0.4mである。

山茶椀(181~183)が出土している。口径13.0~15.0cmで、(183)は、口径15.0cm、器高5.2cm、高台径7.0cmで、わずかに内湾する体部に口縁部が大きく外反する口縁部をもち、断面逆台形の低い高台が貼り付けられる。第Ⅲ段階第6型式の13世紀前半の製品である。

S D22 調査区の南西部に位置し、S D21の南でS D21に沿って検出された。長さ約7mで東西の両端が南に曲がる。幅0.7~1.0m、深さ約0.2mである。

山茶椀(184・185)の底部が出土している。高台径6.0~7.5cmで、185の高台は体部外面に貼り付き、S D21の山茶椀より後出す。

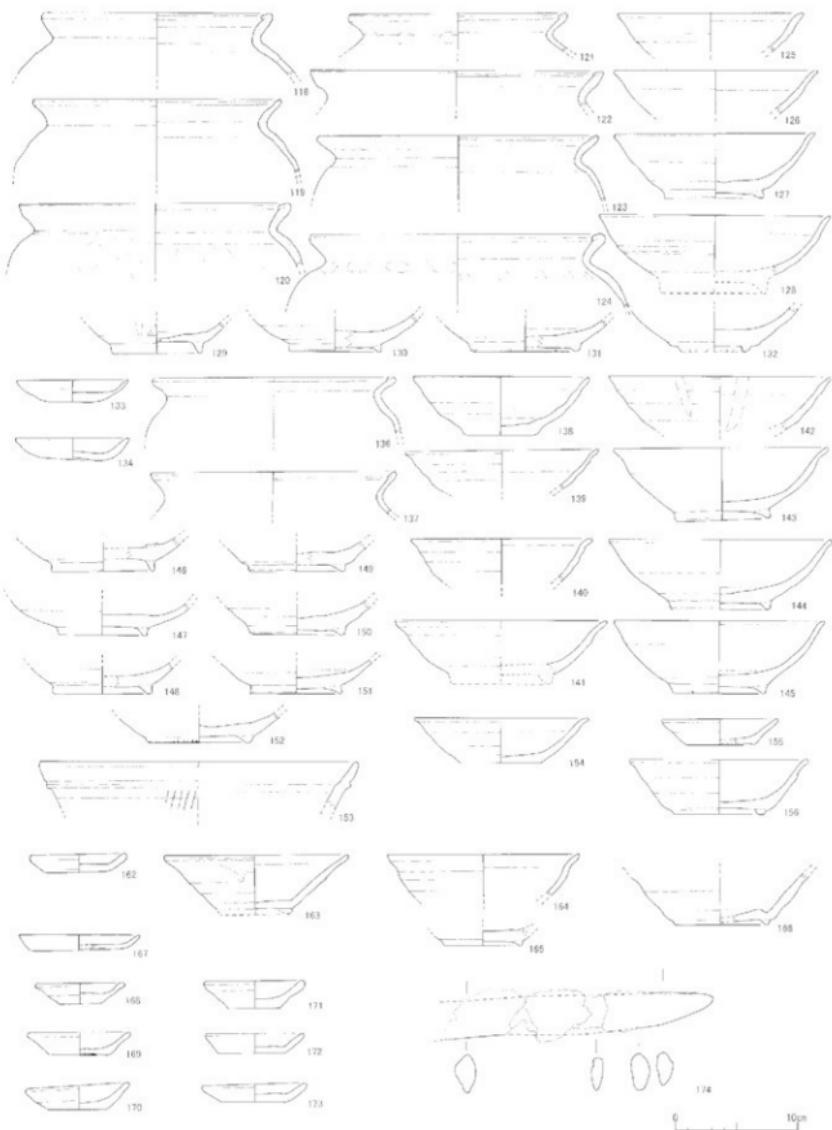
S D23 調査区の中央部に位置し、調査区を北東から北西に横断する。この溝は、数カ所で後出の溝等と重複関係にあり、全長約60m、幅1.1~2.0m、深さ0.2~0.3mである。

土師器皿(186)、山茶椀(188~190)・山皿(187)白磁碗(191)等が出土する。土師器皿(186)は、口径10.2cm、器高1.4cmで口縁部が大きく内湾して開く。山皿(187)は、口径7.8cm、器高1.6cmで、やや厚手の底部に口縁部が直線的に外開する。底部外面には墨書きが認められる。山茶椀は、底部のみで高台径5.0~6.4cmの小振りで、高台も低い。白磁碗(191)は、口径16.4cmで口縁端部は、玉縁状に肥厚する。

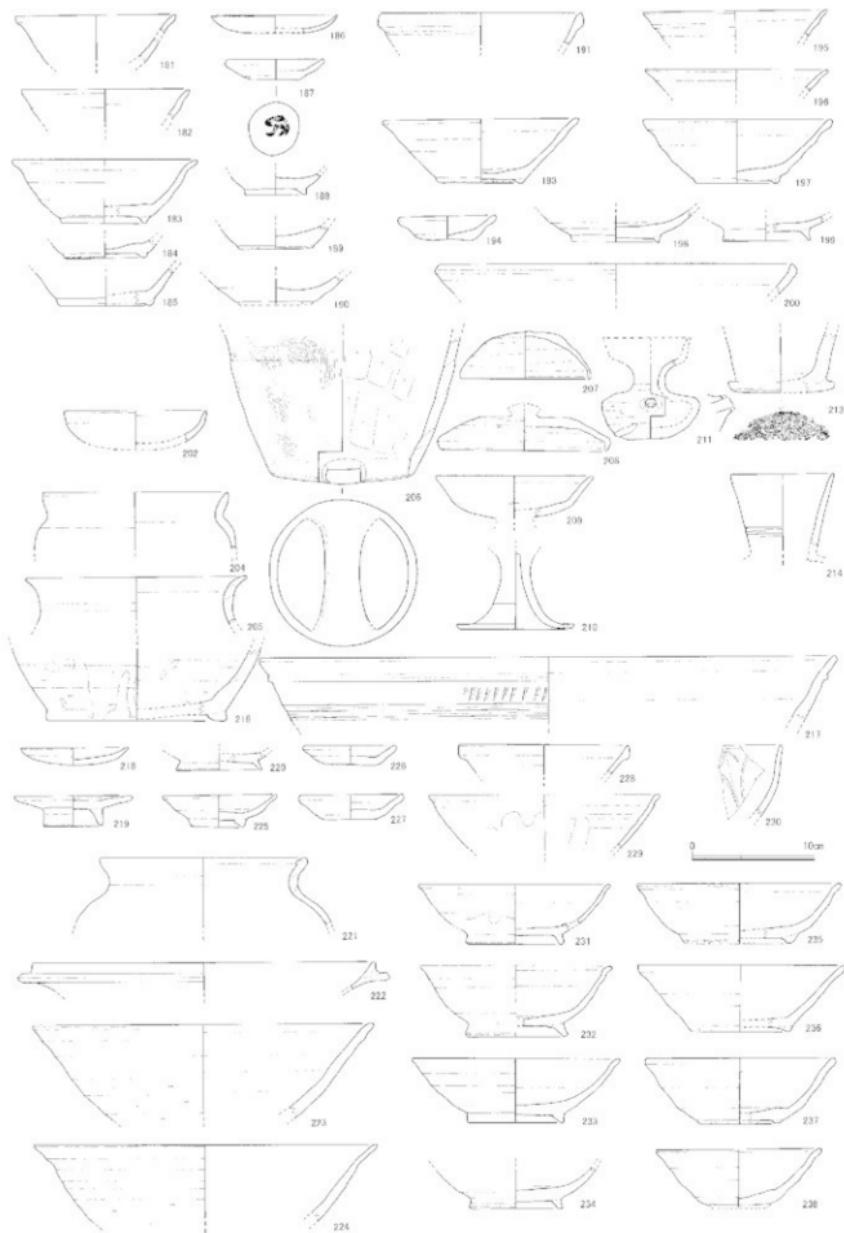
山茶椀は、第Ⅲ段階第6型式ないしは第7型式に属すると考えられ、S D23は13世紀後半には埋没したと考えられる。

S D24 調査区中央部の南端部に位置し、西部でS D23と重複関係にあるが、S D24が先行する。S D23とほぼ直交するように北西から南東に延び、東端で南に折れる。全長約17m、幅1.3m、深さ0.2mでやや蛇行する。

山茶椀(195・196)、山皿(194)が出土する。山茶椀は、口径15cm前後で、口縁部は比較的薄手で、外反する。山皿(194)は、口径8.1cm、器高1.9cmで、



第20図 A地区土坑・中世墓出土遺物実測図 (1:4)



第21図 A地区溝・包含層出土遺物実測図 (1:4)

体部がわずかに内湾するもので、第Ⅲ段階第5型式の製品と考えられ、12世紀後半と考えられる。

S D25 調査区の中央部でS D23の西側で検出された。S D23とほぼ並行するが、わずかに南西方方向に振る。全長約12m、幅約0.5m、深さ数cmの小さな溝である。

山茶碗(197)が出土している。口径15.2cm、器高5.3cm、高台径6.7cmで、体部が直線的に開き、高台は低く、底部外側に貼り付けられる。第Ⅲ段階第6型式に相当し、13世紀前半の製品である。

S D44 調査区東端で、S B37・S B38と西端が重複して、北西から南東の方向に延び、東端が調査区外となる。長さ8.3m以上、幅1.2m、深さ十数cmで東へ流れ。

山茶碗の底部(198・199)が出土している。高台径7.0~7.2cmで、断面が長方形をなし、直立もしくは外開する。第Ⅰ段階第2型式の碗と考えられ、11世紀後半の製品である。

3 室町時代

室町時代の遺構は、溝2条が確認されたのみである。

S D47・S D48 ともに調査区南東隅に位置し、大きく湾曲して並行する溝である。幅0.6~1.4m、深さ30cmほどである。

拂り鉢(200)が出土している。口径29cmで、口縁部はロクロナデし、拂り目は口縁部上部には見られない。

4 その他の遺構

S A 6 調査区西部に位置する。S A 6の西にはS B 7~9、東にはS B 13・14の掘立柱建物がある。溝列S A 6の方向はN27° Eで、直ぐ西には同方向

に延びる新しい溝群があり、これらの溝も掘削を繰り返して現在に至った可能性もある。

S A 6 は、6間以上で更に北側に2間延びる可能性もある。柱間は、3.5~3.7mではほぼ等間である。

S B15 調査区中央の南部に位置する。棟方向はN35° Eで、桁行4間(8.5m)、梁行3間(7.1m)の南北棟の総柱建物である。柱間は、桁行が北から2.1+2.1+2.2+2.1m、梁行が西から2.3+2.3+2.5mである。柱穴掘形は、径30~50cm、深さ15~40cmである。建物の北西には、この建物に伴うと見られる柵S A 16が存在する。

S A16 南北3間(6.7m)、東西2間(3.5m)の柵列がS B15の北西部を囲うように認められる。柱穴の位置が建物の柱筋と一致せず、また建物の北西部に限られているため柵列と判断した。建物の西側で2.2m、北側で2.3mの間隔を空けている。

5 包含層の遺物

調査区全体の包含層から、縄文・弥生時代から近世までの各種遺物が出土しており、当遺跡が断続して営まれていたことを示している。

古墳時代から奈良時代の土器

土器類には、碗(202)・甕(204・205)・瓶(206)があり、須恵器には、杯蓋(207・208)・高杯(209・210)・甕(211)・鉢(213)・壺(214・216)・甕(217)がある。

平安時代から室町時代の土器

土器類には、土師器皿(218)・ロクロ土師器台付皿(219)・縄釉陶器碗(220)・土師器鍋(221・222)、陶器鉢(223・224)、山皿(226・227)、白磁碗(228・229)、青磁碗(230)、灰釉陶器碗(231)、山茶碗(232~238)、同小碗(225)があり、量的には山茶碗が多い。

(近藤 健)

3 B地区の遺構と遺物

当初の遺跡分布調査では、畠地であったC地区のみ遺跡として把握されていた。しかし、地形からも遺跡として連続していると考えられていたA地区とB地区については現況が住宅地であり、表面観察が困難なため、調査の対象地としては保留されていた。1986年、土地の買収と家屋の移転が完了された時点で、試掘調査を実施した。住宅造成時にかなりの削平を受けているものと予期していたが、予想に反してほとんどの試掘坑から遺構と遺物を確認した。B地区では宅地整地層を取り除くと約15cmの厚さで黒褐色土の遺物包含層が形成されていた。中央部と南端の道路敷、浄化槽設営にかかる部分は擾乱されていたが、他は良好な遺構残存状況であった。

A地区とB地区及びB地区とC地区の間には比較的深い谷が入り込み、それぞれ独立した遺構群を形成している。従って遺構の時期も大局的にA地区→B地区→C地区と変遷する。現在、B地区とC地区的間は南北の県道が貫通しているが、現況の地形からいって、かつて、南側はある程度の谷が入り込んでいたが北側はC地区とつながっていたものと考えられる。

調査の結果、B地区は東方に遺構が集中しており、奈良時代の土坑1基、平安時代末期の掘立柱建物8棟、土坑3基、構造条、鎌倉時代末期から室町時代初めにかけての周溝状遺構1条等を検出した。調査面積は、2,050m²である。



1 奈良時代の遺構

土坑

S K61 調査区の北端に位置する。長径4.0m、短径2.0mの不整形土坑で、深さは約10~15cmで比較的浅い。土坑からは、北に延びる幅約50cmの溝が取り付く。

土坑から須恵器壺(34)、同杯(35)が出土している。壺(34)は、口径11.8cmで体部から内傾して窄まるような形状をなす。上部には、櫛状工具によるカキ目を施し、頸部には3条以上の沈線を巡らす。杯(35)は、やや丸味をもつ腰部から口縁が直線的に開き、高台が貼り付けられるものと推定される。

2 平安時代末期の遺構

掘立柱建物

S B62 S K61の南に位置する。棟方向はE15°Sで、桁行2間(4.5m)、梁行2間(3.7m)の東西棟の総柱建物で、倉庫と考えられる。柱間は、桁行が2.25m等間、梁行が北から1.9+1.8mで、柱穴掘形は、径30~35cmの円形を呈し、深さ40~50cmと深い。

柱穴から山皿(1)、山茶椀(2・3)が出土している。山皿(1)は、口径9cm、器高2.4~2.7cm、高台径4.7cmで、やや丸味のある体部に断面が逆三角形の高台が底部外側に貼り付けられる。山茶椀(2・3)は、椀の底部と体部であり、(2)は高台径8.5cmで断面逆台形の高台が貼り付き、高台には初穀痕を残す。(3)は推定口径16.6cmで、口縁部はやや直線的に開く。藤澤編年の第Ⅱ段階第3型式の12世紀前半とみられる。

S B64 S X63の南側に位置する。棟方向は、E25°Sで、桁行3間(7.4m)、梁行2間(4.6m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行が西から2.3+2.4+2.7m、梁行が2.3m等間で、柱穴掘形は、径30~50cmの円形を呈し、深さは30cm前後である。2カ所の柱穴で、径10cmほどの根石を確認する。

S B65 S B64の東側に位置し、棟方向はE25°Sと同じくするため、S B64と同時期に存在したものと考えられる。東西2間(4.7m)、南北2間(4.6m)のほぼ正方形の側柱建物で、S B64に付属する建物であろう。柱間は、桁行が2.35m等間、梁行2.3m等間で、柱穴掘形の径及び深さは、それぞれ30cm前

後である。S B64との間は、1.2mの間隔がある。

S B69 調査区のはば中央に位置し、B地区最大の掘立柱建物である。棟方向はN12°Eの南北棟で、桁行6間(14.0m)、梁行4間(8.8m)の総柱建物で、北側に1間分(2.0m)の張り出しあの庇が付く。柱間は、桁行が北から2.4+2.4+2.2+2.5+2.3+2.2m、梁行が2.2+2.1+2.1+2.4m等間である。柱穴掘形は、径30~50cmの円形ないし梢円形で、深さは30~70cmでバラツキがあるが、10カ所の柱穴で根石を確認する。根石には、2個を上下に置いているものや数個を並べているものもある。西側柱の西側に焼土坑S K67が確認され、この建物に伴う厨房施設と考えられる。

柱穴内遺物が多く、土師器皿(4~8)、ロクロ土師器(9~15)、土師器鍋(16)・土師器ミニチュア壺(17)、黒色土器皿(18)、山皿(20・21)、小椀(22)、山茶椀(23~25)が出土している。

土師器皿は、口径9.8~11.6cmの小皿(4~6・8)と口径14.2cmの中皿(7)に分類される。小皿・中皿ともに体部が緩く内湾して開き、口縁端部をヨコナデして調整するものが大半であるが、器壁が薄く、口縁部が強くヨコナデされ、屈曲して端部が外反するもの(8)もある。

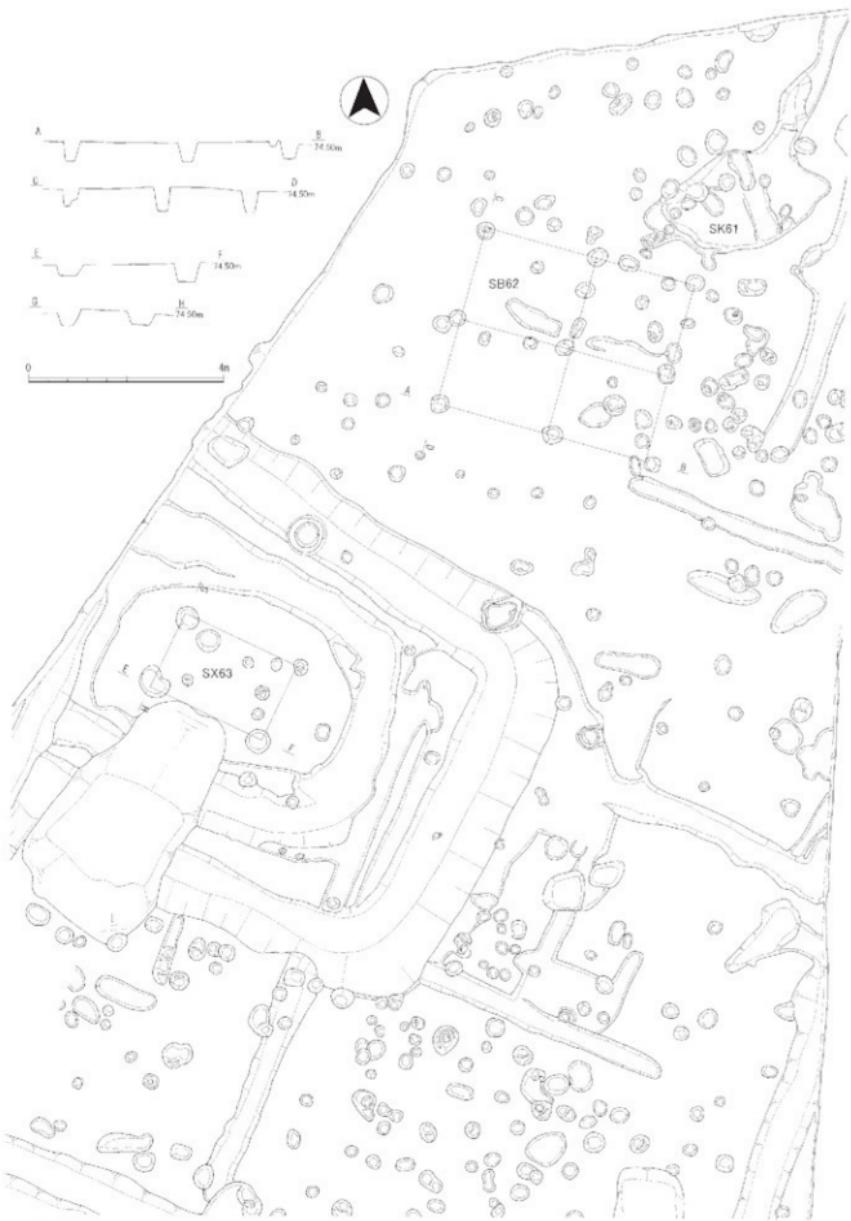
この時期には、ロクロ土師器(9~15)が伴出し、皿(9・10)・椀(11・12)の大小があり、底部を高台状につくりだしているもの(13)もある。

土師器鍋(16)は、推定口径20cmで、口縁端部を折返し、端部を玉縁状に調整する。ミニチュア壺(17)は、口径6.6cm・推定器高5.1cmで体部外面に指圧痕を残す。

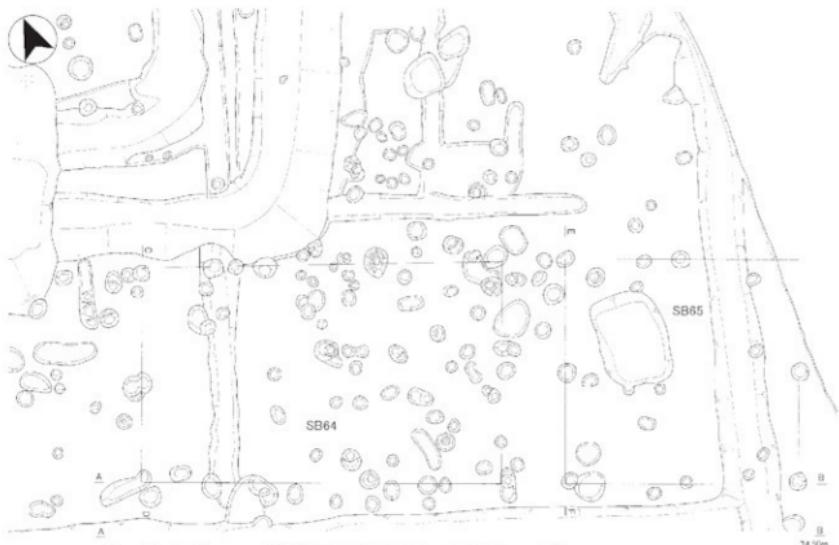
黒色土器(18)は、口径10.2cm・器高2.4cmで、口縁部をヨコナデし、底部外面はオサエで調整し指圧痕を残す。内面及び口縁部外面が焼された黒色土器Bに属する。

山茶椀・山皿には、口径8.9~10.1cmの山皿(20・21)、推定口径11.0cmの小椀(22)と口径15.8~16.2cmほどの椀(23~25)がある。小椀・椀とも断面方形の高台が貼り付けられるが、高台が低く削り出された山皿(20)もある。椀(23)の高台は、剥離したものである。

この他の出土遺物には、白磁碗(26)・鏡矢(27)が



第23図 SB62・SX63・SK61実測図 (1:100)



第24図 SB64・65、SB76実測図 (1:100)

ある。

S B69は、山茶椀の型式編年である藤澤編年の第Ⅱ段階第3型式から第4型式にあたる12世紀前半から中頃に廃絶したものと考えられる。

S B70 S B69の東側に隣接して位置する。棟方向はN12°Eの南北棟の総柱建物である。桁行4間(9.4m)、梁行3間(7.5m)で、柱間は、桁行が北から2.3+2.3+2.4+2.4m、梁行が西から2.7+2.6+2.2mである。柱穴掘形は、径30~50cmの円形で、深さは30~70cmで、7カ所の柱穴で根石を確認している。

棟方向及び位置関係からS B69とS B70は、同時に存在したと考えられ、S B69の東側柱列とS B70の西側柱列との間は、2.7mである。また、南東隅の2間×2間分の土坑S K73は、S B70に付属するものと考えられる。

柱穴からは、土師器皿(28・29)、縁軸陶器(30)、灰軸陶器(31)、瓦器(32)、山茶椀(33)が出土している。土師器皿は、口径7.2cmの小皿(28)と口径11cmの中皿(29)があり、ともに器壁が厚手で、口縁部が緩く内湾する。縁軸陶器は、椀の貼り付け高台部分であり、推定径5.0cm、胎土は土師質で緻密である。縁軸は内面から外面の高台直上まで掛かる。灰軸陶器は、口径11.2cmの小椀(31)で、高台は、断面長方形で高く、藤澤編年の第Ⅰ段階第2型式から第Ⅱ段階第3型式にあたる11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。

S B71 S B70とほぼ重複する建物で、棟方向はN14°Eの南北棟の総柱建物である。桁行4間(8.9m)、梁行3間(6.6m)で、柱間は、桁行が北から2.1+2.1+2.0+2.7m、梁行が西から2.1+2.3+2.2mである。柱穴掘形は、径20~40cmの円形で、深さ20~40cmである。10カ所の柱穴で根石を確認する。東側柱でS B70とS B72の柱穴が重複するが、切り合い関係から、S B70→S B71→S B72の新旧関係が確認できる。

S B72 S B70・S B71の北部分で重複して位置する。棟方向はE15°Sの東西棟の総柱建物である。桁行3間(7.0m)、梁行2間(4.6m)で、柱間は、桁行が西から2.3+2.3+2.4m、梁行が2.3m等間である。柱穴掘形は、径30~40cmの円形を呈し、深さは20

~40cmで、南側柱列の2カ所の柱穴で根石を確認する。

S B76 調査区南端に位置するが、北部分を後世の道路敷により削平されている。棟方向はN14°Eの総柱建物と推定される。東西3間(6.5m)、南北1間(2.3m)以上で、柱間は西から2.1+2.1+2.3mで、柱穴掘形は、径20cmと小さく、深さは約20cmと浅い。

井戸

S E67 S A75の西側で検出された井戸で、東西2.3m、南北2.2mの円形を呈する。深さは、検出面より1.1mと深く、断面形状はすり鉢状を示す。南側には幅0.4~1.3m、深さ10cmほどの南北溝S D77が取り付く。

井戸からは、土師器鍋(49)、山茶椀(45~47)、古瀬戸壺(48)が出土している。鍋(49)は、推定口径25.6cmで、口縁部は「く」字状に大きく外反し、端部は内側に折り返され、内側に端面をもつ。山茶椀には、口縁部に小さな輪花状のユビオサエをもつもの(45)から端部が大きく外反するもの(46)がある。高台は、断面が逆台形をなし、比較的低い。古瀬戸壺(48)は、推定径9.6cmの底部で、内外面とも灰白色を呈する。山茶椀は、藤澤編年の第Ⅱ段階第3型式にあたる12世紀前半のものが主体をなす。

土坑

S K68 S B69西側柱の南から4間のほぼ中央で、側柱内側で確認された焼土坑である。東西1.0m、南北1.3mの隅丸方形を呈しているが、東面の南北に浅いピット状の窪みがある。深さは、検出面から約25cmで、埋土は炭混じりの焼土で満たされていた。S K68は、位置と出土遺物からS B69に付属するものと考えられ、この位置に厨戸施設があったものと考えられる。

土坑内からは、土師器鍋(36)・ロクロ土師器(37)・山皿(38)が出土している。鍋(36)は、推定口径24.6cmで、口縁部が大きく外反し、端部が内側に巻き込まれ玉縁状となる。内外面とも器壁の保存状況が良くないが、外面にはハケメが施される。ロクロ土師器(37)は、推定底径5.5cmの椀の底部である。底部外面は、糸切り調整されたものと考えられる。山皿(38)は、推定口径9.6cmである。口縁部は、直線的

に開き、底部には低い高台が貼り付けられていたと推定される。藤澤編年の第Ⅱ段階にあたる12世紀前半から中頃の時期が考えられる。

S K73 S B70の南東隅で検出された土坑である。東西5.0m、南北7.0mで、北側は隅丸方形状、南側はS D74と交差しているため、南端の掘形が明確でない。S B70の2間×2間分の柱穴に沿って土坑が掘られており、土坑とその柱穴の埋土には切り合い関係がないことなどからこの土坑はS B70に伴うものと判断される。深さは、検出面から約20cmと比較的浅い。土坑内は拳大から人頭大の石約200個が乱雑に混入していたが、それは地山直上に直接置かれているものもあれば、埋土中に浮いているものもあり、規則性は見いだせない。

土器類の混入もかなりあり、土師器皿(68~92)、ロクロ土器(93~96)、土師器鍋(97~99)、瓦質土器(100)、山皿(101~108)、灰釉陶器(109~110)、山茶椀(111~125)、白磁(126~129)、常滑甕(130)、砥石(131)1点が出土する。土器類は、石と同様に故意に置かれた様子ではなく、乱雑に混入していた。土師器小皿を中心に十数個体で完形品も見られたが、全体の率から云えれば少ない。すなわち石も土器類も廃絶時に投棄されたものと考えられる。

土師器皿は、小皿(68~89)が圧倒的多数を占め、口径7.8~10.6cm・器高1.2~2.0cmで、やや丸味のある底部や平らな底部から緩く内湾する口縁部をもつ。小皿(89)の底部中央には、自然に割れた可能性もあるが、一応意図的に穿孔されたものと判断した。土師器皿には、口径12.8~17.0cmの中皿(90~92)もある。

土師器鍋(97~99)は、推定口径22.6~30.0cmで口縁部が「く」字状に外反し、端部が内側に折り返され、端部が内面に面をもつ。

ロクロ土器、口径9.2cm・器高2.1cm・底径4.4cmの小型のもの(93)と口径12.0cm以上のもの(94~96)があり、平らな底部から直線的に外傾する口縁部をもつ椀形となり、底部は糸切りされている。

瓦質土器(100)は、推定口径9.8cmの小皿と考えられ、内外面ともヘラミガキされ、焼されている。

山茶椀には、口径8.4~10.2cm・器高2.4~3.5cmで、底径4.0~4.9cmの高台を有する山皿(101~108)

と口径15.6~17.2cm・器高4.9~5.8cm・底径6.4~9.4cmの椀(111~125)がある。山皿には、底部外面に墨書きをもつ(108)もある。椀には、高台部分に初期痕が付着する(111・114・117~119・124)ものまであり、形態状もやや時期幅が認められる。

白磁(126~129)には、口径10.8cm・推定器高3.2cmの小椀(126)、口径15.4cm・推定器高7.0cmの椀(129)があり、ともに体部が大きく内湾する形状を示し、口縁端部は薄く引きだされる。口縁部が玉縁状となる椀(128)もある。高台は、いずれも断面逆台形で、ケズリだされる。

S K73出土遺物は、山茶椀の編年観から藤澤編年の第Ⅱ段階にあたる12世紀前半から中頃のものが主体をなす。

溝

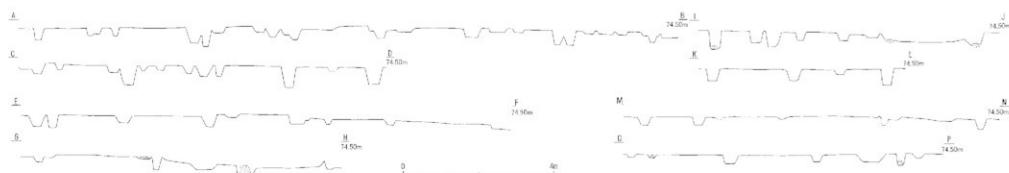
S D66 調査区の西側で確認された南北方向の溝で、S B69、S A75とほぼ方向を同じくする。北方はS X63に切られ、調査区外に延びているため、建物群とどう関わるかは不明であるが、南はそのまま延びて直接谷に注いでいるものと考えられる。幅は1.7~2.6m、断面形状は、U字形で最大深度は検出面より約50cmである。

出土遺物は、山茶椀には、口径8.4~9.0cm・器高2.5~2.8cm・高台径5.0~5.4cmの山皿(50~52)、高台部分の出土であるが、高台径6.0~7.4cmの椀(53~58)がある。椀の高台には、断面長方形で高いものの(53)、断面が逆台形で低いもの(54)があり、若干の時期差が認められるが、藤澤編年の第Ⅰ段階第2型式から第Ⅱ段階にあたる11世紀後半から12世紀中頃に機能していた溝と考えられる。

S D74 S B69の南側柱列付近で確認された東西溝で、S B69の柱穴がこの溝の埋土を切っているため、重複関係からS B69より先行するものである。溝は、S K73付近で南側に方向を変えるが、その先是検出不能であった。幅1.0~1.5m、最大深度は検出面より10~15cmと浅い。

柵列

S A75 S B69の西で確認された柵列で、南方で東に向かってL字状にほぼ直角に屈曲する。西側の南北列は、長さ26.9m、南側の東西列は18.0m以上で、



第25図 S K68・S B69~72・S K73・S D74・S A75実測図 (1:100)

調査区外に延びている。位置的に S B69・S B70に伴う柵列と考えられる。柱間は、南北列が1.7~2.3m、東西列が1.0~2.2mとやや不揃いである。柱穴掘形は、径20~40cmの円形で、深さ20~30cmである。南北列は比較的揃っているが、東西列は規模が小さい。南北列の中央のやや南で3ヵ所に根石が認められ、柱間が2.0mと等間であることから、ここが門柱の可能性がある。

3 鎌倉時代末期～室町時代初頭の遺構

S X63 調査区の北部分、S B62とS B64の間で確認された遺構である。東西約5.0m、南北約3.5mの隅切り方形遺構を中心に二重の周溝で取り囲んでいる。全体規模は南北9.0m、西側は調査区外のため形状は不明であるが、西側も溝が廻っているものと推定され、東西規模は約13.0mである。内側の周溝は、幅1.0~1.2m、深さは20cm前後、外側の周溝は幅1.4~1.8mとやや広く、深さは30cmとやや深い。周溝内の方形遺構には、東西1間(2.5m)、南北1間(1.7m)の掘立柱建物が確認された。柱掘形は、

径30~50cmの円形で、深さ20~40cmである。

周溝からは、土師器羽釜(39)、綠釉陶器(40)、白磁碗(41・44)が出土している。特に土師器羽釜は、周溝内の地山直上で出土したため、この土師器をもって遺構の時期と判断した。

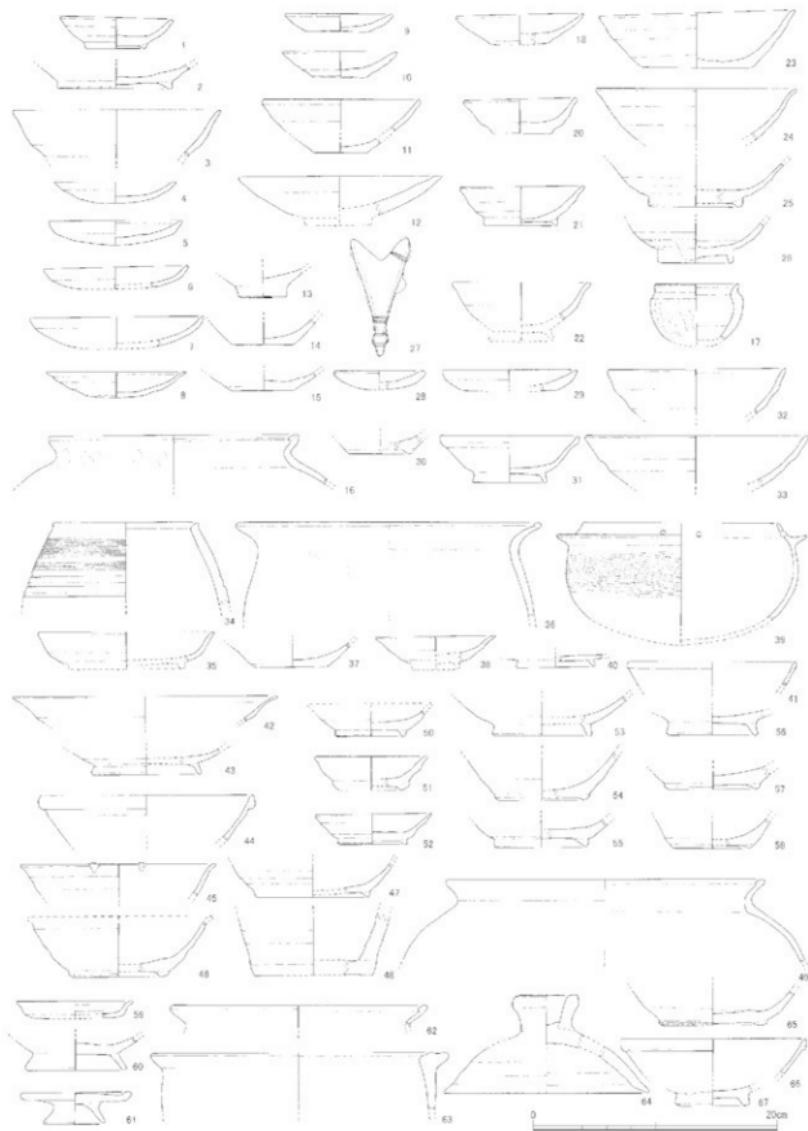
羽釜(39)は、推定口径16.0cmで、球体の体部をなし、口縁部下に水平にのびる鉗をめぐらす。綠釉陶器(40)は、推定径6.2cmの高台部分のみである。高台断面は、長方形で先端部は細くなる。白磁碗(41)は、比較的薄手のもので端部は外側に折り返される。

また、周溝周辺の凹地からは、灰釉陶器碗(42・43)、白磁碗(44)も出土している。

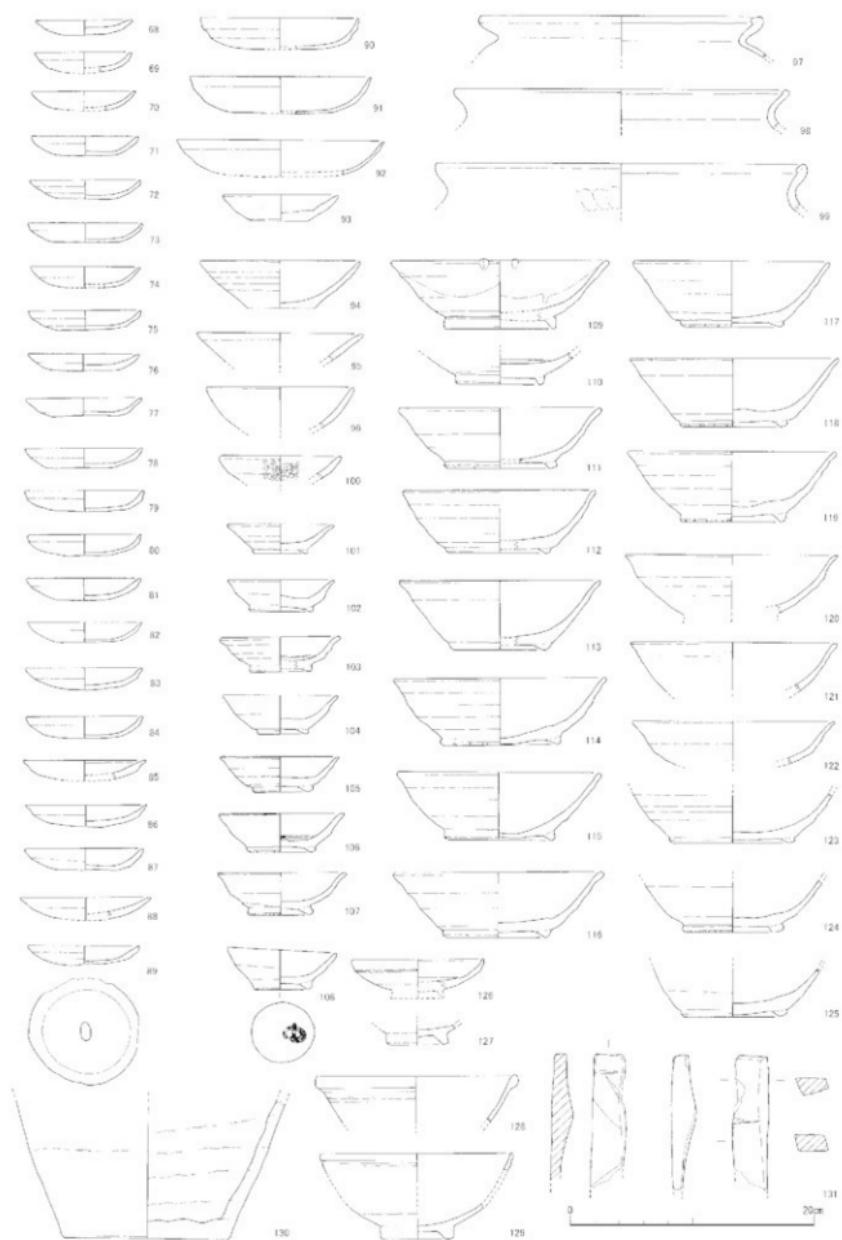
4 包含層の遺物

包含層からは、土師器皿(59)・台付皿(60・61)・鍋(62)・甕(63)・蓋(64)、粉殻压痕が多く認められる山茶碗(65)、白磁碗(66・67)等が出土している。土師器蓋(64)は、口径16.8cmで椀を返したような天井部をもち、つまみ部も口径4.4cm・高8.0cmと大きくなっている。

(浅尾 悟)



第26図 B地区掘立柱建物、土坑、井戸、溝、包含層出土遺物実測図 (1:4)



第27図 B地区SK73出土遺物実測図 (1:4)

4 C地区の遺構と遺物

大蔵遺跡C地区は、標高74m前後の台地南東端部に位置し、台地の東方、南方の眼下には水田が広がる。水田面との比高は、約18mである。台地の東斜面は急峻で、南はそれに比して緩斜面をなす。調査区の平面形はL字形を呈し、面積は2,100m²である。調査前の状況は、一部茶畠を含む畑地であった。調査区北に規則的に掘られた長さ15m、幅40cmほどの十条余りの現代溝は、茶樹栽培に伴う耕作溝である。また、調査区南部の斜面は、竹や灌木を主とする雑木林であった。

土層観察は、調査区西壁で行い、前述のようにC地区は台地縁辺部に位置しているため、表土面、地山面ともに南に緩やかに傾斜している。また、調査区全域に渡って、土砂の堆積は極めて薄く、地表からわずか20cm前後で地山に達する。調査区北部では、厚さ20cmほどの第Ⅰ層・暗褐色粘質土(耕作土)が認められるのみで、その下層は第Ⅳ層・黄褐色粘質土(地山)となる。中央部では、第Ⅰ層下に第Ⅱ層・暗灰褐色粘質土が、南部では第Ⅱ層下に第Ⅲ層・黄褐色粘質土混入暗灰褐色粘質土が認められる。この第Ⅱ層と第Ⅲ層には遺物が含まれる。以上の層序は、傾斜地を平坦化するために、北部の台地高所が削平され、南部の低所に整地されていることを示している。また、南斜面で検出された深さ1mほどの溝S D109は、台地上からの流出土によって完全に埋没しており、起伏のないなだらかな斜面を呈していた。

C地区の調査によって、掘立柱建物12棟、門1棟、井戸1基、溝数条、土坑、道路などの遺構が明らかにされた。これらの遺構の時期は、平安時代末期と鎌倉時代後半の二時期に大別される。また、前者の遺構は調査区の西部に、後者に属するものは調査の東部に集中している。

1 平安・鎌倉時代の遺構

掘立柱建物・門

S B85 調査区の北西端に位置する。棟方向は、E 24° Sで、桁行4間(10.4m)、梁行4間(9.9m)の東西棟の総柱建物で、面積は約103m²である。東側柱の南から2つ目の柱穴を欠くが、柱間は、桁行2.6m、

梁行2.5mで、それぞれの柱間のバラツキは10cm以内でほぼ等間といってよい。また、側柱・床束それぞれの柱穴は直線上に整然と並ぶ。柱穴掘形は、径25~30cmの円形を呈し、深さ約20cmである。側柱・床束とともに、その柱穴の規模にもバラツキは認められない。

このS B85の南方にS B89があるが、双方の建物は約8mの距離を隔てて、棟方向もほぼ一致している。双方の建物とともに良好な時期決定の資料を欠くが、相互の距離や棟方向などを考慮すると、同時存在の可能性も高い。その場合は、大型建物のS B85を主屋に、S B89を付属建物と想定できよう。また、S B85はB地区北部のS B64・65の棟方向ともほぼ一致している。現在B地区とC地区は、南北に走る県道龜山・石水渓線によって隔てられているが、この県道敷設以前は一連の台地であったものと思われる。

S B85は、S D84と重複するが、出土遺物によりS B85がS D84に先行すると考えられる。S D84からは藤澤編年の第Ⅲ段階第7型式～第Ⅳ段階第8型式に相当する山茶椀(37・38)が出土している。また、S B85は、建物東側でS D87とも重複しているが、柱穴との切り合い関係は明瞭で、S D87の方が新しい。

S B85の6カ所の柱穴から少量の遺物が出土したが、いずれも残存度の低い小片である。土師器甕の口縁部(2)、黒色土器、口縁端部が強く外反する薄手の山茶椀などが出土した。

S B89 調査区の西部、S B85の南側に位置する。棟方向は、E 27° Sで、桁行3間(5.3m)、梁行2間(3.4m)の東西棟の側柱建物である。柱間は、桁行が1.8m、梁行が1.7mで、それぞれほぼ等間である。柱穴掘形は、径30~50cmの円形を呈し、深さは20~30cm前後である。3カ所の柱穴では明瞭な柱痕跡が認められた。調査の最終段階で、断割りによる断面観察を行った結果、柱の径は15~20cmと推定される。また、柱痕跡が柱掘形の底部からなお下方に数cm沈下している状況も確認した。

このS B89には、柱穴遺物が全くなく、時期決定は困難であるが、前述のように建物間の位置関係や方位からS B85と同時存在した可能性が高い。

S B90 調査区の北東端に位置し、建物が調査区外に及んでいるため規模は不明である。東西棟と仮定すると、棟方向はE 8° Sで、梁行2間(4.0m)、桁行2間以上の総柱建物と考えられる。柱間は、桁行が2.1m、梁行2.0m等間で、柱穴掘形は径30cm前後で、深さは20~40cmである。柱穴遺物は、全くない。

S B92 調査区の北東端に位置し、建物の大半が調査区外に及んでいるため規模は不明である。これを建物と認めうるか否か、かなり逡巡はしたが、周囲のピットに比べて柱掘形がしっかりとしており、規模も大きいことから建物の柱穴と想定した。棟方向はE 8° Sの梁行2間、桁行2間以上の東西棟と推定される。柱間は、桁行1.6mであるが、西側1間の

みであるため底の可能性もある。梁行は、2.1m等間である。柱穴掘形は、径35~50cmの円形、深さは20~40cmである。北西隅の柱穴は根石をもつ。柱穴から山茶椀、土師器皿、砥石が出土しているが、小片で時期決定は困難である。

S B93 調査区の南西部に位置する。棟方向はN 16° Eの南北棟の総柱建物である。桁行5間(10.4m)、梁行2間(4.4m)で、面積は約46m²である。柱間は、桁行が北から1.8+2.1+2.3+2.1+2.1m、梁行は2.2mの等間である。また、北側柱の北側30cmには、ピットが並列しており、妻庇の存在が想定される。

S B93は、建物方向と完全に一致するS B94と重複している。土坑SK96は、S B94に属する南



第28図 大蔵遺跡C地区遺構配置図 (1:400)

東隅土坑と考えられる。この土坑と S B93の柱穴との新旧関係は明瞭で、土坑埋土を柱穴が切り込んでいる。さらにこの 2 棟の柱穴出土遺物の比較によつても、若干であるが S B93は S B94よりも新しいものと推定される。また、S B93は S K95とも重複している。この S B93の柱穴と S K95のそれぞれの埋土は峻別し難く、切り合い関係から新旧を判断できないが、出土遺物の比較によると S K95が S B93に先行するものと推定される。S K95からは推定高台径 8.6cm の三角高台をもつ山茶椀(16)の底部が出土している。

S B93の柱穴からは土師器、練鉢の口縁部(10)、山茶椀が出土しているが、いずれも小片である。山茶椀(7)は底部を欠く破片であるが、推定口径 14.4 cmで、口縁がわずかに外反し、体部の形状は腰部に丸味を残しており、藤澤編年の第Ⅲ段階第 5 型式に近いものと思われる。

S B94 調査区の西端に位置し、S B93と重複する。建物の西半が調査区外に及んでいるため、東西の規模は不明である。従って棟方向も決めがたいが、一応南北棟として推定する。棟方向は N16° E の南北棟の総柱建物と推定される。桁行 4 間(8.2m)、梁行 1 間以上で、柱間は桁行が北から 1.9+2.2+2.2+1.9 m、梁行は 2.1 m である。柱穴掘形は径 30cm 前後の円形で、深さ 20~30cm ほどである。建物南東隅に、深さ約 10cm の底部が平らな土坑 S K96がある。この S K96は、柱を避けるように、かつては柱筋に沿って掘られており、建物が建てられた後に掘られたものと推測され、この S B94に付属する施設であると思われる。これも推測の域をでないが、S K96の規模は建物南東隅の 2 間 × 2 間の範囲に納まるものであろうか。S K96から石は検出されなかつた。

S B93の柱穴がこの S K96の埋土を切り込んでいる状況から、南東隅土坑を伴う S B94は S B93に先行するものと判断できる。『土坑を伴う中世掘立柱建物について』(浅尾悟『一般国道 1 号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要 VI』1990)による、県下の「この種の建物は 12 世紀中頃以降に急速に広まつたものとみられ、12 世紀後半から 13 世紀にかけてピークとなる」という。S B94も時期決定の資料に乏

しく、柱穴から山茶椀の底部(4)が 1 点出土しただけである。底部の器壁は厚く、高台は端部のつぶれた台形に近い形状を示し、推定高台径 6 cm である。これは藤澤編年の第Ⅲ段階第 5 型式に類似しており、時期は 12 世紀後半と推定され、土坑を伴う掘立柱建物の盛期と一致する。

S B100 調査区の中央部に位置し、建物の一部は調査区外に及ぶ。棟方向は E 6° S の総柱建物である。桁行 5 間(10.2m)、梁行 4 間(7.7m)で、面積は約 79 m² と推定される。柱間は桁行が西から 1.9+2.1+2.1+2.1+2.0 m、梁行は南から 1.7+2.0+2.0+2.0 m で、南面庇の建物と考えられる。柱穴掘形は、径 30~40cm の円形を呈し、深さは 15~30cm である。

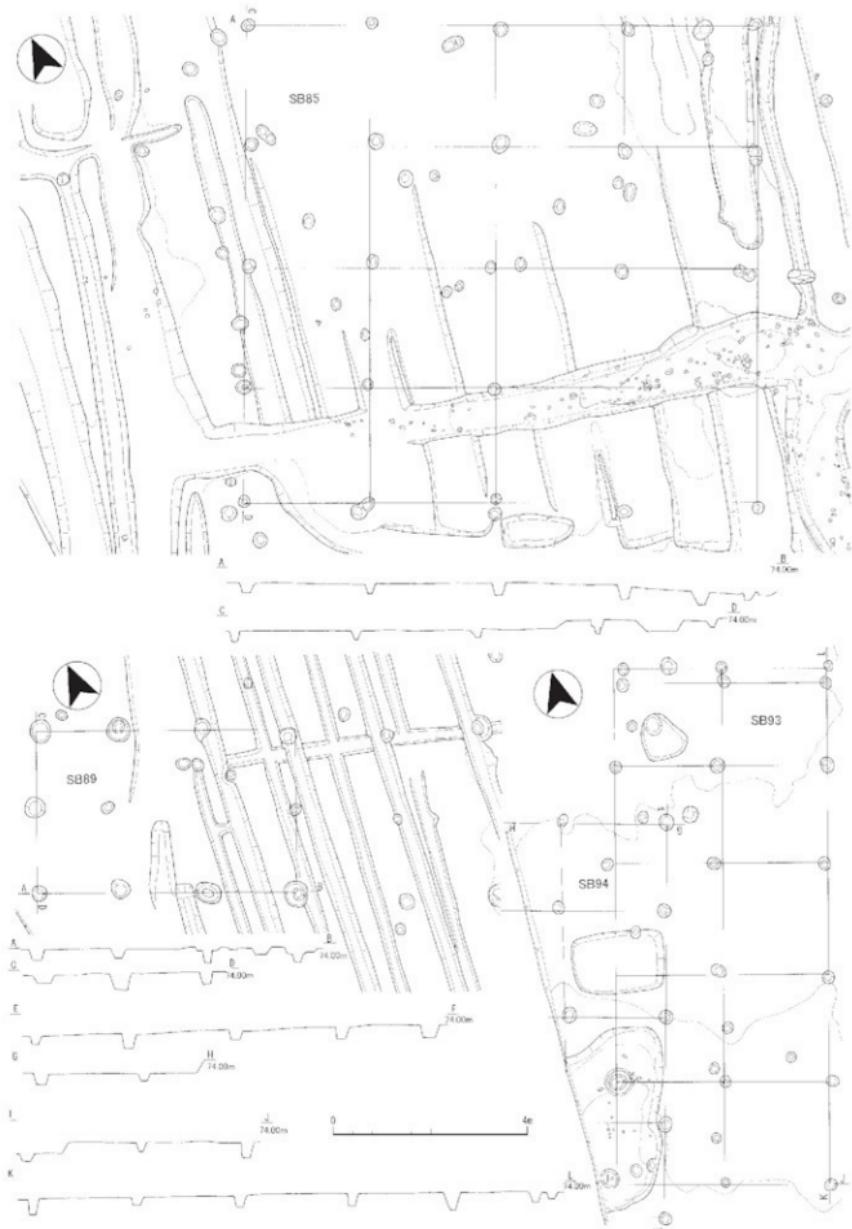
S B101 と重複し、建物南東部では 3 つの柱穴が重なっている。双方の建物の新旧関係は明瞭で、S B100の柱穴が S B101の柱穴を切っている。

S B100 の柱穴からは、いずれも残存度は低いものの、比較的多くの遺物が出土している。土師器皿、青磁碗(9)、山茶椀(8)の各小片である。青磁碗(9)は龍泉窯系の体部に鶴蓮弁を浮彫りしたものである。山茶椀(8)は底部を欠くが、推定口径 11.9 cm と小さく、体部は直線的で、口縁直下で若干凹み、端部が尖るもので、藤澤編年の第Ⅳ段階第 8 ~ 9 型式に近似する。また、判読は不可能ながら、墨書のある山茶椀も出土している。

S B101 調査区の中央部に位置し、S B100と重複し、建物の一部は調査区外に及ぶ。棟方向は E 13° S を示し、S B100の棟方向との差はわずかである。建物規模は、桁行 3 間(6.3m)、梁行 2 間(3.6m)の総柱建物で、面積は約 23 m² と推定される。柱間は、桁行が西から 2.1+2.0+2.2 m、梁行は 1.8 m の等間である。柱穴掘形は、径 30~40cm、深さは 10~30cm である。

柱穴遺物は、山茶椀片と器壁のきわめて薄い土師器皿(1)の小片のみである。遺物から建物の時期を確定することはできないが、柱穴の切り合いから、S B101は、S B100に先行するものと判断している。

S B104 調査区の南部、S B100、S B101の南に位置する。棟方向は、E 7° S の東西棟で、桁行 3 間(5.6m)、梁行 3 間(6.0m)の総柱建物で、面積は



第29図 SB85、SB89、SB93・94実測図 (1:100)

約34m²である。柱間は、桁行の西側の1間が1.6mと狭く、妻庇と考えられる。他の柱間は、2.0m前後ではほぼ等間とみられる。梁行の柱間も2.0mの等間である。柱穴掘形は、径20~35cm、深さ20~50cmである。なお、床束の一つを欠く。

柱穴からは、高台のない平底の山茶椀(5)が出土している。法量は器高5.5cm、口径13cm、底径5.2cmと推定され、形状は体部・底部ともに直線的で、体部の器壁は薄い。藤澤編年の第IV段階第8~9型式に相当する。このS B104の北には、約2.5mの距離を隔ててS B100、南約1.5mにはS B105がある。3棟の棟方向はほぼ等しく、出土遺物の型式も近似していることから、これらが同時存在した可能性がきわめて高い。

S B105 調査区の南部に位置する。棟方向は、E 7° Sの東西棟で、桁行3間(6.4m)、梁行2間(3.6m)の総柱建物で、面積約23m²である。柱間は、桁行が西から2.2+1.9+2.3m、梁行は1.8mの等間である。柱穴掘形は、径35~50cmと比較的大きく、深さは20~60cmである。

柱穴からは、山茶椀、土師器皿の小片が出土している。山茶椀(6)の法量は器高5.3cm、口径13.6cm、高台径6.1cmと推定される。形状は、口縁から腰部にかけて直線的で、粗穂压痕の認められる低い高台が付く。藤澤編年の第III段階第7型式~第IV段階第8型式に相当するものと考えられ、S B100やS B104の出土遺物と大きな時期差はない。

S B106 調査区の南部に位置する。C地区の東西棟の建物方位はすべて東に振れているが、S B106の棟方向はN13° Wと他の建物とは、棟方向を異なえる。桁行4間(8.0m)、梁行2間(4.8m)の総柱建物で、面積は約38m²である。柱間は、梁行が2.4mの等間であるが、桁行は1.8~2.4mと大きなバラツキがあり、4間とも不等間である。このような建物構造は、C地区のどの建物にもみられない。柱穴掘形は、径35~50cm、深さは40~60cmと深い。なお、側柱の柱穴の一つには根石を確認している。

柱穴遺物もまったくなく、棟方向から他の建物との併存の可能性を推定することは不可能である。建物の時期は不明とせざるを得ない。

S B108 調査区の南東端に位置する。棟方向はN

6° Eの南北棟で、桁行3間(6.4m)、梁行2間(4.2m)の総柱建物で、面積約27m²である。柱間は、桁行・梁行とも2.1mのはば等間である。柱穴掘形は、径30~45cmの円形で、深さは20~30cmほどである。

柱穴遺物は、底部を欠く山茶椀(3)の小片1点のみである。口縁部から体部上半の形状は、藤澤編年の第IV段階第8型式に類似する。

S B110 調査区南端に位置する。台地の南縁に沿って、直線上に並ぶ4つの柱穴を検出した。掘立柱による三間門と推定される。柱間は、左右の側面が各1.5m、正面開口部が2.6mである。門柱掘形の規模は大きく、径60~75cm、深さ約60cmである。3つの柱穴には、根石が残存する。扁平な川原石が、掘形の底から10~15cm上部に据えられており、門柱の高さ調整を目的とするものと考えられる。柱穴遺物はない。門の柱筋は、E 7° Sを示し、S B90・92・100・104・105の棟方向と一致する。また、S B108の梁行の方向ともほぼ平行する。この門は、これらの建物と同時期に存在し、屋敷地を構成していたものと推定される。門の左右には、柵や垣垣の痕跡を示す柱穴列が検出されなかったことから、生垣や土塀を想定せざるを得ない。

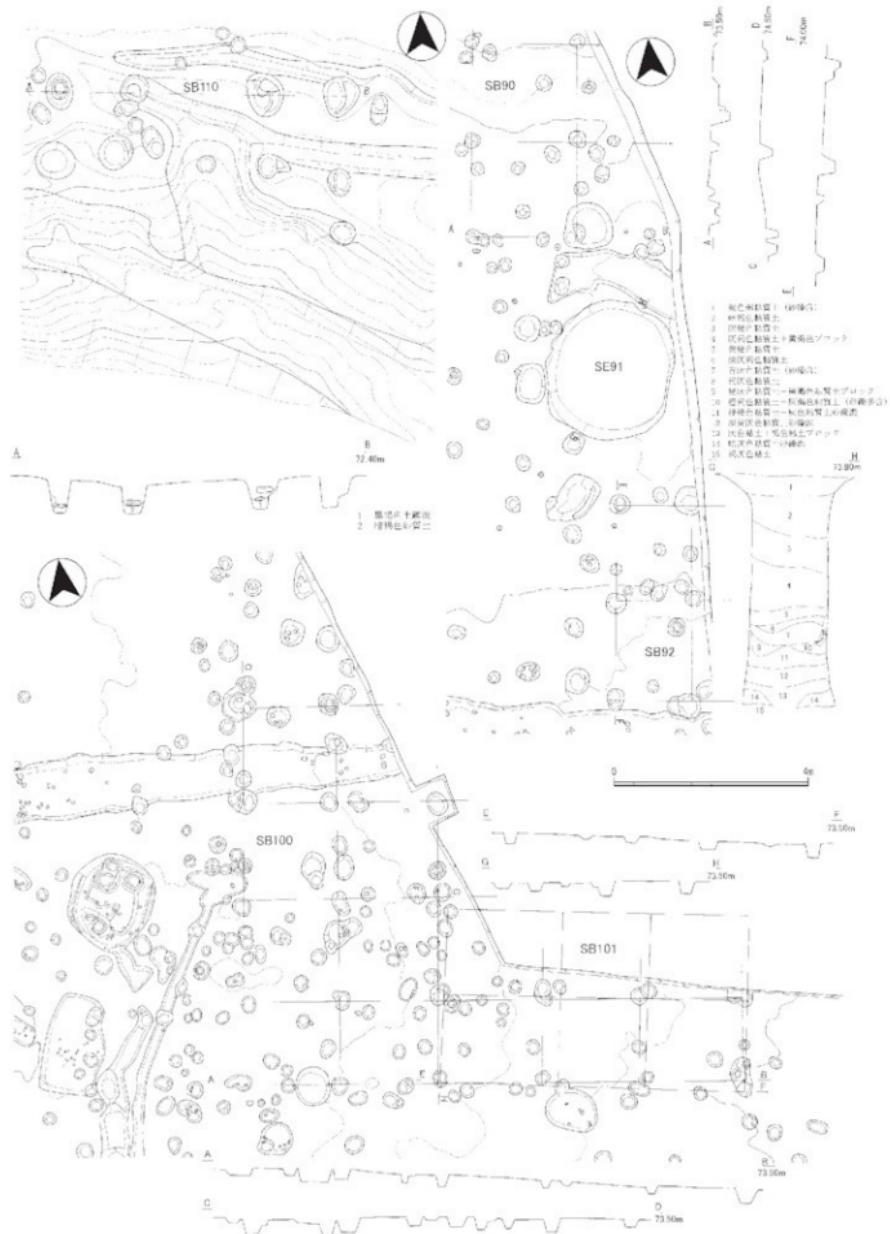
井戸

S E91 調査区の北東部に位置し、S B90とS B92とに近接する。南北約3.0m、東西約2.5mの楕円形プランを呈する素掘りの井戸である。検出面から約40cmの深さまでは漏斗状に狹まり、以下は直径約1.5mで垂直に掘り下げられている。埋土掘削が深さ約5mまで達した時点で壁面の崩落の恐れがでてきたため調査を断念した。この時点でも湧水はほとんど認められなかった。

深さ約3.5mの地点から、湾曲した板状の鉄製品が出土地したが、腐食が著しく器種は断定できない。その他に山茶椀(11~14)が数点出土したが、それらは底部に高台の剥離痕を有するものや平底のもので、藤澤編年の第IV段階第8型式に相当する。井戸の埋没時期は、13世紀末頃と考えられる。

土坑

S K98 調査区の中央部に位置する。S D99と重複しているが、切り合い関係は不明である。双方の遺物にも大きな時期差は認められず、当初からこの土



第30図 S B90・S E91・S B92、S B100・101、S B110実測図 (1:100)

坑の南側に S D99が接続していたものであろうか。S K98は、南北に長い楕円形プランを示し、長径約2.3m、短径約1.8m、深さ約70cmの底の平らな土坑である。土坑の底部から10~20cm上層で、拳大から人頭大の川原石とともに多量に土器が出土した。

完形を含む20個体以上の薄手の土師器皿(22~33)、山茶椀の底部(35・36)、常滑窯擂鉢の小片、土師器の盤(34)などである。土師器皿は、14世紀前半と考えられ、個体間の型式に著しい時期差は認められず、短期間に一括投棄されたものと思われる。

山茶椀は、底部の形状が藤澤編年の第IV段階第6型式に類似するもの(36)と、第IV段階第8~9型式に相当するもの(35)との2個体である。後者の底部外面には、判読不能ながら、明瞭な墨書きを確認した。

S D87から出土した同型式の山茶椀にも、これに類似した墨書きが認められた。土師器の盤(34)は、口径34.8cm、器高9.6cmで、淡褐色を呈する。直径約2.5cmの黒斑が底部の円周に沿って等間隔に3カ所認められた。これは、焼成前に付いていた三足の剥離痕と考えられる。これに類似した器形は、瓦質土器や鉄鍋の中に見られる。足は短いものと推定され、底部には煤の付着もないことから、煮沸の用に供されたとは考えられない。また、底部の器壁はわずか4mmほどで、重量のあるものを入れることは不可能と思われる。以上の点から、用途として最も可能性の高いものは火舎であろうか。

S K102 調査区の中央部。S B100の西方に位置する。平面形は、南北に長い楕円形を呈し、長径約2.0m、短径約1.7m、深さ約10cmである。土坑埋土を切っている数個のピットからは、遺物の出土はなかった。土坑からの出土遺物も常滑窯擂鉢の小片と山茶椀の底部(20)のみである。山茶椀の高台は低く、初段圧痕が認められ、高台径は7.2cmである。腰部に丸味を残し、底部内面と体部との接点、および見込み中央部分が浅く凹む。藤澤編年の第III段階第6型式に相当する。

S K103 調査区の中央部に位置し、S B100・S B101の南面に近接する。平面形は、東西にやや長い楕円形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8m、深さ約15cmの小土坑である。

出土遺物は、羽釜の口縁部(19)と山皿(21)のみで

ある。山皿(21)は、口径8.3cm・器高1.7cmで高台の付かない型式で、藤澤編年の第IV段階第8型式のある13世紀後半のものである。

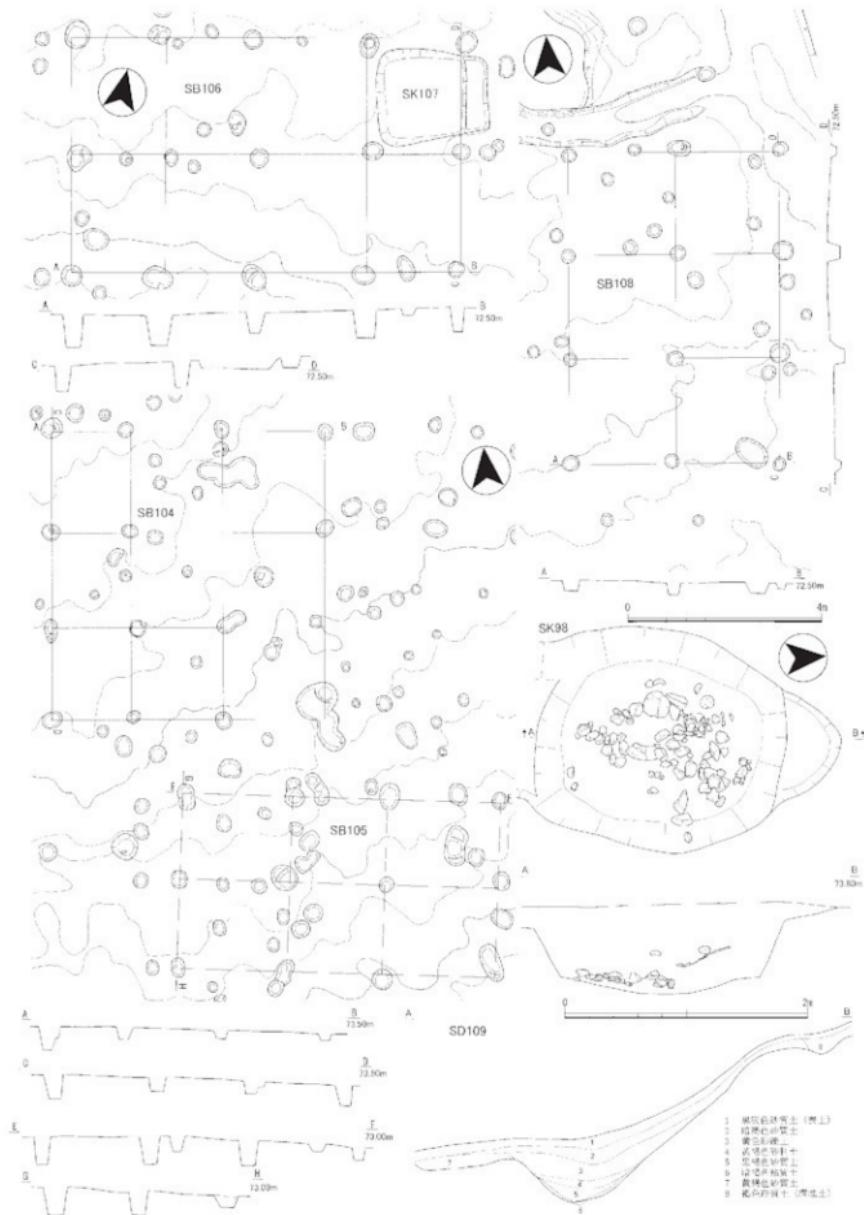
S K107 S B106の東北部に位置する。東西2.3m、南北1.5~2.0mの隅の丸い台形プランを呈し、一部建物の外に張り出している。建物北東隅の1間×1間の範囲にはほ納まり、柱筋に沿って柱を避けるように掘られている点から、建物が建てられた後に掘られたものと推測され、S B106に付属するものと考えられる。土坑の底には、柱筋に沿って明瞭な段差が認められ、建物外の張り出し部分は浅く、建物内部はより深くなる。深さは張り出し部で約15cm、建物内部で約25cmである。掘立柱建物に付属する土坑の性格については、廐説や厨房説が有力であるが、このS B106の土坑は廐とするには規模が小さすぎ、厨房説を裏付ける遺物の出土も全くない。

溝

S D83 調査区の北西端に位置する。S D81・82と平行して南に延びる。幅は0.8~1.5m、深さは10cmほどである。構造検出面の段階では、S D81・82・83の埋土を峻別できず、東西方向にセクションを残して、検出面を漸次下げていった。最終的にそれぞれの遺構を確認できたのは第V層上面であったが、セクションの断面観察の結果、3条の構は互いに時期差をもって切り合っている状況が判明した。S D81は、S D82より古く、S D82はS D83より古い。

S D81・82には出土遺物はない。S D83からも白磁碗の底部(64)が出土しただけである。

S D84 調査区の北西部に位置し、S B85と重複する。S D84は、西側でS D83に、東側でS D87にそれぞれ接続する。幅は、1~1.5m、深さは20cmほどで、溝底は西から東にかけて緩やかに傾斜している。溝底に密着した状態で、完形を含む山茶椀(37・38)が出土した。これらは、藤澤編年の第III段階第7型式~第IV段階第8型式に相当する。接続するS D87の遺物も大半はこの範疇に属するものである。従って、北から南に向かって延びるS D83は、途中からT字状に分岐してこのS D84となり、さらに東に向かって流れ、S D87に合流していたものと推測される。なお、重複するS B85は、出土遺物の比較においても、柱穴と溝の切り合い関係において



第31図 SB106・SK107、SB104・105、SB108実測図 (1:100) SK98、SD109実測図 (1:40)

も、明らかにこの S D84に先行する。

S D87 調査区の西部に位置し、北から南の台地斜面に向かって、ほぼ継続して延びる。肩幅は、1.2~1.8m、底幅は0.6~1 m、深さは西側の一部で10cmと浅いが中央部から南側にかけては30~50cmとなる。溝底は、平坦で断面は台形を呈する。底から10~20cm上層で、拳大の石とともに大量の遺物が出土した。

土師器皿(39~42・44)・羽釜(45)、山皿(46~49)、山茶椀(50~53・55~59・66)、練鉢(60~62)、青磁碗(63)などである。これらの遺物間には大きな時期差は認められず、その大半は鎌倉時代末期の所産と考えられる。この溝の東部に位置する建物群の時期とも一致する。S D87は、これらの建物群で構成される屋敷地西端を区画するものと考えられる。

S D86 調査区の北部から、S D87に平行して南に向かって延び、南端は後世の溝S D97によって切られている。S D86は、幅0.8~1.2m、深さ10~20cmである。

出土遺物には、土師器皿(67・68)、山皿(69・70)、山茶椀(71~79)、練鉢(61)、青磁碗(80)がある。これらと前述のS D87の遺物との間に時期差は認められない。練鉢(61)は、S D87とS D86の双方から出土した破片を接合し得たものである。

S D99 調査区の南西部に位置し、S D87と平行して南に延びる。S K98との切り合い関係は不明であるが、双方の出土遺物にも時期差は認められず、当初からこのS D99はS K98に接続していたものと考えられる。S D99は、幅約1.5m、深さ20cmほどである。出土遺物には、山茶椀(65)がある。

S D109 調査区の南斜面を西から東に向かって延びる。調査前の状況は、台地上からの流出土によっ

て完全に埋没しており、起伏のないなだらかな斜面を呈していた。幅3~4 m、深さ1.4~2.5mである。県道を隔てて西方に位置するB地区には、この溝に接続すると思われる溝は検出されていない。県道敷設以前にはB地区とC地区の間には小規模な谷が存在しており、S D109はこの谷を起点として掘削されたものと考えられる。

出土遺物には、土師器皿(81~83)、ロクロ土師器(84~86)、黒色土器(89)、山茶椀(90~94)、山皿(95・96)、常滑窯焼(98)、白磁碗(99)などがある。

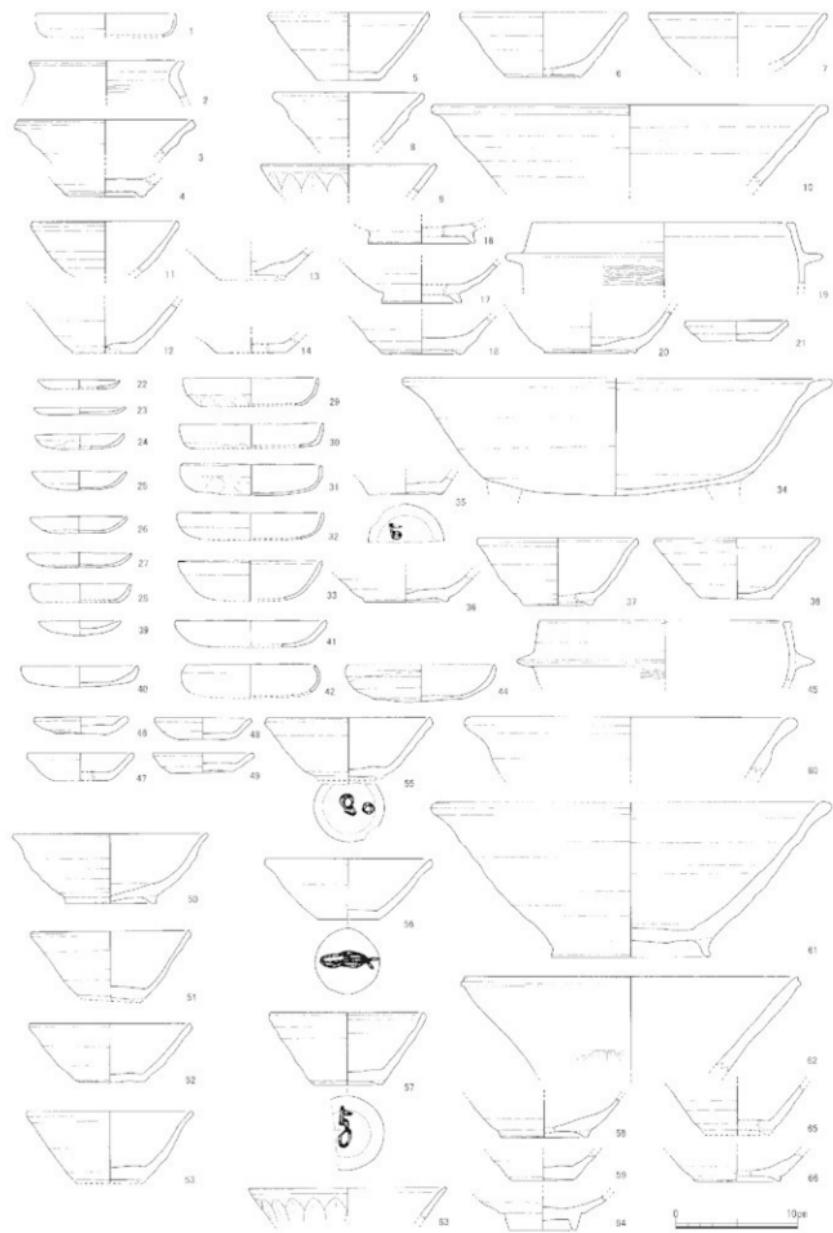
道路

S R88 S D87とS D86およびS D99とに挟まれた幅2.5~5 mの狭長なエリアを道路と推定した。S D87・86・99のそれぞれの出土遺物は、鎌倉時代末期の所産と考えられ、この3条の溝は同時存在していたものと思われる。また、このエリアにはほとんどピットが存在せず、これと重複する同時期の遺構も全くない。この道路上にあるピットの中で、出土遺物から時期を推定し得たのはP 1だけである。P 1からは山茶椀(107)と黒色土器の小椀(109)が出土した。これが道路として使用されていた時点では、P 1はすでに埋設していたものと考えられる。

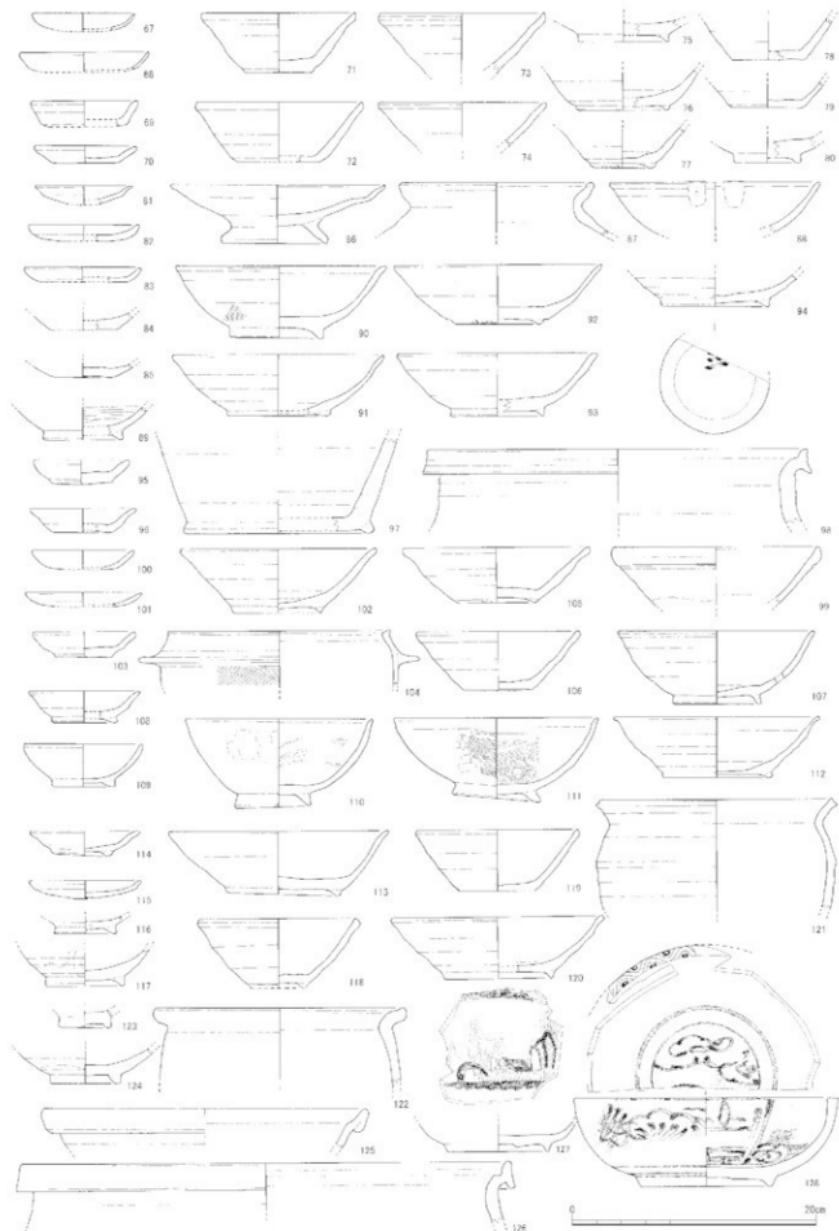
2 包含層の遺物

包含層等からは、土師器小皿(100・101・115)・羽釜(104)・甕(122)、黒色土器(110・111・116)、須恵器甕(121)、灰釉陶器(117)、山皿(103・108・114)・山茶椀(102・105~107・112・113・118~120)、白磁(124)、常滑窯焼(126)のほか、近世の天目茶椀(123)、常滑滑り鉢(125)、伊万里碗(127・128)も出土している。

(平子 弘)



第32図 C地区掘立柱建物、井戸、土坑、溝出土遺物実測図 (1:4)



第33図 C地区溝、包含層出土遺物実測図 (1:4)

5 大蔵遺跡の変遷

大蔵遺跡は、A地区の西側、A地区とB地区の間、B地区とC地区の間に小規模な谷状地形がみられ、またC地区の東には大きな谷底平野が形成されている。発掘調査は、A・B・C地区に分けて実施したが、地形的には一連の遺跡として捉えられる。

すなわち、大蔵遺跡は、C地区の谷に隔てられた台地南東部に立地した古代から中世の集落跡であり、東西約300mの広がりをもつ。ただ、調査区南側の台地崖までの地区及び北側の台地上への広がりは不明である。

A地区で飛鳥時代の堅穴住居3棟・掘立柱建物5棟・土坑3基、B地区で土坑1基を確認しており、大蔵遺跡の集落成立時期を示している。堅穴住居SH2と掘立柱建物SB5のように堅穴住居と掘立柱建物の同時存在を窺わせる事例もあるが、両者の関係は必ずしも明確でない。堅穴住居のカマドの位置は北辺中央に設けられており、堅穴住居・掘立柱建物の主軸は北から東へ十数度振る。SH39出土須恵器は、杯身受部が矮小化する段階であり、陶邑古窯址群のTK209～TK217、尾張窯の東山50号窯期の時期に該当し、7世紀前半を集落成立期とし、I期とする。

大蔵遺跡の中心時期は、12世紀の平安時代後半以降であり、A地区では、掘立柱建物19棟(総柱建物12棟・側柱建物7棟、東西棟12棟・南北棟7棟)・土坑2基・中世墓3基・溝6条等が確認された。

B地区では、平安時代後期の掘立柱建物8棟・土坑3基・溝等及び鎌倉時代末期の周溝状遺構1基を確認し、調査区の中央部で溝と柵列に区画された大型の総柱建物と付属する建物群が認められ、これらの建物群はC地区の西部の建物群と繋がる可能性も指摘できる。

C地区では、掘立柱建物12棟・門1棟・井戸1基・土坑・溝・道路等が確認され、平安時代末期と鎌倉時代後半に大別される。

大蔵遺跡の平安時代では、A地区的SH2が、北から東に約35°振れ、これに直交するようにA地区北部を東西にながれる大溝は後世に掘り返しがなされ最終理渉時期は近代まで降るが、当初はSD23と

共存した可能性も否定できない。また、SD23と約110m距離を隔てたSD66は、北から東に約25°振れ、北から南に流れる。基準方位に約10°の振れが認められるものの、SD23とともに遺跡全体を区画する溝と考えられる。遺跡全域に認められる南北及び東西溝には、N10°～35°Eの微妙なずれが認められ、新しい溝ほど北からの振れが小さくなるのは、建物の棟方向の変化と呼応している。また、溝は、埋没時期に差異があるものの12世紀後半以降大蔵遺跡の土地利用の標準となっていたと考えられる。

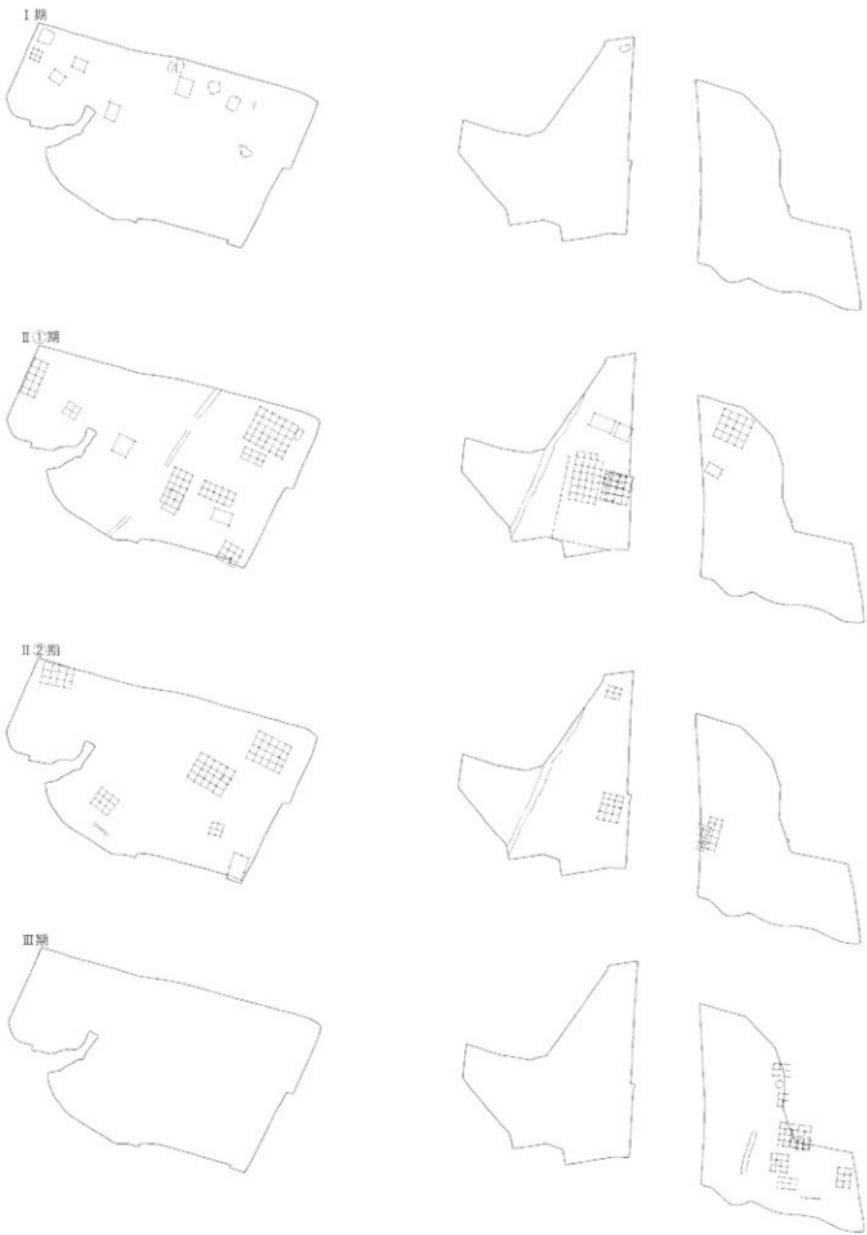
II期の平安時代後半は、藤澤編年の第II段階第3型式・第4型式の時期に該当する^①。その前後の11世紀後半(第I段階第2型式)、12世紀後半(第III段階第5型式)を含むが、遺構の重複関係、建物の棟方向により建物変遷を12世紀前半のII期①小期と12世紀中頃から末期のII期②小期と区分する。

II期の建物は、A地区からC地区全域に広がり一定の間隔を置いて確認している。A地区西端ではSB1・SB3・SB4と南東に倉SB9、A地区北東部にSB37・SB38とSK42、同南東部にSB31・SB32・SB35、B地区中央部にSB69・SB70・SA75・SE67・SK68、及びC地区の北部でSB85・SB89の一帯が確認された。これらの建物群は、A地区中央部のSD23とB地区のSD66がほぼ一町の距離を隔てて、北から東に約25°～35°振れて南方向に流れる溝の方向に棟を揃える傾向をもち、棟方向が北から東に20°～30°振る建物をII①小期(12世紀前半)とした。また、SB1とSB3・SB4との新旧関係からSB3・SB4が後出することが判明しており、後出の建物が北から東へ10°～20°振る建物群をII②小期(12世紀中頃～末期)とした。

その後、大蔵遺跡では、後続する建物が途絶えるか縮小されたと考えられる。しかし、13世紀末期から14世紀初頭に遺跡東部のC地区的東部で門と区画道路を伴う建物群が出現し、この13世紀後半(第IV段階第8型式前後)をIII期とする。この時期の建物の棟方向は、北から東へ6°～8°振る。

I期の掘立柱建物では、SH2と共存する可能性があり、倉庫と考えられるSB5以外は、すべて側柱建物で3間×2間規模(10～20m²)である。

II期以降は、基本的には総柱建物が主体をなし、



第34図 大蔵遺跡遺構変遷図

建物規模も S B29が5間×4間、(120.65m²)、S B37が6間×5間(171.36m²)、S B38が5間×4間(115.2m²)、S B69が6間×4間(123.2m²)、S B85が4間×4間(102.96m²)と中心的建物(主屋)は面積規模が100m²を超える。

II ①期では、S B1とS B9、S B37とS B45、S B31とS B32・S B35、S B69とS B70、S B85とS B89のよううに2棟以上の建物で屋敷地を構成したと推定される。

この建物群は、S B1→S B3、S B37→S B38のように基本的に同一空間で建て替えられ、II ②期に移行する。ただ、この移行は、漸次的であったと考えられ重複せず近接する建物は継続して存続した可能性も否定できない。少なくとも、II ①期、II ②期を通じて複数の建物で構成される屋敷群が4・5箇所存在したと考えられる。

A地区では、建物周辺に井戸は確認されていないが、B地区及びC地区では、建物と同時期の井戸がそれぞれ1基ずつ確認される。

一般的に古代後期から中世にかけて集落内では、溝や柵列によって屋敷地を区画する調査事例が報告されることが多い。大蔵遺跡では、建物方向等を規制する基準となった柵の存在が指摘できるが、個々の居住単位にすべてに区画溝・柵列の存在は認められない。ただ、II ①期のS B69・S B70では建物西及び南側をL字状に建物を取り囲む柵列S A75が確認できる。また、柵列の西側には井戸S E67を介して、南北溝S D66が認められる。

III期は、遺跡東端のC地区で主屋S B100と付属するS B104・S B105・S B108及び門S A110と西方に位置するS D87・S D99に挟まれた道も確認される。また、S B100の北方にはS E91及び推定建物であるがS B90・S B92の存在も想定され、複数の建物群で構成される大規模な屋敷地を復元することができる。

一方、A地区調査区の南西部で確認された中世墓3基は、第Ⅲ段階第6型式の山廾が副葬されており、13世紀前半に造営された中世墓と考えられるが、当該時期に該当する建物が抽出できず、更に検討を要する。

大蔵遺跡は、その西方の糀屋垣内遺跡が発掘調査

され、平安時代後期から室町時代前期までの掘立柱建物が84棟ほど確認されており^②、平安時代末期以降建物数が増加し、大蔵遺跡の集落が拡大し、その中心的機能が西方に移動したと考えられる。

大蔵遺跡と糀屋垣内遺跡は、古代から中世にかけての一連の集落遺跡であり、その背景には莊園制による土地開発が想定される。

糀屋垣内遺跡の所在する羽若町は、文治3年(1187)4月の条で、「廿九日庚子。三月公卿勅使駿家雜事。伊勢国地頭後家人等多以押之間。召在宇等往進状被下之。仍今日二品覽彼目錄。仰不法之輩可被誠向後懈緩之由。及嚴密御沙汰云々。件目錄云。」とあり、この目錄のうち駿家雜事に勤仕していない莊園として、「葉若村」の名が見え、この時は後白河院領となっている。この後、後鳥羽院に繼承されたが、承久3年(1221)の承久の乱により幕府に没収された。

承久3年8月7日条に「七日戊申。世上属無為。是符号二品禪尼夢想。仍奉寄所於二所太神宮。所謂内宮御祈。御院領伊勢国安楽村。井後村。外宮御分。同國領葉若西園両村也。(以下略)」とあり^③、神宮へ寄進され、御厨として14世紀までその存在が確認できる。

大蔵遺跡及び糀屋垣内遺跡は、「葉若莊」に関わる莊園遺跡を構成する集落跡であり、集落の構造と変遷は、「葉若莊」の解明を進める上でも、また当該地域の中世村落を窺いいうる貴重な調査事例であり、更に詳細な検討が課題である。
(駒田利治)

註

- ① 藤澤良祐「瀬戸古窯址群」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1」瀬戸市教育委員会 1982
- ② 亀山市教育委員会「糀屋垣内遺跡」三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会 1994
- ③ 「吾妻鏡第七(文治3年)」「吾妻鏡第二十五(承久3年)」「国史大系 吾妻鏡 前編」吉川弘文館 1964

V 堀越遺跡

1 位置と地形

堀越遺跡は、市街地北方の丘陵地帯に位置し、この辺りは、台地が樹枝状に開析され、台地と谷底平野が入り込んだ複雑な地形を成している。堀越遺跡は、亀山市椿世町集落の東方で、谷間を蛇行して東流する椋川右岸の標高約40mの低位段丘上に立地する。行政的には、亀山市椿世町字堀越に所在する。

堀越遺跡は、烟・茶烟として利用されている比較的排水の良い平坦な段丘上にある。遺跡の推定総面積は、約4,700m²と推定され、昭和62年11月9日から同年12月末日まで第1次調査として1,700m²を調査した。また、昭和63年11月1日から12月2日まで第2次調査として1,700m²の調査を実施し、併せて3,400m²の発掘調査を行った。

周辺には、椿世町集落と谷を隔てた西方の台地上に、古墳時代から近世までの複合遺跡である正知浦

遺跡がある。また、その西方の台地南縁辺部には、続谷垣内遺跡、大藪遺跡など平安時代後半から室町時代にいたるまで断続的に営まれた中世集落が確認されており、堀越遺跡も同時代の遺跡として考えられ、この地域の中世集落解明の一端となる。

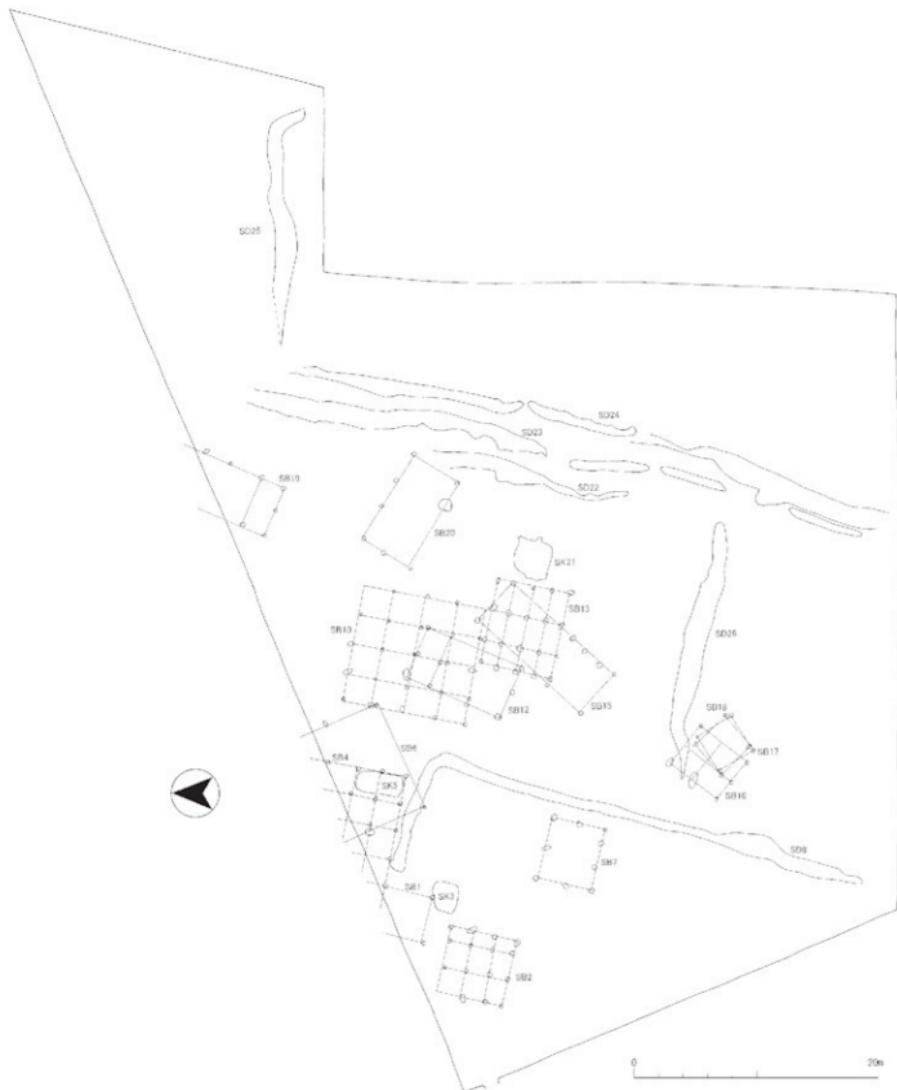
2 遺構と遺物

堀越遺跡では、数多くのピットと溝や土坑を確認し、平安時代末から室町時代の土師器・ロクロ土師器・灰釉陶器・山茶碗などが出土し、当該期の集落と判断された。検出されたピットは、総じて規模が小さく、掘立柱建物跡と確定することには、相当な困難さが伴った。調査現場において、掘立柱建物4棟を確認し、概要報告IV・Vにおいて報告した。

調査後、報告書作成のために整理作業を進める中で、平面形が方形をなすピット群を抽出すると、柱通りが悪い建物も含め、実に55カ所の想定建物が



第35図 堀越遺跡地形図 (1:5,000)



第36図 堀越遺跡遺構配置図 (1:400)

判明した。

しかしながら、極端に不等間な柱間、柱通りが悪いもの、及びピットの規模が小さいもの(直径20cm未満、深さ10cm未満等)の想定建物は、当該時期の掘立柱建物として認定することに躊躇せざるを得ず、現地で確認した遺構を中心に、精査を行った。

その結果、掘立柱建物13棟、溝4条、土坑3基を報告することになった。

1 平安時代後半～鎌倉時代初期(Ⅰ期)

堀越跡地で、最も遺構・遺物の多い時期で、掘立柱建物5棟、溝2条、土坑1基が確認された。

掘立柱建物

S B 4 調査区の北西部に位置し、東西4間(9.0m)以上、南北3間(6.4m)以上の総柱建物で南東隅に土坑S K 5 をもつ。棟方向はE 11° Sである。柱間はほぼ等間で、桁行が西から2.2+2.3+2.3+2.2m、梁行が南から2.0+2.0+2.4mで、柱通りは良い。柱穴掘形は、径40cm、深さ30～50cmほどである。

S B 2 調査区北西隅部に位置し、桁行3間(5.3m)、梁行2間(4.4m)の南北棟の総柱建物で、東に庇をもつ。北西隅の柱穴は確認できなかった。棟方向は、N 10° Eで、柱間は、桁行が南から1.5+1.9+1.9mで、梁行が2.2mの等間で、柱通りも良い。庇の出は、1.1mである。柱穴掘形は、径30～50cm、深さ20～40cmである。

S B 10 調査区北部の中央に位置し、桁行4間(9.6m)、梁行4間(10.2m)の南北棟の総柱建物である。棟方向は、N 11° Eである。桁行は、西から2.0+2.5+2.4+2.7m、南から2.5+2.9+2.5+2.3mとなり、桁行の東3列目及び梁行の南から2列目の柱間は広く不等間であるが、柱通りは良い。柱穴掘形は、径30～50cm、深さ20～40cmと一定である。

柱穴から、灰釉陶器碗(2)の口縁部の小片が出土している。推定口径15.1cmで、内外面に白灰色の灰釉がハケヌリされる。口縁部は、肥厚し、緩やかに外反する。腰部は丸みを帯びる。ロクロナデで成形され、腰部にヘラケズリが施される。

S B 13 調査区中央部に位置し、桁行3間(7.0m)、梁行4間(5.7m)の東西棟の総柱建物で、棟方向はE 12° Sである。柱間は、桁行が西から2.1+2.5+

2.4m、梁行が南から1.4+1.5+1.5+1.3mとなり、全体に梁行の柱間が桁行の柱間よりも狭い。柱通りは良い。柱穴掘形は、径30～50cm、深さ40～70cmほどである。

柱穴から青磁碗(3)の底部が出土し、高台径5.4cmで、胎土の色調は淡灰色で、釉は淡緑色である。底部内面にクシメによる刻花文が施される。龍泉窯のもので、平安時代末期と考えられる。また、底部内面から外面にかけて人為的に打ち欠いた痕跡がみられる。この放射状に打ち欠いた痕跡は、いわゆる円形加工陶磁製品と思われ、県下でも相当数確認されている。

S B 7 調査区の北西部に位置し、桁行3間(5.2m)、梁行2間(4.6m)の側柱建物で、棟方向はE 15° Sである。柱間は、桁行が西から2.0+2.0+1.2m、梁行が2.3m等間であり、東1間は庇と考えられる。柱通りは、必ずしも良くはなく、南側柱と北側柱の対応は悪い。柱穴掘形は、径40～60cm、深さ35～55cmほどで、柱痕跡の認められるものもある。建物位置・構造、棟方向からS B 4あるいはS B 10の脇屋である可能性がある。

土坑

S K 5 調査区北西部にあるS B 4の南東隅に位置する。平面形は、長辺3.8m、幅1.7mの隅丸方形を示し、深さは15～20cmと浅い。S B 4の南東隅2間×1間に収まる所謂南東隅土坑である。

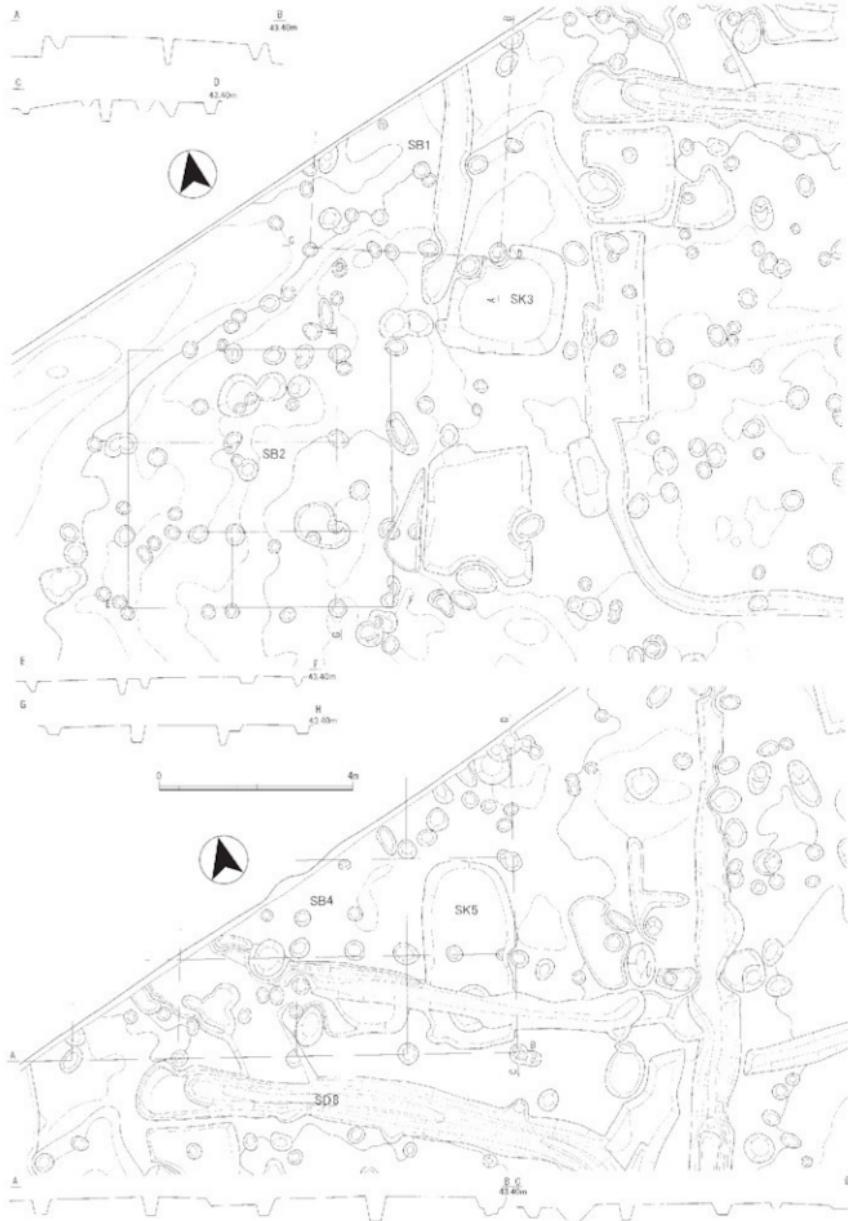
伊勢型鍋(5)、山茶椀(6～8)などが出土している。伊勢型鍋(5)は、推定口径21.6cmで、口縁部は折り返した後、ナデ調整する。頭部は「く」字状に内湾する。胎土に2mm以下の砂粒を含みやや粗い。

山茶椀は、(6・7)は口縁部、(8)は底部の小片である。(8)の高台には初穀痕がみられる。平安時代末期のものと思われる。

S D 8 調査区西部を南北に貫く大溝で全長48m、幅0.6～2.0m、深さ15～50cmである。溝の両側は、底に向けてなだらかに傾斜するが、やや西寄りで急に落ち込む。

灰釉陶器・白磁・山茶椀(9・10)・山皿(11)、刀子(12)などが出土し、平安時代末期から鎌倉時代前期の拂と考えられる。

山茶椀(9)は口縁部、(10)は底部の小片である。



第37図 SB1・2・SK3・SB4・SK5・SB8実測図 (1:100)

(9)は推定口径17.0cm、(10)は高台径6.7cmである。 (10)の高台は、比較的丁寧なつくりだが、粗筋痕が認められる。ともに鎌倉時代初頭のものと考えられる。山皿(11)は、推定口径9.0cm。口縁部直下に1条の沈線がみられる。

刀子(12)は、鋒化が激しく、切先か茎部かは不明である。断面形は長円形で、刃側がやや尖っている。おそらく、断面形が二等辺三角形である平疊平造りと思われる。目釘穴はみられない。

溝

S D 23 調査区東部を南北に貫く溝で、保存状況が悪く、所々途切れているが、全長54m、幅0.6~1.8m、深さ12~38cmであり、溝の両側は、緩やかに傾斜している。

灰釉陶器椀(20)、山茶椀(21・23)、壺(22)の他、繩文土器(26)も混入する。(20)は、高台径7.5cmで、高台は比較的高く、断面は方形となる。(21)は、高台径6.2cmで、高台は低く、断面が逆台形となる。(23)は、高台径7.1cmで、断面逆三角形の低い高台が貼り付けられる。壺(22)は、高台径8.4cmで、断面が方形でしっかりと踏ん張る。平安時代末期から鎌倉時代前期の構と考えられる。時期や規模からも S D 8 と同様な機能をもつ構と考えられる。

両溝は、24~26mの間隔をおいて、概ね並行して延びる。溝の方向は、N17° Eで、この時期の建物方向とも一致しており、S D 8 及び S D 23は、この時期において地区全体を規制していたと考えられる。溝の機能が区画溝か道路造構の側溝かは、周辺の状況をみて判断する必要がある。

2 鎌倉時代前期(II期)

I期に比べ、遺構・遺物ともに少ない。掘立柱建物4棟、土坑2基、溝2条が主な遺構である。

掘立柱建物

S B 1 調査区北西隅で確認された建物で、東西2間(3.9m)、南北2間(4.4m)以上の側柱建物である。棟方向は、N15° Eである。柱間は、南北が2.2mの等間で、東西が西から1.8+2.1mで、柱通りはあまり良くない。柱穴掘形は、径30~40cm、深さ20~40cmでばらつきがある。

S B 12 調査区中央部に位置し、S B 10・13と重複

する。桁行3間と(8.2m)、梁行2間(4.4m)の南北棟の側柱建物で、棟方向はN23° Eである。柱間は、東桁行が南から1.9+3.4+2.9m、西桁行で2.5+1.9mの2間となる。梁行は2.2mの等間であり、柱通りは比較的良好。柱穴掘形は、径20~50cm、深さ20~60cmである。

S B 20 調査区中央部の東寄りに位置し、S D 22と重複する。桁行3間(8.1m)、梁行2間(4.8m)の東西棟の側柱建物で、棟方向はE27° Sである。床束がある可能性もある。柱間は、桁行で西から2.6+3.0+2.5m、梁行は2.4mの等間だが、柱通りは悪い。柱穴掘形は、径30~50cm、深さ16~40cmである。

S B 19 調査区の北端に位置する。桁行3間(7.1m)以上、梁行2間(4.3m)の南北棟の絶柱建物で、棟方向はN23° Eである。床束をもつ可能性もある。柱間は、桁行が南から2.0+2.8+2.3m、梁行が西から2.3+2.0mと不等間であるが、柱通りは良い。柱穴掘形は、径30~50cm、深さ10~30cmである。

土坑

S K 3 調査区北西部のS B 4とS B 7の間で確認され、長辺2.3m、短辺2.3mで、平面形は隅丸方形で、深さは35~44cmで断面は逆台形である。主軸方向は、N17° Eである。埋土は、暗褐色から黒褐色粘質土で炭化物も混じっている。

遺物は、主に深さ20cm以上から出土し、山茶椀(13~16)、鉄鎌(17)、砥石(18・19)がある。

山茶椀(13・14)はほぼ完形、(15・16)も約1/2残存。(13~15)は高台がなく、口径12.6~13.1cm、器高4.4~5.0cm、底径5.8~6.0cmで、成型・調整・特徴などは(16)と概ね同様であるが、やや法量が小さく、高台が無く、糸切り痕が残っている。(16)は、高台が剥離しており、推定口径13.9cm、底径6.1cm、器高5.3cmである。体部は、ほぼ直線的に引き出され、ロクロナデ調整される。底部は高台を貼り付ける際に糸切り痕をナデ消している。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含み、長石の吹き出しが認められる。色調は白灰色である。(16)は、藤澤編年の第IV段階第7型式。(13~15)は第IV段階第8型式に相当し、13世紀後半の時期にあたると考えられる。

鉄鎌(17)は、刃部は長さ21cmのほぼ直線を成し、背部が緩く湾曲する。茎部は長さ11cmで刃部には

鈍角で付けられる。

砥石(18・19)は、現存長10.6cm、19.5cmで、(18)は欠損している。(18)の断面は三角形で、相當に使用されたとみられる。(19)は、断面方形を成す。

S K21 調査区中央部に位置する。長辺・短辺とも3.0mで、平面形は隅丸方形を呈し、深さは20~34cmで断面形は逆台形であり、主軸方向はN17°Eである。遺物は、土師器・山茶碗の破片で鎌倉時代末期の土坑と考えられる。形状・主軸方向は、SK3と類似点がみられるが、性格は不明である。

溝

S D22 調査区の東部に位置し、S D23から分岐した形状を示している。S D23同様に調査区を北東から南西にのびる全長18m、幅0.4~2.0m、深さ8~25cmで、S D23が分岐するのに対応してか、調査区中央部で途切れる。主軸方向N15°Eである。断面形は逆台形を呈する。このS D22もS D23同様にⅡ期以前から流れていた可能性がある。

3 鎌倉時代後半~室町期(Ⅲ期)

この時期は、掘立柱建物2棟が中央部で継続される。

掘立柱建物

S B15 調査区中央部に位置し、S B10・13とも重複する。桁行4間(11.3m)、梁行2間(4.3m)の東西棟の側柱建物である。棟方向は、E47°Nである。柱間は、桁行が南から3.1+2.9+2.7+2.6m、梁行が西から2.2+2.1mで、柱通りは悪い。柱穴掘形は、径20~40cm、深さ50~80cmと深い。

S B16 調査区南部に位置し、時期不明のS B17・18と重複する。桁行2間(4.8m)、梁行2間(4.0m)の南北棟の総柱建物で、棟方向はN39°Eである。北側柱が構で削平され確認できなかったが、柱間は、桁行が西から2.5+2.3m、梁行が2.0mの等間で柱通りも良い。柱穴掘形は、径20~40cm、深さ20cmほどである。倉庫的な建物と考えられるが、柱通り、棟方向からS B15との類似性が認められる。

溝

S D24 全調査区東部に位置し、全長51mにわたって調査区を南北に延びるが、途中で途切れる部分もある。幅0.4~3.0m、深さ9~17cmで、溝の主軸は

N14°Eである。断面形は逆台形を呈する。

口径8.8cmで、口縁端部が大きく外反する山皿(24)が出土する。藤澤編年の第IV段階第8型式の13世紀後半のものと考えられる。

S D26 調査区南部に位置し、ほぼ東西方向に延びる溝である。

灰釉陶器平挽(25)が出土し、推定口径27.6cmで、口縁部は肥厚し、やや内湾する。胎土は黄白色、釉は淡黄褐色で厚くかかる。瀬戸窯の製品で、15世紀のものと考えられる。

4 時期不明

調査区南部に位置するⅢ期のS B17・18が、S B16と重複して確認できるが、新旧関係は不明である。

S B17 東西2間(3.3m)、南北2間(3.3m)の平面が方形に近い側柱建物である。棟方向は、E36°Nである。柱間は、東西が西から1.7+1.6m、南北が南から1.7+1.6mで、柱通りは悪い。S B18の建替えである。柱穴掘形は、径30~40cm、深さ25cmほどである。

S B18 東西2間(3.4m)、南北2間(3.4m)の方形の側柱建物である。棟方向は、E45°Nである。柱間は、東西が西から1.8+1.6m、南北が南から1.6+1.8mで、柱通りは悪い。S B17に先行する倉庫的な建物と思われる。

5 包含層の遺物

平安時代のロクロ土師器・灰釉陶器・白磁及び鎌倉時代の土師器・山茶碗・青磁などがある。

平安時代

ロクロ土師器台付皿(27~30) ほぼ同一地点から出土した。(27・28)は、口径8.9cm・9.6cm、器高2.4cm・2.5cmである。(29・30)は、口径10.0cm・10.6cm、器高3.3cm・3.6cmで、やや大ぶりである。皿部にロクロナデを施し、高台を貼り付けたものである。

清郷型鍋(31) 推定口径23.6cmで、口縁部は肥厚し、上面がオサエ・ナデ調整によって、わずかに窪む平坦面となる。暗赤褐色で、胎土は3mmほどの砂粒を含み粗い。愛知県一宮市清郷遺跡など愛知県を中心に分布する所謂清郷型の鍋である。

灰釉陶器壺(32~34) (32)は、推定口径14.0cm、器高4.3cm、高台径7.2cmで、つくりは丁寧で胎土も精良。底部の糸切痕も丁寧にナデ消す。高台は、(32・33)で三日月高台となり、(34)は断面方形となる。釉は、外面は不明瞭であるが、内面には淡緑色の釉が認められる。

灰釉陶器壺(35) 高台径8.4cmの底部のみの出土である。高台は、丁寧に付けられ、やや外傾する。内面に暗緑褐色の自然釉が径6cmの範囲に付着している。

白磁皿(36) 推定口径11.0cm、器高2.4cmである。胎土は、灰白色で精良。釉は、淡灰白色である。口縁部は内湾し、内面屈曲部に沈線状の段をもつ。底部外面は、釉がかけられた後、ケズリ調整される。底部内面には、草花文様が彫られる。

鎌倉時代

土師器皿(37・38) (37)は、推定口径7.6cm、器高1.2cmで、薄手で胎土が粗い。(38)は、推定口径10.4cm、器高2.4cmで、厚手で胎土は精良である。

伊勢型鍋(39・40) (39)は、推定口径29.4cmで、口縁部が強く折り曲げられ、口縁部が段状となる。(40)は、推定口径25cmで、口縁部が水平に近く、折り曲げられ端部は内傾する面をもつ。頸部は、垂直に立ちあがる。

山茶壺(41~43) (41)は、推定口径17.6cm、器高5.2cmで、高台が体部外面に斜めに貼り付けられる。(42)は、推定口径14.0cm、器高4.6cmで、胎土が粗く7mm以下の砂粒を多く含んでいる。高台は、当初から付けられない。(43)は、底部のみの出土で、高台径7.4cmで、高台に初穀痕が付着する。底部外面に「一」の墨が認められる。

山皿(44・45) (44)は、口径7.4cm、器高2.5cm、底径3.8cmで、底部は未調整で、糸切痕もみられない。内面に淡緑色の自然釉がかかり、焼成の際、最上部におかれたものと考えられる。(45)は、推定口径7.4cm、器高2.1cmで、底部には糸切痕がみられる。

青磁碗(46) 推定口径14.6cm。胎土は、淡白緑色で精良。釉は、淡緑色で、淡黄色の斑点が混じる。口縁部は、やや肥厚する。体部外面に、蓮華文を有し、龍泉窯系青磁である。

室町時代

羽釜(47・48) (47)は、推定口径24.8cmで、口縁部は肥厚し、やや内傾する。口縁部端面は、内傾する面をもち、ナデにより中央が窪んでいる。口縁部の孔は、外面より穿たれ、4孔の可能性もある。鋸部は、ほぼ水平に張り出し、鋸部下面にも煤が付着する。(48)は、推定口径23.6cm、口縁部は肥厚し、上面にはほぼ水平な面をもち、ナデにより上面中央が窪む。鋸部は、水平に張り出し、下面に煤が付着する。体部外面は、ナデ、オサエ、及び斜め方向の粗いハケが施され、煤が付着する。体部外面は、ナデの後、横方向の粗いハケが施される。

常滑窯(49) 推定口径24.5cm。口縁部は「N」字状口縁で、折り返し部分が付着する。胎土は、2~3mmの砂粒を含み、やや粗い。赤褐色を呈するが、外面に淡緑色の自然釉が厚くかかっている。南北朝時代のものとみられる。

3 まとめ

I期では、S B 4及びS B 10が主屋建物と推定され、建物規模が小さく柱間が一定しないS B 2・7・13は、脇屋と考えられる。S B 10とS B 13の位置関係から両者の同時存在は想定できず、S B 13が先行する建物群として想定される。この一群とS B 4を主屋として、S B 2及びS B 7の一群の前後関係は、明瞭ではないが、西の建物群と東の建物群が存在したことが想定できる。これらの建物の棟方向はN10~11° Eに収まる。

一方、土地利用に規制をかけたと想定されるS D 8とS D 23が24~26mの間隔をおいて平行して延びるが、S B 4と溝の位置関係から、その時期は建物廃絶後と考えておきたい。

II期では、掘立柱建物は、棟方向がN21~23° Eとなり、棟方向には規格性が認められるが、I期にみられるような屋敷地の想定は困難である。S B 12・20は、鉤型状の建物配置をしているが、建物規模・構造から主屋・脇屋の区別は明確ではない。建物の柱穴遺物がなく、時期の決定も難しいが、I期・III期の建物方向との関係やSK 3の遺物などから鎌倉時代後半と考えられる。

また、II期でも、S D 9・S D 22など、前時期と



第38図 SD 8、SB10-12-13-15、SK21実測図 (1:100)

同様に溝による規制は継続されている。

Ⅲ期では、Ⅰ期以降の居住区である調査区中央部を中心に2棟の掘立住建物が認められ、棟方向はN 39°~41° Eと更に南に振れる。規模・構造からみると、前代同様主屋と脇屋の区別は明確ではない。

建物構造は、柱間が不等間で、柱通りも悪い。SB 2・4・10・13は総柱建物と推定され、それ以外は側柱建物である。桁行2間が一般的であったと考えられる。

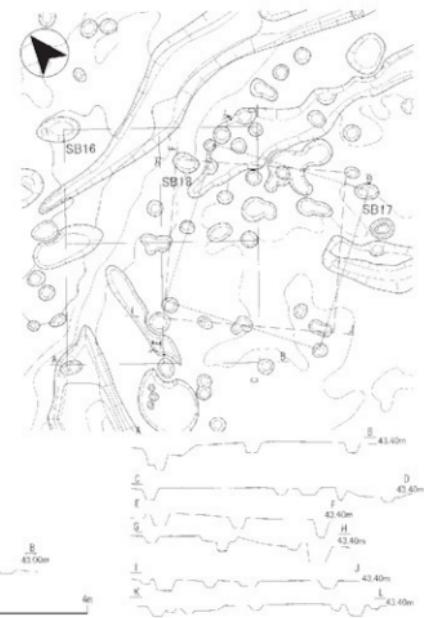
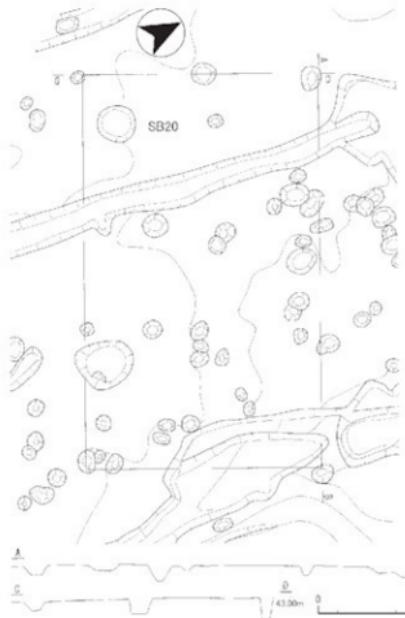
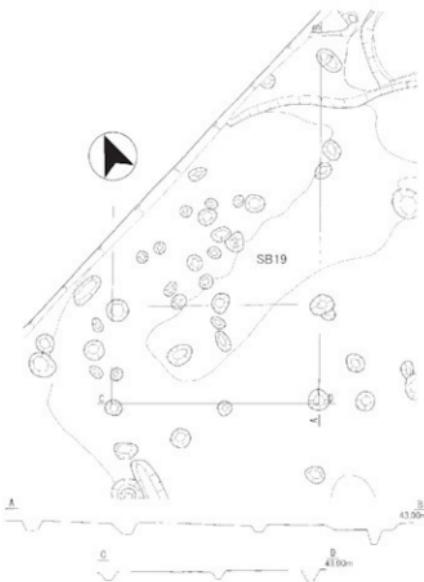
調査区南西部にみられるSB 17・SB 18は規模的には倉庫的な建物であるが、時期及び各々に対応する主屋は明らかでない。

調査区中央部の東西で確認され調査区を北東から

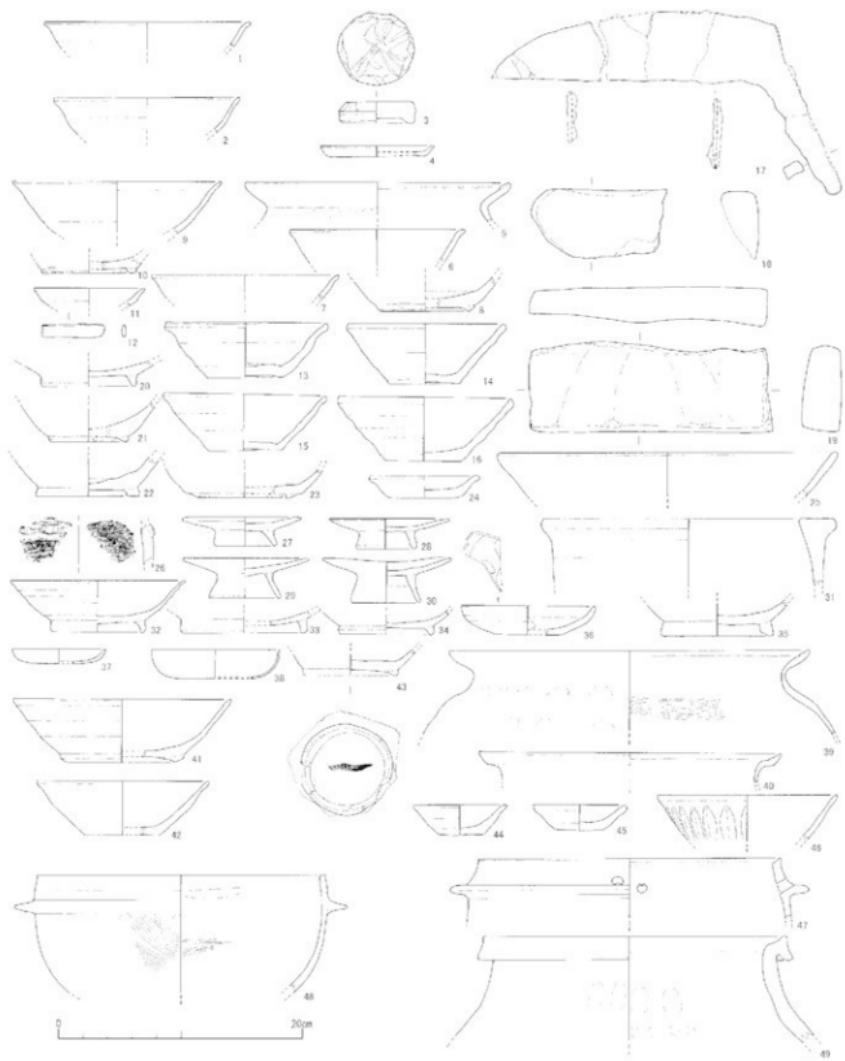
南西に延びる溝群は、Ⅰ期後半にはSD 8・SD 23が開削され、Ⅱ期にはSD 9・SD 22に変更され、Ⅲ期には西側の溝が消失し、東の溝としてSD 24に継続される。SD 24南端からは、天目茶碗が出土し、最終埋没時期は室町時代と考えられる。

また、調査区北東部のSD 25、調査区北西部のSD 26などの東西方向に延びる東西溝は、南北溝と交差することなく、南北溝の間に敷設されたものと考えられる。それぞれの存続時期は、必ずしも明確ではないが、SD 26からは瀬戸窯の平碗(25)などの出土を考えると、最終埋没時期はSD 24と同じく室町時代と推定される。

(近藤 健・駒田利治)



第39図 SB7、SB19、SB20、SB16~18実測図 (1:100)



第40図 堀越遺跡出土遺物実測図 (1:4)

遺構 番号	規模			主柱穴柱間		南北軸方向	カマド	貯蔵穴	周溝	時期	備考
	東西(m)	南北(m)	深さ(cm)	東西(m)	南北(m)						
SH10	4.3	-	4~10	2.2	2.2	N39°W	南西中央	-	-	7世紀初頭	

付表1 千本塚遺跡竪穴住居一覧表

遺構 番号	規模			主柱穴柱間		南北軸方向	カマド	貯蔵穴	周溝	時期	備考
	東西(m)	南北(m)	深さ(cm)	東西(m)	南北(m)						
SH2	4.6	4.3~4.7	2~5	2.8	2.8	N20°E	北壁中央	-	-		
SH26	3.0~3.2	3.2~3.5	5~15	-	-	N10°W	-	-	-		
SH28	4.6~4.7	4.9	8	2.1~2.4	2.3~2.5	N25°E	-	-	南辺・東辺		
SH39	0.7~	2.0~	3	-	-	-	-	-	-	7世紀前半	竪穴住居北西隅部のみ

付表2 大藪遺跡A地区竪穴住居一覧表

遺構 番号	棟方向		規模(m)		面積 (m ²)	柱間(m)		形式	柱穴彫形		備考
	方位	棟	桁行×梁行	桁行(m)		桁行(m)	梁行(m)		形	規格(m)	
SB2	E4°S	東西	2×2	4.0	3.6	14.4	2.0	1.8	鰐柱	円 0.4~0.6	0.6 素良
SB3	E0°S	東西	3×2	5.5	3.8	20.9	1.8+1.9+1.8	1.9	側柱	円 0.3~0.5	0.5 素良
SB6	E2°S	東西	4×2	7.0	3.9	27.3	北:2.0+2.0+1.5+1.5 南:2.0+1.5+1.5+2.0	1.8+2.1	側柱	円 0.4~0.5	0.4~0.7 素良
SB7	E5°S	東西	3×2	6.8	4.3	29.24	北:2.5+2.5+1.8 南:2.8+2.2+1.8	西:2.2+2.1 東:2.5+1.8	側柱	円 0.4~0.5	0.4~0.7 素良
SB9	N7°W	南北	3×2	5.7	4.0	22.8	1.9	2.0	側柱	円 0.4~0.5	0.3

付表3 千本塚遺跡掘立柱建物一覧表

遺構 番号	棟方向		規模(m)		面積 (m ²)	柱間(m)		形式	柱穴彫形		備考
	方位	棟	桁行×梁行	桁行(m)		桁行(m)	梁行(m)		形	規格(m)	
SB5	N23°E	東西	2×2	3.4	3.4	11.56	1.7	1.7	鰐柱	円 0.4~0.6	0.25~0.4 鳥島
SB7	E20°S	東西	3×2	4.5	3.6	16.2	1.5	1.8	側柱	円 0.2~0.5	0.05~0.5 鳥島
SB8	E36°S	東西	3×2	4.6	3.9	17.94	1.4~1.9	1.95	側柱	円 0.4~0.6	0.25~0.5 鳥島
SB12	N16°E	南北	2×2~2	4.0~	4.8	19.2~	2.0	2.4	側柱	円 0.25~0.5	0.15~0.5 鳥島
SB13	N15°E	南北	3×2	5.1	3.8	19.38	1.7	1.9	側柱	円 0.25~0.45	0.2~0.55 鳥島
SB1	N24°E	南北	5×2	12.0	5.1	61.2	2.6+2.4+2.2+2.4+2.4	2.55	鰐柱	円 0.25~0.6	0.1~0.4 平安 (1世紀前半 II-3)
SB3	E11°S	東西	4×3~	9.9	7.1~	70.29~	2.6+2.5+2.5+2.3	2.4+2.4+2.3	鰐柱	円 0.2~0.5	0.15~0.5 (1世紀中 III-4)
SB4	E18°S	東西	3×2	7.7	4.6	35.42	2.4+2.4+2.9	2.3	鰐柱	円 0.2~0.5	0.1~0.45 平安
SB9	E34°S	東西	2×2	5.0	4.2	21.0	2.7+2.3	2.1	鰐柱	円 0.2~0.3	0.1~0.28 平安
SB14	N27°E	南北	4×3	6.2	5.7	35.34	1.3+1.7+1.4+1.8	北:2.0+2.0+1.7 南:1.9+1.8+2.0	側柱	円 0.2~0.3	0.2~0.6 平安
SB27	E32°S	東西	3×2	7.6	4.6	34.96	2.6+2.6+2.3	2.2+2.4	側柱	円 0.2~0.5	0.1~0.5 平安
SB29	E30°S	東西	5×4	12.7	9.5	120.65	2.7+2.4+2.5+2.3+2.8	2.3+2.3+2.3+2.5	鰐柱	円 0.35~0.6	0.3~0.65 平安
SB30	N41°E	南北	3×2	6.2	4.0	24.8	2.1+2.1+2.0	1.9+2.1	側柱	円 0.2~0.4	0.2~0.3
SB31	N23°E	南北	5×3	12.2	6.8	82.96	2.5+2.5+2.4+2.4+2.4	2.3+2.3+2.2	鰐柱	円 0.3~0.55	0.3~0.55 平安 (1世紀前半 II-3)
SB33	E24°S	東西	5×2	11.0	4.8	52.8	2.1+2.1+2.1+2.3+2.4	2.4	鰐柱	円 0.35~0.6	0.2~0.65 (1世紀後半 I-2)
SB33	N27°E	南北	3×2	6.9	4.8	33.12	2.3	2.4	側柱	円 0.25~0.35	0.15~0.3 平安
SB34	E22°S	東西	4×1	8.4	2.4	20.16	2.1	2.4	側柱	円 0.3~0.5	0.25~0.4 平安
SB35	E21°S	東西	3×2	6.5	3.8	24.7	2.1+2.0+2.4	1.9	側柱	円 0.25~0.5	0.2~0.45 平安
SB33	N17°E	南北	2×2	4.4	4.2	18.48	2.2	2.1	鰐柱	円 0.35~0.45	0.2~0.45 平安
SB37	E30°S	東西	6×5	14.4	11.9	171.36	2.4~2.5	2.4~2.5	鰐柱	円 0.25~0.5	0.1~0.45 平安、西面底 (1世紀中 III-3・III-5)
SB38	E24°S	東西	5×4	12.0	9.6	115.2	2.4+2.4+2.6+2.5+2.1	2.5+2.4+2.4+2.3	鰐柱	円 0.25~0.5	0.15~0.4 平安 (1世紀中 III-4)
SB45	E31°S	東西	3×1~	7.5	2.5~	18.75~	2.5	2.5	鰐柱	円 0.25~0.4	0.15~0.6 平安
SB47	E30°S	東西	3×2	6.6	4.8	31.68	2.2	2.2+2.6	鰐柱	円 0.3~0.4	0.15~0.4
SB50	N19°E	南北	3×2	7.2	5.0	36.0	2.4+2.5+2.2	2.5	側柱	円 0.35~0.6	0.15~0.4
SB15	N35°E	南北	4×3	8.5	7.1	60.35	2.1+2.1+2.2+2.1	2.3+2.3+2.5	鰐柱	円 0.3~0.5	0.15~0.4 不明

付表4 大藪遺跡A地区掘立柱建物一覧表

遺構 番号	棟方向	規模(m)			面積 (m ²)	柱間(m)		形式	柱穴彌形		備考	
		方位	棟	桁行×梁行	桁行(m)	梁行(m)	桁行(m)	梁行(m)	形	規模(m)	深さ(m)	
SB62	E15° S	東西	2×2	4.5	3.7	16.65	2.25	1.9+1.8	鰐柱	円 0.3~0.35	0.4~0.5	平安 (12世紀前半 Ⅲ-3)
SB64	E25° S	東西	3×2	7.4	4.6	34.04	2.3+2.4+2.7	2.3	側柱	円 0.3~0.5	0.3	平安、櫻石
SB65	E25° S	東西	2×2	4.7	4.6	21.62	2.35	2.3	側柱	円 0.3	0.3	平安
SB69	N12° E	南北	6×4	14.0	8.8	123.2	2.4+2.4+2.2+ 2.5+2.3+2.2	2.2+2.1+2.1+2.4	鰐柱	円 0.3~0.5	0.3~0.7	平安、北庭、櫻石 (12世紀前半 Ⅲ-3~4)
SB70	N12° E	南北	4×3	9.4	7.5	70.5	2.3+2.3+2.4+2.4	2.7+2.6+2.2	鰐柱	円 0.3~0.5	0.3~0.7	平安、櫻石 (12世紀前半 Ⅲ-3)
SB71	N14° E	南北	4×3	8.9	6.6	58.74	2.1+2.1+2.0+2.7	2.1+2.3+2.2	鰐柱	円 0.2~0.4	0.2~0.4	平安、南東隅土坑、櫻石
SB72	E15° S	東西	3×2	7.0	4.6	32.2	2.3+2.3+2.4	2.3	鰐柱	円 0.3~0.4	0.2~0.4	平安、櫻石
SB76	N14° E	-	3×1~	6.5	-	-	2.1+2.1+2.3	2.3+~	-	円 0.2	0.2	平安、衛庭

付表5 大藪遺跡B地区掘立柱建物一覧表

遺構 番号	棟方向	規模(m)			面積 (m ²)	柱間(m)		形式	柱穴彌形		備考	
		方位	棟	桁行×梁行	桁行(m)	梁行(m)	形	規模(m)	深さ(m)			
SB85	E24° S	東西	4×4	10.4	9.9	102.96	2.6	2.5	鰐柱	円 0.25~0.3	0.2	平安
SB89	E27° S	東西	3×2	5.3	3.4	18.02	1.8	1.7	側柱	円 0.3~0.5	0.2~0.3	平安
SB90	E8° S (東西)	2~×2	2.1	4.0	8.4	2.1	2.0	(鰐柱)	円 0.3	0.2~0.4	平安	
SB92	E8° S (東西)	2~×2	-	-	-	1.6	2.1	-	円 0.35~0.5	0.2~0.4	平安、櫻石	
SB93	N16° E	南北	5×2	10.4	4.4	45.76	1.8+2.1+2.3+2.1+2.1	2.2	鰐柱	円 0.3~0.5	0.3~0.7	平安、北庭
SB94	N16° E (南北)	4×1~	8.2	-	-	19.2+2.2+2.1+9	2.1	鰐柱	円 0.3	0.2~0.3	平安、櫻石 (12世紀後半 Ⅳ-5)	
SB100	E8° S	東西	5×4	10.2	7.7	78.54	1.9+2.1+2.1+2.1+2.0	1.7+2.0+2.0+2.0	鰐柱	円 0.3~0.4	0.15~0.3	平安、南庭 (12世紀後半 Ⅳ-8~9)
SB101	E13° S	東西	3×2	6.3	3.6	22.68	2.1+2.0+2.2	1.8	鰐柱	円 0.3~0.4	0.1~0.3	平安
SB104	E7° S	東西	3×3	5.6	6.0	33.6	1.6+1.9+2.1	2.0	鰐柱	円 0.2~0.35	0.2~0.5	平安、西庭 (12世紀後半 Ⅳ-8~9)
SB105	E7° S	東西	3×2	6.4	3.6	23.04	2.2+1.9+2.3	1.8	鰐柱	円 0.35~0.5	0.2~0.6	平安、櫻石 (12世紀後半 Ⅳ-7~Ⅴ-8)
SB106	N13° W	東西	4×2	8.0	4.8	38.4	1.8~2.4	2.4	鰐柱	円 0.35~0.5	0.4~0.6	平安?、根石
SB108	N6° E	南北	3×2	6.4	4.2	26.88	2.1	2.1	鰐柱	円 0.3~0.45	0.2~0.3	平安
SB110	E7° S	東西	3	5.6	-	-	15+2.6+1.5	-	門	円 0.6~0.75	0.6	門、平安、櫻石

付表6 大藪遺跡C地区掘立柱建物一覧表

遺構 番号	棟方向	規模(m)			面積 (m ²)	柱間(m)		形式	柱穴彌形		備考	
		方位	棟	桁行×梁行	桁行(m)	梁行(m)	形	規模(m)	深さ(m)			
SB4	E11° S	東西	4~×3~	9.0~	6.4~	57.6~	2.2+2.3+2.3+2.2	2.0+2.0+2.4	鰐柱	円 0.4	0.3~0.5	平安末~鎌倉初期、 南東隅土坑
SB2	N10° E	南北	3×2	5.3	4.4	23.32	1.5+1.9+1.9	2.2	鰐柱	円 0.3~0.5	0.2~0.4	平安末~鎌倉初期 東庭
SB10	N11° E	南北	4×4	9.6	10.2	97.92	2.0+2.5+2.4+2.7	2.5+2.9+2.5+2.3	鰐柱	円 0.3~0.5	0.2~0.4	平安末~鎌倉初期
SB13	E12° S	東西	3×4	7.0	5.7	39.9	2.1+2.5+2.4	1.4+1.5+1.5+1.3	鰐柱	円 0.3~0.5	0.4~0.7	平安末~鎌倉初期
SB7	E15° S	東西	3×2	5.2	4.6	23.92	2.0+2.0+1.2	2.3	側柱	円 0.4~0.6	0.35~0.55	平安末~鎌倉初期 東庭
SB1	N15° E	南北	2~×2	4.4~	3.9	17.16~	2.2	1.8+2.1	側柱	円 0.3~0.4	0.2~0.4	鎌倉前期
SB12	N23° E	南北	3×2	8.2	4.4	36.08	要:1.9+3.4+2.9 西:2.5+1.9	2.2	側柱	円 0.2~0.5	0.2~0.6	鎌倉前期
SB20	E27° S	東西	3×2	8.1	4.8	38.88	2.6+3.0+2.5	2.4	側柱	円 0.3~0.5	0.16~0.4	鎌倉前期
SB19	N23° E	南北	3~×2	7.1~	4.3	30.53~	2.0+2.8+2.3	2.3+2.0	鰐柱	円 0.3~0.5	0.1~0.3	鎌倉前期
SB15	E47° N	東西	4×2	11.3	4.3	48.59	3.1+2.9+2.7+2.6	2.2+2.1	側柱	円 0.2~0.4	0.5~0.8	鎌倉後半~室町
SB16	N39° E	南北	2×2	4.8	4.0	19.2	2.5+2.3	2.0	鰐柱	円 0.2~0.4	0.2	鎌倉後半~室町
SB17	E36° N	東西	2×2	3.3	3.3	10.89	1.7+1.6	1.7+1.6	側柱	円 0.3~0.4	0.25	不明
SB18	E45° N	東西	2×2	3.4	3.4	11.56	1.8+1.6	1.6+1.8	側柱	円 -	-	不明

付表7 堀越遺跡掘立柱建物一覧表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土品種及び 出土位置			法面 口径	法面 底径	器高	調査・技法の特徴	地土	焼成	色調	残存度	備考
				口徑	底径	器高									
1	5	須恵器	杯	S83 (A-S16 P3)	(12.8)	-	-	-	-	口縁部コナデ	細砂粒含む	數	反茶色	1/9	
2	6	須恵器	杯	S83 (A-S17 P6)	12.6	-	2.6	-	-	口縁部コナデ、色面へラケズリ?、 底部内面一定方向ナデ	良	黑色	1/8		
3	4	須恵器	壺	S83 (A-R16 P2)	-	10.4	-	-	-	底部-高台ヨナデ、外面へラケズリ?、 内面ロコナデ	粗粒 多く含む	良	青灰(内) 黒灰色(外)	1/4	
4	3	須恵器	壺	S83 (A-S17 P6)	(24.0)	-	-	-	-	口縁部コナデ	良	數	反茶色	1/16	
5	7	須恵器	杯	S86-7 (A-T16 P10)	(16.0)	-	-	-	-	口縁部コナデ	良	良	灰~黒灰色	1/9	
6	8	土器群	壺	S86-7 (A-S16 P6)	(26.6)	-	-	-	-	口縁部コナデ、外面板ナデ	粗粒・露母 含む	良	黄褐色	1/16	
7	16	土器群	杯	S84 (A-R19 SK1)	12.8	-	3.4	-	-	口縁部コナデ、外面指オサエ、 内面ナデ	細砂粒・ 露母含む	良	明褐色	ほぼ 完形	
8	17	須恵器	杯	S83 (A-T18 SK1)	10.2	-	3.4	-	-	口縁部コナデ、底部ロコナデ、 底部外沿ヒダ跡	粗粒 多く含む	やや數	黑色(内) 青灰(外)	完形	
9	14	須恵器	杯	S83 (A-U17 SK1)	-	-	-	-	-	宝珠つまみハリカケ・ナデ、 内面ロコナデ	粗粒 多く含む	良	反色(内) つまみ 露母含む	完存	
10	33	須恵器	杯	S83 (A-U17 SK1)	(15.8)	-	-	-	-	口縁部コナデ	粗良	良	反色(内) 自然鉢(外)	1/8	
11	15	須恵器	杯	S83 (A-U17 SK1)	(15.6)	10.2	4.0	-	-	口縁部コナデ、底部内面ナデ、 高台ハリカケ・ヨナデ	良	黃白色(内) 反白色(外)	1/4		
12	34	須恵器	杯	S83 (A-U17 SK1)	-	18.2	-	-	-	底部内面コロナデ、 高台ハリカケ・ヨナデ	良	良	灰褐色	1/2	
13	11	土器群	壺	S83 (A-U17 SK1)	19.8	-	2.7	-	-	口縁部コナデ、底部内面ナデ	細砂粒・ 露母含む	やや數	胡赤褐色	1/4	
14	10	土器群	壺	S83 (A-Q17 SK1)	21.8	-	2.4	-	-	口縁部コナデ	細砂粒・ 露母含む	良	茶褐色	1/2	
15	9	土器群	壺	S83 (A-Q17 SK1)	(22.6)	-	2.7	-	-	口縁部コナデ、底部外側へラスギキ、 底部内面コロナデ(内)	細砂粒・ 露母含む	良	茶褐色	1/4	
16	32	土器群	壺	S83 (A-U17 SK1)	(12.6)	-	-	-	-	口縁部コナデ(内)、 底部外沿ヒダ・ナデ、体部内面ナデ	細砂粒・ 露母含む	良	褐色	1/4	
17	31	土器群	壺	S83 (A-U17 SK1)	(20.2)	-	-	-	-	口縁部コナデ、底部内面ヒタタケ?、 体部外側ナデ(内)	細砂粒・ 露母含む	良	明褐色	1/8	
18	12	土器群	壺	S83 (A-U17 SK1)	22.8	-	-	-	-	口縁部コナデ(内)ナデ(内)、 底部外沿ヒダ・ナデ、体部内面コロナケ?	粗粒 多く含む、 露母含む	良	茶褐色	1/2	
19	13	土器群	壺	S83 (A-U17 SK1)	(23.4)	-	-	-	-	口縁部コロナデ、体部前内面コロナケ、 ナデアゲ(上部)・ナデ(下部)、 体部外側ヒタタケ(7本・gn)	粗粒・露母 含む	良	暗褐色(内) 黑色(外)	面上 復元	
20	38	石製品	砾石	瓦	6.2	~	幅4.7	厚2.0	幅3.9~4.7、厚1.6~2.0	-	-	-	反色		
21	20	須恵器	杯	包含層(G3)	10.6	-	3.1	-	-	口縁部コナデ、天井部切痕	細砂粒含む	良	反色	1/8	
22	21	須恵器	杯	包含層(T1)	(12.0)	-	-	-	-	口縁部コナデ、底部内面ロコナデ	粗良	良	明褐色(内) 反茶色(外)	1/8	
23	24	須恵器	杯	包含層(S14)	9.2	-	2.7	-	-	口縁部コナデ、底部内面ナデ、 底部外沿ヒダ・ナデ	細砂粒含む	良	暗褐色	1/4	
24	23	須恵器	杯	包含層(R14)	11.2	-	2.7	-	-	口縁部コナデ、底部内面ナデ、 底部外沿ヒダ・ナデ	細砂粒含む	良	反色	1/4	遺物外面 ヘラ記号
25	25	須恵器	杯	包含層(R14)	9.7	6.3	4.3	-	-	口縁部コナデ、底部内面ナデ、 底部外沿ヒダ・ナデ	細砂粒 僅かに含む	良	茶褐色	1/2	
26	26	須恵器	杯	包含層(U16)	14.8	10.0	3.8	-	-	口縁部・体部ロコナデ、 高台ハリカケ・ヨナデ	良	傾ぶ(内) れ有	反色(内) 露母含む	1/6	
27	27	須恵器	杯	包含層(T12)	12.0	9.8	3.6	-	-	口縁部ロコナデ、底部内面ナデ、 底部外側ヒダ・ナデ	細砂粒含む	やや數	反茶色(内) 露母含む	1/8	
28	30	山茶樹	根	包含層(17BT)	(14.6)	-	-	-	-	口縁部コナデ、底部ロコナデ	細砂粒含む	良	反白色	1/12	
29	29	山茶樹	根	包含層(17BT)	-	-	6.3	-	-	高台ハリカケ・ナデ、底部外縁系切痕	細砂粒含む	良	反色(内) 反色(外)	底部 完存	底部外 面墨書き

付表8 千本塚遺跡出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土状況及び 出土位置			法面 口後	法面 底邊	断面	調査・技法の特徴				地土	構成	色調	残存度	備考
				口後	底邊	断面				地土	構成	色調						
1	874	土師器	甕	SH02 (AH17 タテ穴(六))	22.9	-	-	-	-	口縁部コナデ、体部ナデ。 底面剥離のため剥離不規則	~5mm砂粒 含む	やや軟	淡黃褐色	1/7				
2	917	土師器	甕	SH06 (AM20 土穴(六))	(24.8)	-	-	-	-	口縁部～体部コナデ。 体部内面凹コナデ、体部外面ラハケ	~3mm砂粒 含む	良	明黄褐色	1/5				
3	921	土師器	甕	SH08 (AN22 タテ穴(六))	22.0	-	-	-	-	口縁部コナデ、体部外表面凹なラハケ。 内面タラハケ後づ、頭部内面コハケ	~5mm砂粒 含む	良	黃赤褐色(外) 明黄褐色(内)	欠損				
4	923	土師器	甕	SH09 (AN24 タテ穴(六))	10.8	-	-	-	-	体部外面(本・cm)タラハケ、内面ナデ	~20mm砂粒 含む	良	褐色(外) 淡黃褐色(内)	1/4				
5	922	須恵器	杯	SH09 (AN24 タテ穴(六))	11.4	-	3.9	-	-	口縁部～底部ロウナデ、受部様小	~3mm砂粒 含む	やや軟	白灰色	3/4				
6	897	土師器	甕	SH13 北周辺 (AN13 P4.5)	17.0	-	3.4	-	-	口縁部コナデ、体部外面ビスピサエ、内面ナデ。 底部外面ナデ	粗糲	良	淡黃褐色	2/5				
7~10																	欠番	
11	894	土師器	杯	SK46 (AR23 土穴(1))	14.4	7.0	2.9	-	-	口縁部～底部ナデ、口縁部コナデ	粗糲	良	淡黃褐色	1/5				
12	883	土師器	杯	SK46 (AR23 土穴(1))	16.4	-	(4.2)	-	-	全面調整不規則	~30mm砂粒 含む	良	褐色	1/12				
13	918	土師器	片口鉢	SK46 (AR23 土穴(1))	16.0	-	-	-	-	口縁部～底部コナデ、体部上半にハケ。 外側に保有者	数mm砂粒 含む	良	淡黃褐色(外) 明黄褐色(内)	1/4				
14	897	土師器	甕	SK46 (AR23 土穴(1))	9.0	-	-	-	-	口縁部コナデ。 頭部内面(10cm)のハケわざりに残る	~5mm砂粒 含む	やや軟	[にぶい]褐色(外) 白色(内)	1/6				
15	896	土師器	甕	SK46 (AR23 土穴(1))	14.6	-	-	-	-	口縁部コナデ、 口縁部内面(5cm)の斜めのハケ	~3mm砂粒 含む	良	褐色	1/4				
16	850	土師器	甕	SK46 (AR23 集石土坑)	13.8	-	-	-	-	口縁部コナデ、体部外面タハケ? 内面(1本・1.4cm)コハケ?	~4mm砂粒 含む	やや軟	褐色	1/6				
17	919	土師器	甕	SK46 (AR23 土穴(1))	(22.1)	-	-	-	-	口縁部コナデ	~20mm砂粒 含む	良	淡黃褐色(外) 明黄褐色(内)	1/8				
18	910	土師器	甕	SK46 (AR23 土穴(1))	29.0	-	-	-	-	丸土輪積形、口縁部コナデ、 口縁外面(本・cm)タラハケ、内面ユビオサエ・ナデ	微細粒含む	良	淡黃褐色	1/5				
19	898	土器皿	土鉢	SK46 (AR23 土穴(1))	長 (8.8)	幅 (2.0)	2.0	-	-	現存長7.4m、孔内中心部からずれる	粗糲	良	明赤褐色	7/10				
20	925	須恵器	杯	SK46 (AR23 土穴(1))	10.8	6.0	2.8	-	-	口縁部～底部ロウナデ。 底部外面(カク)ナデ	~2mm砂粒 含む	良	青灰褐色	完形				
21	924	須恵器	片口鉢	SK46 (AR23 土穴(1))	10.2	5.4	3.0	-	-	口縁部～底部ロウナデ(右回転)。 天井部外側未調査	~5mm砂粒 含む	良	青灰白色	完形				
22	895	須恵器	片口鉢	SK46 (AR23 土穴(1))	11.2	-	(2.8)	-	-	口縁部～底部ロウナデ、口縁部コナデ。 天井部ヘキリ痕	~5mm砂粒 含む	やや軟	反白	1/5				
23	926	須恵器	甕	SK46 (AR23 土穴(1))	-	高台 7.8	-	-	-	体部～底部ロウナデ、体部下半に2条の次組。 高台(リブ)ナデ	~2mm砂粒 含む	良	青灰白色(外) 暗青灰褐色(内)	1/4				
24	973	須恵器	甕	SK46 (AR23 集石土坑)	22.6	-	-	-	-	口縁部コナデ、頭部ロウナデ(左回転)。 外周灰褐色にこぼれる性質難耐者	粗糲	良	反白	1/8				
25	927	須恵器	甕	SK46 (AR23 土穴(1))	(13.2)	-	-	-	-	口縁部ロウナデ。 高台外面(内)、内面タラハケ。 自然風化からか	粗糲	良	淡黃色(外) 暗青灰褐色(内)	1/4				
26	929	須恵器	甕	SK46 (AR22 土穴(1))	-	高台 9.8	-	-	-	体部～底部ロウナデ、内面(本)土積上塗。 高台ハリック、自然風化からか	粗糲	良	暗青灰褐色(外) 暗青灰褐色(内)	11/12				
27	878	須恵器	器台	SK46 (AR23 土穴(1))	-	34.0	-	-	-	頭部ロウナデ、外側に注連2条の間に櫛状工具による波状突起をもつ凹面にもう。 丁度その凹面内に注連内には僅1cmのボタン状の円形突起が駆け込まれる	粗糲	燒れ有	淡黃褐色(外) 白褐色(内)	1/3				
28	972	土師器	甕	SK01 (AK17 土穴(1))	(12.6)	-	-	-	-	口縁部コナデ。 頭部剥離のため頭部不規則	~2mm砂粒 含む	良	淡黃褐色	1/10				
29	971	土師器	甕	SK01 (AK17 土穴(1))	(17.8)	-	-	-	-	口縁部コナデ、外周タラハケ(下方割)。 内面タラハケ(上方割)	粗糲	良	明褐褐色(外) 淡黃褐色(内)	1/10				
30	970	須恵器	杯	SK01 (AK17 土穴(1))	12.0	-	-	-	-	口縁部コナデ、体部ロウナデ(右回転)。 底面ヘタヘラケズリ	粗糲	良	暗青灰褐色(外) 暗青灰褐色(内)	1/10				
31	969	須恵器	長颈甕	SK01 (AK17 土穴(2))	11.0	-	-	-	-	口縁部ロウナデ。	粗糲	良	反白	1/8				
32	965	須恵器	短颈甕	SK01 (AK17 土穴(4))	12.9	-	-	-	-	口縁部～底部コナデ、体部ロウナデ(左回転)。 底面ヘタヘラケズリ	粗糲	良	反白(外) 暗青灰褐色(内)	1/10				
33	1000	灰陶器	板	SB15 (AJ5 P2)	13.2	-	-	-	-	口縁部コナデ、体部ロウナデ。 底面ツケヅケ	粗糲	良	明灰白色	1/12				
34	822	灰陶器	板	SB15 (AJ5 P3)	-	7.0	-	-	-	体部ロウナデ、底面内面ナデ。 高台ハリック、底面凹面回転系切痕	粗糲	良	反白	底部 4/5				
35	980	灰陶器	板	SB3-4 (AJ5 P1)	-	7.8	-	-	-	高台ハリックコロコロ。 高台は削除後方方に高い	粗糲	良	明灰白色	高台 残存	底面外端 へら記号			
36	981	灰陶器	板	SB3-4 (AJ7 P6)	-	5.8	-	-	-	底面ロウナデ、高台ハリック。 内面ロウナデ(?)	粗糲	良	底土埋蔵質 高台	1/12				
37	832	土師器	甕	SB29 (AR21 P14)	30.5	-	-	-	-	口縁部コナデ。 体部外面(7~10cm)のタラハケ、内面ナデ	微細粒含む	良	褐色	1/8				
38	926	土師器	甕	SB29 (AQ21 P4)	18.6	11.0	3.0	-	-	口縁部コナデ、体部ナデ。 底面褐色の裏面	~10mm砂粒 含む	良	反褐色	1/10				
39	929	土師器	台付甕	SB29 (AQ21 P6)	-	6.8	-	-	-	口縁部ロウナデ。 底面22mm高く、内面ユビオサエ	粗糲	良	褐色	完形				
40	1007	土師器	甕	SB29 (AR21 P6)	15.2	-	-	-	-	口縁部オカリナ。 底面剥離のため底面不規則	微細粒含む	やや軟	明褐褐色	1/15				
41	952	土師器	甕	SB29 (AQ20 P1)	26.0	-	-	-	-	底面剥離(左)、口縁部コナデ。 体部外面(本・cm)のタラハケ、把手ハリツク	~10mm砂粒 含む	良	淡褐色	1/4				
42	1005	山茶瓶	瓶	SB29 (AR20 P3)	15.0	-	-	-	-	口縁部コナデ(?)、腹壁薄い	粗糲	良	明灰白色	1/8				
43	979	土師器	小甕	SB31 (AS18 P4)	9.6	-	(1.5)	-	-	口縁部～底部コナデ、底部ナデ	粗糲	良	淡褐色	1/8				
44	976	土師器	小甕	SB33.1 (AS18 P4)	11.0	-	(1.3)	-	-	口縁部～底部コナデ	微細粒含む	良	淡褐色	1/8				

付表9 大蘇遺跡A地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土品種及び 出土位置			大きさ(cm) 口径×底径×器高	調査・技法の特徴	土色	焼成	色調	保存度	備考
				口径	底径	器高							
45	771	土師器	台付皿	SBS1 (AS17 P3)	9.6	4.0	2.2	口縁部～底部ロクロナデ、 底部器壁薄い	数cm砂粒 含む	やや軟	黄褐色	3/4	
46	770	土師器	台付皿	ASB1 (AS17 P3)	8.4	3.4	1.5	口縁部～底部ロクロナデ、 底部は高台状に突出	~5mm砂粒 含む	良	暗黃褐色(外) 黄褐色(内)	完形	
47	841	土師器	台付皿	SBS1 (AS18 P4)	8.4	1.7	3.2	全盤に器腹剥離著しく、器底不明	微砂粒含む	良	淡黃褐色(外) 暗褐色(内)	底部 1/2	
48	816	土師器	台付皿	SBS1 (AS18 P4)	-	3.9	-	蓋台低い、ナデ	~3mm砂粒 含む	良	赤褐色(外) 淡黃褐色(内)	1/3	
49	815	土師器	台付皿	SBS1 (AS18 P4)	7.6	4.6	2.3	口縁部・体部ロクロナデ、 高台中央、外縁部切痕	~3mm砂粒 含む	良	黃褐色	完形	
50	812	土師器	台付皿	SBS1 (AS18 P4)	9.2	3.2	2.4	口縁部ナデ、高台中央、 底部外縁切痕	裏面多く 含む	良	暗黃褐色	口縫一 部欠損	
51	808	土師器	台付皿	SBS1 (AS18 P4)	-	6.7	-	高台ハリツケ痕	やや粗い	良	にぶい黃褐色	高台 完存	欠番
52													
53	764	須恵器	片口鉢	SBS1 (AS18 P4)	(36.1)	-	-	口縁部ロクロナデ	~2mm砂粒 含む	良	淡綠灰色(外) 淡灰褐色(内)	1/12	
54	977	瓦陶器	瓶	SBS0.31 (AS18 P4)	14.2	-	-	口縁部～体部ロクロナデ	粗良	良	灰白色	1/10	
55	766	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P4)	(16.0)	-	-	口縁部ロクロナデ、器壁薄い	良	良	淡青白色(外) 淡灰白色(内)	1/12	
56													
57	810	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P4)	16.8	-	-	口縁部ヨコナデ	粗良	良	暗灰白色(外) 明灰白色(内)	1/6	
58	807	瓦陶器	瓶	SBS1 (AS18 P4)	-	8.8	-	体部ロクロナデ、高台ハリツケ、 底部内面に重ね供け痕	粗良	良	灰白色	高台 1/3	
59													
60	813	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P4)	-	6.6	-	高台ハリツケ、 底部外縁切痕	粗良	良	灰白色	底部 1/5	
61	809	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P4)	-	6.9	-	高台ハリツケ、 内面に自然跡かかる	粗良	良	灰白色	底部 完存	
62	811	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P4)	-	7.5	-	高台ハリツケ、 底部外縁切痕	粗良	良	明灰白色(外) 暗灰白色(内)	底部 1/10	
63	814	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P4)	-	1.6	-	高台ハリツケ	粗良	良	灰白色(外) 暗灰白色(内)	1/8	
64	960	土研器	小皿	SBS9.32 (AS21 P3)	9.8	(5.4)	1.0	口縁部ヨコナデ、底部外縁ナデ	粗良	良	淡黃褐色	1/6	
65	993	土研器	小皿	SBS0.31 (AR17 P3)	11.0	-	-	口縁部ヨコナデ	粗良	良	淡褐色	1/4	
66	817	土研器	小皿	SBS1.33 (AU16 P4)	8.7	-	2.0	口縁部ヨコナデ、 体部粘土巻上痕・内オサエ、膨大	微砂粒含む	やや軟	淡褐色	完形	
67													
68	990	土研器	小皿	SBS1 (AS18 P3)	10.2	(5.3)	(2.2)	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	粗良	良	淡褐色	1/8	
69	996	土研器	小皿	SBS0.31 (AR17 P3)	10.4	(5.8)	(2.1)	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部外縁オボロナデ	微砂粒含む	良	淡褐色	1/5	
70	991	土研器	小皿	SBS1 (AS18 P3)	10.8	-	1.8	器底調整剤のため不規	粗良	良	淡褐色	1/5	
71	995	土研器	皿	SBS0.31 (AR17 P3)	12.0	(5.4)	(1.8)	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	粗良	良	淡褐色	1/6	
72	840	土研器	皿	SBS1 (AT17 P4)	9.6	4.2	2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部外縁オボロナデ	粗良	良	淡褐色	底部 1/2	
73	784	土研器	皿	SBS0.31 (AR17 P1)	10.0	3.2	2.4	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 底部外縁切痕ナデ	粗良	良	淡褐色(外) 褐色(内)	1/2	
74	994	土研器	皿	SBS1.33 (AT17 P2)	10.8	6.0	1.8	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 底部内面・外縁切痕	粗良	良	淡褐色	1/4	
75	989	土研器	皿	SBS1 (AS18 P3)	15.4	(10.2)	(2.7)	口縁部ヨコナデ	粗良	良	淡褐色	1/7	
76	987	土研器	台付皿	SBS1 (AS20 P1)	9.4	-	(2.8)	口縁部新ヨコナデ、高台ハリツケ、 底部外縁ナデ	粗良	良	淡褐色	1/3	
77	800	土研器	皿	SBS0.31 (AS17 P4)	-	5.2	-	底部外縁切痕	粗良	良	赤褐色	1/8	
78	787	土研器	皿	SBS1.33 (AS17 P2)	-	4.8	-	内オサエ	~2mm砂粒 含む	やや粗い	にぶい褐色	2/5	
79	988	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P3)	14.8	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 内面に自然跡かかる	粗良	良	淡灰白色(外) 暗灰白色(内)	1/10	
80	802	山茶瓶	瓶	SBS1.33 (AT16 P3)	-	7.6	-	体部～底部ロクロナデ、 高台ハリツケ後ナデ	粗良	良	灰白色	底部 完存	
81	992	山茶瓶	瓶	SBS1 (AS18 P3)	-	6.2	-	高台ハリツケ	粗良	良	淡褐色	1/8	
82	984	土研器	皿	SBS2 (AT20 P1)変形	11.6	-	(2.8)	口縁部ヨコナデ	やや粗い	良	淡褐色	1/4	
83	772	土研器	台付皿	SBS2 (AT20 P1)	(8.6)	3.8	2.0	口縁部・高台ロクロナデ、 高台ハリツケ、底部薄い	良	良	暗黃褐色	1/2	
84	768	瓦陶器	瓶	SBS2 (AS20 P3)	(12.4)	-	-	口縁部・体部ロクロナデ、 器壁薄い	良	良	淡黃褐色	底部 1/4	
85	787	瓦陶器	小瓶	SBS2 (AT19 P3)	(17.0)	-	-	口縁部ロクロナデ、器壁薄い、 底部自然跡かかる	良	良	灰白色	1/10	
86	760	瓦陶器	小瓶	SBS2 (AV21 P3)	11.8	6.5	4.1	口縁部・体部ロクロナデ、 高台ハリツケ、底部薄い	粗良	良	淡綠褐色	2/3	
87	777	瓦陶器	瓶	SBS2 (AT20 P7)	-	8.4	-	体部～底部ロクロナデ、 底部外縁切痕ナデ	粗良	良	灰白色	1/8	

付表9 大森遺跡A地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土遺構及び 出土位置			法面(cm) 口側 底側 高さ	頭部・足法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				SB32 (AT19 P2)	-	78							
88	856	灰釉陶器	瓶	SB36 (AV21 P2)	-	65	-	高台ハリヅケ、泥塑内外面子面	~3mm砂粒 含む	良	淡褐色	1/2	
89	830	灰釉陶器	瓶	SB36 (AS19 P2)	9.6	36	1.8	口縁部～泥塑コヨナデ	粗	良	赤褐色	1/6	
90	763	土師器	小皿	SB32 (AS19 P2)	10.0	42	2.1	口縁部～武部ナデ	精良	良	淡黃褐色	1/5	
91	780	土師器	小皿	SB32 (AS19 P10)	9.8	50	1.4	口縁部コヨナデ、 全体～底部ナデ	微砂粒含む	良	淡黃褐色	1/12	
92	962	土師器	小皿	SB32 (AS19 P2)	9.4	40	1.4	口縁部～全体コヨナデ	精良	良	淡黃褐色(外) 反褐色(内)	1/12	
93	959	土師器	台付皿	SB32 (AS21 P3)	8.4	(30)	(1.4)	口縁部～全体コヨナデ	粗	良	明黃褐色	2/3	
94	761	土師器	台付皿	SB32 (AS19 P2)	9.8	46	2.2	口縁部・体部コヨナデ、 高台ハリヅケ	粗	良	明黃褐色	2/3	
95	776	土師器	台付皿	SB32 (AS19 P2)	10.0	54	2.5	口縁部～全体コロコロナデ、 高台ハリヅケ	粗	良	淡黃褐色(外) 淡褐褐色(内)	2/3	
96	790	土師器	台付皿	SB32 (AS19 P2)	9.4	52	2.4	口縁部～全体コヨナデ、 高台ハリヅケ	~2mm砂粒 含む	良	淡黃褐色	3/5	
97	768	土師器	台付皿	SB32 (AS19 P2)	9.4	40	2.6	口縁部～全体コヨナデ、 高台ハリヅケ	精良	良	淡黃褐色	1/4	
98	803	土師器	台付皿	SB32 (AS19 P2)	-	(4.4)	-	泥塑内外面子面切手形、 高台ハリヅケ	精良	良	淡黃褐色	泥塑は 完全	
99	793	土師器	台付皿	SB32 (AS19 P3)	-	6.4	-	泥塑内外面子面、高台ハリヅケ、 泥塑外面部切手	~3mm砂粒 含む	良	淡赤褐色	高台 完全	
100	789	灰釉陶器	瓶	SB32 (AO21 P2)	(13.4)	-	-	口縁部コヨナデ、 底部ハリヅケ	精良	良	明黃白色(外) 反白色(内)	1/9	
101	762	灰釉陶器	瓶	SB32 (AS19 P2)	-	7.1	-	全体コロナデ、底部内面一定方舟ナデ、 泥塑外面部切手形、体部外面部灰塗	粗	良	灰白色	1/2	
102	766	土師器	鍋	SB37 (AO25 P2)	19.2	-	-	口縁部コヨナデ、底部灰塗、 外上方に土をもつ	~2mm砂粒 含む	良	淡黃褐色(外) 淡褐色(内)	1/6	
103	765	灰釉陶器	瓶	SB37 (BP1 P4)	(16.8)	-	-	口縁部コヨナデ、体部コロコロナデ、 内面外縁部に乳白色點かから	~2mm砂粒 含む	良	灰白色	1/5	
104	821	山茶瓶	瓶	SB37 (BP1 P3)	16.0	7.8	6.5	口縁部コヨナデ、体部コロコロナデ、 高台ハリヅケ・粗筋、外面部灰塗	精良	良	内面に自然點 かかる	1/2	
105	819	土師器	台付小皿	SB32 (AN24 P10)	8.1~ 8.5	4.4	4.0	口縁部粘土土台よじ上、口縁部コヨナデ、 高台ハリヅケ、高台ハリヅケナデ、透大	~2mm砂粒 含む	良	にぶい褐色	完形	
106													欠番
107	820	山茶瓶	瓶	SB38 (BO1 P2)	15.5	6.1	5.1	口縁部～全体コロコロナデ、口縁部コヨナデ、 高台ハリヅケ、尾部切手形	精良	良	灰褐色(外) 反白色(内)	1/3	
108	818	山茶瓶	小瓶	SB38 (AO25 P7)	11.2~ 11.5	5.9	4.0	口縁部～全体内面に自然點かから、 泥塑外面部切手	~4mm砂粒 含む	良	反白色	完形	
109	961	土師器	小皿	SB373B (AN23 P4)	9.8	5.4	1.8	全体コロコロナデ、口部内面コヨナデ、 泥塑回転切手形、クロコ回転左	精良	良	淡黃褐色	2/3	
110	963	土師器	瓶	SB373B (AN23 P4)	19.7	-	-	泥塑部コリカシノ、 堆内面上方に土をもつ、唇面削離	~10mm砂粒 含む	やや粗	褐色	1/12	
111	964	山茶瓶	小瓶	SB373B (AP25 P2)	11.4	-	-	口縁部コロナデ	やや細い	良	灰白色	1/12	
112	965	山茶瓶	瓶	SB373B (AN23 P5)	15.0	-	-	口縁部～体部コロナデ	精良	良	明黃褐色(外) 淡灰褐色(内)	1/20	
113	798	山茶瓶	瓶	SB373B (BO1 P5)	16.8	8.2	5.8	口縁部コヨナデ、全体～底部コロナデ、 高台ハリヅケ、高台ハリヅケナデ、透大	精良	良	灰褐色	1/6	
114													欠番
115	1009	清潔器	杵臺	SB46-50 (AT23 P2)	12.4	-	-	口縁部コヨナデ、体部コロコロナデ	精良	良	明灰褐色	1/12	
116													欠番
117	773	清潔器	杵臺	AG20 P1	-	6.6	(4.9)	器體全体にナデ、泥點かから	精良	良	暗灰色	1/12	
118	880	土師器	鍋	SK32 (AO23 土焼1)	18.6	-	-	口縁部～泥塑コヨナデ、底部オカリエシ、 高台ハリヅケ・粘土模様	微砂粒含む	良	淡黃褐色	1/4	
119	882	土師器	鍋	SK32 (AO23 土焼1)	20.2	-	-	口縁部～泥塑コヨナデ、底部オカリエシ、 器體模様のナデの不規則	微砂粒含む	やや粗	褐色	1/5	
120	848	土師器	鍋	SK32 (AO23 土焼1)	(22.2)	-	-	口縁部コヨナデ、ハリヅケナシ、 底部粘土模様、コロコエ後ナデ	微砂粒多く 含む	やや粗	淡黃褐色	1/15	
121	935	土師器	鍋	SK32 (AO23 土焼1)	(19.8)	-	-	口縁部コヨナデ、底部オカリエシ、 底部オサエ	~3mm砂粒 含む	やや粗	明黃白色	1/6	
122	849	土師器	鍋	SK32 (AO23 土焼1)	(24.0)	-	-	口縁部コヨナデ、オカリエシ	微砂粒多く 含む	やや粗	褐色	1/12	
123	881	土師器	鍋	SK32 (AO23 黄土焼1)	22.6	-	-	口縁部～泥塑コヨナデ、底部オカリエシ、 体部に蛇形粘土筋、器體模様のため不明確	微砂粒含む	やや粗	淡黃褐色	1/8	
124	834	土師器	鍋	SK32 (AO23 土焼1)	(23.8)	-	-	口縁部コヨナデ、底部オカリエシ、 底部オサエ	~2mm砂粒 含む	やや粗	淡黃褐色(外) 淡褐色(内)	1/3	
125	884	山茶瓶	瓶	SK32 (AP23 土焼1)	15.2	-	-	口縁部コヨナデ、体部コロコロナデ	精良	良	反白色	1/5	
126	885	山茶瓶	瓶	SK32 (AP23 土焼1)	16.8	-	-	口縁部コヨナデ、体部コロコロナデ	精良	良	淡黃褐色(外) 淡褐色(内)	1/10	
127	932	山茶瓶	瓶	SK32 (AO23 土焼1)	16.2	7.4	5.4	口縁部～体部コロコロナデ、底部内面ナデ、 高台ハリヅケ、表面切手形、自然點かから	~7mm砂粒 含む	良	反白色	2/3	
128	887	山茶瓶	瓶	SK32 (AP23 土焼1)	19.0	-	-	口縁部コヨナデ、底部コロコロナデ、 内面に自然點かから	~7mm砂粒 含む	良	反白色	1/9	
129	889	山茶瓶	瓶	SK32 (AO23 土焼1)	-	7.0	-	口縁部コロナデ、高台ハリヅケ、 泥塑外面部切手形	精良	良	反白色	1/4	
130	886	山茶瓶	瓶	SK32 (AO23 土焼1)	-	7.0	-	口縁部コロナデ、高台ハリヅケ、 泥塑外面部切手形	~4mm砂粒 含む	良	反白色	1/2	

付表9 大蔵遺跡A地区出土遺物觀察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土品種及び 出土位置			測量 (cm) 口径 底径 高さ	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	保存度	備考
				口徑	底径	高さ							
131	879	山茶瓶	板	SK42 (AO23 土坑1)	-	8.3	-	全体ロクロナデ、高台ハリツケ・輪切痕、 底部外周系切痕、内面一部に自然難かかる	難良	良	灰白色	1/5	
132	933	山茶瓶	板	SK42 (AO23 土坑1)	-	4.8	-	全体ロクロナデ、高台ハリツケ・輪切痕、 底部外周系切痕、内面難かかる	秒砂含む	良	淡黄褐色	定期 保存	
133	915	土師器	小皿	SK42 (BO2 集石土状)	9.1	4.8	1.8	口縁部～一部ヨコナデ、 底部外周部底張不規則	難良	良	淡黄褐色	1/2	
134	914	土師器	小皿	SK42 (BO2 集石土状)	9.2	5.0	1.6～ 1.9	口縁部～一部ヨコナデ	難良	やや軟	淡黄褐色(外) 明黄褐色(内)	定期	
135													欠番
136	892	土師器	鍋	SK42 (BO2 集石土状)	19.6	-	-	口縫隙部内側にオリカエシ、 上部にわかな垂れ毛もつ	～2mm秒粒 含む	やや軟	淡黄褐色	1/12	
137	901	土師器	鍋	SK42 (BO2 集石土状)	20.0	-	-	口縁部ヨコナデ、 口縫隙部リエイシ	～2mm秒粒 含む	良	淡黄褐色	1/5	
138	946	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	14.0	6.2	4.8	全体ロクロナデ、 全体ロクロナデ、高台剥離？	難良	良	淡黄褐色	1/3	
139	904	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	15.6	-	-	全体ロクロナデ、 全体ロクロナデ	難良	良	灰白色	1/6	
140	900	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	14.6	-	-	全体ロクロナデ、 全体ロクロナデ	難良	良	灰白色	1/5	
141	891	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	17.2	-	-	口縁部～一部ロクロロヂ、 全体ヨコナデ	難砂粒含む	良	灰白色	1/5	
142	906	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	18.0	-	-	口縁部ヨコナデ、全体ロクロナデ、 全体～一部ヨコオサズで輪化	～4mm秒粒 含む	良	灰白色	1/7	
143	912	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	17.2	7.5	5.9	口縁部～一部ロクロロヂ、高台ハリツケ、 底部外周部切痕、内面に重ね焼き痕	～2mm秒粒 含む	良	淡綠灰色	2/3	
144	913	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	18.2	7.6	5.7	口縁部～一部ロクロロヂ、高台ハリツケ・輪裂痕、 底部外周部切痕、内面に重ね焼き痕	難良	良	淡灰(外) 淡黄褐色(内)	1/3	
145	911	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	17.2	7.6	6.0	口縁部～一部ロクロロヂ、高台ハリツケ・輪裂痕、 底部外周部切痕、内面に重ね焼き痕	～2mm秒粒 含む	良	淡黄灰(外) 淡灰(内)	2/3	
146	842	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	-	8.2	-	全体ロクロナデ、内面重ね焼き痕、 高台ハリツケ、外周系切痕ナデ	難良	良	灰白色	2/5	
147	847	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	-	6.7	-	全体ヨコナデ、底部内面ナデ、 高台ハリツケ、尾部外周部系切痕	難良	良	明灰白色	2/3	
148	903	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	-	7.4	-	全体ロクロナデ、高台ハリツケ、 外周系切痕	難良	良	灰白色	1/4	
149	743	山茶瓶	板	SK42 (BO2 合骨層)	-	7.4	-	全体ロクロナデ、内面重ねナデ、 高台ハリツケ・外周系切痕	難良	良	灰白色	1/4	
150	902	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	-	7.0	-	全体ロクロナデ、高台ハリツケ、 底部外周部系切痕	～4mm秒粒 含む	良	灰白色	1/2	
151	941	山茶瓶	板	SK42 (BO2 集石土状)	-	7.4	-	全体～底部ロクロナデ、 底部外周部内面ナデ、 高台ハリツケ、尾部外周部系切痕	～2mm秒粒 含む	良	灰白色	定期 保存	
152	860	山茶瓶	板	SK51 (AR20 土坑2)	-	7.8	-	全体ロクロナデ、内面重ねナデ、 高台ハリツケ・外周系切痕、 輪裂痕の剥離	～5mm秒粒 含む	良	灰白色	2/3	
153	882	須磨器	雙	SK51 (AR20 土坑1 P1E)	25.8	-	-	口縁部ヨコナデ、全体ロクロロヂ、 全体ヨコナデ、内面重ねナデ、 輪裂痕の剥離	難良	良	暗黒褐色(外) 淡灰褐色(内)	1/20	
154	893	山茶瓶	板	SK40 (AS23 土坑1)	14.2	6.6	3.7	口縁部～一部ロクロロヂ、口縫部ヨコナデ、 底部外周部系切痕	難良	良	淡褐色	7/10	
155	876	山茶瓶	山皿	SK35 (AU19 土坑1)	9.5	5.6	2.1	口縁部ヨコナデ、全体ロクロロヂ、 底部外周部切痕、口縫部に自然難かかる	難良	良	灰白色	2/5	
156	854	山茶瓶	板	SK35 (AV19 土坑1)	14.5	7.4	4.5	口縁部ヨコナデ、全体～一部ロクロナデ、 高台ハリツケ、尾部外周部切痕	秒砂含む	良	灰白色	1/9	
157～161													欠番
162	870	山茶瓶	山皿	SK38 (AT9 中世基2)	7.7	4.9	1.6	口縫部～一部ロクロロヂ、底部内面ナデ 底部外周部系切痕	～1mm秒粒 含む	良	灰褐色	9/10	
163	889	山茶瓶	板	SK38 (AT9 中世基2)	14.7	(6.3)	(3.1)	口縫部～一部ロクロロヂ、 底部外周部切痕、高台剥離	～2mm秒粒 含む	良	灰白色	1/3	
164	937	山茶瓶	板	SK38 (AT9 土坑1)	15.7	-	-	口縫部ヨコナデ、全体ロクロナデ、 全体ロクロナデ	難良	良	灰褐色	1/6	
165	938	山茶瓶	板	SK38 (AS8 中世基2)	-	6.2	-	全体ヨコナデ、高台ハリツケ後ヨコナデ、 底部外周部切痕	難良	良	灰白色	1/3	
166	936	山茶瓶	板	SK38 (AS8 中世基1)	-	7.2	-	全体ロクロナデ、内面重一定方向ナデ、 底部外周部切痕	秒砂含む	良	灰白色	1/5	
167	939	土師器	皿	SK30 (AT9 中世基3)	10.0	6.4	1.3	口縫部～一部ナデ	難良	良	淡黃色	2/5	
168	881	山茶瓶	山皿	SK30 (AT9 中世基3)	6.9	3.4	1.7	口縫部～一部ロクロロヂ、 底部外周部切痕	～2mm秒粒 含む	良	明灰褐色	11/12	
169	865	山茶瓶	山皿	SK30 (AT9 中世基3)	6.2	4.9	1.9	口縫部～一部ロクロロヂ、 底部外周部切痕	～2mm秒粒 含む	良	灰褐色	定期	
170	866	山茶瓶	山皿	SK30 (AT9 中世基3)	8.0～ 8.2	4.8	1.8～ 2.1	口縫部～一部ロクロロヂ、底部外周部切痕、 内面に自然難かかる	秒砂含む	良	明灰褐色	定期	
171	863	山茶瓶	山皿	SK30 (AT9 中世基3)	7.6	4.2	2.3	口縫部～一部ロクロロヂ、 底部外周部切痕、右側面	秒砂含む	良	淡黃灰色	定期	
172	862	山茶瓶	山皿	SK30 (AT9 中世基3)	7.8	5.3	1.6	口縫部～一部ロクロロヂ、 底部外周部切痕、左側面	～2mm秒粒 含む	良	淡黃灰色	定期	
173	864	山茶瓶	山皿	SK30 (AT9 中世基3)	8.1～ 8.4	5.1	1.4～ 1.6	口縫部～一部ロクロロヂ、 底部外周部切痕、左側面	～2mm秒粒 含む	良	灰褐色	定期	
174	872	鐵製品	刀子	SK20 (AT9 中世基3)	22.3	規長 (3.0)	厚 0.9	先是刀子使用時の状況を示すが、 その他は錆び付付					
175～180													欠番
181	1001	山茶瓶	板	SK21 (AV9 土/1)	(13.0)	-	-	口縫部ヨコナデ、全体ロクロナデ	難砂粒含む	やや軟	灰白色	1/12	

付表9 大蔵遺跡A地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土状態及び 出土位置			法面 (cm) 口側	法面 (cm) 底側	断面	調査・技法の特徴			胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口側	底側	断面				胎土	焼成	色調					
182	856	山茶瓶	瓶	SD01122 (AT8 1ゾ1)	13.8	-	-	-	-	口縁部3コナデ、体部ロクロナデ、 底部に自然粒(三日色)かかる	砂妙粒含む	良	灰白色	1/8			
183	855	山茶瓶	瓶	SD01123 (AT8 1ゾ1)	15.0	70	5.2	-	-	口縁部コナデ、体部ロクロナデ、 底部内面2面、外面部切削ナデ	精良	良	灰白色	1/3			
184	988	山茶瓶	瓶	SD022 (AV8 1ゾ1)	-	60	-	-	-	体部ロクロナデ、底部内面ナデ、 底部ハリツケ-粗粒底、底部外周系切痕	砂妙粒含む	良	暗灰白色	1/5			
185	858	山茶瓶	瓶	SD022 (AV8 1ゾ1)	-	75	-	-	-	体部ロクロナデ、底部ハリツケ、 外面部切痕ナデ	精良	良	暗灰白色	1/3			
186	931	土師器	皿	SD033 (AW2 1ゾ2)	10.2	(4.6)	1.4	-	-	口縁部-底部ロクロナデ、 底部外周系切痕	砂妙粒含む	やや軟	明黄褐色	1/4			
187	707	山茶瓶	山茶	SD023 (AU14 1ゾ1)	7.8	39	1.8	-	-	口縁部-体部ロクロナデ、 底部外周系切痕	砂妙粒含む	良	暗灰白色(外) 淡灰白色(内)	完形	尾形外 底面		
188	708	山茶瓶	瓶	SD023 (AU13 1ゾ1)	-	50	-	-	-	底部ロクロナデ、 底部ハリツケ-外面部切削ナデ	精良	良	暗灰白色	1/2			
189	710	山茶瓶	瓶	SD023 (AU13 1ゾ1)	-	54	-	-	-	底部小さく、低い、 底部外周系粗粒底	砂妙粒含む	良	灰色	1/4			
190	709	山茶瓶	瓶	SD023 (AU13 1ゾ1)	-	(6.4)	-	-	-	底部剥離か、 底部外周系切削ハラ脱頂	砂妙粒含む	良	灰色	度部 完存			
191	711	白磁	碗	SD023 (AU13 1ゾ1)	16.4	-	-	-	-	口縁部ロクロナデ	精良	良	灰白色	1/12			
192																欠番	
193	701	山茶瓶	瓶	SD19 (AU11 1ゾ1)	15.8	6.5	5.2	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 底部ハリツケ-粗粒底、底部外周系切痕	砂妙粒含む	良	暗灰白色	3/4			
194	877	山茶瓶	山茶	SD24 (AV15 1ゾ1)	8.1	3.8	1.9	-	-	口縁部ヨコナデ、底部孔切痕、 底部ハリツケ	精良	良	灰白色(外) 淡灰白色(内)	ほぼ 完形			
195	847	山茶瓶	瓶	SD24 (AW16 1ゾ1)	15.1	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 自然難かからず	砂妙粒含む	良	灰白色	1/14			
196	845	山茶瓶	瓶	SD24 (AW16 1ゾ1)	15.0	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 自然難かからず	精良	良	明灰白色	1/16			
197	857	山茶瓶	瓶	SD25 (AP16 1ゾ1)	15.2	6.7	5.3	-	-	口縁部ヨコナデ、底部-底部ロクロナデ、 底部ハリツケ、底部剥離孔有り	砂妙粒含む	良	暗灰白色	2/2			
198	841	山茶瓶	瓶	SD44 (BG1 大ミフ)	-	7.2	-	-	-	体部ロクロナデ、底部ハリツケ、 底部外周系切痕	精良	良	灰白色	1/2			
199	842	山茶瓶	瓶	SD44 (BG1 大ミフ)	-	7.0	-	-	-	体部ロクロナデ、底部内面ナデ、 底部ハリツケ、底部外周系切痕	精良	良	灰白色	1/2			
200	851	陶器	鉢	SD4748 (AW22 1ゾ1)	(28.0)	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	砂妙粒 多く含む	良	暗赤褐色	1/10			
201																欠番	
202	726	土師器	瓶	包含層 (AR16 包含層)	11.5	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	精良	良	暗灰白色	1/5			
203																欠番	
204	739	土師器	裏	包含層 (AQ24 包含層)	15.0	-	-	-	-	口縁部直立瓦砾、 器壁剥離不規則	~2mm砂粒 含む	やや軟	明黄褐色	1/6			
205	732	土師器	裏	包含層 (AQ24 包含層)	17.8	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、底部粘土様土塊、 底部内外面ハラ脱頂?	~3mm砂粒 含む	良	明褐色	2/5			
206	733	土師器	底	包含層 (AQ20 包含層)	-	-	-	-	-	体部粘土様土底、外周面1/2-4周位のタテハケ、 内面下から上へハラ脱頂	~7mm砂粒 多く含む	良	明褐色	2/5			
207	759	須恵器	杯	包含層 (AW14 薄込み)	10.6	-	3.9	-	-	口縁部ヨコナデ、底部-天井部ロクロナデ、 天井部外周部ハラ脱頂	~8mm砂粒 含む	良	暗青灰色	2/3			
208	724	須恵器	杯	包含層 (AQ11 包含層)	13.8	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 天井部内面ナデ、外周部ハラ脱頂、 底部2つ丸み	砂妙粒含む	良	黄灰色(外) 青灰色(内)	2/5			
209	723	須恵器	高杯	包含層 (AQ11 包含層)	12.8	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、 体部ロクロナデ、内面ナデ	精良	良	暗黄褐色	1/10			
210	712	須恵器	高杯	包含層 (AQ12 包含層)	-	B2	6.1	-	-	口縁部-底部ヨコナデ、 底部(透かしなし、下部に1つの沈線	精良	良	暗青色	細部 欠番			
211	720	須恵器	罐	包含層 (AO9 包含層)	-	最大径 8.0	6.5	-	-	口縁部ヨコナデ、底部横幅ハケズリ、 注入部上方に凸出	精良	良	暗灰白色	口縁部 欠番			
212																欠番	
213	721	須恵器	杯	包含層 (AO9 包含層)	-	8.7	-	-	-	底部外周に凸出面をなす2~3mm粒 の小石痕が軽面2つ	~2mm砂粒 含む	良	暗青灰色	1/3			
214	740	須恵器	長颈瓶	包含層 (AS24 包含層)	8.4	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、瓶底部2条の次級	精良	良	暗青灰色	1/3			
215	763															欠番	
216	752	陶器	巣	包含層(西 南低張区付)	-	14.5	-	-	-	体部ロクロナデ、体部外周部方向のハラ脱頂、 底部外周部切痕	精良	良	灰白色	1/6			
217	725	須恵器	裏	包含層 (AT12 包含層)	(46.0)	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、底部-安突-9本1単位 の継状工字割-交叉X-3条以上の沈線	砂妙粒含む	良	黒色(外) 深黄色(内)	1/15			
218	748	土師器	皿	包含層 (AN25 包含層)	8.6	3.8	1.4	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	精良	良	暗黄褐色	1/2			
219	731	土師器	台付皿	包含層 (AT20 包含層)	9.4	4.4	2.5	-	-	口縁部-底部ヨコナデ、 底部内面2面ナデ	砂妙粒含む	良	暗黄褐色	2/3			
220	750	綠釉陶器	瓶	包含層 (AN15 包含層)	-	7.0	-	-	-	素泊リバタケ、底部内面ロクロナデ、 外周部切削底ナデ	精良	良	淡緑色	1/4			
221	738	土師器	瓶	包含層 (AP23 包含層)	16.8	-	-	-	-	粘土様土上底、口縁部ヨコナデオカリエシ、 内面上方に凹面をもつ	~2mm砂粒 含む	やや軟	明黄褐色	1/8			
222	754	土師器	瓶	包含層 (AT27 包含層)	(27.8)	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ	精良	良	黑褐色	1/10			
223	751	陶器	抹	包含層 (BP1 包含層)	27.8	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 下段横方向のハラ脱頂	精良	良	灰白色	1/6			
224	730	陶器	抹	包含層 (AT20 包含層)	28.0	-	-	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、 体部下横方向のハラ脱頂	砂妙粒含む	良	黄灰色	1/15			

付表9 大蔵遺跡A地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土品種及び 出土位置			大きさ(cm) 口径 直径 厚さ	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	保存度	備考
				包含層	(B02 包含層)	9.2 4.0 2.5~ 2.7							
225	758	山茶瓶	小瓶	包含層 (AT8 包含層)	7.5	4.1	1.6	口縁部ヨコナデ、底部ロクロナデ、 高台ハリツケ、底部内外面ナデ	良	良	暗灰白色	2/3	
226	749	山茶瓶	山皿	包含層 (AT8 包含層)	8.4	4.2	2.0	口縁部ヨコナデ、底部ロクロナデ、 底盤内面一定方向ナデ、外周系切痕	~2mm砂粒 含む	良	灰白色	1/10	
227	717	山茶瓶	山皿	包含層 (AUP 包含層)	13.6	-	-	口縁部~底部ロクロナデ、底部系切痕、 内面に包含物からむ	難良	良	灰白色	2/3	
228	736	白磁	碗	包含層 (AQ24 包含層)	12.8	-	-	口縁部ヨコナデ、底部ロクロナデ	難良	良	明白色	1/12	
229	745	白磁	碗	包含層 (AS18 包含層)	-	-	-	口縁部ヨコナデ、底部ロクロナデ、 内面ナデナギ、外面に輪垂れ丸	難良	良	淡綠灰色	1/6 二次 焼成	
230	757	青磁	碗	包含層 (AV9 包含層)	-	-	-	口縁部~外側に輪運笄丸、 口縁部割入丸	難良	良	綠青色 (紫地灰白色)	1/12	
231	746	灰釉陶器	瓶	包含層 (AV21 包含層)	15.4	7.3	4.9	口縁部ヨコナデ、 全体ハリツケ	難良	良	淡綠褐色	1/2	
232	728	山茶瓶	瓶	包含層 (AP16 包含層)	15.4	7.8	5.8	口縁部ヨコナデ、底部ロクロナデ、 高台ハリツケ、外周系切痕	難良	良	灰白色	1/3	
233	742	山茶瓶	瓶	包含層 (B02 包含層)	16.8	7.6	5.2	口縁部ヨコナデ、底部~底部ロクロナデ、 高台ハリツケ、底盤外周系切痕	~7mm砂粒 含む	良	灰白色	1/2	
234	747	山茶瓶	瓶	包含層 (AN23 包含層)	-	4.8	-	全体ロクロナデ、高台ハリツケ、 外周系切痕	~5mm砂粒 含む	良	淡灰褐色	1/2	
235	729	山茶瓶	瓶	包含層 (AM19 包含層)	16.2	7.6	4.9	口縁部ヨコナデ、底部ロクロナデ、 高台ハリツケ、外周系切痕(右回転)	微砂粒含む	良	灰白色	2/5	
236	714	山茶瓶	瓶	包含層 (AS 9 包含層)	16.8	7.8	5.5	口縁部~底部ロクロナデ、高台ハリツケ、 底盤外周系切痕	難良	良	灰色	1/4	
237	713	山茶瓶	瓶	包含層 (AS9 包含層)	15.4	6.0	5.5	口縁部~底部ロクロナデ、高台ハリツケ、 底盤外周系切痕	~2mm砂粒 含む	良	暗灰白色	1/4	
238	716	山茶瓶	瓶	包含層 (AU8 包含層)	13.4	(4.2)	(4.9)	口縁部~底部ロクロナデ、 ハリツケ底台剥離、底盤外周系切痕	~3mm砂粒 含む	良	淡灰白色	1/2	

付表9 大藪遺跡A地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土遺構名 出土の箇所		法面(cm) 口径(cm) 周長(cm)	深度(cm)	説明・注釈	調査・注釈の特徴			地土	集成	色調	堆存度	備考	
				出土遺構名	出土の箇所				地表付近	底面							
1	2	山茶瓶	山皿	SBE02 (CK7 Pt1)	9.0	4.7	2.4~ 2.7	口縁部へ底部にクロナデ。 高台ハリツケ	微砂粒含む	良	淡灰色	ほぼ 完形					
2	130	山茶瓶	瓶	SBE02 (CK8 Pt1)	-	8.5	-	底部部内面切欠きナデ、底部底 部内面切欠きナデ、瓶底	精良	良	灰色	1/2					
3	131	山茶瓶	瓶	SBE02 (CN4 Pt1)	(16.6)	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ	精良	良	灰色	1/10					
4	288	土師器	皿	SBE09 (CS2 Pt4)	9.8	-	1.8	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	微砂粒含む	良	淡白色	1/2					
5	316	土師器	皿	SBE09 (CS4 Pt3)	10.8	-	2.0	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	微砂粒 少量含む	良	黄褐色	1/5					
6	108	土師器	皿	SBE09 (CS2 Pt2)	11.6	-	(1.8)	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	精良	良	暗灰色(内) 黄褐色(外)	1/8					
7	98	土師器	皿	SBE09 (CT3 Pt1)	14.2	-	(2.6)	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	微砂粒含む	良	褐色(内) 黄褐色(外)	1/5					
8	115	土師器	皿	SBE09 (CS4 Pt2)	11.2	-	2.1	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	精良	良	淡褐色	1/3					
9	153	土師器	皿	SBE09 (CR2 Pt2)	8.5	3.2	1.5	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	精良	良	淡褐色	1/3					
10	152	土師器	皿	SBE09 (CR2 Pt2)	9.2	4.2	2.2	口縁部へ底部部内面クロナデ(右回転)、 底部部内面オサエ	精良	良	淡褐色	1/4					
11	117	土師器	瓶	SBE09 (CS4 Pt3)	12.8	4.3	(4.4)	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面切削	~2mm砂粒 含む	良	淡黄色	口縫1/8 底縫2/3					
12	105	土師器	瓶	SBE09 (CR2 Pt6)	(16.4)	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ	精良	良	褐色	1/4					
13	92	土師器	台付瓶?	SBE09 (CS3 Pt6)	-	3.7~ 3.9	-	体側部へ底部部内面クロナデ、 高台付部内面切削	精良	良	こぶし黄褐色 淡青	高台 残存					
14	98	土師器	瓶	SBE09 (CS2 Pt1)	-	4.8	-	体側部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面切削	~2mm砂粒 含む	良	褐色	底縫 1/2					
15	103	土師器	瓶	SBE09 (CR2 Pt6)	-	5.1	-	体側部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面切削	精良	良	暗黄色	底縫 完存					
16	104	土師器	瓶	SBE09 (CR2 Pt6)	(20.2)	-	-	口縁部内側部内面オカリエシ、 底部部内面オサエ	微砂粒含む	良	白褐色(内) 淡褐色(外)	1/10					
17	93	土師器	匁付?	SBE09 (CS3 Pt6)	6.6	-	(3.1)	ヨコズナ付、口縁部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	微砂粒含む	不良	褐色(内) 淡褐色(外)	底縫 大崩れ					
18	94	黒色土器	皿	SBE09 (CS3 Pt6)	10.2	4.8	2.4	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部外面オサエ	精良	良	褐色(内) 淡褐色(外)	1/10					
19	180	山茶瓶	山皿	SBE09 (CS3 Pt6)	8.9~ 9.2	4.5	2.8	口縁部へ底部部内面クロナデ(左回転)、 底部部内面切削	微砂粒 少量含む	良	淡灰色	ほぼ 完形					欠番
20	91	山茶瓶	山皿	SBE09 (CS3 Pt6)	10.1	9.8	3.1~ 3.4	口縁部へ底部部内面クロナデ、底部部内面重ね傾き傾 高台ハリツケ、外面右後方後ナデ	微砂粒含む	良	灰色	10/12					
22	97	山茶瓶	小瓶	SBE09 (CT2 Pt1)	(11.0)	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ	精良	良	淡褐色	1/5					
23	1	山茶瓶	瓶	SBE09 (CT3 Pt1)	15.8	8.6	4.2~ 4.8	口縁部へ底部部内面クロナデ、底部部内面ヘリ土輪積層	微砂粒含む	良	淡灰色	ほぼ 完形					
24	106	山茶瓶	瓶	SBE09 (CR2 Pt6)	16.2	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ(左回転)、 底部部内面ヘリ土輪積層	精良	良	反色	1/5					
25	109	山茶瓶	瓶	SBE09 (CS2 Pt6)	-	6.4	-	体側部へ底部部内面クロナデ、 高台ハリツケ、外面右後方後ナデ	精良	良	淡黄色	1/3					
26	102	白磁	碗	SBE09 (CR2 Pt6)	-	5.4	-	体側部へ底部部内面クロナデ、 底部部外面オサエ	精良	良	白褐色	1/2					
27	151	鉄製品	鐵皿	SBE09 (CR2 Pt2)	9.3	4.9	1.4	複雑な鉄器、全体に錆び	複雑な鉄器、全体に錆び	良	褐色	完形					
28	126	土師器	小皿	SBE09 (CS4 Pt5)	7.2	-	1.5	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	微砂粒 少量含む	良	淡褐色	1/8					
29	121	土師器	皿	SBE09 (CS4 Pt1)	11.0	-	1.8	口縁部内面クロナデ	精良	良	黄褐色	1/4					
30	122	経輪陶器	小皿?	SBE09 (CS4 Pt1)	-	5.0	-	高台ハリツケ	精良	良	褐色	1/5					
31	3	灰釉陶器	小瓶	SBE09 (CT4 Pt2)	11.2	5.8	3.9	口縁部へ底部部内面クロナデ、 高台ハリツケ	精良	良	淡灰色	1/2					
32	125	瓦器	瓶	SBE09 (CT3 Pt1)	14.4	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面オサエ	精良	良	反色	1/8					
33	119	山茶瓶	瓶	SBE09 (CS4 Pt1)	18.0	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ(右回転)	微砂粒 少量含む	良	反色	1/4					
34	202	須恵器	春	SKB01 (CK7 土筑1)	11.8	-	-	口縁部内面クロナデ、底部部カキモ	~2mm砂粒 含む	良	淡青灰色	1/12					
35	201	須恵器	杯	SKB01 (CK7 土筑1)	(14.2)	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ	微砂粒 多く含む	良	青灰色	1/10					
36	210	土師器	鍋	SBE09 (CR2 土筑1)	(24.6)	-	-	体側部内面ハリ 窓壁部通のため頭部不正確	~2mm砂粒 多く含む	良	淡褐色	1/4					
37	211	土師器	瓶	SBE08 (CR2 土筑1)	-	5.5	-	体側部へ底部部内面クロナデ、 底部部内面切削	~2mm砂粒 含む	良	淡褐色	1/3					
38	212	山茶瓶	山皿	SBE08 (CR2 土筑1)	(9.4)	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ、 内面に自然地かかる	精良	良	淡灰色	1/5					
39	132	土師器	羽量	SBE08 (CN4 土筑2)	16.0	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ、 内面は自然地かかる	精良	良	褐色(内) 口縫部 完存	1/2					
40	217	経輪陶器	瓶?	(CN4 土筑1)	-	(8.2)	-	底部部内面切削、経輪かかる	精良	良	褐色	1/8					
41	216	白磁	碗	SKB03 (CN6 土筑1)	(13.6)	-	-	口縁部内面に泥跡	精良	良	乳白色	1/20					
42	144	灰釉陶器	瓶	(CM4 落込A)	(21.6)	-	-	口縁部内面クロナデ、器壁薄い	~3mm砂粒 含む	良	淡绿色(内) 淡反色(外)	1/10					
43	145	灰釉陶器	碗	SKB03 (CM4 落込A)	-	8.4	-	底部部内面クロナデ、高台ハリツケ、 底部部内面切削	精良	良	反色	1/8					
44	150	白磁	碗	(SKB03 落込A)	17.4	-	-	口縁部内面に泥跡、底部部内面に泥状となる	精良	良	乳白色	1/3					
45	206	山茶瓶	瓶	SE47 (GR1 井戸)	15.8	-	-	口縁部へ底部部内面クロナデ、 内面に自然地かかる	精良	良	乳白色	1/8					
46	203	山茶瓶	瓶	SE47 (CR1 井戸)	-	6.8	-	体側部へ底部部内面クロナデ、高台ハリツケ、 底部部内面切削、高台に粒状	精良	良	淡灰色	1/3					

付表10 大藪遺跡B地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	断面	出土品名及び 出土位置			法量 (cm) 口径	底径 厚さ	壁高	調査・目次の特徴		胎土	焼成	色調	保存度	備考
				底	底径	壁高				底	底径					
47	204	山茶樹	樹	S687 (CR1 井戸)	-	9.0	-	-	-	体部一底部クロナ子、高台ハリツケ。 底盤外周面切削	繊維	良	灰白色	1/3		
48	207	山茶樹	樹	S687 (CR1 井戸)	-	9.6	-	-	-	体部クロナ子、底盤外周面切削	繊維粒含む	良	灰白色	1/5		
49	209	土師器	鍋	S687 (CR1 井戸)	(25.6)	-	-	-	-	口縁部オカリズミ、ヨココテ。 体部外壁埋甃付のため底盤不規則	繊維粒 多く含む	やや粗	灰灰色	1/12		
50	134	山茶樹	山皿	S686 (BQ25 大溝)	-	5.3	-	-	-	体部クロナ子、底盤内面に重ね焼き痕。 高台ハリツケ、底盤外周面切削	~2mm砂粒 含む	良	灰灰色	初期復 元保存		
51	135	山茶樹	山皿	S686 (BQ25 大溝)	9.0	5.0	2.8	-	-	口縁部一底部クロナ子、底盤内面に重ね焼き痕。 高台ハリツケ、底盤外周面切削	繊維	良	泥灰灰(内) 灰灰色(外)	1/4		
52	133	山茶樹	山皿	S686 (BQ25 大溝)	8.6	5.2~ 5.4	2.5	-	-	口縁部一底部クロナ子、底盤外周面切削	繊維粒含む	良	灰灰色	初期 保存		
53	142	山茶樹	樹	S686 (CR1 井戸)	-	7.4	-	-	-	体部一底部クロナ子、外周面切削	繊維	良	灰灰(内) 灰灰色(外)	1/5		
54	143	山茶樹	樹	S686 (CR1 井戸)	-	7.0	-	-	-	体部一底部クロナ子、高台ハリツケ。 底盤外周面切削	繊維粒含む	良	灰灰(内) 灰灰色(外)	初期 保存		
55	228	山茶樹	樹	S686 (BV24 三ノ井)	-	7.4	-	-	-	体部一底部クロナ子、高台ハリツケ。 外周面切削	繊維粒多い	良	灰灰色	1/4		
56	225	山茶樹	樹	S686 (CLS 三ノ井)	-	6.8	-	-	-	高台ハリツケ、底盤外周面切削ナデ	~1mm砂粒 含む	良	灰灰色	1/3		
57	232	山茶樹	樹	S686 (CNS 三ノ井)	-	7.0	-	-	-	体部一底部クロナ子、内面裏壓、 高台ハリツケ、外周面切削	繊維	良	灰灰色	1/4		
58	233	山茶樹	樹	S686 (CNS 三ノ井)	-	6.0	-	-	-	体部一底部クロナ子、高台ハリツケ。 外周面切削	繊維	良	灰灰色	1/6		
59	177	土師器	小皿	S686 (CNS 三ノ井)	9.4	6.9	1.5	-	-	口縁部一底部クロナ子、 底盤外周面切削	繊維粒含む	良	泥褐色	1/5		
60	188	土師器	台付皿	S686 (CT3)	-	7.8	-	-	-	体部一底部クロナ子、高台ハリツケ。 底盤外周面切削	繊維粒含む	良	泥褐色	1/3		
61	183	土師器	台付皿	S686 (CT1)	8.7	6.7	2.2	-	-	高台ハリツケ、 脊壁形成のため底盤不規	繊維	良	泥褐色	3/4		
62	173	土師器	鍋	S686 (CT1 P4)	(20.4)	-	-	-	-	口縁部内側オカリズミ、ヨココテ	繊維粒 多く含む	良	褐色(内) 褐色(外)	1/8		
63	181	土師器	甕	S686 (CJ2 P7)	(21.6)	-	-	-	-	口縁部底面厚、上方に腰をもつ。 底盤埋甃付のため底盤不規則	繊維粒 多く含む	良	赤褐色	2/3		
64	280	土師器	蓋	S686 (CWE)	4.4	16.8	(8.0)	-	-	つまみ部コロコロ、蓋部コロコロ、 蓋見附付、腰部不規	繊維	良	褐色	1/12		
65	184	山茶樹	樹	S686 (CU4)	-	7.3~ 8.0	-	-	-	体部一底部クロナ子、底盤内面に重ね焼き痕。 高台ハリツケ、底盤外周面切削、粒状	繊維	良	灰灰色	高台 保存		
66	193	白磁	碗	S686 (CS4)	(15.0)	-	-	-	-	体部外壁面ケキズ	繊維	良	乳白色	1/10		
67	179	白磁	碗	S686 (CLS)	-	5.0	-	-	-	高台ハリズミ、底盤外壁面ケキズ	繊維	良	乳白色	1/2		
68	271	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付51)	7.8	-	1.2	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	良	泥褐色	1/5		
69	266	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付20)	7.8	-	(1.7)	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	良	橙色	1/8		
70	268	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切)	8.4	-	(2.6)	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維	良	泥褐色	1/8		
71	16	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付41)	8.6	-	1.6	-	-	体部底面一底部オサエ	繊維粒含む	良	赤褐色(内) 泥褐色(外)	1/2		
72	17	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付13)	9.0	-	1.5	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維粒含む	良	淡黄色	4/5		
73	4	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付29)	9.4	-	1.5	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	~2mm砂粒 含む	良	泥褐色	注記 完形		
74	14	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付13)	9.0	-	1.7	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維	良	白色	1/5		
75	10	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付14)	9.2	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維粒含む	良	泥褐色	注記 完形		
76	272	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付7)	9.0	-	1.9	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	良	褐色	1/12		
77	15	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切)	9.4	-	1.4	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維粒含む	良	褐褐色(内) 褐色(外)	1/3		
78	9	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付14)	9.4	-	1.6	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維粒含む	良	褐褐色	4/5		
79	19	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切)	9.6	-	2.0	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維粒含む	良	にじむ黄褐色	1/4		
80	7	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付16)	9.2	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	良	褐色	1/5		
81	13	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付13)	9.2	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	やや粗	泥褐色	1/2		
82	8	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付44)	9.4	-	1.7	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	~2mm砂粒 含む	良	泥褐色	注記 完形		
83	5	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付16)	9.5	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維	良	泥褐色	完形		
84	11	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付3)	9.2	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維粒含む	良	赤褐色	完形		
85	270	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切)	(10.0)	-	(1.7)	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維	良	泥褐色	1/12		
86	290	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切)	9.8	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	良	泥褐色(内) 泥褐色(外)	1/10		
87	18	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付43)	9.4~ 9.6	-	1.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維粒含む	良	橙色	注記 完形		
88	274	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付6)	10.6	-	(1.4)	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維	良	泥褐色	1/6		
89	6	土師器	小皿	S7K3 (CUS 大土切付16)	8.5~ 8.9	-	1.6	-	-	口縁部一底部ヨココテ。	繊維	良	泥褐色	注記 完形		
90	20	土師器	皿	S7K3 (CUS 大土切付40)	12.8	-	2.8	-	-	口縁部一底部ヨココテ。 底盤外周面一底部オサエ	繊維	良	泥褐色	1/8		
91	12	土師器	皿	S7K3 (CUS 大土切付20,34)	14.6	-	3.0	-	-	口縁部外周一底部オサエ	良	良	泥褐色	2/5		

付表10 大森遺跡B地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土遺跡名 出土位置		法面(ton) 口径	法面(ton) 底径	高さ	調査・指図の特徴		地土	集成	色調	残存度	備考
				SKT3 (CUL 大土坑)	(170)				口縁部~全体部コナデ、 底部外周~底部オサエ	縫合					
92	285	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑)	9.2	4.4	2.1	-	口縁部~全体部コナデ、 底部外周~底部オサエ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/6	
93	267	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑)	13.0	5.3	3.8	-	口縁部~全体部コナデ、 底部外周~底部オサエ	~20cm 縫合 含む	縫合	良	淡褐色	1/8	
94	21	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑No.32)	(136)	-	-	-	口縁部~全体部コナデ、 底部外周~底部オサエ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/8	
95	23	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑)	(120)	-	-	-	口縁部~全体部コナデ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/8	
96	24	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑)	(120)	-	-	-	口縁部~全体部コナデ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/12	
97	27	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑)	(226)	-	-	-	口縁部~全体部コナデ、縛面内側上方に隙、 縫合部オカリナシ、縛面外側下方に隙、 縫合部コナデ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/12	
98	25	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑No.7)	(270)	-	-	-	口縁部~全体部コナデ、縛面内側上方に隙、 縫合部コナデ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/10	
99	26	土研器	皿	SKT3 (CUL 大土坑)	(30)	-	-	-	口縁部~全体部コナデ、縛面内側上方に隙、 縫合部コナデ、縛面外側下方に隙	縫合	縫合	良	淡褐色	1/12	
100	28	瓦質土器	小皿	SKT3 (CUL 大土坑)	(9.8)	-	-	-	口縁部~全体部外周~内側ガタ	縫合	縫合	良	淡褐色	1/10	
101	234	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑上部)	8.4	4.0	2.4	-	口縁部~全体部コナデ(ハリツケ)、 底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色	2/3	
102	24	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑No.28)	8.7	4.7	2.8	-	口縁部~底部コナデ、高台ハリツケ、 底部外周切削痕	縫合	縫合	良	灰白色	1/6	完存
103	46	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑)	9.6	4.6	-	-	口縁部~底部コナデ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 灰白色(外)	1/5	
104	31	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑No.19)	9.3~	3.5	3.2	-	口縁部~底部コナデ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 灰白色(外)	1/6	完存
105	32	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑No.32)	9.4~	4.2	-	-	口縁部~底部コナデ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 淡褐色(外)	1/6	
106	35	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑No.12)	10.2	4.9	-	-	口縁部~底部コナデ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、外周切削痕	~20cm 縫合 含む	縫合	良	淡褐色(内) 淡褐色(内)	1/2	
107	26	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑No.25)	10.2	4.9	-	-	口縁部~底部コナデ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 淡褐色(外)	1/2	
108	33	山茶瓶	山皿	SKT3 (CUL 大土坑No.36)	9.0	4.0	10~	-	口縁部~底部コナデ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、外周切削痕	縫合	縫合	良	白灰色	完存	底部外表面 墨書き
109	49	反転陶器	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.21)	17.8	8.6	-	-	口縁部~底部コナデ、高台ハリツケ、 反転ケガタ、高台ハリツケ	縫合	縫合	良	灰白色	1/3	
110	251	反転陶器	柄	SKT3 (CUL 大土坑)	-	6.3	-	-	口縁部~底部コナデ(ハリツケ)、高台ハリツケ、 底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 高台灰白色(外)	1/2	
111	42	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑内済)	16.4	9.2	4.9	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	灰白色	1/3	
112	239	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑)	15.6	7.8	-	-	口縁部~底部コナデ(左回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 淡褐色(外)	1/3	
113	38	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.10.41)	16.4	7.4	-	-	口縁部~底部コナデ(左回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	灰白色	1/2	
114	43	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.38)	17.2	9.2	5.4	-	口縁部~底部コナデ(左回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色	1/3	
115	44	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.53)	18.4	8.2	5.5	-	口縁部~底部コナデ(左回転)、 高台ハリツケ、底部内面重ね縫合痕、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 灰白色(外)	10/12	
116	39	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.4)	16.4~	7.5	5.3~	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	~20cm 縫合 含む	縫合	良	灰白色	完存	
117	37	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.2)	16.0~	7.6	5.4~	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	灰白色	完存	
118	41	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.20)	16.8	8.0	5.6~	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削ナデ、板輪痕、 高台ハリツケ、底部外周切削ナデ	縫合	縫合	良	淡褐色	2/3	
119	40	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.35)	16.6	8.0	5.5~	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削	~20cm 縫合 含む	縫合	良	淡褐色(内) 灰白色(外)	2/3	
120	71	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.18)	17.2	-	-	-	口縁部~底部コナデ(ナデ)	縫合	縫合	良	灰白色	1/3	
121	73	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑)	16.7	-	-	-	口縁部~底部コナデ(ナデ)	縫合	縫合	良	灰白色	1/3	
122	72	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.39)	16.4	-	-	-	口縁部~底部コナデ(ナデ)	縫合	縫合	良	灰白色	1/5	
123	90	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑)	-	8.4	-	-	口縁部~底部コナデ(ナデ)(右回転)、 底部内面重ね縫合痕、高台ハリツケ(ナデ)	縫合	縫合	良	淡褐色(内)	1/3	
124	56	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.32)	-	8.4	-	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	~30cm 縫合 含む	縫合	良	灰白色	1/2	
125	50	山茶瓶	柄	SKT3 (CUL 大土坑No.37)	-	7.6~	7.8	-	口縁部~底部コナデ(右回転)、 高台ハリツケ、底部外周切削痕	縫合	縫合	良	淡褐色	底部 完存	
126	83	白磁	小皿	SKT3 (CUL 大土坑)	10.8	-	(3.2)	-	内部の体部と底盤部に段差もつ、 外周部底面下に突起	縫合	縫合	良	白透青(内) 白透青(外)	1/4	
127	82	白磁	碗	SKT3 (CUL 大土坑)	-	4.9	-	-	口縁部半平ヘキズ、高台ケリジン	縫合	縫合	良	白透青(内) 白透青(外)	1/3	
128	81	白磁	碗	SKT3 (CUL 大土坑)	16.2	-	-	-	口縁部厚削、3脚状、 口縁部底面下に突出	縫合	縫合	良	白透青(内) 白透青(外)	1/3	
129	84	白磁	碗	SKT3 (CUL 大土坑)	15.4	4.9	(7.0)	-	口縁部わずかに肥厚、 底盤部下に突出	縫合	縫合	良	白透青(内) 白透青(外)	1/10	
130	80	常滑	甕	SKT3 (CUL 大土坑No.5.46)	-	13.2~	-	-	体部粘土巻上げ、内面に粘土巻上げ痕、 底盤部内面ササ	縫合	縫合	良	淡褐色(内) 淡褐色(外)	底盤 完存	
131	86	石器皿	砾石	SKT3 (CUL 大土坑No.51)	10.8	2.5	2.0~	-	層厚2.0 2面使用痕	-	-	-	黑褐色		

付表10 大森遺跡B地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土品名及び 出土位置	法量(cm)			調査・目次の特徴	胎土	焼成	色調	保存度	備考
					口径	底径	壁高						
1	353	土器部	皿	SB01 (CW19 P3)	(11.4)	-	2.0	口縁部コロナデ、体部下半下腹部外周ヨコナデ。全体に塵付着。	良	良	淡黄褐色	1/6	
2	332	土器部	甕	SB05 (CN1 P1)	11.8	-	-	口縁部コロナデ、体部内面ヨコハサゲ。外面部斜面に塵付着。	良	良	淡黄褐色	1/10	
3	257	山茶瓶	瓶	SB08 (CV21 P2)	14.2	-	-	口縁部コロナデ。左回転。	良	良	淡褐色反色	1/9	
4	333	山茶瓶	瓶	SB09 (GU1 P3)	-	(6.0)	-	口縁部コロナデ。高台ハリヅケ。底部外周ヨコナデ。	良	良	淡灰色	1/6	
5	347	山茶瓶	瓶	SB104 (CY1 P2)	13.0	5.2	5.5	口縁部コロナデ。右回転。	~2mm砂粒 含む	良	白灰色	1/5	
6	318	山茶瓶	瓶	SB105 (FB16 P2)	13.6	6.1	5.3	口縁部コロナデ。高台ハリヅケ。底部外周ヨコハサゲ。底部外周ヨコナデ。	~2mm砂粒 含む	良	淡灰色	1/10	
7	319	山茶瓶	瓶	SB93 (CV10 P1)	(14.4)	-	-	口縁部コロナデ。	良	良	灰白色(内) 暗灰色(外)	1/4	
8	487	山茶瓶	瓶	SB100 (CV17 P6)	(11.9)	-	-	口縁部コロナデ。	~2mm砂粒 含む	良	淡灰色	1/6	
9	316	青磁	碗	SB106 (CW17 P3)	(14.2)	-	-	口縁部コロナデ。	良	良	暗緑色(糊) 淡灰色(胎土)	1/10	
10	338	陶器	鉢	SB03 (GU11 P2)	(31.0)	-	-	口縁部コロナデ。	粗良	良	灰色	1/29	
11	492	山茶瓶	瓶	SE91 (CR16 青芦)	(11.8)	-	-	口縁部コロナデ。	~2mm砂粒 含む	良	淡黄褐色	1/12	
12	491	山茶瓶	瓶	SE91 (CR16 青芦)	-	5.2	-	体部コロナデ。右回転。	~2mm砂粒 多く含む	良	淡青灰色	1/5	
13	493	山茶瓶	瓶	SE91 (CR16 青芦)	-	(5.2)	-	体部コロナデ。高台剥離。底部外周ヨコハサゲ。	微細粒 多く含む	良	淡青灰色	1/7	
14	495	山茶瓶	瓶	SE91 (CR16 青芦)	-	5.6	-	体部コロナデ。右回転。	微細粒 多く含む	良	淡灰色	1/4	
15													欠番
16	422	山茶瓶	瓶	SK95 (GU10 SK1)	-	8.6	-	高台ハリヅケ。底部外周ヨコハサゲ。	良	良	淡青灰色	1/6	
17	302	瓦輪廻器	器	SK95 (CV1 土状1)	-	8.2	-	体部一部コロナデ。	粗良	良	淡青灰色	1/3	
18	303	山茶瓶	瓶	SK95 (CV10 土状1)	-	6.4	-	体部一部コロナデ。高台ハリヅケ。底部外周ヨコハサゲ。底部外周ヨコナデ。	~2mm砂粒 少く含む	良	淡灰色	高台 残存	
19	418	土器部	羽釜	SK101 (CV16 土状1)	(21.4)	-	-	口縁部コロナデ。調節ハリヅケヨコナデ。底部外周ヨコハサゲ。	良	良	淡黄褐色	1/14	
20	415	山茶瓶	瓶	SK102 (CV10 土状2)	-	7.2	-	体部一部コロナデ。高台ハリヅケ。底部外周ヨコハサゲ。	微細粒 多く含む	良	淡灰色	2/3	
21	417	山茶瓶	瓶	SK103 (CW16 土状1)	8.3	5.7	1.85	口縁部コロナデ。右回転。	良	良	淡灰色	1/3	
22	412	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1)	6.6	-	0.8	口縁部コロナデ。	良	良	淡黄褐色	1/3	
23	413	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1)	7.4	-	0.8	体部一部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	良	良	黃褐色	1/2	
24	402	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1)	7.0	-	1.2	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	良	良	淡黃褐色	1/5	
25	408	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1 №8)	7.8	-	1.4	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	良	良	淡褐色	完形	
26	411	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1)	7.8	-	1.4	口縁部コロナデ。	良	良	黃褐色	2/3	
27	410	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1)	8.4	-	1.5	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	良	良	黃褐色	1/2	
28	304	土器部	小皿	SK98 (CV14 土状1)	8.2	-	1.5	口縁部コロナデ。	粗良	良	淡黃褐色	1/3	
29	404	土器部	皿	SK98 (CV14 土状1)	11.0	-	2.3	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	良	良	黃褐色	2/3	
30	405	土器部	皿	SK98 (CV14 土状1)	11.6	-	2.0	口縁部コロナデ。	良	良	淡黃褐色	1/6	
31	325	土器部	皿	SK98 (CV1 土状 №12)	11.4	-	2.5	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。底部外周ヨコエ。	良	良	白褐斑(内) 黃褐色(外)	1/2	
32	414	土器部	皿	SK98 (CV14 土状1)	11.8	-	(2.3)	口縁部コロナデ。底部外周ヨコエ。	良	良	淡黃褐色	1/3	
33	324	土器部	皿	SK98 (CV14 土状1 №1)	11.9	-	3.3	口縁部コロナデ。底部外周ヨコエ。底部外周ヨコナデ。	良	良	淡黃褐色	1/2	
34	340	土器部	盤	SK98 (CV14 土状1 №2)	14.8	-	9.6	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	良	良	淡褐色	2/3	
35	301	山茶瓶	瓶	SK98 (CV14 土状1)	-	6.0	-	底部外周ヨコナデ。高台ハリヅケ。	粗良	良	灰白色	泥質外 泥塞書	
36	401	山茶瓶	瓶	SK98 (CV1 土状1)	-	6.6	-	口縁部コロナデ。高台ハリヅケ。底部外周ヨコナデ。	良	良	淡青灰色	1/3	
37	330	山茶瓶	瓶	SD94 (CO12 潟1)	12.8	5.5	5.5	口縁部コロナデ。高台ハリヅケ。底部外周ヨコナデ。	~2mm砂粒 多く含む	良	灰白色	1/2	
38	307	山茶瓶	瓶	SD94 (CO12 潟1)	13.6	6.0	4.8~	口縁部コロナデ。右回転。	~5mm砂粒 含む	良	淡灰色	注記 完形	
39	481	土器部	小皿	SD97 (CO14 土状1)	6.6	-	1.2	口縁部コロナデ。	良	良	淡黃褐色	1/5	
40	389	土器部	小皿	SD97 (CS1 大溝 №18)	9.4	-	1.2	体部一部に断面剥離し、調節不順。	良	良	淡赤褐色	1/10	
41	390	土器部	皿	SD97 (CS1 大溝 №15)	12.2	-	2.2	全体に断面剥離し、調節不順。	良	良	淡褐色	1/4	
42	556	土器部	皿	SD97 (DR1 大溝 №12)	10.4	-	2.8	口縁部コロナデ。	良	良	黃褐色	口縫 4/5	
43													欠番
44	314	土器部	皿	SD97 (DR1 大溝 №6)	12.0	-	3.0	口縁部コロナデ。底部外周ヨコエ。	良	良	淡黃褐色	完形	
45	328	土器部	羽釜	SD97 (T13 大溝)	20.6	-	-	口縁部コロナデ。底部外周ヨコエ。	黃褐色少量	良	淡褐色	1/9	
46	370	山茶瓶	山皿	SD97 (CW1 大溝)	7.4	4.4	1.2~ 1.5	口縁部コロナデ。底部外周ヨコナデ。	~3mm砂粒 含む	良	淡灰色	注記 完形	

付表11 大森遺跡C地区出土遺物観察表

報告 No.	整理 No.	種類	器種	出土遺物名 出土位置		法量 (cm) 口径	底径	高さ	調査・注記の特徴			土色	焼成	色調	残存度	備考
				口径	底径				底面	側面	高さ					
47	373	山茶瓶	山皿	SD07 (CR13 大溝1)	8.4	4.6	2.3		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削痕	良	良	淡灰色	1/4			
48	227	山茶瓶	山皿	SD07 (CS11 大溝 No.14)	7.8	4.5	1.75		口縁部一体型クロナデ、 底部外周回転切削痕	~3mm砂粒 含む	良	灰褐色	2/3			
49	326	山茶瓶	山皿	SD07 (CT10 大溝1)	8.0	5.1	1.6		口縁部一体型クロナデ(左回転)、 底部外周回転切削痕	~3mm砂粒 含む	良	灰褐色	3/5			
50	341	山茶瓶	瓶	SD07 (CR12 大溝1)	15.8	6.8	5.7		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 裏台面ハリツケ、底部外周回転切削痕、 輪形容	~5mm砂粒 含む	良	淡灰色	1/4			
51	315	山茶瓶	瓶	SD07 (CR13 大溝 No.10)	12.8	5.4	5.7		口縁部一体型クロナデ(左回転)、 底部外周回転切削痕、 裏台面ハリツケ	~4mm砂粒 含む	良	淡灰褐色(内 外白灰色)外 灰褐色	ほぼ 完形			
52	320	山茶瓶	瓶	SD07 (CR11 大溝 No.5)	13.0	5.9	4.8		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削痕	~7mm砂粒 含む	良	淡灰色	3/4			
53	284	山茶瓶	瓶	SD07 (CR13 大溝1 No.5)	12.6	6.0	4.0		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削痕	~8mm砂粒 少量含む	良	淡灰色	2/3			
54																
55	366	山茶瓶	瓶	SD07 (CR13 大溝1)	13.4	5.7	5.2		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 裏台面ハリツケ、底部外周回転切削痕	~3mm砂粒 多く含む	良	淡黄灰色	1/6			
56	322	山茶瓶	瓶	SD07 (CR13 大溝 No.6)	13.4	5.2	5.0		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削、 輪形容	砂粒含む	良	白灰色(内 外白灰色)外 灰褐色	ほぼ 完形			
57	321	山茶瓶	瓶	SD07 (CX13 大溝)	12.5	5.8	5.95		口縁部一体型クロナデ(左回転)、 裏台面ハリツケ、底部外周回転切削痕	~2mm砂粒 含む	良	淡褐色	2/3			
58	284	山茶瓶	瓶	SD07 (CU12 大溝1)	-	6.8	5.2~		口縁部ハリツケ、高台ハリツケ、 底部外周回転切削痕	砂粒含 多く含む	良	淡灰褐色	1/3			
59	380	山茶瓶	瓶	SD07 (CW12 大溝1)	-	5.2			口縁部ハリツケ(ナデ)、 底部外周回転切削痕	~3mm砂粒 含む	良	淡灰褐色	底部 完形			
60	289	陶器	鉢	SD06 (CS13 大溝 No.16)	(26.2)	-			口縁部一体型クロナデ	良	良	淡灰褐色(内 外白灰色)外 灰褐色	1/9			
61	309	凝灰	鉢	SD06 (CU14 濃3)	29.8	9.2	12.3		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削	~5mm砂粒 含む	良	淡灰色	1/4			
62	261	陶器	鉢	SD07 (CW12 大溝1)	(27.2)	-			口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削	良	良	暗褐色(内 外褐色)外 灰褐色	1/10			
63	288	青磁	碗	SD07 (CR13 大溝1)	(18.0)	-			口縁部ハリツケ(ナデ)、底部外周回転切削	糠粒含 多く含む	良	淡灰褐色	1/10			
64	306	白磁	碗	SD03 (CR10 黄地)	-	5.5			底部外周回転切削、 裏台面ハリツケ	糠粒含 多く含む	良	白灰褐色	1/2			
65	462	山茶瓶	瓶	SD09 (CX14 濃1)	-	5.9			底部外周回転切削痕	糠粒含 多く含む	良	淡灰褐色	底部 完形			
66	468	山茶瓶	瓶	SD07 (CN14 濃1)	-	6.7			底部ハリツケ、高台ハリツケ、瓶底	糠粒含 多く含む	良	淡灰褐色	1/2			
67	458	土師器	小皿	SD06 (CU14 濃3)	8.3	-		(15)	口縁部一体型クロナデ	良	良	淡黄褐色	1/7			
68	459	土師器	皿	SD06 (CU14 濃3)	10.4	-			口縁部ハリツケ	良	良	淡黄褐色	1/8			
69	472	山茶瓶	山皿	SD06 (CO15 濃3)	8.5	7.2	2.1		口縁部一体型クロナデ、 底部外周回転切削	良	良	淡黄褐色	1/8			
70	471	山茶瓶	山皿	SD06 (CO15 濃3)	8.2	5.6	1.5		口縁部一体型クロナデ(左回転)、 底部外周回転切削痕	~3mm砂粒 含む	良	淡黄褐色	1/2			
71	470	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	12.4	5.4	4.9		底部ハリツケ(ナデ)、底部内面ナデ、 底部外周回転切削痕	~5mm砂粒 多く含む	良	淡黄褐色	1/10			
72	479	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	13.4	6.6	5.0		底部ハリツケ(ナデ)、底部外周回転切削	糠粒含 多く含む	良	淡黄褐色	1/7			
73	469	山茶瓶	瓶	SD06 (CT14 濃3)	13.5	-			底部ハリツケ(左回転)、 全体ハリツケ	~4mm砂粒 含む	良	淡灰褐色	口縫型 薄厚			
74	502	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	13.6	-			口縁部ハリツケ(ナデ)、底部外周切削	~2mm砂粒 含む	良	淡黄褐色	1/5			
75	476	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	-	7.2			底部ハリツケ(ナデ)、高台ハリツケ、 底部外周切削	糠粒含 多く含む	良	淡灰褐色	1/2			
76	480	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	-	7.0			底部ハリツケ(右回転)、高台ハリツケ、 底部外周回転切削、瓶底	糠粒含 多く含む	良	淡灰褐色	2/3			
77	457	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ14 濃3)	-	4.4			底部ハリツケ(右回転)、底部内面ナデ、 底部外周回転切削痕	~2mm砂粒 含む	良	淡黄褐色	底部 完形			
78	478	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	-	5.9			底部ハリツケ(右回転)、底部内面ナデ、 底部外周切削痕	~2mm砂粒 含む	良	淡灰褐色	1/4			
79	475	山茶瓶	瓶	SD06 (CQ15 濃3)	-	5.8			底部ハリツケ(右回転)、 底部外周回転切削痕	~2mm砂粒 含む	良	淡黄褐色	1/2			
80	331	青磁	碗	SD06 (CT14 濃3)	-	5.2			底部外周面ハリツケ、高台ハリツケ	糠粒含 多く含む	良	淡灰褐色	1/3			
81	432	土師器	小皿	SD10 (FA11 濃1)	8.0	-	1.5		口縁部一体型コロナデ、 底部外周回転切削痕不明確	良	良	淡赤褐色	1/4			
82	433	土師器	小皿	SD10 (FA11 濃1)	9.0	-	1.3		口縁部一体型コロナデ、 底部外周面オカリナ・ナデ	良	良	淡黄褐色	1/5			
83	437	土師器	小皿	SD10 (FB10 濃1)	9.4	-	1.2		口縁部一定部コロナデ、 底部外周面オカリナ・ナデ	良	良	淡黄褐色	1/6			
84	443	土師器	皿	SD10 (FA10 濃1)	-	5.6			底部ハリツケ(ナデ)、 底部外周回転切削痕	良	良	淡褐色	1/2			
85	438	土師器	皿	SD10 (FA10 濃1)	-	4.8			底部ハリツケ(ナデ)、 底部外周切削痕	良	良	淡褐色	2/3			
86	311	土師器	台付皿	SD06 (FA10 濃1)	17.6	8.4	4.05		口縁部ハリツケ(ナデ)、 底部内面ナデ、高台ハリツケ	糠粒含 多く含む	良	淡褐色(内 外白灰色)外 灰褐色	2/3			
87	434	土師器	盤	SD10 (FA11 濃1)	15.6	-			口縁部一部型コロナデ、質部以下ハケ?、 質部のため底面粗面登出隙	糠粒含 多く含む	良	淡黄褐色	1/5			
88	313	山茶瓶	瓶	SD10 (FA11 濃1)	17.0	-			口縁部一体型クロナデ、ナデ、自然釉	良	良	反綠色(内 外白灰色)外 灰褐色	1/4			
89	446	黒色土器	瓶	SD10 (FA12 濃1)	-	6.4			底部内面ナデ(ナデ)へと引け、 底部外周回転切削	糠粒含 多く含む	良	黑色(内 外白灰色)外 灰褐色	1/5			
90	312	山茶瓶	瓶	SD10 (FB12 B12 濃1)	17.4	7.4	5.95		口縁部ハリツケ(ナデ)、高台ハリツケ、 底部外周切削、粗面	良	良	淡褐色	1/5			
91	453	山茶瓶	瓶	SD10 (FA10 濃1)	17.2	8.0	4.95		口縁部一体型クロナデ(ナデ)、 底部内面ナデ切削	良	良	淡灰褐色	1/6			
92	449	山茶瓶	瓶	SD10 (FA10 濃1)	16.7	6.8	4.9		口縁部一体型クロナデ(右回転)、 底部外周回転切削、粗面	良	良	淡灰褐色	1/3			

付表11 大蔵遺跡C地区出土遺物観察表

樹種	物理性	種類	器種	出土遺構及び出土品目			法量(cm) 口径 厚さ 断面	調査・往來の特徴			地土	焼成	色調	残存度	備考
				出土地点	出土品目	回数		地盤	地盤	地盤					
53	329	山茶樹	根	SD109 (FA10 1箇)	16.0	7.3	5.2	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ、底部外回転粘切痕	良	良	深灰色	1/8			
94	323	山茶樹	根	SD109 (FA10 1箇)	-	8.8	-	全体形クロウダ、高台ハリツケ、 底部外回転粘切痕ナシ、輪郭直	良	良	深灰色	2/3	底部外回 (三)葉裏		
95	430	山茶樹	山皿	SD109 (FB14 1箇)	7.6	4.8	2.0	口縁部-全体形のコナ子、 底部外回転粘切痕	良	良	暗灰色	1/2			
96	431	山茶樹	山皿	SD109 (FB14 1箇)	8.4	4.8	1.9	口縁部-全体形のコナ子、 底部外回転粘切痕	~2m砂利 含む	良	青灰色	1/3			
97	427	瀬戸	瓶	SD109 (FA10 1箇)	-	15.0	-	全体形下部-灰土上に焼成-ヨコナ子、 高台ハリツケ	良	良	青黃色(内) 暗緑色(外)	1/4			
98	456	電電	瓶	SD109 (FB14 1箇)	(30.8)	-	-	口縁部コロナ子、 口縁部内面に高台輪	細砂粒含む	暗褐色(内) 胡麻色(外)	1/18				
99	210	白磁	碗	SD109 (FA12 1箇)	16.6	-	-	口縁部-全体形のコナ子	良	良	青灰色(内) 白灰色(外)	1/7			
100	423	土師器	小皿	SK111 (FC22 土丸)	8.2	-	1.8	口縁部コロナ子、 全体形-底部外回転オサエ-ナ子	良	良	暗褐色	1/5			
101	425	土師器	小皿	SK111 (FC22 土丸)	9.4	-	1.2	口縁部コロナ子、 全体形-底部外回転オサエ-ナ子	良	良	暗褐色	1/7			
102	317	山茶樹	根	合金層 (FC22 土丸)	145.5 15.6	7.1	5.3	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ、底部外回転粘切痕、輪郭直	砂粒含む	良	深灰色	ほぼ 完形			
103	338	山茶樹	山皿	合金層 (CW16 PE)	8.3	4.7	2.1	口縁部-全体形のコナ子、底部外回転粘切痕、 輪郭直	砂粒 少量含む	良	深灰色	ほぼ 完形			
104	364	土師器	羽釜	合金層 (CR15 PI)	18.2	-	-	口縁部-調理コロナ子、 底部外回転オサエ-ナ子	良	良	青黃色(内) 暗褐色(外)	1/6			
105	349	山茶樹	根	SD109 (FB18 PI)	15.0	6.4	4.5	口縁部コロナ子、 全体形-底部外回転オサエ-ナ子	良	良	青灰色	1/10			
106	358	山茶樹	根	合金層 (CX18 PI)	13.0	5.5	4.9	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 底部外回転粘切痕	~2m砂利 含む	良	青灰色	1/5			
107	343	山茶樹	根	SRB8 (CQ14 PI)	16.0	6.7	6.0	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ	良	良	白灰色	1/3			
108	352	山茶樹	山皿	合金層 (CU14 PI)	9.0	4.9	2.6	口縁部-全体形のコナ子、高台ハリツケ、 輪郭直	良	良	暗褐色	1/8			
109	342	黒色土器	小皿	SRB8 (CU14 PI)	9.6	5.0	3.5	口縁部コロナ子、 全体形-底部外回転オサエ-ナ子	良	良	明褐色(内) 暗褐色(外)	1/6			
110	RF21	黒色土器	根	大斎試用 G10	15.2	5.9	7.9	口縁部コロナ子、体部直面へ高台、 全体形外回転ハリツケ(後)、系高台ハリツケ	~100砂利 含む	良	暗褐色	3/4			
111	RF21	黒色土器	根	大斎試用 G10	16.8	7.0	5.8	口縁部コロナ子、体部直面へ高台、 系高台ハリツケ(後)へ高台(左)、高台ハリツケ	細砂粒含む	良	黑色(内) 暗褐色(外)	1/2			
112	RF24	山茶樹	根	大斎試用 3	16.8	8.5	4.9	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ、底部外回転粘切痕	良	良	暗褐色	1/3			
113	RF25	山茶樹	根	大斎試用 3	16.0	8.6	5.6	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ、底部外回転粘切痕	~100砂利 含む	良	白灰色	2/3			
114	RF26	山茶樹	山皿	新斎試用 2	8.5~ 9.0	4.1	1.5	口縁部コロナ子、高台ハリツケ、 全体形-底部外回転オサエ-ナ子	良	良	白灰色	定形			
115	324	土師器	小皿	合金層 (FD21 1箇)	8.9	-	1.5	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 底部外回転オサエ-ナ子	良	良	暗褐色	1/6			
116	330	黒色土器	根	CG10 1箇	-	5.0	-	細胞ロクロナ子、高台ハリツケ	良	良	黑色(内) 黑色(外)	1/2			
117	335	灰陶器	裏	合金層 (FC14 土)	-	6.0	-	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ、底部外回転粘切痕	良	良	暗褐色	1/3			
118	517	山茶樹	根	合金層 (CU14 土)	12.4~ (CU14 土)	5.0	5.4	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 高台ハリツケ、底部外回転粘切痕	~5m砂利 含む	良	青黃色	ほぼ 完形			
119	542	山茶樹	根	合金層 (FB15 1箇)	12.0	6.0	5.0	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 底部外回転粘切痕	細砂粒 含む	良	青黃色	1/5			
120	546	山茶樹	根	合金層 (FB12 1箇)	17.0	8.8	5.1	口縁部-全体形のコナ子(右回転)、 底部外回転粘切痕	良	良	暗褐色	1/2			
121	539	土師器	裏	合金層 (FB13 1箇)	18.8	-	-	口縁部-全体形のコナ子、 底部内面へ状工型によるナデ	~6m砂利 含む	良	青黃色(内) 暗褐色(外)	1/8			
122	548	土師器	裏	合金層 (FB12 1箇)	20.0	-	-	口縁部-全体形コロナ子、 底部内面へ状工型によるナデ	細砂粒含む	良	暗褐色	1/10			
123	507	陶器	天目茶碗	合金層 (GP15 1箇)	-	3.6	-	高台ハリツケ	良	良	黒褐色(内) 青黃色(外)	1/2			
124	518	白磁	碗	合金層 (CU14 1箇)	-	5.8	-	全体形ロクロナ子、 底部外回転ハリツケ	良	良	青黃色(内) 青灰色(外)	1/2			
125	542	電電	碗	合金層 (FB15 1箇)	(26.2)	-	-	口縁部エカリエ、高台コナ子	良	良	暗褐色	1/10			
126	514	電電	裏	合金層 (CK11 1箇)	40.0	-	-	口縁部状況欠損、ヨコナ子	良	良	暗褐色	1/3			
127	545	磁器	染付盒	合金層 (CU14 1箇)	-	8.2	-	底部内面-墨ロクロナ子	良	良	青白色(染付)	黒褐色 錆	伊万里		
128	547	磁器	染付盒	合金層 (FA12 1箇)	21.4	10.2	7.3	底部内面-墨ロクロナ子	良	良	青白色(染付)	1/2	伊万里		

付表11 大藪遺跡C地区出土遺物觀察表

報告 年	測量 年	種類	器種	出土遺構名 及出土地點		法量(cm) 口径 周長 壁厚	調査・注目特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考		
				直徑	周長									
1	82	灰釉陶器	瓶	SD10 (B1-24 P1)	16.6	-	口縁部クロナデ	良	良	淡灰色	小片			
2	73	灰釉陶器	瓶	SD10 (B1-20 P1)	(15.1)	-	口縁部クロナデ、 底部外側下部ヘラケズ	良	良	白灰色	小片			
3	38	青磁	碗	SD13 (B6-4 P1)	-	5.4	高台部クリナデ、高台のみ残存、 底部内面周辺を二次的に削離加工痕	良	良	淡褐色	高台 残存			
4	80	土師器	小皿	SD30 (B7-11 P1)	9.2	-	0.6	口縁部コロナデ	良	良	淡褐色	小片		
5	67	土師器	盤	SK5 (B1-7 SK1)	21.6	-	口縁部オリエヌ、ヨコナデ、 腹部外側凹凸	微細粒 多く含む	やや軟	淡褐色	1/7			
6	84	山茶瓶	瓶	SK5 (B1-7 SK1)	14.1	-	口縁部クロナデ	粗糲	良	淡灰色	小片			
7	68	山茶瓶	瓶	SK5 (B1 SK1)	(15.0)	-	口縁部クロナデ	良	良	淡褐色	1/12			
8	60	山茶瓶	瓶	SK5 (B1-7 SK1)	-	7.2	底部外側クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側切離・削離	~0.4mm砂粒 含む	良	淡褐色	1/3			
9	58	山茶瓶	瓶	SD8 (B1-22 SD2)	(17.0)	-	口縁部～全体クロナデ	微細粒 多く含む	良	淡白色	1/12			
10	66	山茶瓶	瓶	SD8 (B1-22 SD1)	-	6.7	底部外側クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側切離・削離	微細粒 多く含む	良	暗灰白色	1/5			
11	59	山茶瓶	山皿	SD8 (B1-21 SD1)	(8.0)	-	口縁部クロナデ	微細粒 多く含む	良	淡白色	1/5			
12	69	鉄製品	刀子	SD24 (B1-12 SD1)	長 9.0	1.0	刀子の刃部、全体に錆化進む	刀子の刃部、全体に錆化進む	刀子の刃部、全体に錆化進む	刀子の刃部、全体に錆化進む	刀子の刃部、全体に錆化進む	刀子の刃部、全体に錆化進む	刀子の刃部、全体に錆化進む	
13	6	山茶瓶	瓶	SK3 (A5-25 SK1 No.2)	13.0	6.0	4.4	口縁部～全体クロナデ(右回転)、 底部外側二方向凹凸、底部外側切離	~5mm砂粒 含む	良	淡灰色	ほぼ 完形		
14	7	山茶瓶	瓶	SK3 (A5-25 SK1 No.3)	12.6	5.8	5.0	口縁部～全体クロナデ、底部内面二方向凹凸、 底部外側切離(左回転)	~4mm砂粒 含む	良	淡灰色	2/3		
15	8	山茶瓶	瓶	SK3 (A5-25 SK1 No.4)	13.1	5.9	4.5	口縁部～全体クロナデ、 底部内面二方向凹凸、底部外側切離	~7mm砂粒 含む	良	灰色	1/2		
16	9	山茶瓶	瓶	SK3 (A5-25 SK1 No.5)	13.9	6.1	5.3	口縁部～全体クロナデ、底部内面二方向凹凸、 底部外側切離(左回転)	~5mm砂粒 含む	良	淡灰色	1/4		
17	5	鉄製品	鎌	SK3 (A5-25 SK1 No.1)	刃部 21.0	5.4	11.0	刃部(左回転)、刃部は折れ 全面(左上方)に使用痕、裏面剥離、 砂岩系						
18	10	石製品	砥石	SK3 (A5-25 SK1)	10.6	5.6	2.9	一面(正面)に研磨面、裏面剥離、 砂岩系						
19	10	石製品	砥石	SK3 (A5-25 SK1 No.6)	19.5	-	7.4	~3.0	三面使用痕		刃部(左回転)			
20	42	反転陶器	瓶	SD23 (B7-5 M1)	-	7.5	-	底部外側クリナデ、高台ハリツケ、 瓶底	良	良	淡灰色	1/2		
21	43	山茶瓶	瓶	SD23 (B2 大溝)	-	6.2	-	底部外側クリナデ、高台ハリツケ、 瓶底	良	良	淡灰色	1/4		
22	45	常滑	壺?	SD23 (2-5 大溝)	-	8.4	-	底部外側クリナデ(右回転)、 底部外側切離	良	良	淡褐色	小片		
23	63	山茶瓶	瓶	SD24 (B6-13 SD1)	-	7.1	-	底部外側クリナデ、 底部外側切離	微細粒 多く含む	良	淡灰色	1/7		
24	22	山茶瓶	山皿	SD24 (B12-9 M1)	8.8	5.6	1.8	口縁部～全体クリナデ、 底部外側切離	良	良	淡黃灰色	1/3		
25	57	反転陶器	平盤	SD26 (B1-22 SD 2D1)	(27.6)	-	-	口縁部クロナデ	良	良	淡褐色	小片		
26	66	縫文土器	鉢	包含層 (SD23 (B2-10 M1))	-	-	-	外縁にヨピオサエによる審査痕	粗糲	良	淡褐色	小片		
27	4	土師器	台付皿	包含層 (B6-4 包)	8.9	4.8	2.4	口縁部～全体クリナデ、 高台ハリツケ、ヨコナデ	露母含む	良	淡褐色	1/2		
28	3	土師器	台付皿	包含層 (B6-4 包)	9.6	4.6	2.5	口縁部～全体クリナデ、 高台ハリツケ、ヨコナデ	~2mm砂粒 含む	良	赤褐色	ほぼ 完形		
29	13	土師器	台付皿	包含層 (B6-4 包)	10.0	5.5	3.3	口縁部～全体クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側面	粗糲	良	淡褐色	1/2		
30	14	土師器	台付皿	包含層 (B6-4 包)	10.6	5.8	3.6	口縁部～全体クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側面	粗糲	良	淡褐色	1/2		
31	24	土師器	鉢	包含層 (B6-4 包)	23.6	-	-	口縁部オサエ後ヨミナデ、 底部内面ヨミナデ、高台ハリツケ、 瓶底	微細粒 多く含む	良	淡褐色	小片		
32	11	反転陶器	瓶	包含層 (B1-13 包)	(14.0)	7.2	4.3	口縁部～全体クリナデ、 底部外側面	微細粒含む	良	淡灰色	1/3		
33	37	反転陶器	瓶	包含層 (B1-13 包)	-	8.6	-	木製輪印(左)、高台ハリツケ、 底部外側面	良	良	淡褐色	1/4		
34	36	反転陶器	瓶	包含層 (B6-4 包)	-	7.4	-	底部外側クリナデ、 底部外側切離	~3mm砂粒 含む	良	淡灰色	1/3		
35	71	反転陶器	壺?	包含層 (試 G2)	-	8.4	-	底部外側クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側切離	良	良	淡褐色	1/2		
36	34	白磁	皿	包含層 (A10-5 包)	(11.0)	-	2.4	口縁部～全体クリナデ、 底部外側クリナデ	良	良	淡褐色	小片		
37	32	土師器	小皿	包含層 (B1-1 包)	(7.6)	-	1.2	口縁部～全体クリナデ	微細粒含む	やや軟	淡褐色	1/3		
38	33	土師器	皿	包含層 (B1-7 包)	(10.4)	-	2.4	口縁部～全体クリナデ、 底部外側面	微細粒含む	やや軟	淡褐色	1/5		
39	19	土師器	皿	包含層 (B6-1 包)	(28.4)	-	-	口縁部ヨリエヌコナデ、 底部外側面ヨミナデ	微細粒含む	やや軟	淡褐色(内) 淡褐色(外)	1/6		
40	53	土師器	皿	包含層 (B6-4 包)	(25.0)	-	2.4	口縁部～全体クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側面	~2mm砂粒 含む	良	淡褐色(内) 淡褐色(外)	小片		
41	47	山茶瓶	瓶	包含層 (B1-16 包)	(17.6)	8.8	5.2	口縁部～全体クリナデ、高台ハリツケ、 底部外側面	~2mm砂粒 含む	良	淡褐色(内)	小片		
42	16	山茶瓶	瓶	包含層 (B1-16 包)	(14.0)	6.0	4.6	口縁部～全体クリナデ(右回転)、 底部外側面	~4mm砂粒 含む	良	淡褐色(内)	1/5		
43	39	山茶瓶	瓶	包含層 (B1-17 包)	-	7.4	-	木製輪印(左)、高台ハリツケ、 底部外側面	~2mm砂粒 含む	良	淡褐色	底部外 焼却	底部外 焼却	
44	1	山茶瓶	山皿	包含層 (A10-20 包)	7.4	3.8	2.5	口縁部ヨリエヌコナデ、 底部外側面	微細粒含む	良	灰色	完形		
45	2	山茶瓶	山皿	包含層 (B1-13 包)	(7.4)	4.0	2.1	口縁部～全体クリナデ(右回転)、 底部外側面	~3mm砂粒 含む	良	淡褐色(内) 淡褐色(外)	1/4		
46	35	青磁	碗	包含層 (A10-9 包)	(14.6)	-	-	口縁部～全体クリナデ	良	良	淡褐色	小片		
47	55	土師器	羽釜	包含層 (B7-12 包)	(24.8)	-	-	口縁部ヨリエヌコナデ、 底部内面穿孔	良	良	淡褐色	小片		
48	21	土師器	羽釜	包含層 (B11-13 包)	(23.6)	-	-	口縁部ヨリエヌコナデ、 底部内面穿孔	微細粒含む	やや軟	淡褐色	1/5		
49	23	常滑	甕	包含層 (B7-14 包)	(24.5)	-	-	口縁部ヨリエヌコナデ、 底部内面オサエ・ヨコナデ、 外縁オサエ	~2mm砂粒 含む	良	赤褐色	小片		

付表12 堀越遺跡出土遺物觀察表

付 篇

付篇1 大蔵遺跡出土山茶椀の胎土分析

1 はじめに

窺跡出土山茶椀の分析データが集積されるにつれて、山茶碗胎土の化学特性が次第に明らかになってきた。東海地方の須恵器は、一般的に Ca, Fe, Sr, Na 量が少ないという特性をもつことは知られているが、山茶椀にも同様な特性があることが明らかにされた。しかし、東海地方全域にわたって一様な特性をもっているわけではなく、瀬戸群は猿投群、常滑群、渥美群とは少し特性が異なり、それぞれ、相互意識できることがわかった。これに対し、猿投群と常滑群とは特性が類似しており、相互意識は困難であった。

このように窺跡出土山茶椀の化学特性がわかってきる段階で、窺跡出土山茶椀の胎土分析も進行し始めた。本報告では、大蔵遺跡出土山茶椀の蛍光 X 線分析の結果について報告する。

2 分析結果

40点の山茶椀の分析表は表2にまとめられている。また、母集団として、瀬戸群、猿投群、常滑群、岡山3号窯、湖西群を選び、各母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値を表3に示してある。計算に使用した因子は、K, Ca, Rb, Sr の四因子である。東海地域内の窯群間の相互識別には Fe, Na 因子は余り有効でないので使用しなかった。産地同定のため、母集団への帰属条件として、D(母集団) ≤ 10 を採用した。表3をみると、No.1 の試料については、この条件を満足するのは猿投群と常滑群である。産地候補地として両群をとり上げた。いまのところ、両群にいずれが産地であるかを判断するデータはない。また、No.2 のように、D ≤ 10 を満足する母集団が一つもないときは産地不明としておいた。以下、同様にして産地推定を行った。

資料番号	名称	地区	遺構	出土年月日	登録番号	資料番号	名称	地区	遺構	出土年月日	登録番号
1	山茶椀	B	C T3 P1	890728	1	21	山茶椀	C F A10 溝1		890922	329
2	小椀	B	C T4 P2	890731	3	22	山皿	C C W16 P8		891020	338
3	山皿	B	C U5 大土坑		32	23	山茶椀	C C Q14 P2		891006	343
4	山皿	B	C U5 大土坑	890907	34	24	山茶椀	C F B18 P1		891023	349
5	山皿	B	C U5 大土坑		35	25	山茶椀	C C X18 P1		891023	358
6	山茶椀	B	C U5 大土坑	890907	37	26	山皿	C C W12 大溝		890927	370
7	山茶椀	B	C U5 大土坑	890907	38	27	山皿	C C R13 大溝		891005	373
8	山茶椀	B	C U5 大土坑	890907	41	28	山皿	C C Q13 大溝		891005	374
9	山茶椀	B	C U5 大土坑	890911	44	29	山茶椀	C C R13 大溝		891013	394
10	山皿	B	C S3 P9	890804	91	30	鉢	C C S13 大溝		891013	399
11	山皿	B	C Q25 大溝	890909	133	31	山皿	C F B14 溝1		891006	430
12	小椀	B	C S3 P4	890803	155	32	山茶椀	C F A10 溝1		890925	449
13	山茶椀	B	C W5 P1	890828	162	33	山茶椀	C F A10 溝1		890925	453
14	山皿	B	C U5 大土坑	890821	234	34	山茶椀	A A U11 溝1		891102	701
15	山茶椀	B	C U5 大土坑	890829	239	35	山茶椀	A A P16 溝1		891120	857
16	山茶椀	B	C R3 P1	890804	277	36	山皿	A A T9 蔊3		891117	861
17	山茶椀	C	C O13 溝1	891006	307	37	山皿	A A T9 蔊3		891117	862
18	山皿	C	C P16 溝3	891012	308	38	山皿	A A T9 蔊3		891117	863
19	山茶椀	C	F A11 溝1	890926	313	39	山皿	A A T9 蔊3		891117	864
20	山茶椀	C	F B16 P3	891031	318	40	山茶椀	A A T8 蔊2		891117	869

表1 大蔵遺跡出土山茶碗胎土分析遺物一覧表

理屈からいえば、産地推定の作業はこれでおしまいである。数値計算だけでは心もとないのは考古学者ばかりではない。我々、自然学者でもこのままでは、不安である。まして、新しく提案された産地推定方法の試運転段階ではなおさらのことである。何か図表示できるものがあれば納得しやすい。そこで、この結果を Rb-Sr 分布図上で確かめることにした。この分布図ほど有効に地域差を表示する分布図は他にない。長年の須恵器の胎土分析の研究から、経験的に見つけられたものである。

図 2 には、常滑窯群の山茶椀の Rb-Sr 分布図を示してある。すべての点を包含するようにして、常滑領域を示してある。このように定性的に決めたので、この領域は定量的な意味をもたない。それでも、他の窯群の領域と比較する上には有効で、かつ、便利である。図 3 には猿投群の山茶椀の Rb-Sr 分布図を示してある。同様にして猿投領域はとてあるが、大部分が常滑領域と重複しており、相互識別が困難なことが予想される。

次に、産地推定された試料を Rb-Sr 分布図上にプロットしてみた。図 4 には、猿投窯群と推定された山茶椀の Rb-Sr 分布図を示す。3 点とも猿投領域には分布するが常滑領域には分布せず、計算による推定結果がよく理解できる。この結果、No.13, No.14, No.37 の 3 点は猿投群産と推定された。

図 5 には、重複して産地を推定された山茶椀の Rb-Sr 分布図を示してある。計算による産地推定の結果から予想されるように、すべて猿投領域と常滑領域が全く重複する領域に分布していることがわかる。1 点、常滑産と渥美産と重複して産地推定されたものもある。図上でもその推定結果がよく理解できる。

図 6 には、産地が推定できなかった山茶椀の Rb-Sr 分布図を示してある。このうち、No.3, No.5 の 2 点は計算の結果、渥美郡産と推定されたものであり、産地不明ではない。No.2, No.10, No.11, No.23 の 4 点は D(常滑群) 値が 10~15 であり、D(常滑群) ≤ 10 を満足しなかったから常滑産と判定しなかつただけで、常滑群産の可能性が大きい試料である。他の母集団への D 値はさらに大きい。

これに対して、Sr 量が少ない No.17, No.22, No.25, No.26, No.29 の 5 点からもわかる。このうち、No.17,

No.22, No.26, No.29 の 4 点は計算結果から瀬戸群産と推定されたものであり、No.25 も瀬戸群産の可能性をもつ試料である。

No.12 の小楕のみは、計算結果ではどの母集団にも対応しなかったことは図 5 からもよく理解できる。表 2 をみると、Fe, Na 因子でも他の試料とは異なっており、今回上げた母集団以外の窯の製品である。外部領域からの搬入品とみられるが、目下のところ、産地は不明である。

以上の結果、今回分析した大蔵遺跡の山茶椀の大部分は常滑群産か猿投群からの搬入品もあることもわかった。ほとんどすべてが東海産の山茶椀であることが確認されたが、唯一 1 点 No.12 のみは外部からの搬入品と推定された。

(三辻利一)

資料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.544	0.087	0.608	0.749	0.354	0.169
2	0.574	0.210	0.819	0.798	0.379	0.321
3	0.396	0.102	0.728	0.550	0.370	0.139
4	0.588	0.108	0.664	0.666	0.345	0.220
5	0.406	0.111	0.692	0.540	0.390	0.138
6	0.505	0.078	0.777	0.654	0.315	0.161
7	0.531	0.113	0.675	0.708	0.391	0.242
8	0.545	0.078	0.562	0.718	0.355	0.175
9	0.472	0.074	0.692	0.624	0.309	0.115
10	0.609	0.164	0.819	0.784	0.328	0.278
11	0.451	0.118	0.872	0.729	0.379	0.116
12	0.596	0.351	1.620	1.020	0.573	0.468
13	0.576	0.057	0.852	0.770	0.286	0.144
14	0.745	0.155	0.916	0.868	0.457	0.133
15	0.499	0.081	0.658	0.716	0.334	0.140
16	0.552	0.128	0.746	0.726	0.397	0.221
17	0.499	0.046	0.584	0.690	0.214	0.032
18	0.551	0.115	0.888	0.710	0.397	0.224
19	0.429	0.072	0.851	0.642	0.230	0.041
20	0.443	0.094	0.729	0.592	0.300	0.144
21	0.477	0.070	0.761	0.691	0.320	0.145
22	0.436	0.071	0.486	0.627	0.196	0.041
23	0.577	0.211	0.738	0.744	0.390	0.367
24	0.463	0.089	0.805	0.588	0.306	0.123
25	0.555	0.022	0.560	0.760	0.167	0.055
26	0.487	0.015	0.644	0.625	0.133	0.027
27	0.439	0.056	0.838	0.595	0.236	0.101
28	0.405	0.089	0.749	0.618	0.301	0.115
29	0.347	0.030	0.450	0.464	0.135	0.024
30	0.473	0.065	0.944	0.617	0.277	0.132
31	0.513	0.065	0.793	0.629	0.287	0.135
32	0.530	0.108	0.627	0.746	0.377	0.185
33	0.463	0.076	0.772	0.603	0.306	0.163
34	0.485	0.078	0.909	0.617	0.313	0.139
35	0.460	0.076	0.716	0.624	0.290	0.105
36	0.557	0.108	1.010	0.706	0.299	0.155
37	0.382	0.043	0.625	0.662	0.210	0.078
38	0.495	0.076	0.810	0.634	0.300	0.116
39	0.541	0.205	0.923	0.625	0.460	0.212
40	0.429	0.085	0.826	0.617	0.263	0.073

表 2 大蔵遺跡出土山茶椀胎土分析表

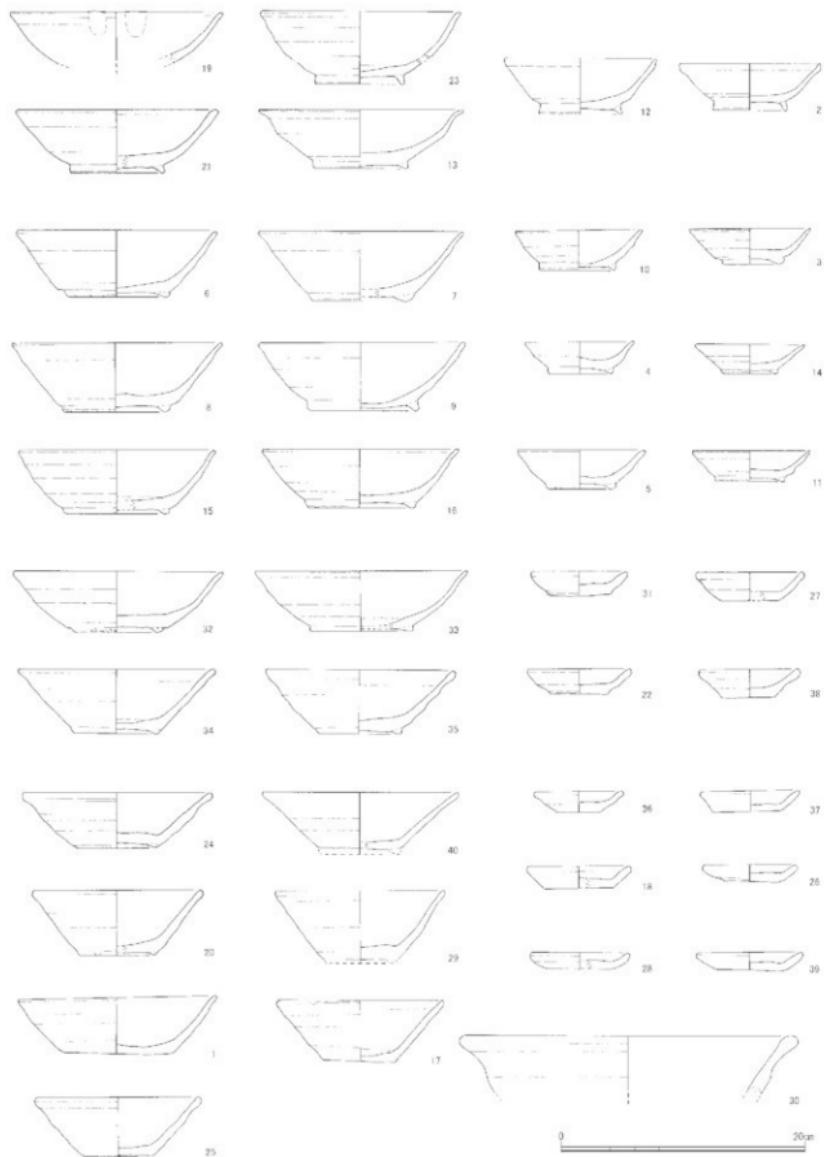


图1 大墓遺跡出土山茶椀胎土分析資料 (1:4)

資料番号	鹿児島	鹿児島	鹿児島	鹿児島	鹿児島	鹿児島	推定産地
1	25	1.8	3.1	0.1	0.0	0.0	鹿児島
2	26	0.9	3.0	0.1	0.0	0.0	鹿児島
3	198	1.7	2.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
4	171	1.8	2.0	0.1	0.0	0.0	鹿児島
5	52	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
6	98	2.2	2.1	0.1	0.0	0.0	鹿児島
7	24	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
8	29	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
9	21	1.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
10	52	1.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
11	20	1.8	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
12	202	1.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
13	113	1.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
14	21	1.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
15	21	1.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
16	6	0.9	2.0	0.1	0.0	0.0	鹿児島
17	1.0	0.6	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
18	9.2	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
19	20	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
20	20	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
21	20	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
22	9.1	1.1	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
23	21	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
24	21	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
25	14	2.0	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
26	20	2.0	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
27	20	2.0	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
28	21	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
29	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
30	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
31	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
32	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
33	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
34	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
35	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
36	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
37	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
38	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
39	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島
40	20	1.3	0.5	0.1	0.0	0.0	鹿児島

表3 大藪遺跡出土山茶椀の推定产地

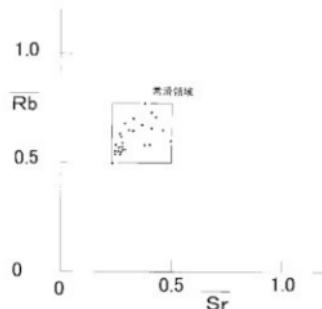


図2 常滑窯群 山茶椀 Rb-Sr分布図

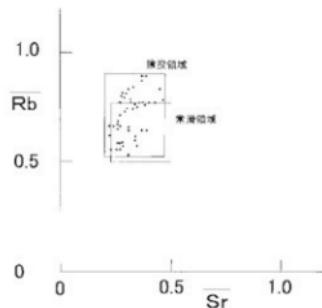


図3 猿投窯群 山茶椀 Rb-Sr分布図

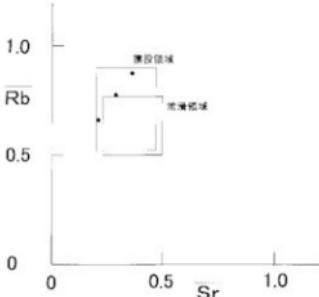


図4 猿投窯群と推定された山茶椀 Rb-Sr分布図

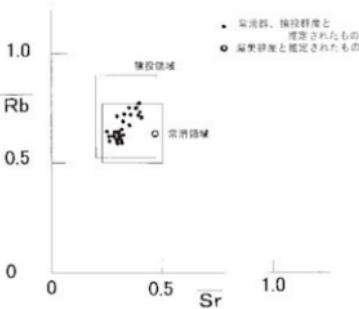


図5 重複して産地推定された山茶椀のRb-Sr分布図

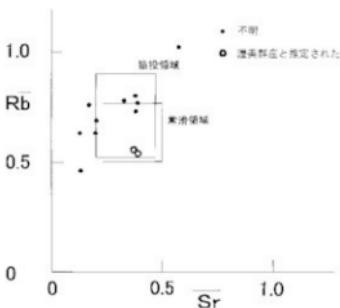


図6 不明と推定された山茶椀のRb-Sr分布図

付篇2 千本塚遺跡のプラントオパール分析

1 目的

千本塚遺跡は、国道1号亀山バイパス建設に伴つて発掘調査されている遺跡の一つで、現状では試掘調査まで行われている。今回は、本調査に先立ち稻やソバなどの栽培がどの時期まで遡れるかなど、農耕史に関する検討を行うことを主目的として花粉分析を行った。

2 試料

試料は、遺跡内の試掘調査地点の3地点の断面から採取された20点である(図1)。3地点とも下位に青色粘土あるいはシルトが堆積しており、その上位に黒灰色や暗灰色の粘土が堆積している。さらに上位では、鉄分やマンガンなどが沈着した砂まじりの粘土が堆積している。その鉄分などの沈着が認められる層位からは土師器・近世の陶器細片が出土しており、さらにその下部あるいは下位からは須恵器・山茶碗(高台)が出土している。

3 方法および結果の表示法

花粉・胞子化石の抽出は、以下の方法で行った。試料15gを秤量し、フッ化水素(HF)処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥下を行う。次に重液(ZnBr₂比重2.2)を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物の残渣について、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後、残渣をよく攪拌しマイクロビレットで適量をとり、グリセリンで封入しプレパラートを作成する。検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類(Taxa)について同定・計数した。

計数結果は一覧表(表1)で示し、古植生の検討を行うために花粉化石群集変遷図(図2)を作成した。花粉化石群集の変遷図の出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草花花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉数を除いた数をそれぞれ基数として百

分率で算出した。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

また、イネ科についてはノマルスキイ微分干渉装置を使用し、外膜の表面模様、発芽孔の形態、粒径などについて観察し、イネ属と他のイネ科に区分した。その結果は、鈴木・中村(1977)にしたがいイネ科花粉総数に対するイネ属花粉数の比率(イネ属比率、表1)で表示した。ただし、検出数の少ない試料については、その中に含まれていたイネ属の個数も表示した。

4 結果

3地点の花粉・胞子化石の産状は、170TのⅨ層以外の試料からは比較的多くの花粉・胞子化石が検出された(表1)。また、化石の保存状態は、170TのⅨ層と174TのⅦ層では良くなく、外殻が壊れているものが多く認められた。

3地点における花粉化石群集の変遷は、特に高木の種類で花粉生産量の多い樹木のマツ属の複雑管束亞属やアカガシ亞属が類似した変遷を示した(図2)。3地点が距離的にも近いことを考慮すると、3地点で得られた花粉化石群集の変遷は時間・空間的に比較されると考えられ、3局地花粉化石群集帯を設定した。下位よりSBD-I・II・III帯とする。(SBDは千本塚遺跡の局地花粉化石群集帯の略号)。

SBD-I帯(174TのⅦ層、178TのⅨ層)；樹木花粉が総花粉・胞子数に対して高率に占める。アカガシ亞属・クリ属・シノノキ属の高率出現に特徴づけられる。

SBD-II帯(170TのV～IV層、174TのV～IV層、178TのⅦ層)；総花粉・胞子数に対する樹木花粉数は、減少傾向を示す。アカガシ亞属は、依然高率に出現するが、その他に種類が増え、針葉樹のスギ属が増加傾向を示すようになる。

SBD-III帯(170TのV～IV層、174TのV～IV層、178TのVI～IV層)；高率に出現していたアカガシ亞属が減少傾向を示し、マツ属複雑管束亞属・コナラ亞属が増加傾向を示す。

SBD-IV带(3地点ともⅢ層以浅)；増加傾向を示していたマツ亜属複維管束亜属が急増し、優先するようになる。逆に、アカガシ亜属などの広葉樹花粉は低率になる。また、170Tでは、スギ属が本帶上部で増加する。

草花花粉の産状は、樹木花粉化石の産状とほぼ対応する。下位の青灰色シルト・粘土層で認められたSBD-I带では草花花粉は低率であり、イネ科や水生植物のミズアオイ属などが僅かに出現する。僅かに出現したイネ科のなかには、栽培植物とされるイネ属が含まれているが、その比率は低率である(表2)。SBD-II带になると、草花花粉が増加する。なかでもイネ科花粉が著しく増加し、40%前後の出現率を示すようになる。そのうち50%前後は、植物とされるイネ属である。そのほかに栽培植物とされるソバ属も連続して出現するようになり、抽水植物の種類も多くなる。SBD-III带になるとイネ科はさらに増加し、60%前後の出現率を示すようになる。イネ属比率も70%以上を占めるようになる。SBD-IV带ではSBD-III带とは大きな差は認められず、カヤツリグサ科が低率になるのみである。

5 考察

(1) 稲作およびソバ栽培について

SBD-II带、すなわち青灰色の粘土あるいはシルト層直上の黒褐色や暗灰色の粘土の堆積するところである。

青灰色の粘土・シルト層中にもイネ属花粉が検出されたが、その個体数は少ない。イネ属比率も低率であったことから、上方からの落込みによる花粉化石と判断したほうが良さそうである。現状では、青灰色の粘土・シルト層がどの時期にどのように堆積したのかは不明であるが、花粉化石群集の変遷がその上位の黒褐色や青灰色の粘土層に変化すると同時に急激に変化することから、その間に時間の間隙が生じている可能性が考えられる。このことについて、本地域周辺の地形発達過程を明らかにした上で再検討する必要があろう。

SBD-II带の頃、すなわち有機物を含んだ黒灰色や暗灰色粘土層が堆積した頃は、調査地点のかなり近くで稲作が行われていた可能性が高い。それはイ

ネ属比率が50%前後を示している点、花粉分析の結果イネ属比率が30%以上示す層位ではその周辺で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる(鈴木・中村1977)点等から推定されるからである。また、稲作の他に、ソバ属の花粉の出現から周辺でのソバ栽培などの畑作の可能性も考えられる。したがってSBD-II带の頃、本地域は人類にとって生産地として重要な場所であったことを示唆される。

SBD-III带の頃になども稲作は引き続いて行われていた可能性が高い。ただし、イネ属比率が高率になることから稲作の様態が変化した可能性がある。すなわちここでイネ属比率の高率化が調査地点周辺に生育していた他のイネ科の減少を反映している可能性が高く、その他のイネ科草本が水田雜草として生育していたものであると仮定すれば、水田における生産性向上のための除草など水田の管理が行われるようになったことが考えられるからである。このような状況は、SBD-IV带にみられたカヤツリグサ科の減少についても同様に推定される。

本地域においては青灰色の粘土・シルトの堆積後に稲作が行われるようになり、近世のころまで引き続いて行われていた可能性がある。本調査における畦畔構造の確認や稻穂などの検出が期待される。

(2) 森林変遷

3地点の花粉化石群集は類似しており、高率に出現している種類は高木の種類がほとんどであり、また林縁に生育するツル性の樹木など局地的な植生を反映している可能性が高い種類は低率であることから、広域の植生変遷を反映している可能性が高い。

SBD-I带の頃、周辺の大地上などには照葉樹林が成立していた可能性が高く、またかなり近くまで森林が迫っていた可能性がある。SBD-II带の頃になども継続していたと考えられるが、上記した様に低地における人類の植生干渉が推定されることから低地やその近くに生育していた樹木は減少した可能性がある。

SBD-III带のころになるとマツ属複維管束亜属やコナラ亜属の花粉が増加傾向を示すが、同時に低地において植生干渉がさらに強くなったことが示唆される。また、カシ類などの照葉樹が減少し、アカマツやナラ類などが二次的に生育するようになった

ことを反映している可能性がある。

SBD-IV带になるとその影響がさらに強くなつた可能性が高く、周辺大地上にアカマツなどの二次林がみられるようになったことが推定される。その時代は、遺物の出土状況から推定される時代に基づくと近世以降になる。

【引用文献】

鈴木功夫・中村純(1977)「稻科花粉の堆積に関する基礎的研究」文部省科研費特定研究

仲村淳「稻作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－」『古文化財』 P 1-10

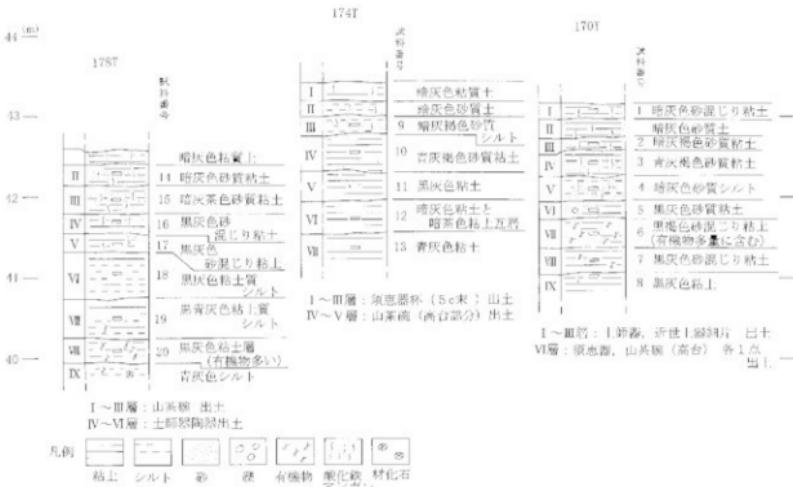


図1 千本塚遺跡 花粉分析試料採取地点土層模式柱状図

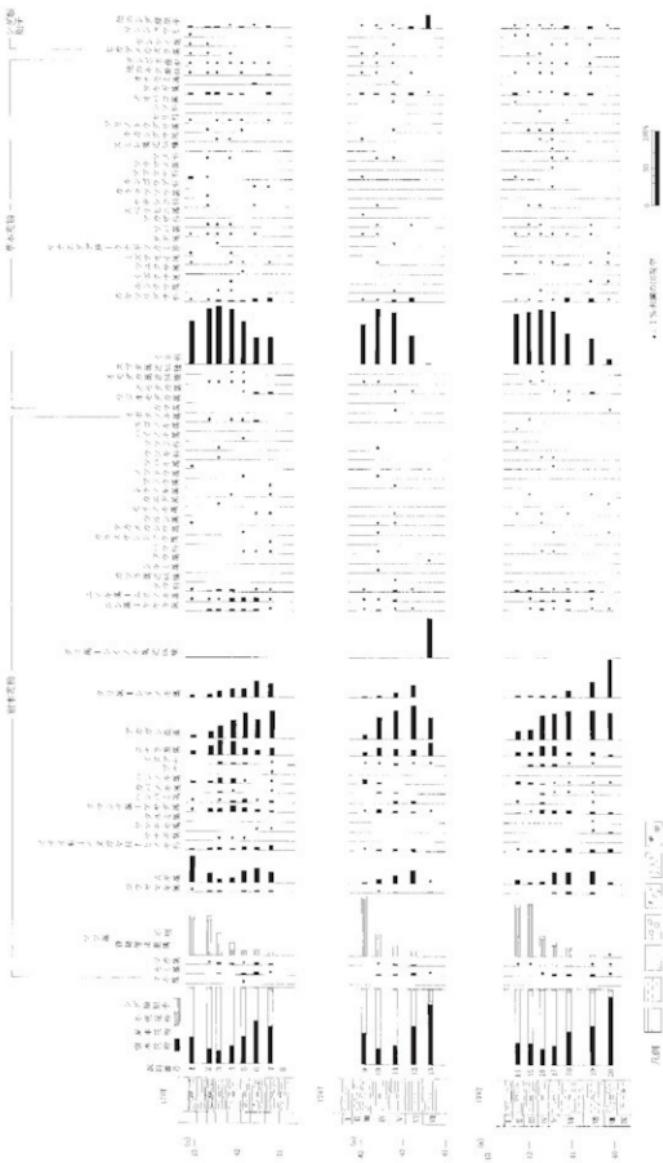


図2 干本塚遺跡(170T・174T・178T)試料花粉化石群集変遷図

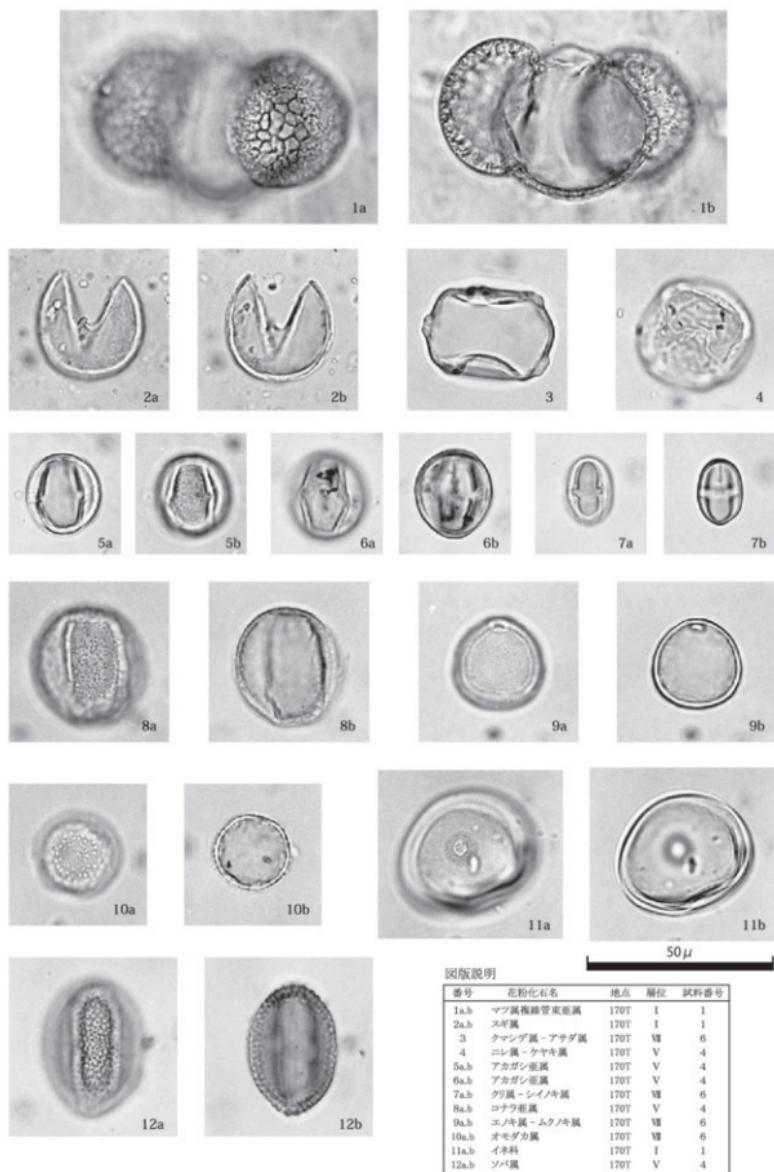
表1 千本桜遺跡試料の花粉分析結果

地名	標位	試料番号	イソ酸	他のイソ酸	率(%)
178T	I	1	23	14	13
	III	2	60	12	8
	IV	3	79	14	7
	V	4	96	7	7
	VI	5	80	13	7
	VII	6	36	36	30
	VIII	7	53	31	16
	IX	8	-	-	-
	III	9	73	19	8
174T	IV	10	36	12	12
	V	11	25	14	11
	VI	12	37	23	19
	VII	13	20(1)	67(2)	0
178T	II	14	90	5	5
	III	15	87	9	8
	IV	16	72	29	9
	V	17	67	24	9
	VI	18	71	23	6
	VII	19	64	23	4
	IX	20	-	-	-

※不明としたものは化石の保存状態が良くなく、種類同定が行えなかったものである。なおイネ科花粉が少なかった。

表3 玄木掘遺跡試料におけるイカ層比率(%)

図版 1 花粉化石





調査前近景（南から）



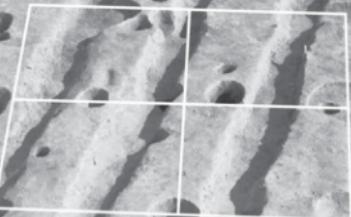
調査後航空写真（南東から）

P L 2

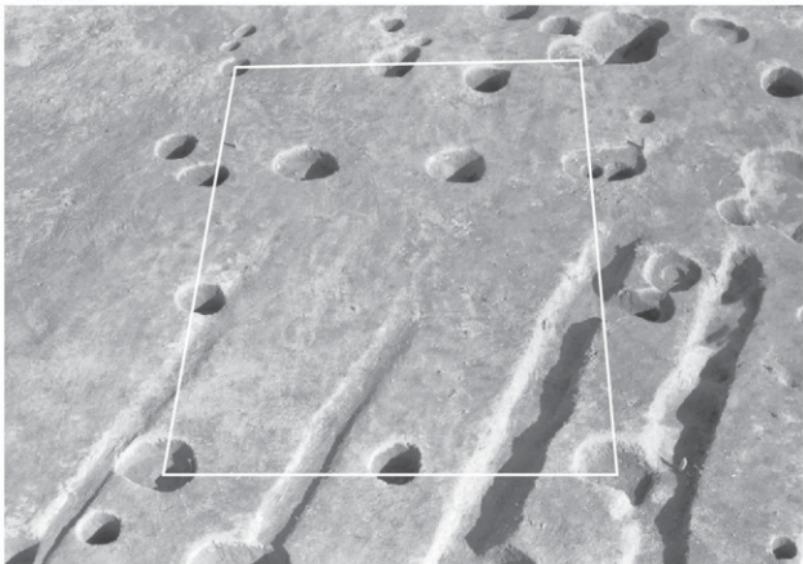
千本塚遺跡



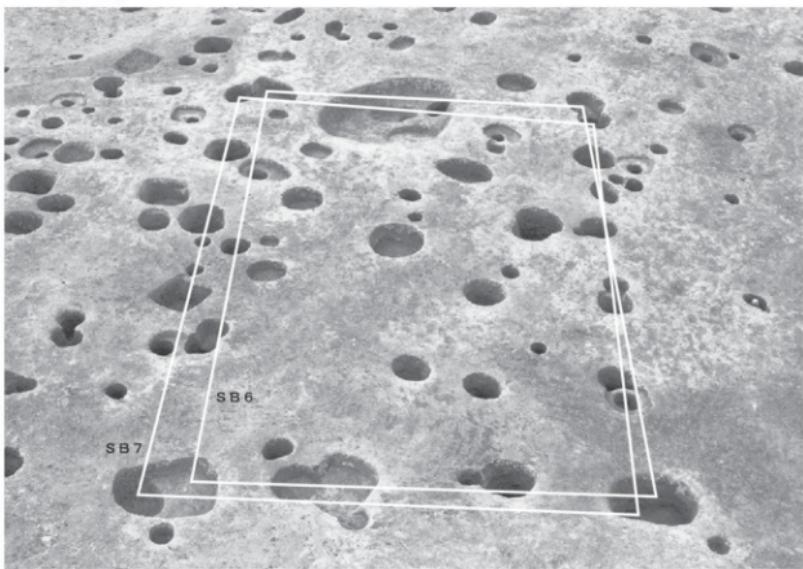
調査後全景（東から）



SB 2（西から）



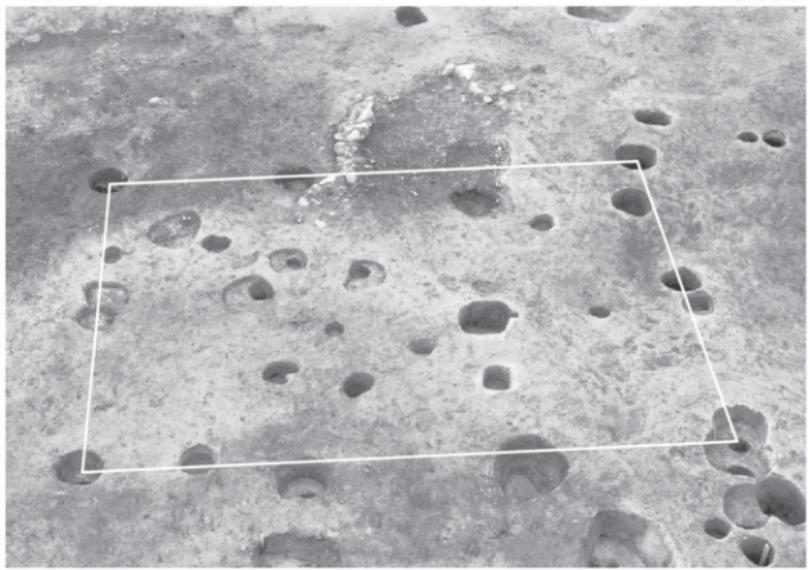
SB 3 (西から)



SB 6・7 (東から)

P L 4

千本塚遺跡



S B 9 (東から)



S K 8 (南から)



A地区調査前（東から）



A地区調査後（北上空から）

P L 6

大藪遺跡



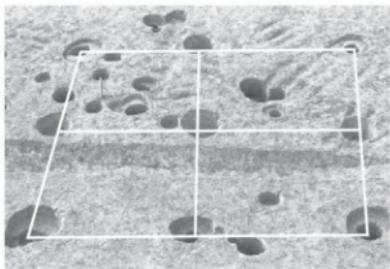
A地区全景（上から）



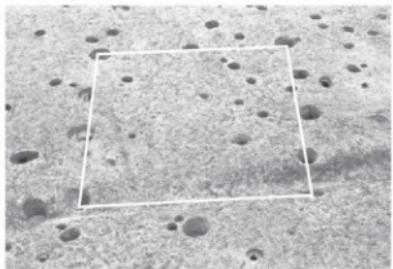
SH2（南から）



SB7（東から）



SB5（東から）



SB8（西から）



SB 1~5、SH 2(東から)



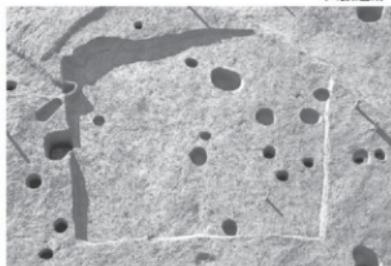
SA 6、SB13・14(西から)

P L 8

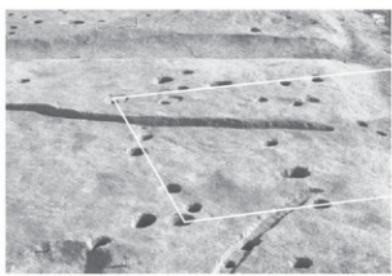


S K10・11(西から)

大藪遺跡



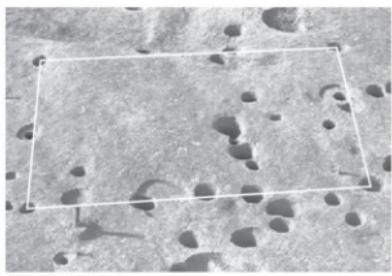
S H26(東から)



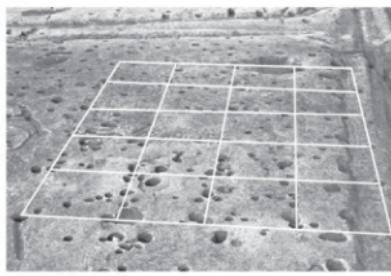
S B12(北西から)



S H28(南から)



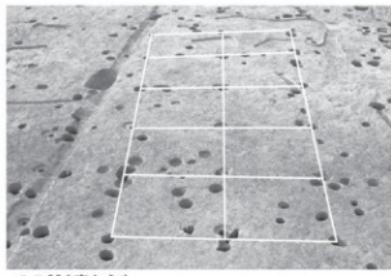
S B13(東から)



S B29(東から)



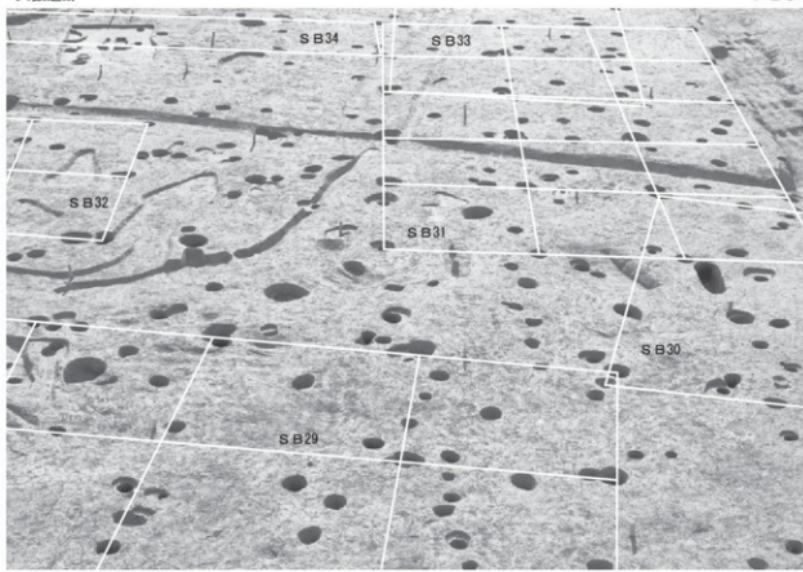
S B15(東から)



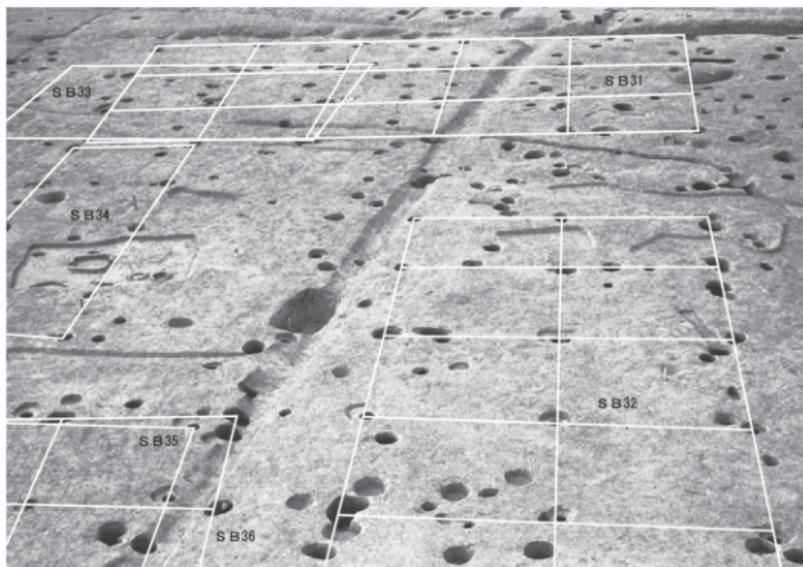
S B32(東から)

大敷遺跡

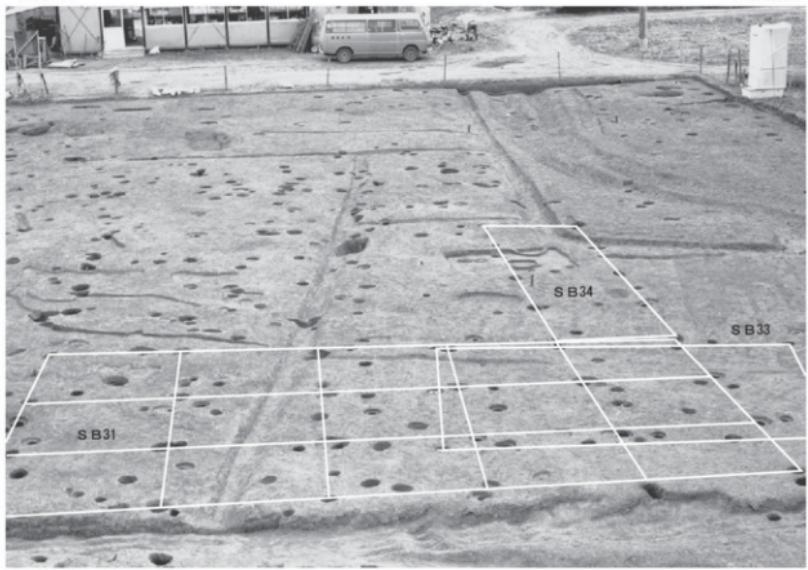
PL 9



SB29～34(北から)



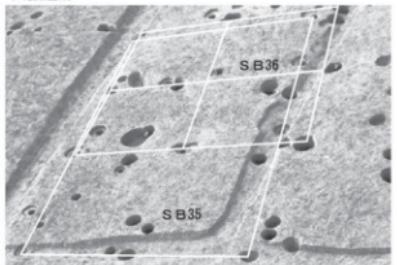
SB31～36(東から)



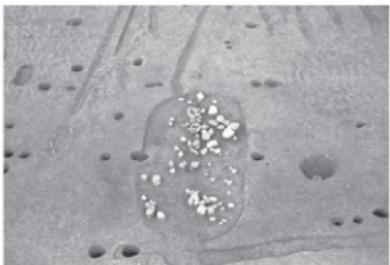
SB31・33・34(西から)



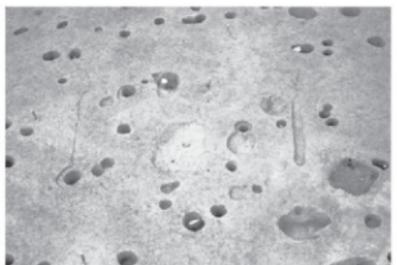
SB37・38(西から)



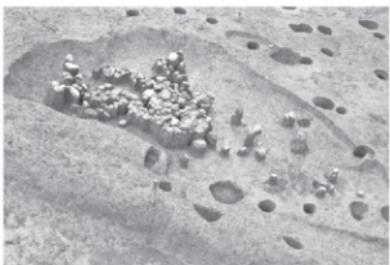
S B35・36(東から)



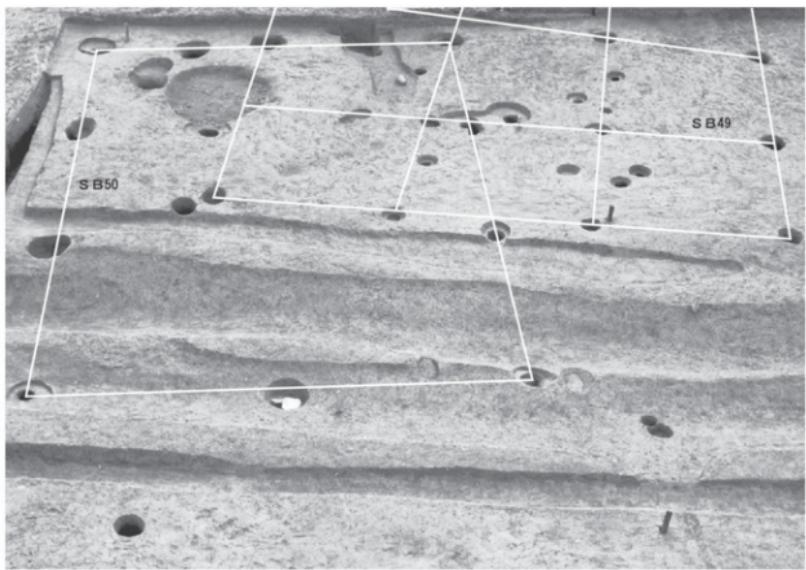
S K42(南から)



S H39(南から)



S K46(北東から)



S B49・50(北から)



B地区調査前（西から）



B地区調査後（西から）

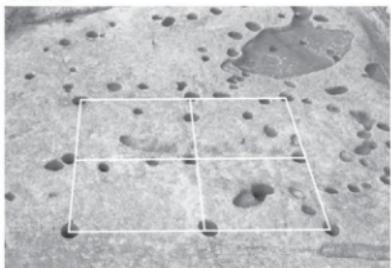


B・C地区調査後（南上から）



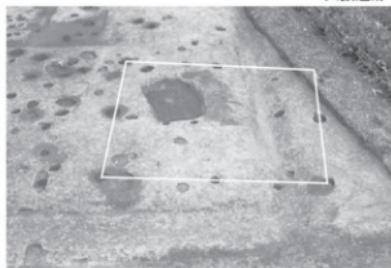
B地区調査後（北から）

P L 1 4



S K61・S B62(南から)

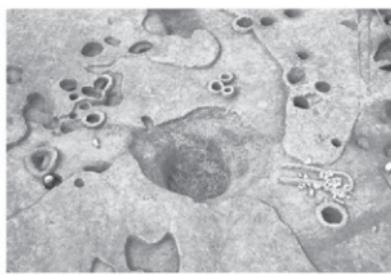
大藪遺跡



S B65(南から)



S X63(南から)



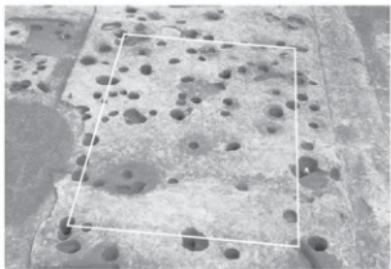
S E67(南から)



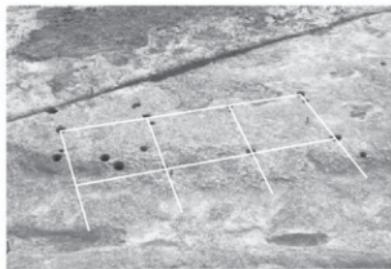
S B64(南から)



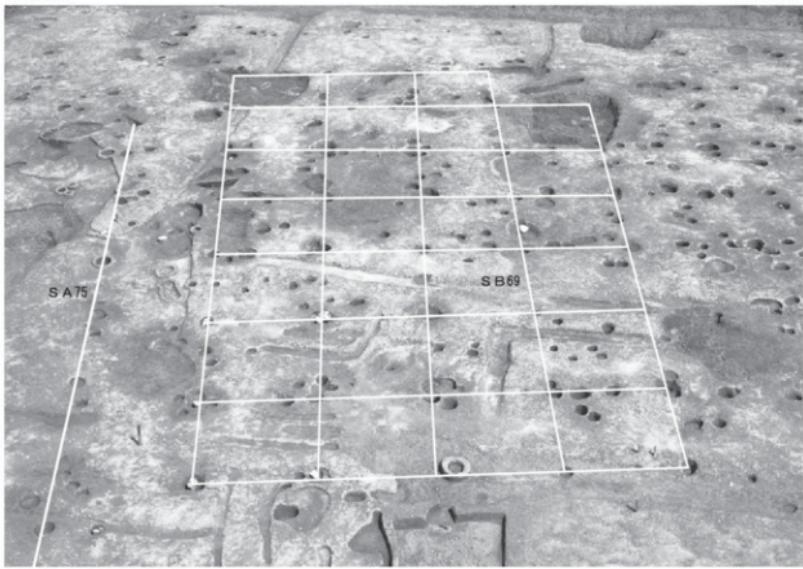
S K73(北から)



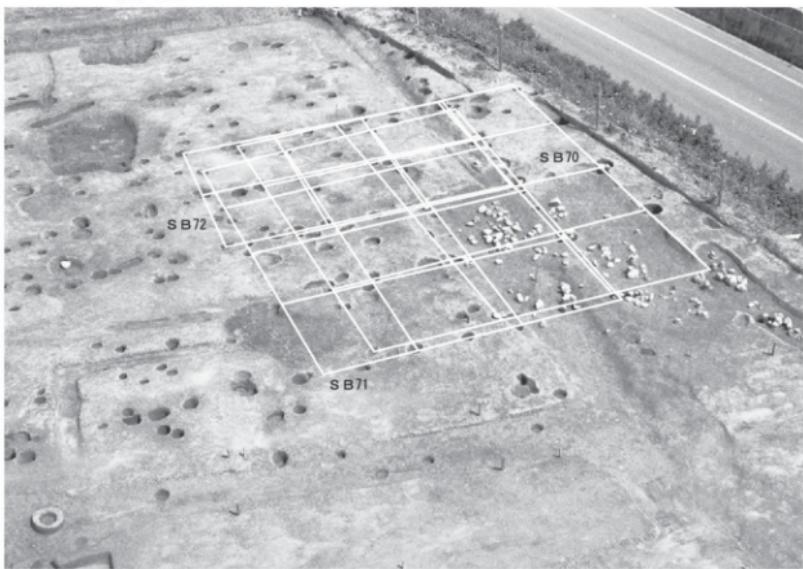
S B64(西から)



S B76(北から)



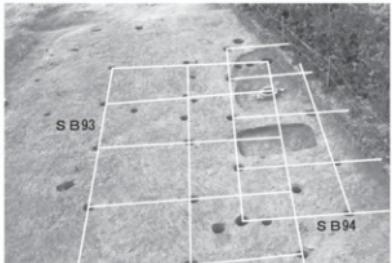
S A 75・S B 69(南から)



S B 70～72(南から)



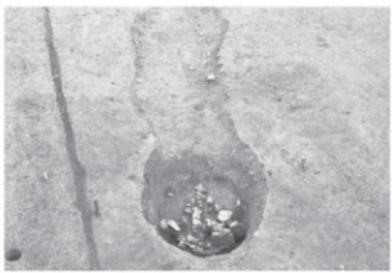
C地区調査前（西から）



S B93・94(北から)



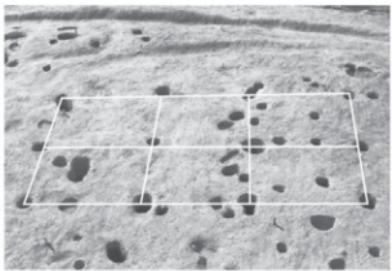
S B85(東から)



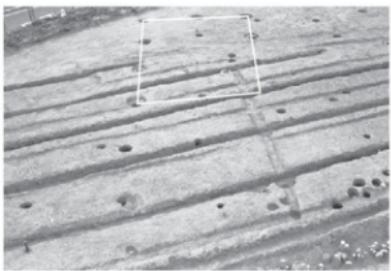
S K98・S D99(北から)



S D87(北から)



S B105(北から)



S B89(東から)



S B110(東から)



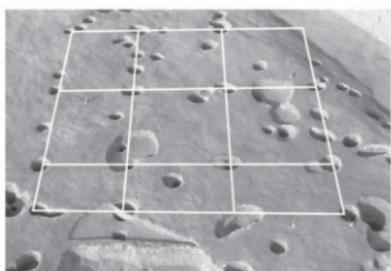
第2次調査後（上から）



調査前（東から）



第1次調査後（東から）



S B 2（東から）



S B 4（南から）



7



8



11



18



20



25



13



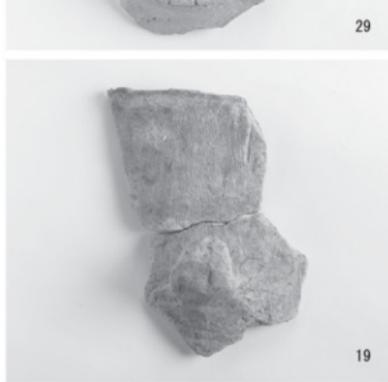
14



15



29



19





162



168



169



170



173



194



134



197



117



207



220



211



174

大薮遺跡B地区

P L 2 1





89



83



84



94



102



104



105



108



115



116



117



131

大薮遺跡C地区

P L 2 3



25



48



31



41



42



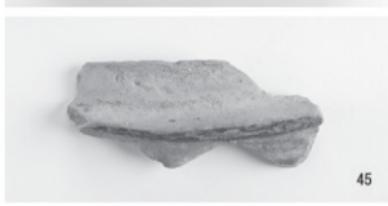
44



34



38



45



52



51



61





3



46



26



18



19



28



30



37



44



13



47



49



17

報告書抄録

ふりがな	せんほんづかいせき・おおやぶいせき・ほりこしいせき							
書名	千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	研究紀要							
シリーズ番号	第23号							
編著者名	駒田利治							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732							
発行年月日	西暦2014年 8月 8日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
せんほんづかいせき 千本塚遺跡	みよしへんかくせきし 三重県亀山市 みよし こうさんしき 亀田町字千本塚	210	a 160	34° 86' 16"	136° 45' 89"	19900108 ~19900208	1,230	一般国道1号 亀山バイパス 建設事業
おおやぶいせき 大藪遺跡	みよしおやぶいせきし 三重県亀山市 みよし こうさんしき 羽若町字大藪	210	a 195	34° 86' 25"	136° 45' 46"	19890710 ~19900208	8,650	
ほりこしいせき 堀越遺跡	みよしほりこしいせきし 三重県亀山市 みよし こうさんしき 橋井町字堀越	210	a 158	34° 86' 29"	136° 46' 80"	(①)19871109 ~19871228 (②)19881101 ~19881202	1,700 1,700	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
千本塚遺跡	散布地	奈良時代	窓穴住居 桁立柱建物	土師器 須恵器	独立丘陵上に営まれた8世紀初頭の単位集団の住居跡			
大藪遺跡	散布地	奈良時代～室町時代	窓穴住居 桁立柱建物 井戸 上杭 横列 濁	土師器 須恵器 灰輪陶器 山茶椀 磁磁器	12世紀から13世紀を中心とする大規模な中世集落跡			
堀越遺跡	散布地	平安時代～室町時代	楕立柱建物 濁	土師器 灰輪陶器 山茶椀	12世紀後半から14世紀前半に営まれた中世集落跡			
要約	鈴鹿山北岸の台地上に営まれた古代から中世の集落跡で、その営為は7世紀初頭にはじまる。飛鳥時代から奈良時代の窓穴住居で構成される千本塚遺跡の古代集落跡は小規模なものと推定される。12世紀の平安時代後半になると大藪遺跡やその西側に拡がる堀越遺跡では、楕柱建物を主とした楕立柱建物群が確認される。これらの建物群は、付属する楕立柱建物や井戸で一つの屋敷地を構成するが、区画溝や柵に囲まれた星敷地は明確でない。その全盛期は13世紀前半の鎌倉時代前期にあり、その後集落規模を縮小していく。この背景には、当該地域におかれられた「葉若庄」との関係が想定される。							

研究紀要 第23号
千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡
 2014(平成26)年 8月
 編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
 印刷 光出版印刷株式会社